

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集

仁右衛門畑遺跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

—古墳時代以降編—

2000

福岡県教育委員会

一般国道 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集
210号

仁右衛門畑遺跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

—古墳時代以降編—



仁右衛門畑遺跡全景



4号掘立柱建物跡



1号竪穴住居跡出土土器



32号溝出土土器

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用もおこなわれています。

本書は、平成7年度から9年度にかけて発掘調査を実施した、浮羽郡吉井町所在の仁右衛門畑遺跡の調査記録です。今回の調査では、弥生時代の集落をはじめ、古墳時代の集落、奈良時代の掘立柱建物群を中心とする集落、さらに中世の居館といった数多くの発見があり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史研究や教育、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いに存じます。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例言

1. この報告書は、平成7（1995）年度から平成9（1997）年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第12集である。
2. 本書に掲載した仁右衛門畑遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第5地点にあたり、浮羽郡吉井町大字新治字仁右衛門畑、今屋敷、灰高に所在する。
3. 仁右衛門畑遺跡の報告書は、平成12・13（2000・2001）年の2ヶ年に分けて発行する。平成12年は古墳時代以降編、平成13年は弥生時代編を発行する予定である。
4. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は石丸洋・北岡伸一が撮影し、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、飯田澄江・石橋九子・丸山喜代子・本石セツ子・星野恵美・山口由美子らの協力を得た。
6. 出土遺物の整理・復元作業は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。
7. 出土遺物の実測は調査担当者の他、平田春美、棚町陽子、久富美智子、田中典子、坂田順子、巖江圭子、藤原さとみ、江口幸子、堀之内久美子、若松三枝子の協力を得た。
8. 遺構・遺物の製図は豊原弥生・原カヨ子が行った。
9. 本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳ-2を吉田、Ⅳ-1を重藤が行い、Ⅲは重藤・吉田・進村が分担して行った。編集は吉田が行った。

本文目次

I はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	3
II 位置と環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	7
III 発掘調査の記録	11
1. 遺跡の概要	11
2. 基本層序	11
3. 検出遺構と遺物	12
竪穴住居跡	12
掘立柱建物跡	138
土坑	154
井戸	171
溝	172
墓	205
落ち込み	209
その他の遺物	211
IV おわりに	228
1. 仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代十師器編年	228
2. 集落の変遷について	240

図版目次

巻頭図版1	仁右衛門畑遺跡全景	4号掘立柱建物跡
巻頭図版2	1号竪穴住居跡出土土器	32号溝出土土器
図版1	1. 北半部全景 (空中写真 南から)	2. 北東部全景 (空中写真 上から)
図版2	1. 調査区中央全景 (空中写真 上から)	2. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)
図版3	1. 調査区中央全景 (空中写真 南東から)	2. 調査区中央全景 (空中写真 南東から)
図版4	1. 調査区中央北側遺構確認状況 (東から)	2. 調査区中央北側全景 (東から)
図版5	1. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)	2. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)
図版6	1. 調査区西側全景 (西から)	2. 調査区西側全景 (北東から)
図版7	1. 1号竪穴住居跡 (南から)	2. 1号竪穴住居跡カマド (南から)
	3. 1号竪穴住居跡カマド対面上坑 (北から)	
図版8	1. 2号竪穴住居跡 (西から)	2. 3号竪穴住居跡 (東から)
	3. 4号竪穴住居跡 (南から)	
図版9	1. 8号竪穴住居跡 (西から)	2. 13号竪穴住居跡 (東から)

3. 14号竪穴住居跡（東から）
- 図版10 1. 15号竪穴住居跡（東から） 2. 16号竪穴住居跡（東から）
3. 17号竪穴住居跡（南から）
- 図版11 1. 19号竪穴住居跡（東から） 2. 21号竪穴住居跡（東から）
3. 23号竪穴住居跡（北から）
- 図版12 1. 24号竪穴住居跡（北から） 2. 25号竪穴住居跡（北から）
3. 25号竪穴住居跡鉄製鋤先出土状態（南から）
- 図版13 1. 29号竪穴住居跡（北から） 2. 31~40号竪穴住居跡（空中写真）
3. 31号竪穴住居跡（南から）
- 図版14 1. 33号竪穴住居跡（南から） 2. 33号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 35号竪穴住居跡（東から）
- 図版15 1. 36号竪穴住居跡（南から） 2. 36号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 39号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版16 1. 42号竪穴住居跡（南から） 2. 42号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 3号竪穴住居跡（東から）
- 図版17 1. 43~51号竪穴住居跡（空中写真） 2. 44号竪穴住居跡（西から）
3. 45・49号竪穴住居跡（東から）
- 図版18 1. 45号竪穴住居跡カマド（東から） 2. 46号竪穴住居跡カマド（東から）
3. 47号竪穴住居跡カマド（東から）
- 図版19 1. 50号竪穴住居跡（南から） 2. 51号竪穴住居跡（南から）
3. 52号竪穴住居跡（東から）
- 図版20 1. 58・59号竪穴住居跡（南から） 2. 65号竪穴住居跡（南から）
3. 69・78号竪穴住居跡（南から）
- 図版21 1. 70号竪穴住居跡（南から） 2. 70号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 70号竪穴住居跡カマド対面土坑（北から）
- 図版22 1. 71号竪穴住居跡（南から） 2. 72号竪穴住居跡（東から）
3. 74~77号竪穴住居跡（東から）
- 図版23 1. 74~77号竪穴住居跡（南から） 2. 74号竪穴住居跡（南から）
3. 75号竪穴住居跡カマド（南から）
- 図版24 1. 76号竪穴住居跡カマド（東から） 2. 80号竪穴住居跡（南から）
3. 82号竪穴住居跡（南から）
- 図版25 1. 83号竪穴住居跡（東から） 2. 83号竪穴住居跡カマド（東から）
3. 83号竪穴住居跡門面礎出土状態（東から）
- 図版26 1. 84号竪穴住居跡（南から） 2. 84号竪穴住居跡カマド（南から）
3. 85号竪穴住居跡（北から）
- 図版27 1. 86号竪穴住居跡（南から） 2. 86号竪穴住居跡壁際土坑（北から）
3. 86号竪穴住居跡貼床除去後（南から）
- 図版28 1. 87号竪穴住居跡（北から） 2. 88号竪穴住居跡（南から）

3. 89~91号竪穴住居跡 (南から)
- 図版29 1. 89号竪穴住居跡カマド (南から) 2. 92号竪穴住居跡 (南から)
3. 93号竪穴住居跡 (南から)
- 図版30 1. 93号竪穴住居跡カマド (南から) 2. 94・95号竪穴住居跡 (東から)
3. 94号竪穴住居跡カマド対面土坑 (西から)
- 図版31 1. 1号掘立柱建物跡 (東から) 2. 2号掘立柱建物跡 (南から)
3. 3号掘立柱建物跡 (東から)
- 図版32 1. 4号掘立柱建物跡 (掘削前、東から) 2. 4号掘立柱建物跡 (東から)
3. 4号掘立柱建物跡 P7 (西から)
- 図版33 1. 4号掘立柱建物跡 P10 (西から) 2. 4号掘立柱建物跡 P12 (南から)
3. 4号掘立柱建物跡 P17 (東から)
- 図版34 1. 5号掘立柱建物跡・30号竪穴住居跡 (東から) 2. 5号掘立柱建物跡 P9 (東から)
3. 5号掘立柱建物跡 P10 (東から)
- 図版35 1. 6号掘立柱建物跡 (北から) 2. 6号掘立柱建物跡 P2 (北から)
3. 6号掘立柱建物跡 P4 (西から)
- 図版36 1. 7号掘立柱建物跡 (西から) 2. 8号掘立柱建物跡 (西から)
3. 10号掘立柱建物跡 (北から)
- 図版37 1. 11号掘立柱建物跡 (西から) 2. 12号掘立柱建物跡 (南から)
3. 13~16号掘立柱建物跡 (空中写真)
- 図版38 1. 7号土坑 (南から) 2. 10号土坑 (南から)
3. 14号土坑 (西から)
- 図版39 1. 15号土坑 (南から) 2. 33号土坑 (北から)
3. 36号土坑 (東から)
- 図版40 1. 50号土坑 (西から) 2. 50号土坑完掘状況 (西から)
3. 54号土坑 (南から)
- 図版41 1. 63号土坑 (北から) 2. 67号土坑 (西から)
3. 73号土坑 (北から)
- 図版42 1. 75号土坑 (東から) 2. 83号土坑 (南から)
3. 84号土坑 (西から)
- 図版43 1. 89号土坑 (東から) 2. 91号土坑 (東から)
3. 111号土坑 (東から)
- 図版44 1. 131号土坑 (南から) 2. 137号土坑 (西から)
3. 138号土坑 (西から)
- 図版45 1. 5号溝 (西から) 2. 5号溝 (西から)
3. 5号溝コーナー部 (南から)
- 図版46 1. 10号溝遺物出土状態 (北から) 2. 17号溝断面 (西から)
3. 17号溝断面 (北から)
- 図版47 1. 22号溝断面 (南から) 2. 28号溝断面 (南から)

3. 32号溝上面検出状態 (南東から)
- 図版48 1. 32号溝完掘状況 (西から) 2. 32号溝北側断面 (西から)
3. 32号溝南側断面 (南から)
- 図版49 1. 32~40号溝 (西から) 2. 33号溝断面 (南から)
3. 34号溝断面 (西から)
- 図版50 1. 38号溝断面 (西から) 2. 39号溝断面 (西から)
3. 41号溝断面 (西から)
- 図版51 1. 9号墓 (南から) 2. 9号墓完掘状況 (西から)
3. 71号墓 (南から)
- 図版52 1. 90号墓 (東から) 2. 135号墓 (南から)
3. 49号井戸 (南から)
- 図版53 1号竪穴住居跡出土土器
- 図版54 1・4・13号竪穴住居跡出土土器
- 図版55 14・15・16号竪穴住居跡出土土器
- 図版56 16・25号竪穴住居跡出土土器
- 図版57 28・29・32・33・34号竪穴住居跡出土土器
- 図版58 35・36号竪穴住居跡出土土器
- 図版59 36・39号竪穴住居跡出土土器
- 図版60 39・42号竪穴住居跡出土土器
- 図版61 43~45・47・51・52号竪穴住居跡出土土器
- 図版62 59・70・82・83号竪穴住居跡出土土器
- 図版63 84~87号竪穴住居跡出土土器
- 図版64 88~94・96号竪穴住居跡、3・10号掘立柱建物跡出土土器
- 図版65 67・111・138号土坑出土土器
- 図版66 5・7・8・10・17号溝出土土器・陶器
- 図版67 17・32号溝出土土器・陶磁器
- 図版68 41号溝、9・71・90・135号墓出土土器・陶磁器
- 図版69 1. 管状土錘 2. 土玉
3. 焼塩土器
- 図版70 1. 初期須恵器 2. 打製石器①
3. 打製石器②
- 図版71 1. 打製石器③ 2. 磨石・敲石等
3. 磨製石器等
- 図版72 1. 砥石① 2. 砥石②
3. 砥石③
- 図版73 1. 滑石製石鏃等① 2. 滑石製石鏃等②
3. 滑石製石鏃模造品
- 図版74 1. 石臼① 2. 石臼②

3. 鉄器①

図版75 1. 鉄器②

3. 鉄製品等

2. 鉄器③

挿 図 目 次

第1図	吉井町位置図	5
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第3図	調査区周辺字図 (1/10,000)	8
第4図	調査区位置図 (1/2,000)	10
第5図	基本土層図 (1/40)	11
第6図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	13
第7図	1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	14
第8図	1号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	15
第9図	1号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	16
第10図	1号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	17
第11図	1号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)	18
第12図	2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	19
第13図	2・4・8・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	20
第14図	3号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	21
第15図	4号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	21
第16図	8・12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第17図	13・14号竪穴住居跡実測図 (1/60)	24
第18図	13号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	25
第19図	13号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	26
第20図	14号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	27
第21図	14号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	28
第22図	15～17号竪穴住居跡実測図 (1/60)	30
第23図	15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	31
第24図	16号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	33
第25図	16号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	34
第26図	19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第27図	19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第28図	21号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	36
第29図	17・19・21・23・24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	37
第30図	23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第31図	24号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	38
第32図	25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第33図	25号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	40

第34図	25号竪穴住居跡土玉出土状態 (1/6)	40
第35図	25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	41
第36図	25号竪穴住居跡出土土器・磁器実測図 (1/3)	42
第37図	28号竪穴住居跡・北東部灯跡実測図 (1/60・1/30)	42
第38図	28号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	43
第39図	28号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	44
第40図	29・30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第41図	29号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	46
第42図	29号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	47
第43図	30号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	47
第44図	30・31・32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	48
第45図	31号竪穴住居跡実測図 (1/60)	49
第46図	31号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	50
第47図	32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50
第48図	32号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	51
第49図	33・34号竪穴住居跡実測図 (1/60)	52
第50図	33号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	53
第51図	33号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	54
第52図	34号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	54
第53図	34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	55
第54図	35・38・40号竪穴住居跡実測図 (1/60)	56
第55図	35号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	57
第56図	35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4・1/3)	58
第57図	36号竪穴住居跡実測図 (1/60)	59
第58図	36号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	60
第59図	36号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3・1/4)	62
第60図	36号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	63
第61図	36号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	64
第62図	36号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)	65
第63図	37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	66
第64図	37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	66
第65図	37・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	67
第66図	39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	68
第67図	39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	69
第68図	39・40号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	70
第69図	42号竪穴住居跡実測図 (1/60)	71
第70図	42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	72
第71図	42号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	73

第72図	42号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	74
第73図	42号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)	75
第74図	43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	77
第75図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	78
第76図	44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	78
第77図	44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	79
第78図	45～49号竪穴住居跡実測図 (1/60)	81
第79図	45・46号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	82
第80図	45～48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	83
第81図	47号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	84
第82図	48・49号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	85
第83図	49・50号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	86
第84図	50号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	87
第85図	51号竪穴住居跡実測図 (1/60)	88
第86図	51・52号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	89
第87図	52・57号竪穴住居跡実測図 (1/60)	90
第88図	52号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	90
第89図	58・59号竪穴住居跡実測図 (1/60)	92
第90図	58・59号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)	93
第91図	58・59号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	94
第92図	65号竪穴住居跡実測図 (1/60)	95
第93図	65・69号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	96
第94図	69号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第95図	69号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	97
第96図	70号竪穴住居跡実測図 (1/60)	98
第97図	70号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	99
第98図	70号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4・1/3)	100
第99図	70号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)	101
第100図	70号竪穴住居跡カマド対面土坑実測図 (1/30)	102
第101図	71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60)	103
第102図	71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	103
第103図	71・72・74・75号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	104
第104図	74～77号竪穴住居跡実測図 (1/60)	106
第105図	74・75号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	107
第106図	76号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	108
第107図	78号竪穴住居跡実測図 (1/60)	109
第108図	78号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	109
第109図	76～78・81・82号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	110

第110図	80・81号竪穴住居跡実測図 (1/60)	111
第111図	82号竪穴住居跡実測図 (1/60)	112
第112図	82号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	113
第113図	83号竪穴住居跡実測図 (1/60)	113
第114図	83号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	114
第115図	83号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	115
第116図	84号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	117
第117図	84・85号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	118
第118図	85号竪穴住居跡実測図 (1/60)	119
第119図	86号竪穴住居跡・炉跡実測図 (1/60・1/30)	121
第120図	86号竪穴住居跡壁際土坑実測図 (1/30)	122
第121図	86号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	123
第122図	87号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	124
第123図	87号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	125
第124図	88号竪穴住居跡実測図 (1/60)	126
第125図	88号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	127
第126図	89～91号竪穴住居跡実測図 (1/60)	128
第127図	89号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	129
第128図	89～92号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	130
第129図	90号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	131
第130図	92号竪穴住居跡実測図 (1/60)	132
第131図	93号竪穴住居跡実測図 (1/60)	133
第132図	93号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	134
第133図	93号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	134
第134図	94・95号竪穴住居跡実測図 (1/60)	135
第135図	94～96号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	136
第136図	96号竪穴住居跡壁際土坑実測図 (1/30)	137
第137図	96号竪穴住居跡実測図 (1/60)	138
第138図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	139
第139図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	140
第140図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	141
第141図	4号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	142
第142図	5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	143
第143図	6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	144
第144図	7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	145
第145図	8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	146
第146図	9～11号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	148
第147図	12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	149

第148图	13·14号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	151
第149图	15·16号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	152
第150图	掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	153
第151图	17号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	154
第152图	7·10·14·15·33·36号土坑実測図 (1/60·1/30)	155
第153图	7·10·14·33号土坑出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	156
第154图	50·54·63·67号土坑実測図 (1/60·1/30)	158
第155图	50·54·63·67号土坑出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	159
第156图	73·75·83·84号土坑実測図 (1/40·1/30)	161
第157图	73·75·84号土坑出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	162
第158图	89·91·98·111·131号土坑実測図 (1/40·1/30)	164
第159图	91·111·131号土坑出土土器実測図 (1/3)	165
第160图	137~139号土坑実測図 (1/40)	167
第161图	138号土坑出土土器実測図 (1/3)	168
第162图	138·139号土坑出土土器実測図 (1/3)	169
第163图	49号井戸実測図 (1/40)	171
第164图	49号井戸出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	171
第165图	1·8·10·11·13·17号溝断面実測図 (1/40·1/20)	172
第166图	5号溝実測図 (1/60·1/30)	173
第167图	1·5号溝出土土器実測図 (1/4·1/3)	174
第168图	5号溝出土土器実測図 (1/3)	175
第169图	5号溝出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	176
第170图	6号溝実測図 (1/60·1/30)	177
第171图	6号溝出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	178
第172图	7号溝出土土器·磁器実測図 (1/3)	179
第173图	8·10号溝出土土器実測図 (1/4·1/3)	181
第174图	11号溝、10·11号溝上層出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	182
第175图	17号溝屈曲部付近実測図 (1/60)	184
第176图	17号溝出土土器実測図① (1/4·1/3)	185
第177图	17号溝出土土器実測図② (1/3)	186
第178图	17号溝出土土器実測図③ (1/3)	187
第179图	17号溝出土土器·陶磁器実測図 (1/3)	188
第180图	19·22~24·27·31号溝出土土器実測図 (1/3)	190
第181图	22·30~32号溝断面実測図 (1/40·1/20)	191
第182图	32号溝·同背磁碗·土師皿出土状況実測図 (1/80·1/20)	194
第183图	32号溝出土土器実測図 (1/3)	195
第184图	32号溝出土土器·陶器実測図 (1/3)	196
第185图	32号溝出土磁器実測図 (1/3)	197

第186図	33~35号溝断面実測図 (1/40・1/20)	199
第187図	33・34・36・38・39号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	200
第188図	36・38・39~41号溝断面実測図 (1/40・1/20)	202
第189図	34・38・39号溝上層、40号溝出土土器・磁器実測図 (1/3)	203
第190図	41号溝出土土器実測図 (1/3)	204
第191図	9・71・90・135号墓実測図 (1/30)	206
第192図	9・71号墓出土土器・磁器実測図 (1/3)	207
第193図	90・135号墓出土土器・磁器実測図 (1/3)	208
第194図	1号落ち込み出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	209
第195図	2・3号落ち込み出土土器・磁器実測図 (1/4・1/3)	210
第196図	土製品実測図 (1/2)	212
第197図	焼塩土器・縄羽口・ガラス玉・木製品実測図 (1/3・1/1)	213
第198図	石器・石製品実測図① (2/3)	214
第199図	石器・石製品実測図② (1/3・2/3)	215
第200図	石器・石製品実測図③ (1/3)	216
第201図	石器・石製品実測図④ (1/3・1/2)	217
第202図	石器・石製品実測図⑤ (1/3)	218
第203図	石器・石製品実測図⑥ (1/4)	219
第204図	石器・石製品実測図⑦ (1/3)	220
第205図	石器・石製品実測図⑧ (1/6)	222
第206図	鉄器・鉄製品等実測図① (1/2)	223
第207図	鉄器・鉄製品等実測図② (1/2・1/1)	224
第208図	浮羽郡の古墳時代中・後期土師器編年① (1/6・1/8)	230
第209図	浮羽郡の古墳時代中・後期土師器編年② (1/6・1/8)	231
第210図	沖出遺跡9号竪穴住居跡出土土器 (1/6・1/8)	234
第211図	多孔式把手付甌と初期須恵器関係資料 (1/6・1/8・1/12)	237
第212図	主要遺構変遷図① (1/750)	241
第213図	主要遺構変遷図② (1/750)	245
第214図	主要遺構変遷図③ (1/750)	247
付図	仁右衛門畑遺跡遺構配置図 (1/300)	

表 目 次

第1表	土製品・石製品・金属製品観察表①	225
第2表	土製品・石製品・金属製品観察表②	226
第3表	土製品・石製品・金属製品観察表③	227
第4表	5~6期の竪穴住居跡におけるカマドの有無と出土土器	236

I はじめに

1. 調査の経過

浮羽バイパスは、大分県日田市と福岡県久留米市を結ぶ一般国道210号の交通混雑の緩和と、浮羽郡内を中心とした地域産業経済の発展を目的として、昭和48（1973）年度に事業化された、総延長14.0km、幅員16～25mの第1級道路である。現在、浮羽町と吉井町の一部で暫定的に対面2車線で供用を開始されており、地域住民の生活に密着した道路となっている。

この浮羽バイパスの建設に先立ち、昭和47（1972）年2月3日付で建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所から福岡県教育庁管理課文化課（現在、総務部文化財保護課）に、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼があり、これにもとづいて、浮羽町所在の塚堂遺跡群の発掘調査が昭和54（1979）年度から57年度までの4ヶ年にわたって実施された。その後、昭和61（1986）年4月2日付で福岡工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼が文化課にたいして出され、文化課は塚堂遺跡を除く計16地点の発掘調査必要箇所を回答した。現在までこの回答による16地点についての調査を随時協議しながら実施している。

本書に掲載した浮羽バイパス5地点「仁右衛門畑遺跡」については、平成7年2月6日、同3月1日・8日に試掘調査を実施した結果、遺構の存在が判明し、本調査が必要となった地点である。周辺では福岡県甘木農林事務所が県営は場整備事業を実施しており、その関連から福岡工事事務所、甘木農林事務所、吉井第5土地改良区と随時協議を重ねながら、平成7年4月10日より発掘調査を開始した。

調査を始めるに当たって、周囲の水田に水を供給し始める6月中旬までに、調査区を縦断する幅2mの函渠設置工事の完了を予定する福岡工事事務所の工程に添い、まず現農業用水



試掘調査



調査風景



調査風景

路から函渠設置予定箇所までの約900㎡の発掘調査を平成7年5月31日までに終了すると調査予定を工事事務所側に提示し、4月10日より発掘調査を開始することとなった。

表土掘削作業は、用水路に接した西側から函渠設置予定の東側へと順次行っていた。4月17日には器財を搬入し、4月19日午後より遺構検出を開始した。ところが、土壌の性質上遺構覆土と地山との区別が非常に困難であり、また予想以上に遺構の重複が著しく、調査の遅延が懸念されたために急速予定を変更し、函渠設置箇所を中心に幅7m、約200㎡のみを5月31日までに終了することとした。ここでもやはり遺構検出作業は困難を極め、また4・5月は例年になく豪雨が続き、予想外の排水作業に不安と苛立ちがつのる日々が続いたが、予定期日までに何とか終了することができた。

函渠設置工事中は付近に近寄れなかったため、6月1日からは調査区北東端へと移動し、順次南へと調査を進めていった。この調査区東端から函渠までの約3,000㎡は、工事用道路設置のため10月31日までに調査を終了する行程で協議を行っていたが、10月にはいつから調査区南端で第2遺構面の存在を確認するという不測の事態が生じたため、終了期日を10日間延期し11月9日にこの区間を終了した。

続いて調査区西寄りに位置する町道に至るまでの約110mの間、片側2車線の本線設置工事を平成8年2月から着工する旨を工事事務所側から受けていたため、翌日からは路線幅の両側半分にあたる、幅15m、約3,000㎡の調査を先行することとした。調査は西の町道側から開始し、東側へと進行していった。上記同様遺構の重複が著しく調査が遅れがちだったので、12月からは作業員の大幅増員を行い、1月31日には予定区間を無事終了することができた。12月17日には地元住民の方々へのご理解とこれまでの成果を公表するため、現地説明会ならびに吉井町教育委員会の協力のもと吉井町公民館でスライド映写会を開催し、約100人の参加者を得た。

2月1日からは前調査区の北側、約3,000㎡の調査を行った。これまで以上に遺構の重複が激しく、はっきりなしに通る10tダンプに身の



空中写真用バルーン



現地説明会



現地説明会

危険を感じながらの調査であったが、平成7年度は3月19日に調査を終了した。

翌8年度は4月11日に調査を開始した。5月には浮羽郡内で大粒の雹が降り、発掘調査区に隣接する畑地の収穫直前の麦が倒れるなど付近の農作物が大打撃を受けた。6月3日に町道までの間を終了した後、急遽浮羽バイパス4地点（堂畑遺跡）の調査を先行する必要があるため、仁右衛門畑遺跡の調査を一時中断し、4地点の方にとりかかった。平成9年2月10日からは再び仁右衛門畑遺跡へ戻り、今度は町道の東側、約2,500㎡の調査を実施した。平成8年度は3月25日に調査を終了した。



5月に降った雹

平成9年度は4月23日に調査を再開し、翌5月28日には器財を撤収、仁右衛門畑遺跡の全ての調査を終了した。

2. 調査の組織

発掘調査関係者および報告書作成関係者は次の通りである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度
事務所長	佐竹 芳郎	佐竹 芳郎	藤本 聡	藤本 聡 森 将彦
副所長	中馬 正昭	藤浪 元生	兼武征二郎	兼武征二郎
	中空 進	緒方 良一	別府 五男	新開幸一郎
建設監督官	松尾 義信	松尾 義信	有家 信義	有家 信義
	山川 武春	山川 武春	柴田 智	中島 浩二
調査第二課長	西原 広寿	田中 義高	田中 義高	赤星 文生
調査係長	芹口 臣也	鶴 敏信	杓掛 孝	杓掛 孝
建設技官	島田 隆一	島田 隆一	島田 隆一	柳橋 孝博
工務課長	洵 幸一	洵 幸一	河野 良行	後藤 昌隆
工務第一係長	黒木 俊彦	黒木 俊彦	梶原 俊之	古木 英昭
工務第三係長	田口 仁	田口 仁	斉藤 啓嗣	斉藤 啓嗣

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度
総括	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成11年度
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜
教育次長	松枝 功	松枝 功	松枝 功	藤吉純一郎
指導第二部長	丸林 茂夫	丸林 茂夫	竹若 幸二	
総務部長				岩本 誠
文化課長	松尾 正俊	松尾 正俊	石松 好雄	

文化財保護課長				柳田 康雄
参事兼文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄	柳田 康雄	
参事				井上 裕弘
課長補佐	元水 浩士	元水 浩士	城戸 秀明	
課長補佐兼管理係長				角 伸幸
参事補佐兼室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘	
参事兼課長技術補佐				橋口 達也
調査班総括	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	
調査第一係長				児玉 真一
調査第二係長				佐々木隆彦
参事補佐	木下 修	木下 修	木下 修	中間 研志
	中間 研志	中間 研志	新原 正典	
	小池 史哲	小池 史哲	中間 研志	
庶務				
管理係長	柴田 恭郎	黒田 一治	黒田 一治	
事務主査	久保 正志	東 健二	鶴我 哲夫	吉武 祐二
調査・報告				
主任技師	吉村 靖徳		吉田 東明	重藤 輝行 吉田 東明
技師	重藤 輝行 吉田 東明	重藤 輝行	造村 真之	造村 真之

現場作業には地元吉井町をはじめ田主丸町、浮羽町、杷木町、甘木市からご参加いただいた。悪条件の中を熱心に作業にあたられた皆様に心から感謝申し上げます。

星野恵美(調査補助員) 中川サトキ 矢輪光枝 権藤タキエ 中川トシ 中川初子 梶村サツキ
 梶村上枝 古賀マサ子 本松幸子 権藤フミエ 佐藤ツイ子 田中スム子 中川君子 坂本サダ子
 二宮真弓 高木マサ子 小林英子 石橋九子 因間美枝子 伊藤夏子 山本文子 飯田澄枝 飯田
 尚子 山口由美子 堤忠男 堤利夫 岩橋マサ子 宮崎ヤス子 岩橋カナエ 佐藤勝子 田中トミ
 子 善高義 古賀仁 樋口始 宮崎シゲシ 渡辺強剛 重岡和子 迫貞子 古賀美恵子 高倉克己
 山下重信 古賀コトミ 梶村裕二 金丸時太 樋口文夫 樋口奈美子 樋口幸子 堤チヨ子 高瀬
 セツ子 西田美代子 辻啓子 岡泰子 高倉君子 松尾蕭朗 北端摂子 石橋ヒサ子 牛嶋真由美
 大塚ヒロ子 権藤エイ子 才田ヒサ子 田中恒彦 中野ヒデア子 中村弘子 野口征子 丸山喜代子
 林田愛子 中野強 中野正敏 郷原ハツ子 国武ヒサ子 原淑子 原美登里 中野淑子 大隈寿学
 国武俱幸 田中弘子 深町律子 深町信子 柴山ミネ子 本石セツ子 柴山ヤス子 矢野美智子
 江頭敏之 横溝ミ子 芳野マキ子 田中聖二 福岡波津子 永田悦子 熊野智代 三善多衣子
 大田明子 林多津美 中津留ハツエ

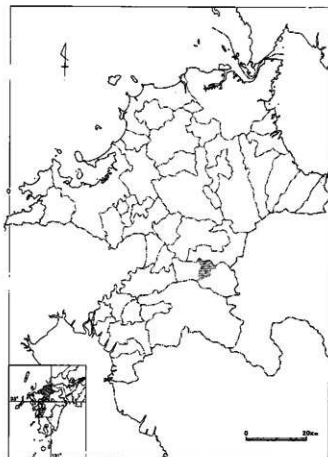
調査および整理のの期間中には、文化財保護指導委員の方々をはじめ、近隣市町村文化財担当者、北筑後教育事務所、九州歴史資料館、甘木歴史資料館等多くの方々からご教示、ご支援を頂いた。お礼申し上げます。

II 位置と環境

1. 地理的環境

仁右衛門畑 (NIEMONBATAKE) 遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字新治字灰高346-1・347-4・348・349・350・352-1・353-1・360-1・361-1・362-1・362-2・363-1・364-1・365-1、字仁右衛門畑394・395・396・397-1に所在する。

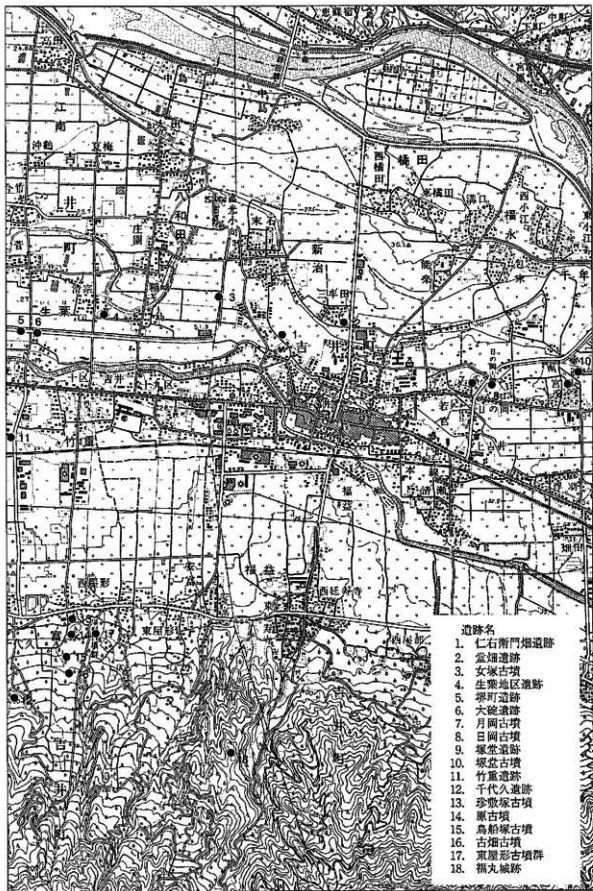
遺跡の所在する吉井町は福岡県の南東部に位置する。東は浮羽町、西は田主丸町、北は筑後川を挟んで朝倉町・杷木町と接している。面積28.29㎡、人口約17,500人。北部は福岡県第一の河川で「筑紫次郎」と称される筑後川を望み、その南には随一の穀倉地帯である筑後平野が広がる。南部には「屏風岳」とも呼ばれる水繩山地が座し、これから流れ出た小河川によって形成された扇状地が展開する。産業は平野部では水稲・野菜・植苗木、山裾部では果樹栽培が盛んで農業を主要経済基盤にすえる町だが、豊富な山林資源をもとに木工産業も行われている。



第1図 吉井町位置図

吉井町は「緑と清流、古墳と白壁の町」と言われる。そもそも「吉井」という地名は、「きれいな水が湧き出る井戸」が由来らしい。「五庄屋物語」として語り継がれる大石長野水道を代表に、町内には無数の農業用水がめぐり、周囲の水田に豊富な水を供給している。山裾部は富有柿の栽培が盛んであり、紅葉の季節になるとあたり一面が特色にかわる。日岡古墳・珍敷塚古墳に代表される装飾古墳は全国的に有名であり、また平成9年2月に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された白壁づくりの町並みは、毎年2月から4月にかけて催される「筑後吉井おひなめぐり」の時期になると多くの観光客でにぎわう。まさに自然と文化の調和した町である。

仁右衛門畑遺跡は筑後川の支流である美津留川の左岸、開折作用によって形成された自然堤防上に立地する。白壁づくりの町並みがのこる吉井町中心部の北西に位置し、住宅街からは少し離れた距離にある。あたりには水田が広がるが、最近ではこの辺りにも徐々に開発の波が押し寄せ、新築の家屋が目立ちはじめている。近くを通りがかった人の話によると、遺跡のある一帯は米も麦もよく実り、また昭和28年に起きた大水害の時にも浸水しなかったという。遺跡立地の条件としては非常に恵まれた土地である。



第2圖 周辺遺跡分布圖 (1/25,000)

2. 歴史的環境

古墳時代 浮羽郡内は壁画古墳が多く分布する地域として知られている。吉井町内では大字若宮所在の日岡古墳（昭和3年国指定）、大字富永所在の珍数塚古墳・鳥船塚古墳・原古墳・古畑古墳（屋形古墳群として昭和61年国指定）など、学術上欠かすことのできない古墳が存在する。壁画古墳以外にも、日岡古墳の西側に位置する月岡古墳、徳丸所在の塚堂古墳といった著名な前方後円墳が分布しており、浮羽町朝田所在の朝田古墳群（楠名古墳・重定古墳が大正11年国指定）、平成4年度以降継続的に実施されている墳丘範囲確認調査で全長100mを越す前方後円墳であることが確認された、田主丸町大字石垣所在の塚堂古墳を含め、盟主墳の移動、さらに的臣との関連など、多くの研究がなされている。その他、仁右衛門畑遺跡の西方約300mに位置する大字新治・稲崎所在の女塚古墳は、上部を大きく削平されており詳細は不明だが須恵器、埴輪などが採集されている。日岡・月岡古墳と同様に平野部に造られた前方後円墳である。

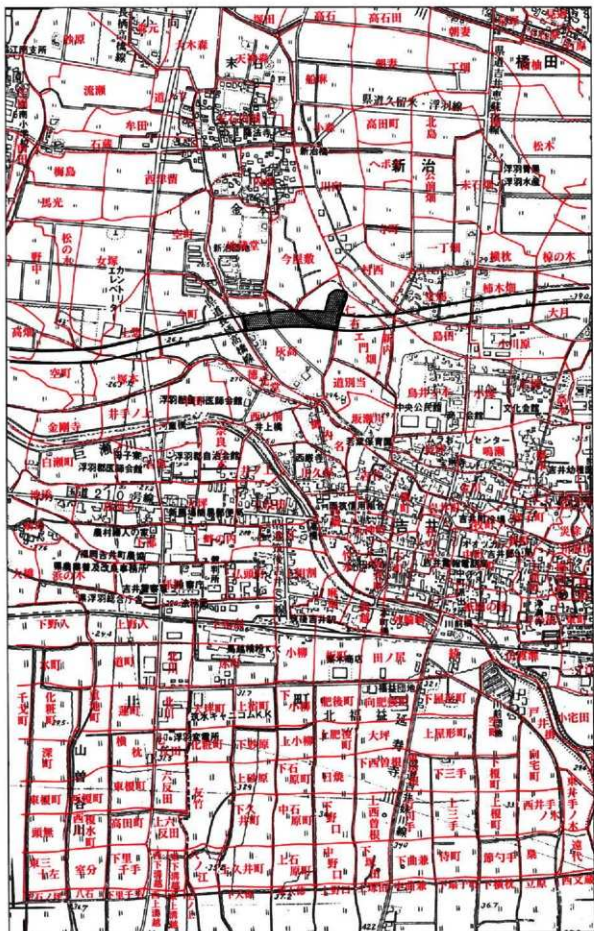
著名な古墳群に対し、集落遺跡に関しては永らく実態が不明であったが、一般国道210号浮羽バイパス建設事業および県営圃場整備事業に伴う発掘調査が進むにつれ、徐々にその様相が明らかになりつつある。

古墳時代前期から中期の集落遺跡として、大字富田、徳丸に所在し、浮羽バイパス建設事業に伴い1979年から1987年にかけて発掘調査が行われた塚堂遺跡がまず挙げられる。遺跡は標高33m前後の低丘陵上に立地し、塚堂古墳刷漆の他、縄文時代から中世にいたるまでの遺構・遺物が検出された。このうち、5世紀代の住居跡にはカマドが設置されており、普及期のカマドとして注目される。当該住居跡からは初期須恵器、多孔式甔等も多数出土している。他に、同じ浮羽バイパス建設事業に伴って発掘調査が行われた鷹取所在の鷹取五反田遺跡が挙げられる。この遺跡は筑後川の支流である美津留川右岸の自然堤防上に立地し、弥生時代後期から古墳時代、奈良時代にかけての集落遺構や甕棺墓などが調査された。ここでは5世紀前半から中葉にかけての竪穴住居跡が検出されており、これにもやはりカマドを伴う。また、県営圃場整備事業に伴い町教委が発掘調査を実施した大字生業所在の生業地区遺跡でも、前述と同様の竪穴住居跡が検出されている。今回報告する仁右衛門畑遺跡でもやはり同時期の竪穴住居跡を検出しており、この古墳時代前期～中期にかけての集落遺跡の増加と、以降大きく展開する古墳群との間に積極的な関連を認めても良いように思える。

古墳時代後期の集落遺跡は、前述の塚堂遺跡、鷹取五反田遺跡、生業地区遺跡でも検出されているが、他に生業1号墳に近接する大字生業所在の大礎遺跡がある。ここでは標高26m程の微高地上に、7世紀後半を主体とする竪穴住居跡が検出されている。

古代 『和抄抄』によると、筑後国は十郡からなり、このうち生業郡は大石、山北、姫治、物部、椿子、小家、高西の七郡からなり、現在の吉井町は小家郷にあたる。筑後国内の郡衙推定遺跡としては、小郡市の小郡官衙遺跡や大洗町の下高橋遺跡群が著名だが、生業郡衙の位置に関しては未だ不明である。また当時の生業郡を窺うことができる史料に、平城宮造酒司跡推定地出土の木簡がある。靈龜二年（716）と翌三年に、生業郡が平城宮に煮塩年魚を貢納したことが記されている。調査中に担当者も幾度となく筑後川の鮎を食したが、美味であることは今も昔も変わらない。

水縄山北麓は現在でも古代の土地区画である条里地割が広く展開している。旧生業、竹野、山本の三郡にわたり、東西約二十数kmにおよぶ距離である。この条里地割については、天武朝以後、畿内政権のもとに本格的に開発が促進され、七世紀末にはほとんどが完成したと考えられている。



第3図 調査区周辺字図 (1/10,000)

古代の遺跡は調査数が非常に少ない。塚堂遺跡地区の溝状遺構からは、9世紀代の遺物が出土している。また鷹取五反田遺跡では、8世紀代の堅穴住居跡が検出されている。西隣の田主丸町では、大字榑木所在のシメノ遺跡が田主丸町教委により調査され、奈良時代から平安時代初期の集落が確認されている。また、浮羽バイパス建設工事に伴い調査された大字船越所在の船越二ノ上遺跡では、土坑・溝などから10～12世紀の遺物が出土している。

発掘調査は行われていないが、大字富水の水繩山山麓斜面では、白鳳期の軒丸瓦が採取されており、寺院（法華寺）跡の可能性が指摘されている。

中世 「吉井」という地名に関する史料は『吾妻鏡』第三十六巻に、寛元二年六月（1244）、筑後国御家人吉井ノ四郎長広と同御家人矢部ノ十郎直澄が、生業庄得安名の屋敷田畠のことで論争したという記事が初出である。嘉禄二年（1226）に星野伯耆守胤実が生業郡の領主となると、本拠を星野におき、水繩山の各所に山城を築いて外敵に備えた。吉井町内には延寿寺の小城、同福丸城、屋形の妙見城、千代久の西城、同清水城がある。この中でも福丸城の城下町は今の延寿寺の西側一帯に栄えたが、天正十二年（1584）に豊後大友勢に攻略され落城してからは、その城下町は現在の吉井地区に移動したようである。

中世遺跡の発掘調査数も古代同様非常に少なく、塚堂遺跡や大礎遺跡、大字生業所在の堺町遺跡で掘立柱建物跡や井戸、溝状遺構が数例検出されているに過ぎない。大字大村の大村居館跡、下菅の菅村館跡など、現在でも住民達の生活空間として、当時のままの姿を残す所もある。

近世 近世の吉井町を知る上で、五庄屋による大石・長野堰建設事業は欠かすことができない。今でこそ北部一帯には緑豊かな田園風景が広がるが、以前は筑後川、巨瀬川といった河川は水位が低すぎて農業用水として利用することができず、豊かな水を前にして周囲の土地は荒蕪のまま放置されていた。そこで農民の貧窮を救うべく、寛文三年（1663）、夏梅村庄屋次兵衛、高田村庄屋助左衛門、清宗村庄屋平右衛門、今竹村庄屋平左衛門、菅村庄屋作之丞の五人の庄屋を發起人とする十一人の庄屋達は、筑後川に堰を造り、水道を通して荒れ地に水を供給する計画を立て、郡奉行高村権内に申し出た。洪水が起きた際の被害の拡大を恐れた近隣八ヶ村の反対陳情などもあったが、権内の調停で何とかおさまり、普請奉行丹羽頼母重次監督のもと寛文四年（1664）正月十一日、工事が開始された。事業が失敗した時の五庄屋処罰のためと、人目につきやすい所に礫台が用意されていたという。工事ははじめて約六十日、人夫数延べ四万人を費やし、寛文四年三月中旬に工事は完成した。以後、幾度かの水路拡張、水門改修工事を経て現在に至っており、今なお周囲の水田を潤している。

参考文献（浮羽バイパス関係文化財調査報告書を除く）

『吉井町誌』第一巻 吉井町誌編纂委員会 1977

『浮羽郡誌』浮羽郡誌刊行会 1966

『田主丸町誌』第一巻～第三巻 1996

『塚堂古墳』吉井町文化財調査報告書第1集 吉井町教育委員会 1982

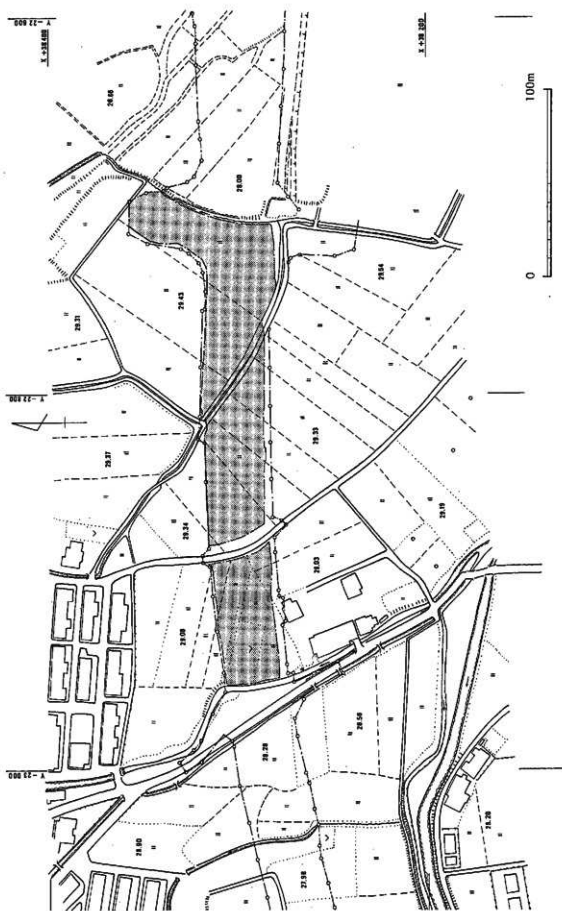
『原古墳』吉井町文化財調査報告書第2集 吉井町教育委員会 1984

『月の岡古墳』吉井町文化財調査報告書第3集 吉井町教育委員会 1986

『若宮古墳群』吉井町文化財調査報告書第4集 吉井町教育委員会 1989

『生業地区遺跡』吉井町文化財調査報告書第5集 吉井町教育委員会 1990

『若宮古墳群』吉井町文化財調査報告書第6集 吉井町教育委員会 1990



第4图 调查区位置图 (1/2,000)

Ⅲ 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要

仁右衛門畑遺跡は美津留川の左岸、川より約150m程離れた自然堤防上に立地する。美津留川に最も近い調査区東側は標高29.7mを測り、調査区の中では最も高い。これよりさらに東側は崖面を形成しており、低位段丘面とは約1.7mの比高差がある。この低位段丘面は試掘調査の結果遺構が検出されなかったため、調査対象区域から除外した。調査区中央から西側にかけては緩やかに下降しており、それぞれ29.4m、28.8mを測る。遺構もこれに比例して徐々に稀薄になる。

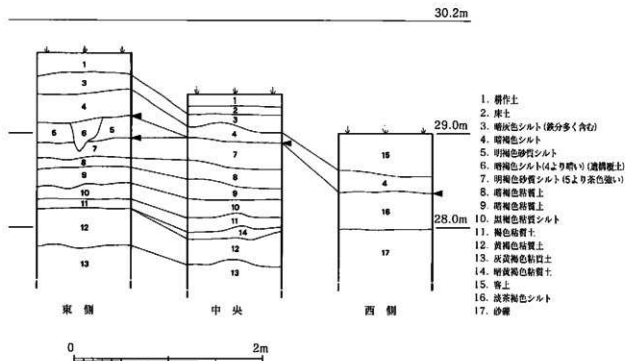
検出した主な遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・木棺墓・土墳墓・甕棺墓・落ち込み等である。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器・金属器が出土している。

調査を実施するにあたり、便宜上、用水路部分から東をⅠ区、用水路から町道までをⅡ区、町道から西をⅢ区と区分けした。調査面積はそれぞれ3,465㎡、2,700㎡、1,950㎡で、合計8,115㎡。遺構番号は遺構を検出した順に付したが、先述した諸般の理由で調査区内を転々と移動せざるをえなかったため、遺構の位置が把握し難いものとなってしまった。

2. 基本層序 (第5図)

当遺跡は自然堤防に立地するという地理条件上、土壤は河川の氾濫・浸食作用で形成された粘質土・シルトからなる堆積土である。

調査区東側は耕作土の下に鉄分を多く含んだ暗灰色シルト層が堆積する。床土が見られないのはこの土層図を作成したトレンチが水田畦畔に位置したためである。この暗灰色シルト層には遺物が若干含まれる。その下層は暗褐色シルト層からなり、多くの遺物が包含される。第5層の明褐色砂



第5図 基本土層図 (1/40)

質シルト層は調査区全体に認められるものではなく、部分的な堆積である。遺構はこの層の上面から掘り込まれており、第5層上面を遺構検出面とした。またこの層にはわずかではあるが遺物が含まれるため、下層の調査を実施した。第7層は第5層とはほぼ同質であり、やや茶色が強い程度である。以下粘質土やシルトが堆積するが、これらには遺物は全く含まれない。

調査区中央は旧水田であり、最上層は耕作土・床土からなる。第3・4

層は東側と同様の状況である。この付近には5層が存在せず、第4層の下には第7層が堆積する。従ってこの層の上面を遺構検出面とした。以下は東側と同様の堆積状況となっている。

調査区西側は旧宅地だったため、約40cmの客土が盛られる。客土の下には耕作土・床土はなく、第4層暗褐色シルト層が認められた。やはり遺物包含層であるが、東側・中央と比べて遺物量が少ない。第4層の下には淡茶褐色シルト層が堆積しており、その上面を遺構検出面とした。この下には粗砂と拳大の円礫からなる砂礫層が厚く堆積する。尚調査区西側は堆積状況が複雑で、第4層の下層が砂礫層となる部分もあり、この砂礫層上面を遺構検出面とした場所もある。



基本層序

3. 検出遺構と遺物（古墳時代以降）

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版7、第6図）

調査区中央北寄りで見出した竪穴住居跡である。平面形は比較的整った正方形で北壁6.0m、東壁6.0m、壁高35cm、床面積は35.63㎡を測る。北壁のほぼ中央にカマドを付設する。壁際には壁小溝が巡っており、カマド周辺を除いて全周している。カマド対面には長軸1.65m、短軸1.05m、床面からの深さ20cmを測る楕円形の土坑を配置する。土坑内からは底面から約10cm程淨いた状態で、数個の河原石とともに甕47が出土した。また土坑東側の床面直上からは壺45とともに第196図27の土製模造鏡が出土した。主柱穴はP1～P4を検出しており、径は40～60cm、深さは40cm前後を測る。柱痕はP2の南側には人頭大の河原石とともに3cm前後の円礫が径50cmの範囲で円形に集中する箇所があるが、その性格については不明である。床面では貼り床は認められなかったが、ほぼ全面で床面硬化を確認しており、特に主柱穴間の硬化が著しい。遺物は遺構覆土および床面直上から多く出土している。

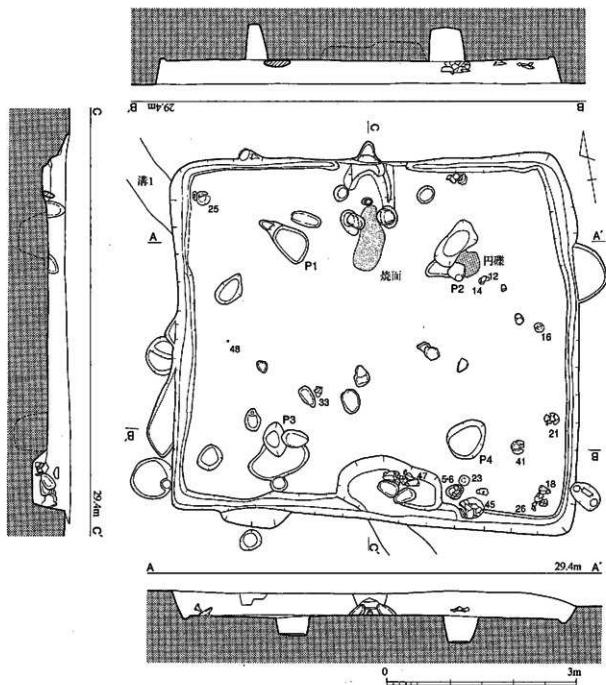
カマド（図版7、第7図） 北壁ほぼ中央に付設する造り付けカマドで、北側中央に長さ40cmの短い煙道が付く。右袖は1.0m、左袖は0.4mを測り、壁体には粘土ではなく遺構覆土と同様の土を使用しているため検出が困難で、左袖を若干掘りすぎてしまった。カマド内には炭を多く含んだ焼土が堆積する。焚き口の両側には長さ40cm位の扁平な石を立てるが、土圧により上方が内側へ傾く。こ

の石の上に架していたと思われる河原石が西側へ50cm離れた所から出土した。支脚は壁から60cm離れた中軸線上に位置し、棒状の石を使用している。この支脚から南側は1mの長さにわたり床面が強く焼けている。遺物は支脚北側から椀4・9、壺29が、焚き口付近から壺30が出土した。

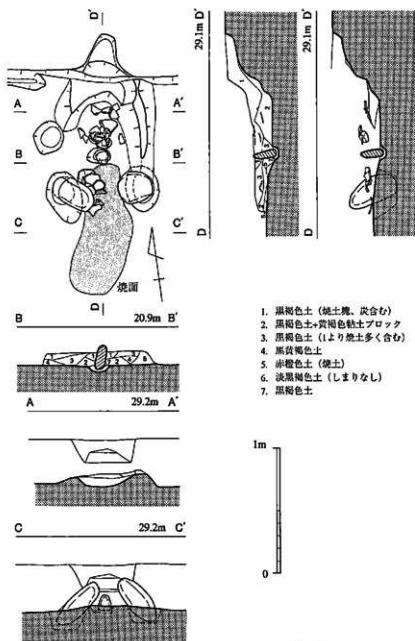
出土土器 (図版53・54、第8～11図)

弥生土器 (1～3) 1・2は壺の底部。3は断面三角形となる甕の口縁部。いずれも弥生時代中期の混入品である。

土師器 (4～48) 4～16は碗である。4～7は口縁部が若干外反する。5は底部に焼成前穿孔を行う。9・12は口縁部が真上に立ち上がり、深みがある。他のものは浅めで、口縁部は開き気味に立ち上



第6図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第7図 1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

端部で接地するものと、23・25の様には跳ね上がり気味に開いて内側で接地するものがある。口径18.3～20.4cm、器高14.9～16.2cmを測る。

27～31は壺である。27は口縁部が大きく開く小型のものである。28・29は口縁部が長く直線的に伸びるもので、28の端部は尖っている。29は胴部最大径が上方にある。口径10.7cm、器高16.3cmを測る。30・31は退化した二重口縁のものである。29は4・9と共にカマド内の支脚北側から、30はカマド焚き口から出土した。

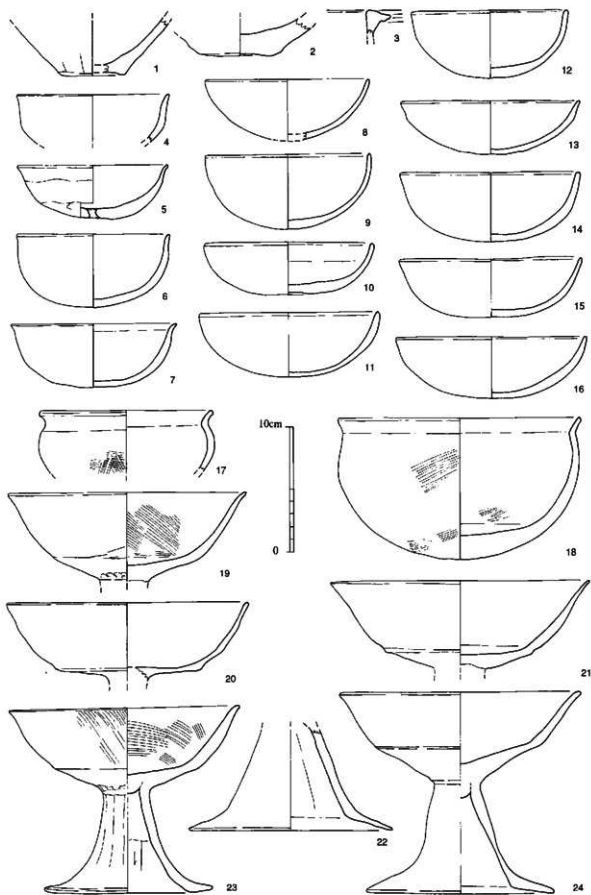
32～45は壺である。40の様には直線的に伸びるものもあるが、他は口縁部は外反気味に長く伸びる。胴部は強い横ヘラケズリを行うものが多く、屈曲部の内面に稜をもつものが多い。肩部はあまり張らず、45を例にとると胴部最大径は中位にあり、やや長胴となる。口縁部は横ナデ、外面はハケメ調整を行う。口径18.8cm、器高26.2cmを測る。

がる。器表の風化が著しく調整不明なものが大半である。

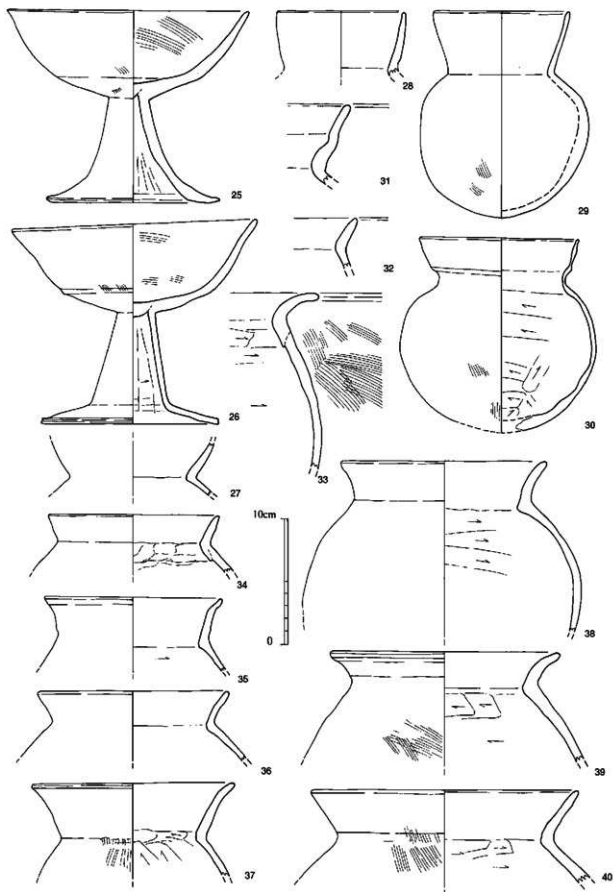
4・9はカマド内の支脚北側から一括して出土したものである。

17・18は口縁端部を短く外反させる鉢で、17は小型、18は口径19.0cmを測る大型のものである。18は底部が非常に厚く、内外面ハケメ調整を行っている。

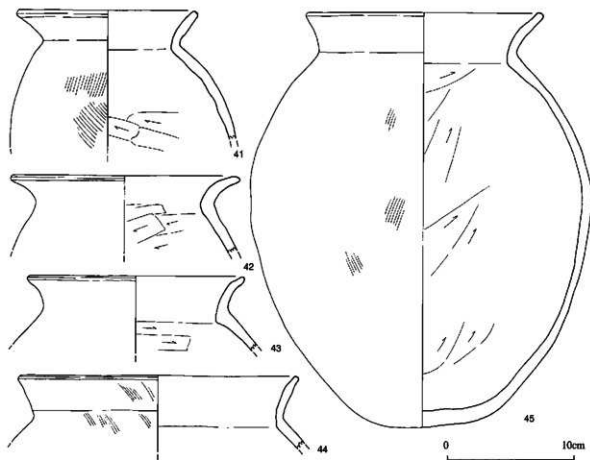
19～26は高坏である。24は坏部上半が直線的に開き、内底部がやや深く、また脚柱部はわずかに中膨らみとなる古式の様相を残す。口径19.0cm、器高16.0cmを測る。他は坏部上半が内湾気味に大きく開き、口縁部は外反する。内底部は平坦で、屈曲部にはほとんど稜が認められない。脚柱部は直線的のび、裾部は緩やかに開く。裾部には22・26の様には直線的に伸びて



第8图 1号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第9圖 1号竖穴住居跡出土土器実測圖② (1/3)



第10図 1号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

46・47は甌である。口縁部は開かず、体部から直線的に口縁部へと移行する。47は把手をソケット状に差し込んでおり、体部内面にその痕跡が認められる。底部に不整円形の蒸気孔を中央に1個、その周囲に5個配置する。内面はヘラケズリ、外面は縦ハケメ調整を行う。口径31.6cm、器高26.2cmを測る。

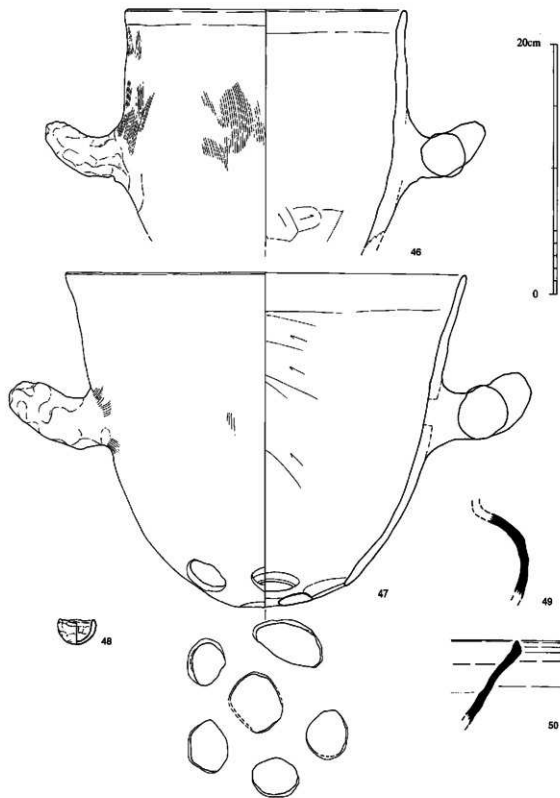
48は小型でづくね碗で、丁寧な指ナデ調整を行う。

須恵器 (49・50) 49は甌の肩部で、内外面ナデ調整を行う。初期須恵器の部類に入る。50は東播系の須恵質こね鉢で、口縁部を玉縁状にする。住居跡に切り込んだ中世ビットからの混入品である。

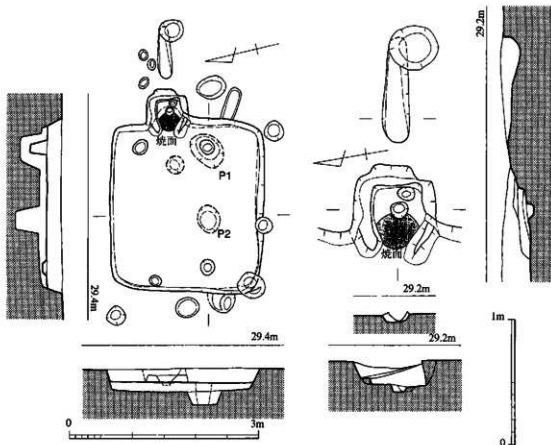
上述の遺物のうち、明らかに混入品と判断されるものを除けば、一括性の高い良好な資料である。器種構成面では碗の増加傾向を指摘できる。帰属時期としては、24の高坏、30・31の甌に古い様相が認められるものの全体的に見れば古墳時代中期中葉に比定できる。これらの土器以外に第202図52の砥石、カマド内から第201図45の石包丁が出土した。

2号竪穴住居跡 (図版8、第12図)

調査区中央南西寄りで見出した小型の竪穴住居跡である。後述する3・4号竪穴住居跡とともに一群を構成する。平面形は東西にやや長い隅丸方形で、東壁2.3m、北壁2.5m、深さ20cm、床面積6.67㎡を測る。東壁の中央から北寄りの所を大きく掘り込んでカマドを設置する。主柱穴ははっきりとはしないが、P1・P2を可能性のあるものとして挙げておきたい。P1は径45cm、深さ40cmで、柱痕を確認している。P2は径35cm、深さ50cmで貼り床下層で確認した。住居内での配置としては、



第11图 1号竖穴住居跡出土土器実測图④ (1/3)



第12図 2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

中央にあるP2の一本支柱を想定した方が良い様にも思える。床面には貼り床がなされているが、床面硬化は全く認められなかった。

カマド (第12図) 東壁に造られており、壁から50cm程突出する。煙道は1m程伸びているが、カマドに近い所は削平され途切れる。また先端は後世のビットに破壊される。カマド壁体は掘り方を取り囲むように厚く積み上げられ、袖は内側へ30cm程伸びる。カマド内部では支脚の抜き取り穴を奥壁から25cm内側で検出した。この穴は煙道の中心線上にちょうど位置している。この抜き取り穴から焼き口にかけて、径30cm程の広さで赤変部分が認められた。

出土土器 (第13図)

弥生土器 (1) 1は如意形口縁の甕で、口縁下部に三角突帯を巡らす。弥生時代中期初頭のもので、明らかに混入品である。

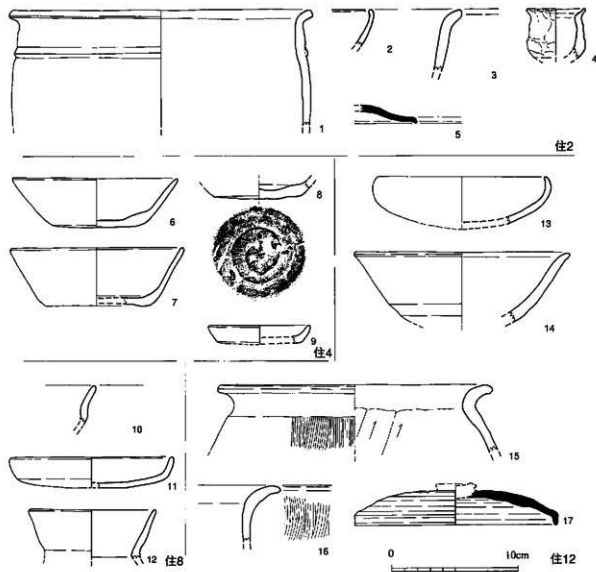
土師器 (2~4) 2は坏の口縁部で、端部が短く内湾する。3は口縁部が短く外反しており、甕であろう。4は小型でづくね土器で、形は鉢に近く、底部は平底で口縁部が外反する。

須惠器 (5) 5は坏壺である。端部は断面三角形で短く屈曲し、少し外側に開く。焼け歪みが著しい。

出土遺物に乏しく時期比定は困難だが、8世紀後半頃と思われる。

3号竪穴住居跡 (図版8、第14図)

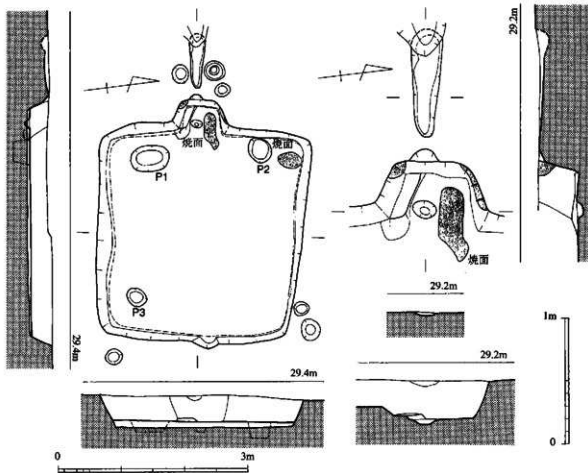
調査区中央南西寄りで見出した。2・4号竪穴住居跡とともに一群を構成する。平面形は比較的整



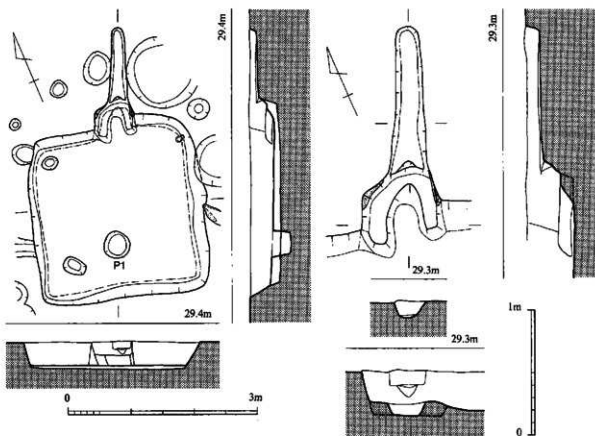
第13図 2・4・8・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

った隅丸正方形で、西壁3.2m、北壁3.2m、深さ0.4mを測る。西壁中央を大きく掘り込んでカマドを付設する。主柱穴はP1～P3を考えたが、掘り込みがやや浅く、主柱穴ではないかもしれない。また東壁の中央で、半円形の小さな張り出しを検出したが、これは出入口施設に関連する掘り込みの可能性もある。床面はほぼ全面に貼り床がなされるが、床面硬化は認められなかった。遺物はカマド内から土器器片が2点出土しただけで、しかも細片で図示できなかつた。時期の比定は困難だが、2・4号竪穴住居跡と主軸方位がほぼ同じことから、大差ない時期と考える。

カマド (第14図) 東壁中央を60cm程四角く掘り込んで造られる突出型のカマドである。掘り方の両コーナー上部では焼けて変色した部分が認められた。煙道はカマド中央からやや南にずれ95cm程伸びており、カマドに近い所は削平され途切れる。この煙道の両側で2つのピットを検出しており、覆い屋根の様な上屋構造を有していたものと思われる。カマド袖は左袖のみ20cm程検出したが、図面でも確認できる様に、構造上問題がある。壁体には粘土を使用せず覆土と同様の砂質土を使用するため、検出が非常に困難であり掘り間違えてしまった。支脚は奥壁から40cm程内側の中軸線から南に寄った所に位置する。支脚そのものは抜き取られており、抜き取り穴のみ検出した。この掘り



第14図 3号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第15図 4号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

方の北側には焼土塊が広がっているが、これはカマド壁体の崩落土であろう。

4号壑穴住居跡（図版8、第15図）

調査区中央南西寄りで検出した壑穴住居跡である。平面形はややいびつな隅丸方形で、北壁2.5m、西壁2.5m、深さ35cm、床面積7.48㎡を測る。カマドは北壁ほぼ中央に付設される。支柱穴はP1のみ検出しており、径45cm、深さ30cmを測る。床面は全面に貼り床がなされるが、床面硬化は認められない。

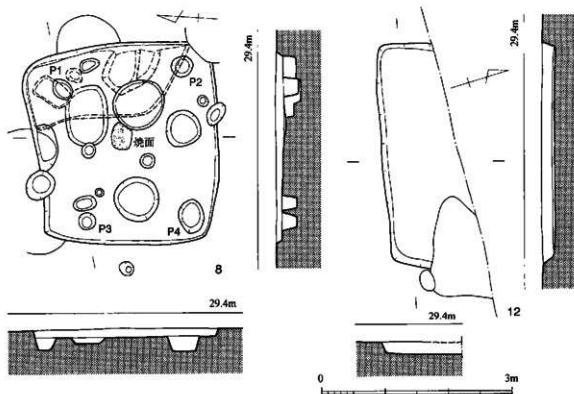
カマド（第15図） 北壁中央を60cm程掘り込んで造られる突出型のカマドである。煙道はカマドの中軸線上に位置し、約1.1m程伸びる。検出当時、カマド内に逆字形のラインが見えたため、これをカマド壁体と考えて検出したが、カマド掘り方の両コーナー上部に焼面が認められることから構造上つじつが合っていない。壁体崩落土を袖と間違えて検出してしまった様である。支脚の位置は確認できなかった。出土遺物には図示したもの他に、2号壑穴住居跡出土の5と同一個体と思われる須恵器坏蓋が出土したが、細片で図示できなかった。

出土土器（図版54、第13図）

土師器（6～9） 6～8は土師器坏である。6・7は体部が直線的に伸び、底部は切り離し後にヘラナデ調整を行う。8の底部はヘラ切り離しのままである。これらは8世紀後半以降に比定できる。9は小皿で口径8.0cm、底部糸切りを行うもので、中世の混入品である。

8号壑穴住居跡（図版9、第16図）

調査区中央で検出した壑穴住居跡である。平面形はややいびつな隅丸長方形で、東壁2.9m、北壁2.7m、南壁3.2mを測る。残りが悪く、壁高は残りの良い所で10cmを測るに過ぎない。床面積



第16図 8・12号壑穴住居跡実測図（1/60）

は8.89㎡。床面のほぼ中央に焼土がみられ、掘り込みはないが汚跡であろう。主柱穴はP1～P4を検出しており、径25～40cm、深さ30cmを測る。床面は東側の一部のみ貼り床が認められる。床面硬化は顕著には認められなかった。出土遺物は少ない。

出土土器（第13図）

土師器（10～12） 10は深みのある椀で口縁部が短く外反する。11は口縁部が直立する皿で、8世紀代の混入品である。12は直線的に伸びる小型壺の口縁部である。

12号竪穴住居跡（第16図）

調査区中央北端で検出した竪穴住居跡である。北側が調査区外へと続いており平面形は不明だが、ややびつな隅丸正方形になると思われる。南壁3.4m、深さ0.2mを測る。貼り床・床面硬化は認められなかった。

出土土器（第13図）

土師器（13～16） 13は口縁部が強く内湾し端部が内側を向く坏で、内外面ナデ調整を行う。14は古墳時代中期の高坏で、下半は内湾しながら開き、口縁部はわずかに外反する。15は口縁部が強く外反する甕である。16は口縁部が外反するが胴部は張りがない。甕の可能性もある。

須恵器（17） 17は端部が下方に屈曲する坏壺で、割とシャープな作りである。

出土遺物は少ないが、ほぼ8世紀前半前後に比定できるであろう。

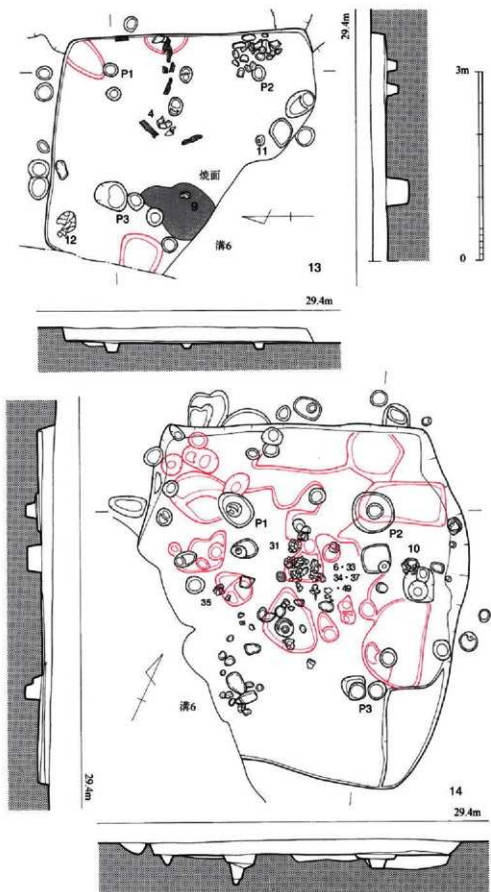
13号竪穴住居跡（図版9、第17図）

調査区北東側で検出した竪穴住居跡である。西側が調査区外へと伸び、また南側を6号溝に切られるため、全体の $\frac{3}{4}$ 程度しか遺存していない。北側は3.2m、東側は3.7m、深さは25cmを測り、不整形な長方形プランとなる。覆土は黒褐色砂質土の自然堆積である。床面の中央西寄りに焼土の広がりが認められ、掘り込みはないが汚跡であろう。南東のコーナー付近では床面からかなり浮いた状態で拳大の礫群を検出したが、どのような意図があるのか判らない。また床面には炭化材がいくつか散乱しており焼失住居の可能性も考えたが、焼失住居とするには炭化材が少なすぎるため断定するまでには至っていない。主柱穴はP1～P3を検出したが、どれも掘り込みが浅く、20～25cm程度に過ぎない。貼り床は一部で認められ、下層では不整形のピットを検出している。床面硬化は顕著には認められなかった。遺物は比較的多く出土している。図示した土器以外に第202図56の砥石が出土している。

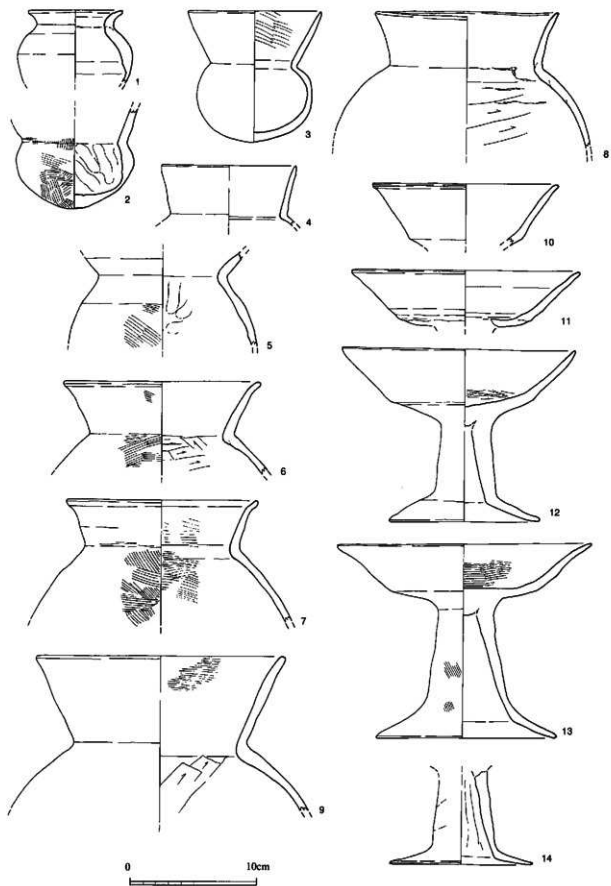
出土土器（図版54、第18・19図）

土師器（1～22） 1～9は壺である。1～3は小型のもので、1は口縁部が短く強く外反する。2は体部最大径が上位にあり、頸部はあまり締まらない。口径10.5cm、器高10.4cmを測る。3は体部が球形で、頸部が締まり、口縁部径は体部径より大きく、直線的に長く伸びる。4は口縁部があまり開かない中型の直口壺である。5～8は口縁部が開き気味に立ち上がり、端部がわずかに外反する中型壺で、肩はあまり張らず球形になる。9は口縁部が直線的に開く大型の壺である。

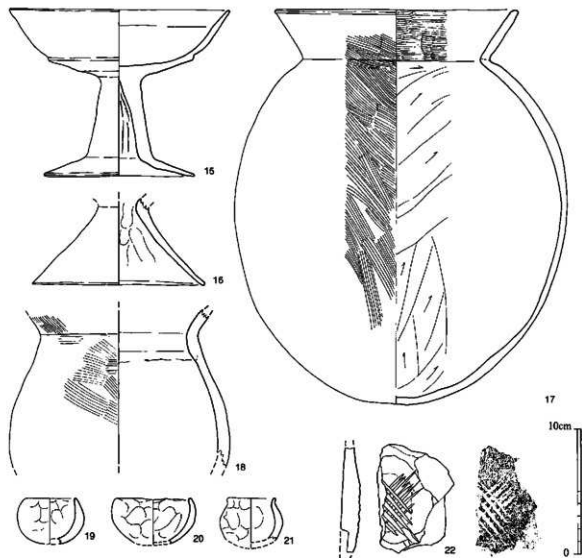
10～16は高坏である。坏部は直線的に伸びるか、もしくはわずかに外反気味に大きく浅く開く。脚部は柱部が中膨らみに広がり裾部が直線的に開くものと、16のように柱部をもたずに接合部から大きく直線的に広がるものがある。10は細片を図示したため、復元径にやや不安が残る。12は口



第17圖 13・14号整穴住居跡実測図 (1/60)



第18图 13号墓穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第19図 13号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

径18.4cm、器高13.8cm、13は口径20.0cm、器高15.4cm、15は口径17.4cm、器高13.2cmを測る。

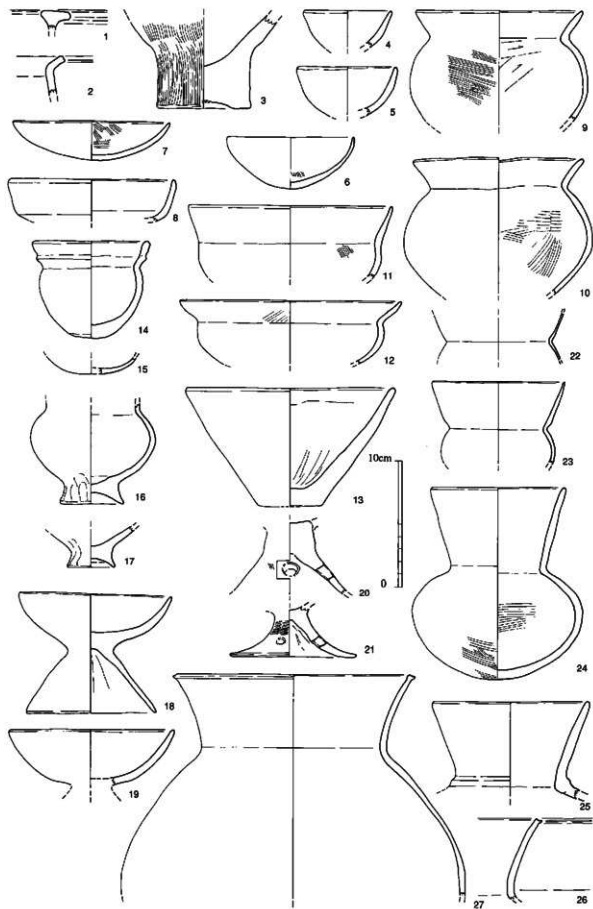
17・18は甕である。17は長胴気味の球形胴で、頸部はしまり、口縁部は直線的に開く。口径19.2cm、器高31.2cmを測る18は傾きにやや不安が残る。肩はあまり張らず、頸部もあまり締まらない。

19～21は小型でつくね土器で、覆土からの出土である。19・20は鉢形に近く、21は壺形に近い。22は土器の一部であろうが、どのような器形になるのか全く不明である。内面は全く平坦で、外面にはヘラによる粗い斜格子を刻んでおり、その周囲は環状に窪んでいる。

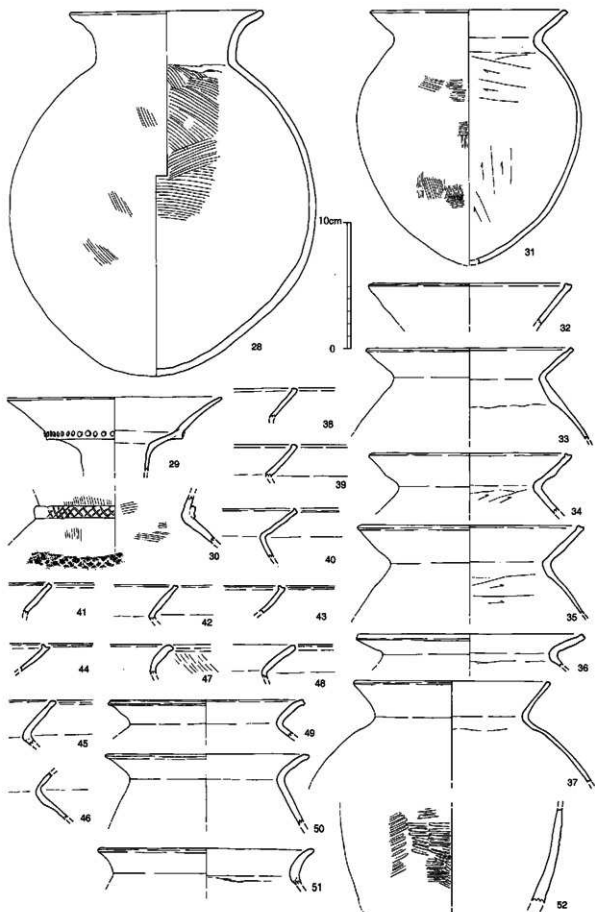
出土遺物にはほとんど混入が見られず、良好な一括資料である。器種構成上は高坏・壺が目立ち、甕が非常に少なく碗が欠落するといった現象が指摘できる。時期は古墳時代中期前半でも古い段階に比定出来る。

14号竪穴住居跡 (図版9、第17図)

調査区北東側で検出した竪穴住居跡で、南西側を6号溝に大きく切られる。平面形は長方形だが東壁がやや崩れており、不整形である。北壁4.2m、東壁5.7m、深さ20cmを測る。覆土は黒褐色砂



第20图 14号墓穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第21图 14号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

質土の自然堆積である。床面中央には焼土の広がり認められ、掘り込み等はないが炸跡であろう。南東コーナーでベツト状の高まりを検出したが、高さ5cmと非常に低く不明瞭なものである。主柱穴はP1～P3の3箇所しか検出できなかったが、本来は4主柱であろう。これらの柱穴は径30～50cm、深さ20～50cmを測る。貼り床はほぼ全面に行っており、下層では不整形のビツトや落ち込みを検出した。また顕著な床面硬化は確認できなかった。床面下層では浅い溝状遺構やビツトを検出した。床面直上からは河原石とともに土器がまとまって出土したがどれも破砕しており、住居廃棄後に投棄されたものであろう。図示した土器以外に第202図66の砥石が覆土から出土している。

出土土器（第55、第20・21図）

弥生土器（1～3） 1は端部がやや伸びた三角口縁の甕。2は屈曲の弱いく字口縁の甕。3は柱状の厚い底部の甕。いずれも混入品である。

土師器（4～52） 4～14は鉢である。4～6は小型のもので、ハケ後ナデ調整を行う。4・5は半球形の深いものである。6はやや浅いもの。7は浅く、内面ヘラミガキ調整を行う。8は上半が屈曲し、口縁部が上を向く。奈良時代の坏の混入品であろう。9・10は体部が球形で最大径が中位にあり、頸部が締まって口縁部は短く開く広口のものである。11・12は体部が浅いもので、頸部がしまらず、口縁部は短く伸びる。13は平底のもので、体部は直線的に開き、また器壁が厚い。14は二重口縁となる小型の鉢で、山陰系の二重口縁を模したものである。口径9.2cm、器高8.6cmを測る。

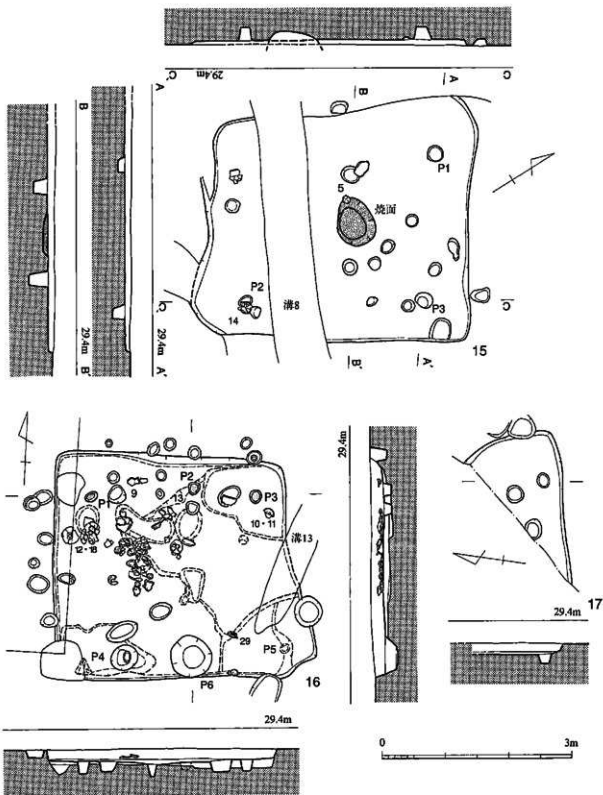
15は鉢か壺の底部であろう。16・17は脚台をもつ鉢である。脚台は低く、断面三角形となる。

18・19は台付鉢である。18に関しては脚部は柱部を持たず、裾部は接合部からそのまま直線的に開く。20・21は高坏で、円形の透かし孔を穿孔するものである。どちらも短い脚柱部を持つ。21に関しては、柱部から外反してそのまま裾部へと移行する。21の外側は横タキ調整を行う。

22～30は壺である。22・23は小型の壺で、頸部があまり締まらない。24は長頸壺で、体部の最大径が中位にある。頸部はあまり締まらず、口縁部は直線的に伸びる。口径10.6cm、器高15.0cm。25～27は口縁部が直線的に伸びるもので、特に26・27は口縁端部を面取り整形している。28は頸部がまっすぐに立ち上がった後、緩く外反して口縁部へと至る。胴部は球形で、最大径が中位にある。内外面ハケメ調整を行う。口径15.3cm、器高28.8cm。29は二重口縁壺で、屈曲部外面に円形浮文を巡らす。頸部は締まりまっすぐに立ち上がる。口縁部は大きく直線的に開く。器壁は薄い。30は斜格子刻みをもつ突帯を頸部に巡らす在地系の壺である。

31～52は甕である。31は胴部最大径が中位よりやや上にあり、底部は尖り気味である。口縁端部は断面四角形に面取りする。内面のヘラケズリは屈曲部より1cm程下から行われ、外面は胴部下半に縦ハケメ、上半に横ハケメ調整を行う。器壁は4mm前後と薄いものである。口径15.6cm、器高20.2cm。32～46は口縁部が直線的または内湾気味に開く畿内系のものである。端部を短く上方にまみ上げるものと、四角く面取りするものがある。総じて器壁が薄い。47～51は口縁部がやや外反し、端部は丸く仕上げる伝統的の第V様式系のものである。52は甕の胴部破片で、上下が不明である。内面ナデ、外面タキ調整を行う。

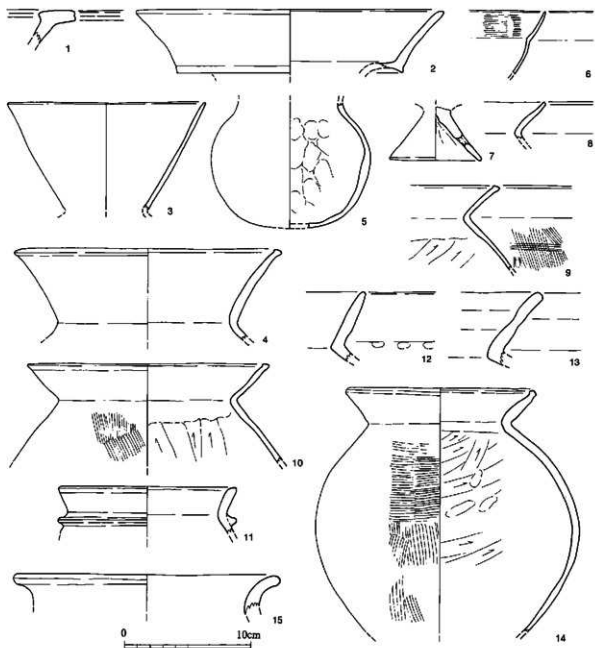
以上の出土遺物は、弥生時代の明らかな混入土器を除けば良好な一括資料である。在地系が少なく、畿内系の一群と第V様式系の一群とで構成される現象が見て取れる。時期的には古墳時代前期初頭として良いものである。



第22图 15~17号竖穴住居跡实测图 (1/60)

15号竪穴住居跡 (図版10、第22図)

調査区北東側で検出した竪穴住居跡で、中央を大きく8号溝に切られる。平面形はややいびつな長方形で、北壁3.9m、東壁4.0m、南壁3.4mを測る。深さは5~10cmと非常に浅い。床面積は15.2㎡を測る。覆土は黒褐色砂質土の自然堆積である。床面中央で楕円形の炉跡を検出している。長軸0.8m、短軸0.55m、深さ10cmを測り、内部には焼土が多く含まれていた。主柱穴はP1~P3を検出しており、径20cm、深さ20cm前後の小さく浅いものである。南東側の主柱穴は検出できなかったが、4本主柱となるであろう。他にいくつか小ピットを検出したが、当住居に伴うものかどうか判断できなかった。また貼り床、床面硬化は確認していない。遺物は図示した土器の他、第198図3の石鏃、下層から第199図22の打製石斧が出土した。



第23図 15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版55、第23図)

弥生土器 (1) 1は鋤先口縁の甕である。口縁部は水平に短く伸びる。混入品である。

土師器 (2~15) 2~5は甕である。2は二重口縁甕で屈曲部は鋭い稜をなし、口縁部は外反して大きく開く。3は大きく直線的に開く長頸甕である。4は口縁部が長い広口甕で、端部をわずかに上方につまみ上げる。5は甕の体部で、最大径が中位よりやや上にある。6は体部が浅く、頸部がほとんど締まらない鉢。7は接合部から直線的に開く高坏脚部で、円形の透かし孔を2箇所に穿孔する。

8~15は甕である。8は端部が若干薄く仕上げられる。9・10はどちらも口縁部が直線的に開くもので、端部は内側につまみ出している。口縁部は横ナデ、胴部内面は屈曲部よりやや下からハラケズリを行う。外面は縦ハケ調整を行い、また器壁はかなり薄い。11~13は在地的様相が濃いものである。11は口縁部があまり開かず、屈曲部外面に突帯を巡らす。12・13は口縁部が直線的に開いており、器壁は厚い。14は最大径が胴部中位にある球形胴のもので、口縁部はわずかに内湾しながら開く。器壁はやや厚い。胴部中位よりやや上に1条の沈線を巡らす、全周しない。胴部内面は縦ハラケズリ、外面は縦ハケの後に横ハケを行う。15は口縁部が強く外反する甕で、混入品である。

出土遺物は前述の14号壑穴住居跡出土遺物よりもやや新しい様相が見られる。古墳時代前期前半頃に比定出来る。

16号壑穴住居跡 (図版10、第22図)

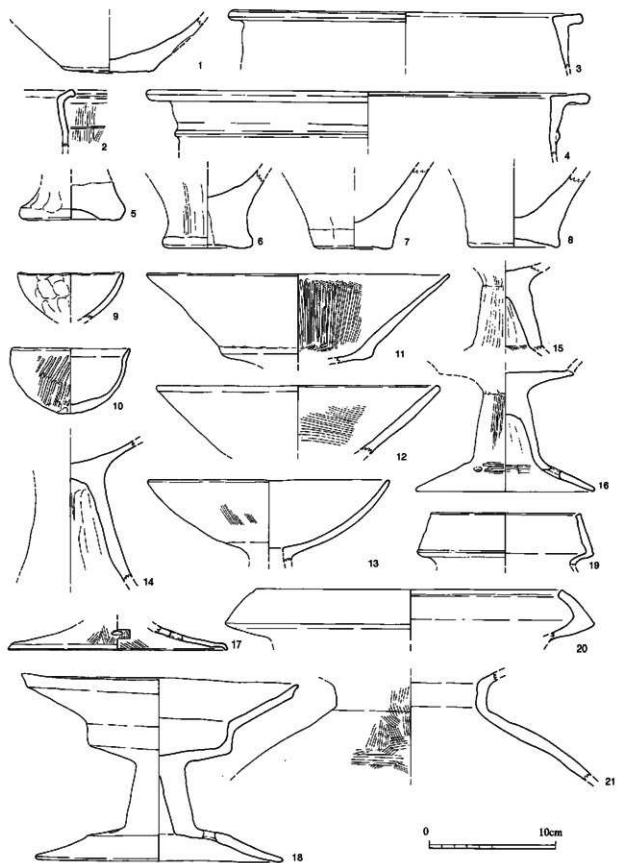
調査区北東側で検出した壑穴住居跡で、12・13・14号溝に切られている。平面形は北壁3.6m、西壁3.6mを測る正方形プランだが、東壁がややいびつになっている。深さは20cm、床面積は13.50㎡を測る。覆土は黒褐色砂質土である。床面を精査したが、炉跡は検出できなかった。また支柱穴の位置は判然としなかったが、P1・P3・P4・P5がこれに相当すると考えている。いずれも径20cm、深さ20cm前後と小さく浅いものである。またP1・P2・P3はビット掘り方の壁が赤く焼けていたが、この住居跡が焼失住居とは考えられないので原因は不明である。P6としたものは、壁際土坑である。径65cm、深さ20cmと小さなものである。貼り床は全面に行われ、下層では不整形の掘り込み、ビット等を検出した。全体的に東側が深く掘られる様である。床面硬化は確認できなかった。床面直上から若干の円礫とともに土器が出土したが、いずれも投棄された状況である。図示した土器の他、第198図12のスクレイパー、第200図32の磨石、第200図38の凹石、第203図73の砥石が出土した。

出土土器 (図版55・56、第24・25図)

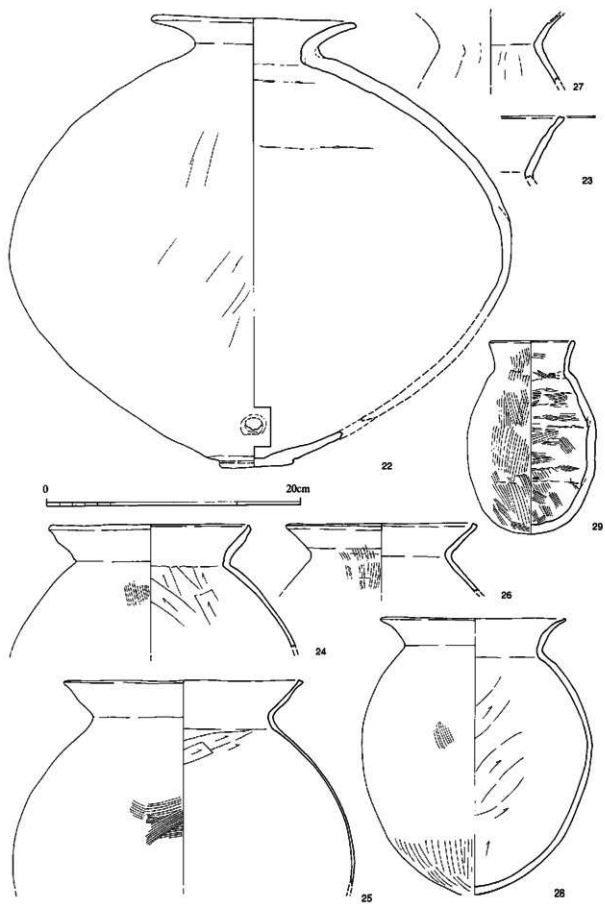
弥生土器 (1~8) 1は甕の底部。2は如意形口縁の甕で口縁下に1条の沈線を巡らす。3は端部が外側に短く伸びた甕の口縁。4は端部が水平に伸びる鋤先口縁の甕で、口縁下に三角突帯を巡らす。5・6は柱状となる甕の底部。7・8はやや薄めの底部でわずかに上げ底となる。すべて混入品で、弥生時代中期初頭~中葉のものである。

土師器 (9~29) 9は手づくねの鉢だが比較的丁寧に作られる。10は口縁部がわずかに外反する鉢で、外面タタキ、内面ナデ調整を行う。口径9.3cm、器高20.5cmを測る。

11~18は高坏である。11・12は畿内系の高坏で、11は屈曲部が明瞭で、口縁部が直線的に長く開く。内面はヘラミガキ、外面は風化のため不明である。12もやはり口縁部が直線的に伸びるもので、内面ハケ調整を行う。13は畿内系の影響を受けた高坏で、浅い碗形の坏部となる。14~16は柱状の脚部である。16の柱部は中位が膨らみ、裾部に円形透かし孔を3箇所配置する。17は大きく開



第24图 16号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第25圖 16号整穴住居跡出土土器実測圖② (1/3)

く裾部で、やはり円孔を穿孔する。端部は短く屈曲する。18は吉備系の高帯で裾部に円形の透かし孔を4箇所配置する。口径21.8cm、器高20.5cmを測る。

19～22は壺である。19は口縁部が内傾しながら直線的に伸びる二重口縁壺で、端部を面取りする。20は口縁部が内湾する弥生時代後期前半前後の二重口縁壺で混入品であろう。21は畿内系二重口縁壺の肩部から頸部にかけての破片で、頸部は短く直立し、肩は大きく張る。22は胴部が扁球形の大型壺で、地域色の強いものである。頸部は強く締まり口縁部は短く大きく開く。底部は小さな平底となる。胴部の底部から近い所に焼成後穿孔を行う。調整は内面ナデ、外面ヘラによるナデを行う。口径16.3cm、器高35.0cmを測る。23は広口壺の口縁部で、端部は内側にわずかに尖る。

24～29は甕である。24～26は畿内系の甕で、器壁が薄く、口縁部は内湾気味に大きく開き、端部は上方に尖る。どれも風化が著しいが、24は内面屈曲部から縦ヘラケズリ調整を行い、外面は細かい縦ハケメ調整を行う。25の胴部は特に器壁が薄く、2mm程度である。胴部内面は斜ヘラケズリ、外面は横ハケメ調整を行う。27は肩が張らない甕。28は第V様式系の甕で、口縁部が外反しながら開く。胴部はやや長胴となる。29は非常に雑なつくりの小型甕で、内外面ハケメ調整を行う。

出土物は畿内系・在地系・V様式系などが混在するが、割合としては畿内系が最も多い。時期としては古墳時代前期初頭頃に比定できるものである。

17号竪穴住居跡 (図版10、第22図)

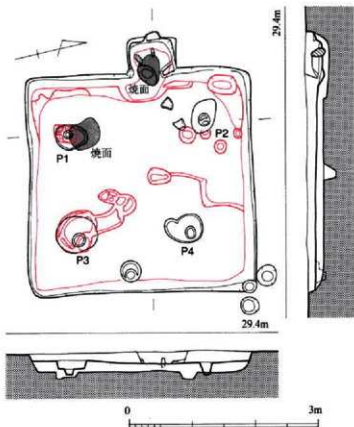
調査区北東側で検出した。大半が調査区外へと続いており、全体の形状は不明である。方形プランの竪穴住居跡を想定したが、住居跡でない可能性もある。検出できた範囲では、南壁2.5m、東壁1.5m、深さ20cmを測る。床面でピットを3個検出したが、支柱穴となるかどうかは不明である。貼り床、床面硬化は確認できなかった。遺物は少なくビニール袋1袋程度であり、図示した土師器以外に弥生土器片・白磁片・第198図16の黒曜石使用剥片等も含む。

出土土器 (第29図)

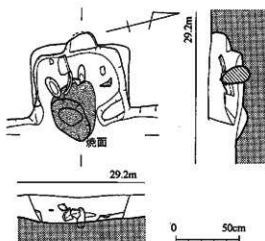
土師器 (1) 底形5.8cmを測る土師器杯の底部である。風化のため調整は不明。8世紀代のものである。

19号竪穴住居跡 (図版11、第26図)

調査区中央東寄りで検出した竪穴住居跡である。他の住居跡とはやや離れ、単独で位置する。平面形は隅丸正方形で、西壁3.5m、北壁3.5m、深さ15～20cm、床面積12.85㎡を測る。



第26図 19号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第27図 19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

西壁中央やや北寄りの所を大きく方形に掘り込んでカマドを付設する。支柱穴はP1~P4を検出しており、径20~40cm、深さ15cm程度の浅いものである。またカマドと反対側の東壁から15cmほど内側で、P5を検出しており、恐らく出入口施設に伴うピットと思われる。径40cm、深さ20cmを測る。床面には貼り床が行われ、下層は北西コーナー付近が深くなる。また下層では不整形ピットをいくつか検出している。床面硬化は明確で、特に支柱穴間で顕著であった。

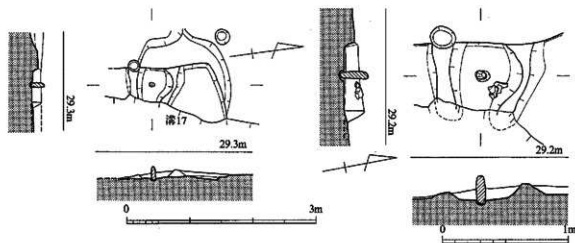
カマド(第27図) 西壁中央から20cm程北寄りに位置するカマドで、壁から50cm程突出する。煙道は削平され、煙出し部のみ10cm程伸びる。カマド壁体には粘土を使用せず覆土と同様の砂質土を使用し、掘り方を囲むように5~15cmの厚さで積み上げる。カマド袖は右袖のみ50cm程検出した。先端がかなり内側へ向いている。支脚は奥壁から20cm程内側の中軸線上に位置する。支脚には扁平な円礫を使用し、火床面から支脚先端までは高さ18cmを測る。この支脚の手前は長軸45cm、短軸35cmの広さで楕円形状に赤変面が広がる。またこの部分には深さ5cm程の浅い掘り込みがあり、焼土が堆積していた。カマド内からは3の甕、5の鉢、第207図45の鉄滓が出土した。また煙道から第206図8の刀子が出土した。

出土土器(第29図)

土師器(2~5) 2・3は口縁部が強く強く外反する甕で、器壁が非常に厚い。4・5は大型の鉢で、やはり口縁部が強く外反する。体部内面上半は横へラケズリ、外面は粗い縦ハケメ調整を行う。体部を強くへラケズリするため口縁部に比べて体部は薄くなる。いずれも8世紀以降のものである。

21号竪穴住居跡(図版11、第28図)

調査区中央南東端で検出した。17号溝に大きく切られており、平面形は全く不明。17号溝検出中に焼土の広がり支脚の一部を確認し、かろうじて住居跡と判断した次第である。床面までは深さ5cmを測る。カマドは西壁に設置される。



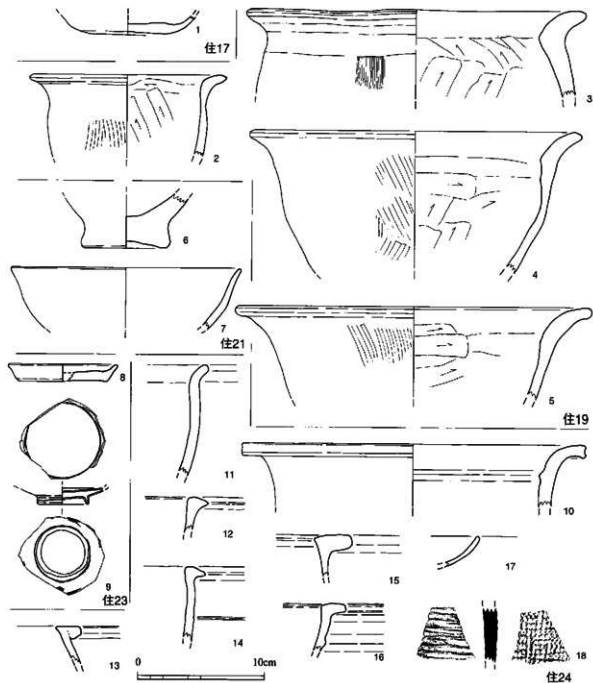
第28図 21号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド (第28図) 西側を向く造り付けカマドで、カマド壁体には粘土を使用せず覆土と同様の砂質土を使用する。煙道は検出してない。カマド袖は先端を17号溝に切られており、検出した部分では右袖60cm、左袖50cmを測る。支脚は奥壁から25cm程内側の中軸線上に位置する。棒状の円礫を使用し、火床面から支脚先端までは高さ20cmを測る。カマド内には焼土を含んだ黒褐色土が堆積する。カマド内からは7の碗が出土した。

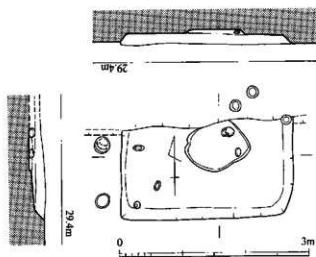
出土土器 (第29図)

弥生土器 (6) 6は若干上げ底となる壺または鉢の底部で、混入品である。

土師器 (7) 7は口縁部がわずかに外反する高坏の坏部片である。口径18.0cmを測る。当住居跡の時期を比定する土器はこの1点のみであるが、17号溝からこの住居跡に伴うと思われる土器が出土



第29図 17・19・21・23・24号壁穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第30図 23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

しており、これらの土器を含めると古墳時代中期中葉頃のものと思われる。

23号竪穴住居跡 (図版11、第30図)

調査区南東端で検出した遺構で、北側が大きく削平される。南壁2.7m、深さ15~20cmを測る。北側に長軸100cm、短軸80cmを測る楕円形の浅い掘り込みがある。主柱穴・貼り床は全く検出できなかった。検出時には方形プランの住居跡を想定したが、出土遺物から見て竪穴住居跡ではない可能性が高い。

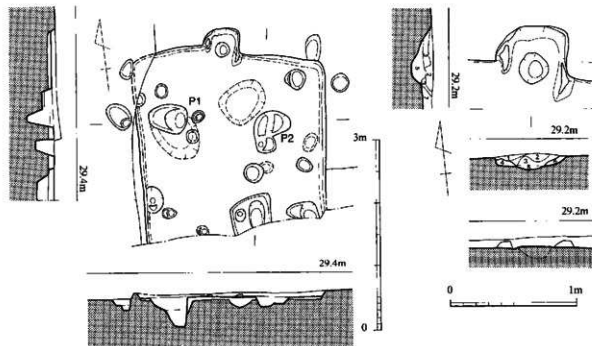
出土土器・陶磁器 (第29図)

土師器 (8) 8は小皿で底部糸切り。口径8.7cm、器高1.45cm。

磁器 (9) 9は染付椀で、内面見込みに花文を描く。全面施釉。

24号竪穴住居跡 (図版12、第31図)

調査区南東端で検出した竪穴住居跡である。南側が調査区外へ続き、また北西端を21号溝に切られる。平面形は隅丸方形で、北壁3.0m、深さ10cmを測る。北壁中央を方形に掘り込んでカマドを付設する。主柱穴はP1・P2を検出したが、深さはP1が40cm、P2が15cmを測り、かなり深さが異なる。床面上では他にいくつかのピットを検出したが、主柱穴と思われるものは無かった。床面は約5cmの厚さで貼り床が行われ、床面下層ではピットを数個検出した。床面硬化は認められない。遺物は少なく、またかなり混入している。



第31図 24号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマド (第31図) 東壁のほぼ中央に位置するカマドで、壁から40cm程突出する。煙道は前平され、全く遺存していない。カマド壁体には粘土を使用せず覆土と同様の茶褐色土を使用し、掘り方を囲むように5cm程積み上げている。袖は右袖が25cm、左袖が10cm程内側へ伸びる。住居跡覆土とカマド構築土との区別がつき難く、左袖を若干掘りすぎたようである。奥壁から20cm程内側で支脚抜き取り穴を検出してあり、径50cm、深さ10cmを測る。

出土土器 (第29図)

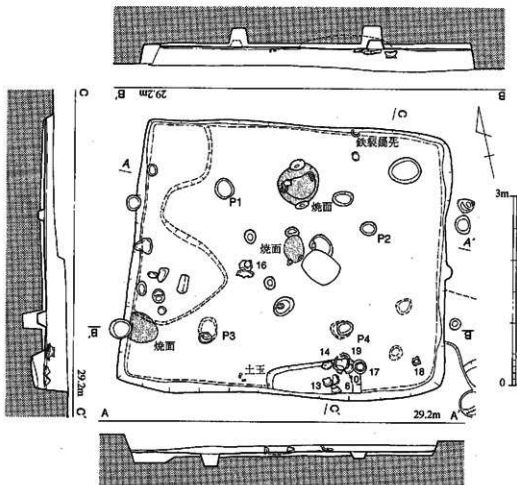
弥生土器 (10~16) 10は素口縁の壺で、端部は面取りを行っており断面方形に仕上げる。また口縁内側に三角突帯を巡らす。11は如意形口縁の甕。12~14は三角口縁の甕。13は強く内傾する。14は一条の沈線を巡らす。15・16は端部が外側に短く伸びたもので、16は小さな三角突帯を巡らす。全て混入品で、弥生時代中期初頭から前半のものである。

土師器 (17) 17は坏である。器壁が薄く、口縁部は内湾し端部は上方を向く。

須恵器 (18) 18は須恵器の胴部片で、内面平行当て具、外面格子タタキを行う。

25号竪穴住居跡 (図版12、第32~34図)

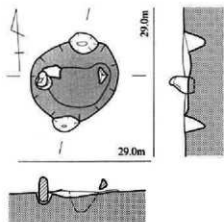
調査区中央南東寄りで見出した竪穴住居跡である。平面形は隅丸長方形で、北壁4.8m、東壁4.0m、深さ10cm、床面積21.33㎡を測る。床面のほぼ中央、中央北寄り、南西壁際の3箇所で焼面を確認したが、このうち中央北寄りに位置するものは、径60cm、深さ5cm程度の浅い掘り込みを有し



第32図 25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ており跡と認めてよいものである。周囲4箇所に円礫を立てていたようで、立った状態の円礫を2個、その抜き取り穴と思われる小ピットを2個検出した。主柱穴は床面では確認できず、貼り床除去後にP1～P4を確認した。径30cm、深さ40cm前後を測る。また、南壁際中央で不整長方形の壁際土坑を検出した。長軸150cm、短軸50cm、深さ25cmを測る。

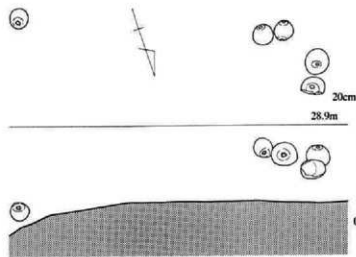
貼り床は全面に行われ、下層では西側で不整形の掘り込みや数個のピットを検出した。床面硬化は



第33図 25号堅穴住居跡伊勢実測図 (1/30)



土玉出土状態



第34図 25号堅穴住居跡土玉出土状態実測図 (1/6)

全く認められなかった。遺物は南壁際の土坑付近に集中しており、他にこの土坑西側からは床面から3cm程浮いた状態で第196図22～26の土玉5個が集中して出土した。また北壁際の床面直上からは第206図16の鉄製U字形鋤先が出土した。他に第198図9・10のスクレイパーが覆土から出土している。

出土土器・陶磁器 (図版56、第35・36図)

弥生土器 (1～6) 1は鋤先口縁となる壺の口縁部で、やや内傾する。2は壺の底部で外面ヘラミガキ調整を行う。3・4は三角口縁の甕で、4は口縁部下に三角突帯を巡らす。5・6は上げ底の厚い底部の甕である。全て混入品である。

土師器 (7～23) 7～13は碗である。7は口径が小さく、口縁部は直立する。口径10.0cm、器高5.5cmを測る。7・8は外面ハケメ調整を行う。9～13の底部はヘラナデ調整を行う。

14～16は高坏である。坏部は深く、屈曲部をもたず緩やかに立ち上がる。15の脚柱部は内面ヘラケズリのため大きく広がり、裾部は内面に稜をもって水平に開く。口径18.5cm、器高14.9cmを測る。16は裾部が短く開く。

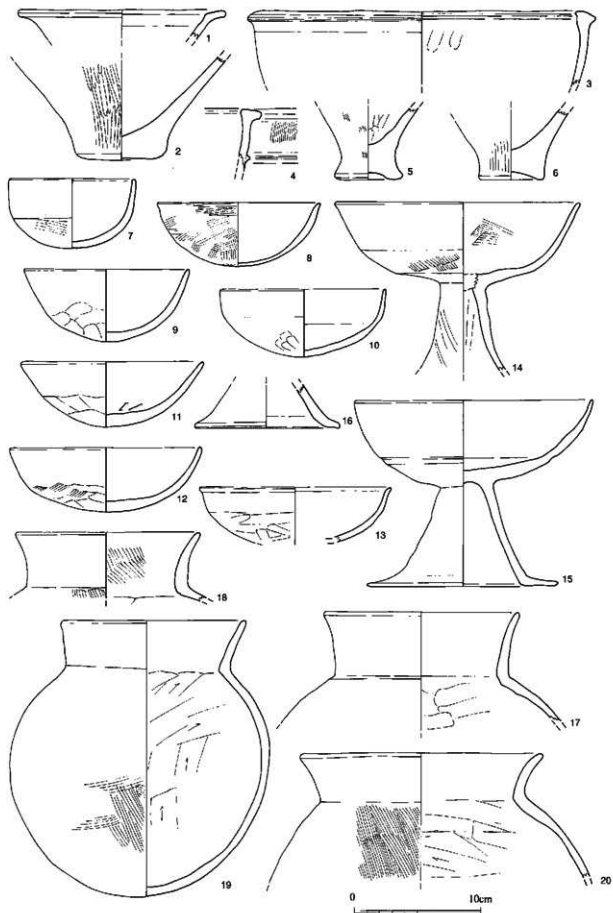
17は壺としたが、甕との区別がつかなくなってきている。

口縁部が外反気味に立ち上がり、肩部は丸く張っている。

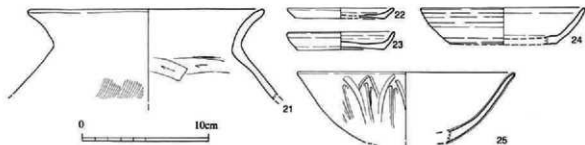
18～21は甕である。口縁部は17・19のように直線的に伸びる古相のものと、外反する新相のものとがある。端部は丸く仕上げられる。19は口径14.6cm、器高21.8cmを測る。

22・23は小皿でどちらも口径8.4cm。底部の調整は風化のため不明。24は底部糸切りの坏で、口径13cm、22～24は混入品である。

磁器 (25) 25は青磁碗で、外面に鎗蓮弁を巡らす。混入品である。



第35圖 25号聚穴住居跡出土土器実測圖 (1~6: 1/4, 7~20: 1/3)

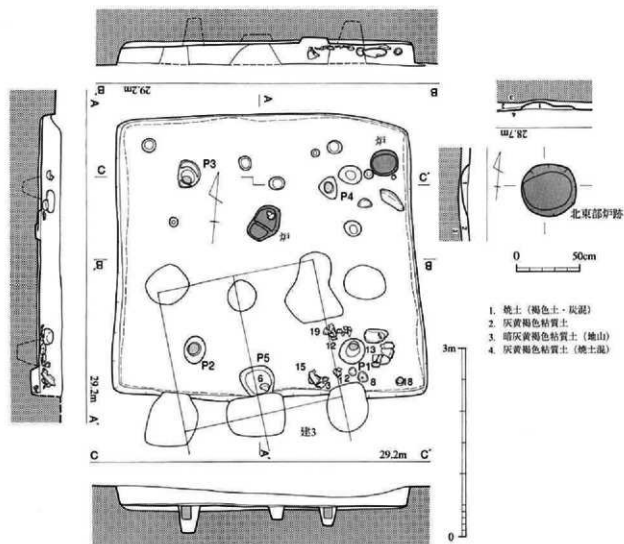


第36図 25号竪穴住居跡出土土器・磁器実測図 (1/3)

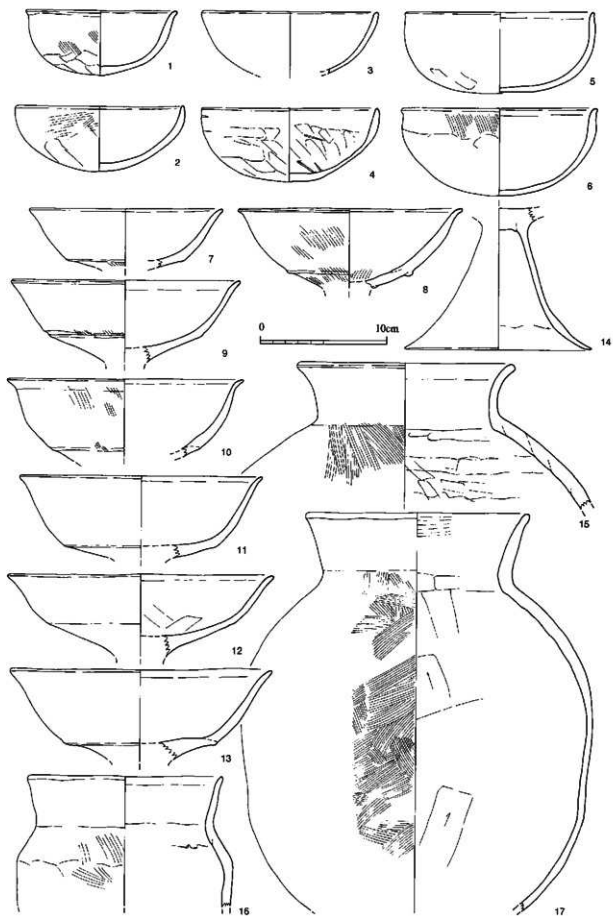
出土遺物はほぼ古墳時代中期中葉のもので、カマド出現直前くらい頃に相当する。

28号竪穴住居跡 (第37図)

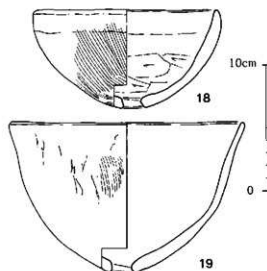
調査区の中央西側に位置する隅丸正方形の竪穴住居で、南半は3号掘立柱建物跡に切られている。P1~4が主柱穴となると考えられ、P5は壁際土坑である。中央に長軸60cm、短軸40cmの長楕円形の炉跡があるが、これとは別に北東隅近くに径40cm余りの円形の炉跡がある。この住居隣近くの炉跡は今回の調査で検出された他の住居に類例の無いものであり、その性格が問題となる。発掘調



第37図 28号竪穴住居跡・北東部炉跡実測図 (1/60・1/30)



第38图 28号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第39図 28号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

具によるナデを施す。7～14は高坏で、坏部片は口径15.2～20.6cm、14の脚部片は裾径14.6cm、屈曲部までの高さ9.6cmを測る。いずれの坏部も口縁がやや内湾しながら立ち上がり、摩滅して調整不明のものが多いが、8・9・10は口縁外面に斜め方向のハケメが観察される。15～17はひとまず壺と分類した。ただ、15の胴部が膨らむ大型の器形、16の直立に近くやや長く伸びた口縁などの特徴は壺との区別を難しくさせている。いずれも外面は斜めから縦方向の粗雑なハケメ仕上げである。内面はヘラケズリで仕上げるが、15・16の胴上部内面は接合痕が残る。18・19は底部に1.5cm程の小孔を作る小型甔である。以上の土器はいずれも古墳時代中期中葉に位置づけられるものであり、高坏、碗の多い器種構成、出土状況から良好な一括資料と評価してよい。これらの土器の他、第206図2の刀子が出土している。

29号竪穴住居跡 (図版13、第40図)

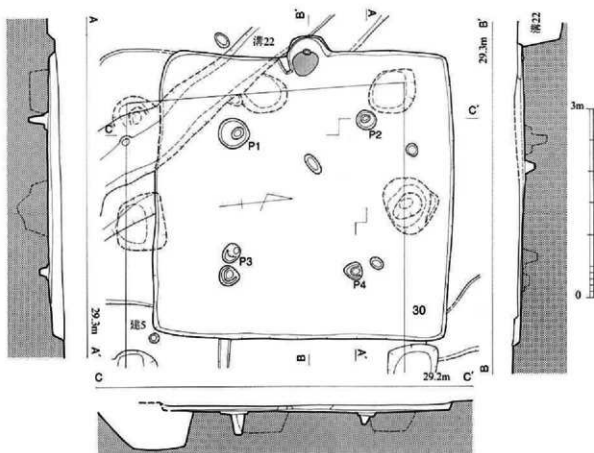
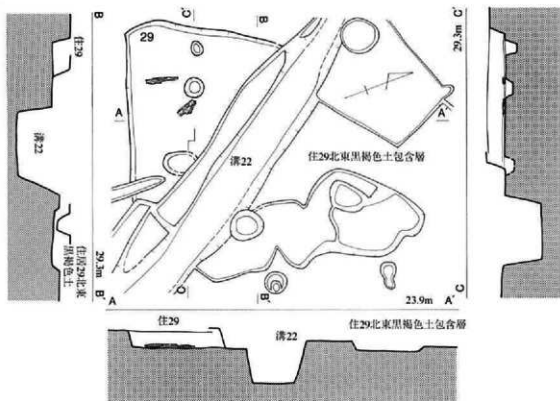
調査区の西部、28号竪穴住居跡の東10m程の所に位置し、22号溝に切られる。22号溝との切合いに加えて31号溝の延長線上にも位置しているが、相互の関係を十分に検討する前に掘り下げたために切合いや平面形が不明となってしまった。竪穴住居跡として平面形を確定できたのは西南隅付近のみである。そこでは炭化した板材がほぼ床面上から出土している。なお、22号溝の北側を「住居29北東黒褐色土」包含層として遺物を取り上げたが、後述するようにそこから22号溝に伴う7世紀後半の土器とともに、弥生土器が出土している。図示した土器の他、第199図31の打製石包丁が出土している。

出土土器 (図版57、第41・42図)

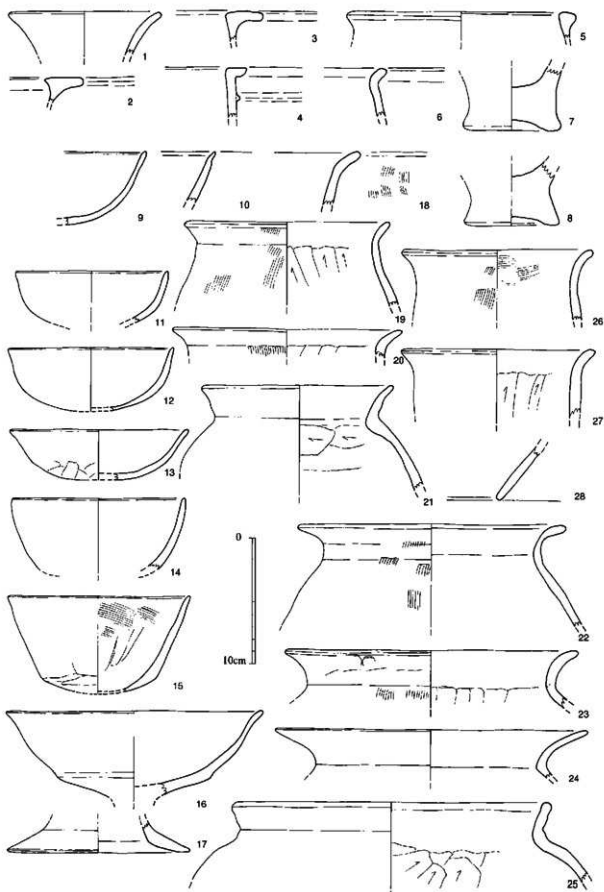
「住居29北東黒褐色土」出土の7・18・19・22・23・26～31を除いたものが当住居跡の出土品である。中には22号溝に伴う可能性の高いものもあるが、5・6・25は埋土上層、12・13・16はほぼ床面上から出土したことを確認している。

弥生土器 (1～8) 1、2は壺口縁部片、3～6は壺口縁部片、7・8は壺底部である。若干の時期幅はあるが、いずれも弥生時代中期前半のものと考えられる。

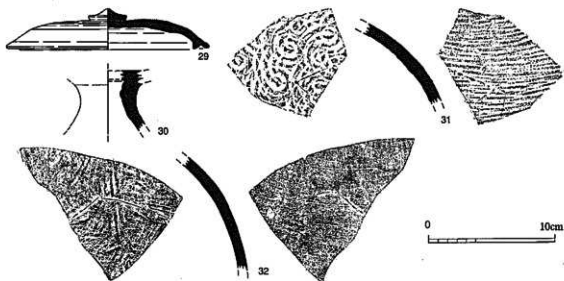
土師器 (9～28) 9～14は土師器碗で、ナデで仕上げるものが多いが、外底部のケズリが13に



第40圖 29・30号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第41图 29号竖穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第42図 29号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

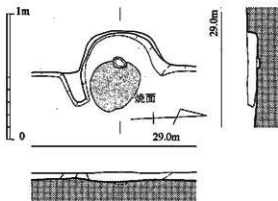
見られる。15は鉢で、内面下半に工具によるナデ、上部にハケメが観察される。16は高坏坏部片、17は高坏脚部片である。壺口縁部片(18~27)は古(21、24)、新(それ以外)に2分でき、後者は22号溝に伴うものであろう。28は小片であるが、甕裾部か。これら土器器中で床面直上のものは古墳時代中期中葉頃にあたり、古相の甕もこれと合致する。本住居の時期もその頃と考えられる。

須恵器(29~32) 29は低い宝珠つまみのある坏蓋、30は低脚で透かしのない高坏脚部片、31・32は甕胴部片である。29は7世紀第4四半期のものであるが、他の須恵器も前後する時期にあてて問題なく、いずれも本来は22号溝に属するのであろう。

30号竪穴住居跡(図版34、第40図)

調査区の中央やや西よりに位置し、22号溝、5号掘立柱建物跡と切合関係にある。切合いを確認する前に掘り下げたため、これらの遺構遺物が混入した恐れもあるが、最終的に溝、建物より新しいと考えた。ほぼ東西方向を主軸とし西にカマドを設置する方形住居で、恐らくP1~4が主柱穴であろう。南北4.7m、東西4.6m、深さ10~20cm、床面積21.14㎡を測り、床面の貼り床は明確でない。なお、遺構検出当初は南壁よりもさらに南に広い平面形を考え、さらに22号溝との切合いを誤って発掘を行った。そのため、住居の南壁の一部が失われ、住居の南に不自然な段落ちを掘ることになった。

カマド(第43図) 住居の西壁ほぼ中央に位置し、壁から30cm程突出している。中軸線上のカマド西壁から20cm余り離れた中央に径10cm程、深さ2cm程の小穴があり、位置からして支脚の抜取痕であろう。その全面は径40cm程の範囲で熱変しており、燃焼部となっている。発掘ミスにより南側の片方の抽しか検出していない。南袖は壁から29cm突出しているが、燃焼部の位置



第43図 30号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

から考えて本来はもう少し伸びていたものと推測される。

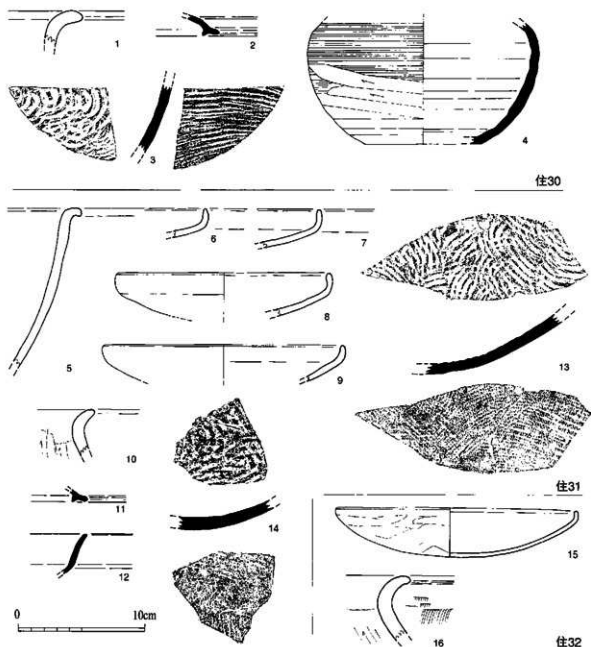
出土土器 (第44図)

土師器 (1) 強く屈曲して外反する甕口縁小片である。

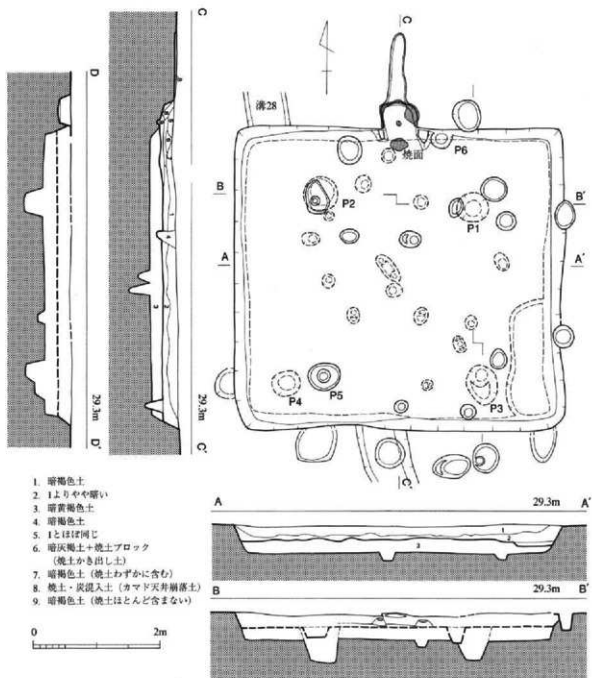
須恵器 (2~4) 2はかえりのある坏蓋口縁片で、3は甕胴部片。4は最大径18.2cmを測るナデ肩の胴部片で上部にカキメ、下部に回転ヘラケズリを施す。恐らく平瓶であろう。2は7世紀後半のもので4もそれと矛盾しないが、いずれも小片のため住居の時期決定に用いるには難がある。

31号竪穴住居跡 (図版13、第45図)

調査区中央部、4号掘立柱建物跡の東北に隣接し、28号溝を切っている。主軸をほぼ南北にとり、北側にカマドを付設する方形の竪穴住居である。南北4.8m、5.2m、床面積25.16㎡を測る。発掘時



第44図 30・31・32号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



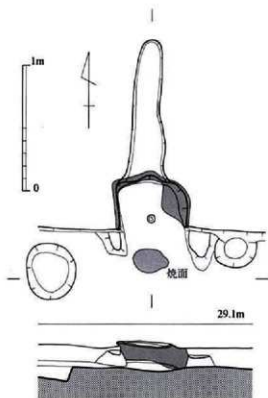
第45図 31号竪穴住居跡実測図 (1/60)

には十字の土層、カマドの床面を検討した後で、誤って貼り床面を除去してしまったことに気づいた。十字のベルトの土層観察によると貼り床面までの深さは22cmで、床面が微妙な凹凸をなしている。主柱穴はP1～P4が考えられる。P5は主柱穴ではない浅いビットであり、カマド右袖外側のP6には焼土が詰まっていた。貼り床は厚く全体に及んでいる。

カマド(第46図) 住居北壁のほぼ中央に付設



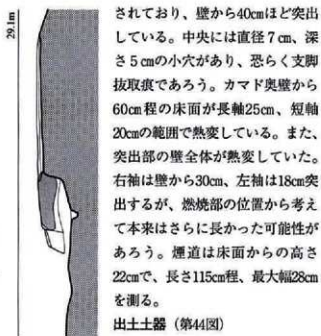
31号竪穴住居跡カマド



第46図 31号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

縁部片でいずれも直立した口縁をなしている。砂粒をほとんど含まない胎土を用いている。10は壺口縁部片で胴内面は雑な縦方向のヘラケズリを施す。

須恵器 (11~14) 11はかえりの付く坏蓋, 12は坏口縁部片でいずれも7世紀後半のものである。13・14は壺胴部片。

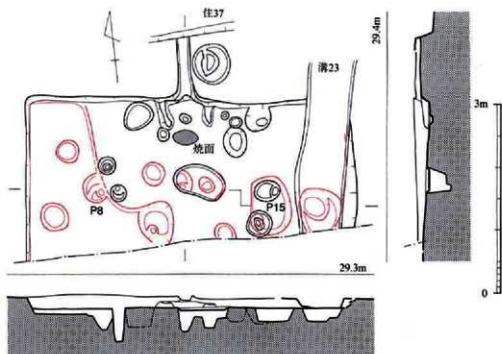


されており、壁から40cmほど突出している。中央には直径7cm、深さ5cmの小穴があり、恐らく支脚抜取痕であろう。カマド奥壁から60cm程の床面が長軸25cm、短軸20cmの範囲で熱変している。また、突出部の壁全体が熱変していた。右袖は壁から30cm、左袖は18cm突出するが、燃烧部の位置から考えて本来はさらに長かった可能性であろう。煙道は床面からの高さ22cmで、長さ115cm程、最大幅28cmを測る。

出土土器 (第44図)

弥生土器 (5) 混入と考えられる壺口縁部片で、内外とも摩滅のために調整不明である。

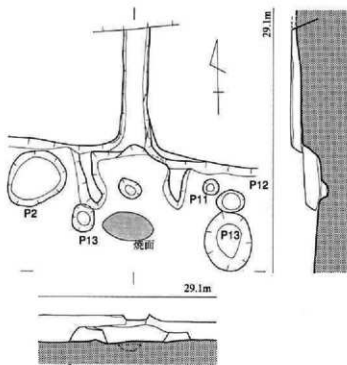
土師器 (6~10) 6~9は坏口



第47図 32号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)

32号竪穴住居跡 (図版13、第47図)

調査区の中央部に位置し、調査区の南壁にかかるため半分程度しか検出していない。また、東壁近くを23号溝に削られ、カマドの煙道先端は37号竪穴住居跡に切られている。東西5.1～5.2m、深さ25cmを測る。床面および下層では多数のピットが検出されたが、P2・P10～13はカマドから出る焼土、炭を詰めたピットであり、支柱穴はP8・P15と思われる。西壁沿いに深さ5cm程の貼り床の掘り方がある。



第48図 32号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド (第48図) カマドは住居北壁のほぼ中央に付設され、軸は住居軸と若干ずれており、正南北に近い。カマド奥壁から30cmのところまで直径15cmほどの小穴が検出され、支脚採取痕と推測される。その小穴から30cmほど離れた地点を中心に長軸40cm、短軸20cm余りの楕円形に床面が熱変している。袖部の間隔は45cm、右袖長32cm、左袖長45cmを測るが、床面燃変部からするとさらに長いと考えるべきであろう。煙道は竪穴外に長くのびるが、先端を37号竪穴住居跡により切られる。



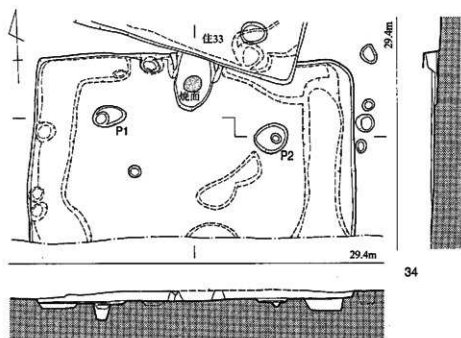
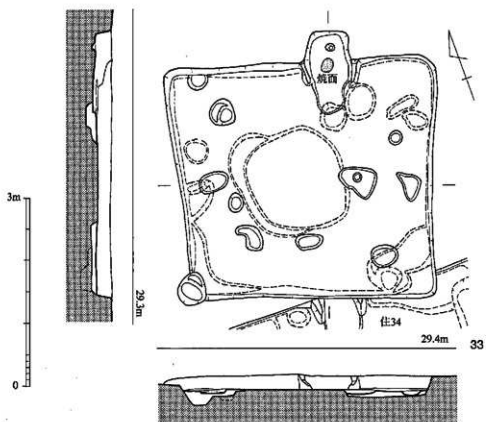
32号竪穴住居跡カマド

出土土器 (図版57、第44図)

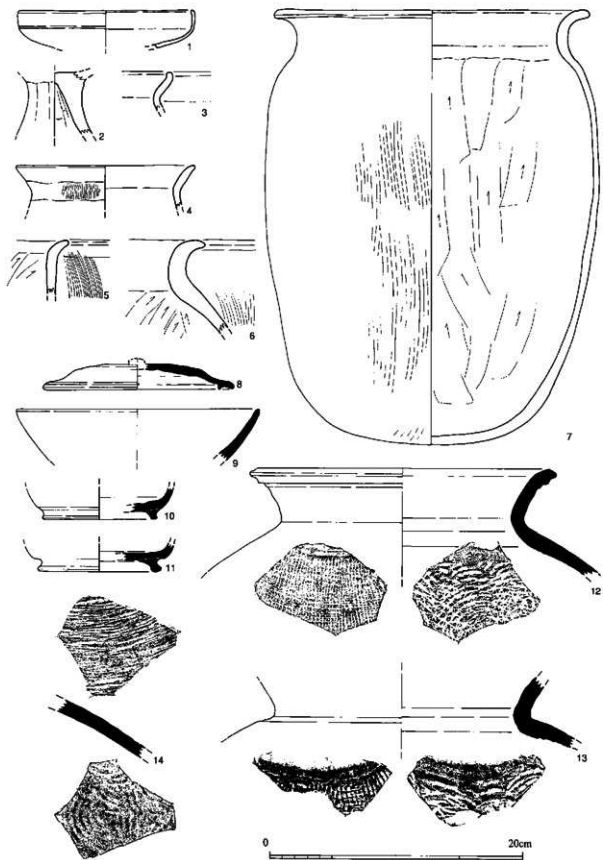
土師器 (15・16) 15は土師器杯の完形に復元できる資料で口径20.0cm、高さ3.9cmを測る。16は壺口縁部片である。前者は7世紀後半か。

33号竪穴住居跡 (図版14、第49図)

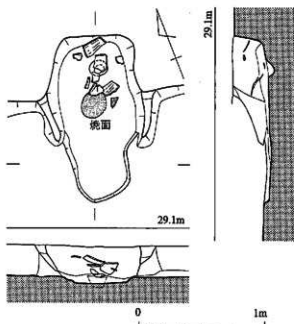
調査区の中央南寄り、32号竪穴住居跡の東北8mの場所に位置する。西壁を24号溝に若干削られ、南壁が34号竪穴住居跡を切る。方形の竪穴住居で北壁のやや東よりに壁から突出させてカマドを設置している。北壁4.3m、南壁3.9m、東壁3.8m、西壁3.7m、深さ25cm、床面積15.53㎡を測る。床面、貼り床下層では多数のピットを検出したが、支柱穴は明らかではない。下層は壁沿いに1m余りの幅で貼り床掘り方を巡らし、中央を高状に掘り残している。



第49图 33·34号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第50图 33号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)



第51図 33号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

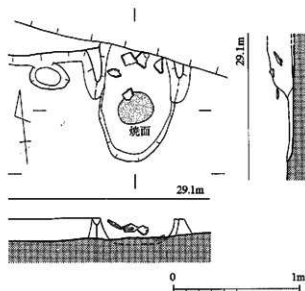
3・4は薄手の作りの小型品で、3は丸みをもたせた口縁端部が特徴的である。大型の5～7はいずれも外面をタテハケ、内面ヘラケズリで雑に仕上げ、6・7の口縁部は強く屈曲して外反する。須恵器(8～14) 8はかえり付きの坏壺で、やや低平な器形をなす。9～11は高台付きの坏身片である。9は口径19cmを測る大型品である。10・11はわずかに外に踏ん張る高台をつけ、11には底部と体部の境界の稜が見られる。12・13は須恵器甕口縁部から頸部にかけての破片で、いずれも外面は擬格子タタキを施し、内面に当て具痕が残る。12は口縁下端を拡張し、突帯状に仕上げている。14は平行タタキを外面に残す甕胴部片であるが傾きは不安。

これらの土器以外に第206図12の鉄鉾がカマド左側の床面直上から出土している。

カマド(図版14、第51図) カマドは竪穴住居壁より45cm程突出させて構築している。カマド奥壁より20cm程の所に径10cm余り、深さ5cm程の小穴が有り、支脚抜取穴であろう。燃烧部はカマド奥壁より50cm程隔てた床面にみられる熱変部分と考えられ、支脚抜取穴とは少し距離がある。袖は間隔60cm程、右袖長43cm、左袖長37cmを測る。袖の間は奥壁から130cmの所まで床面より5cm程くぼんでいる。

出土土器(図版57、第50図)

土師器(1～7) 1は底部との境に稜をなして直立する口縁の坏で、器壁が薄く精良な胎土で作られている。2は高坏脚部片で外面は面取り風にケズリを施す。3～7は甕で、完形に復元可能な7はカマド内からの出土品である。

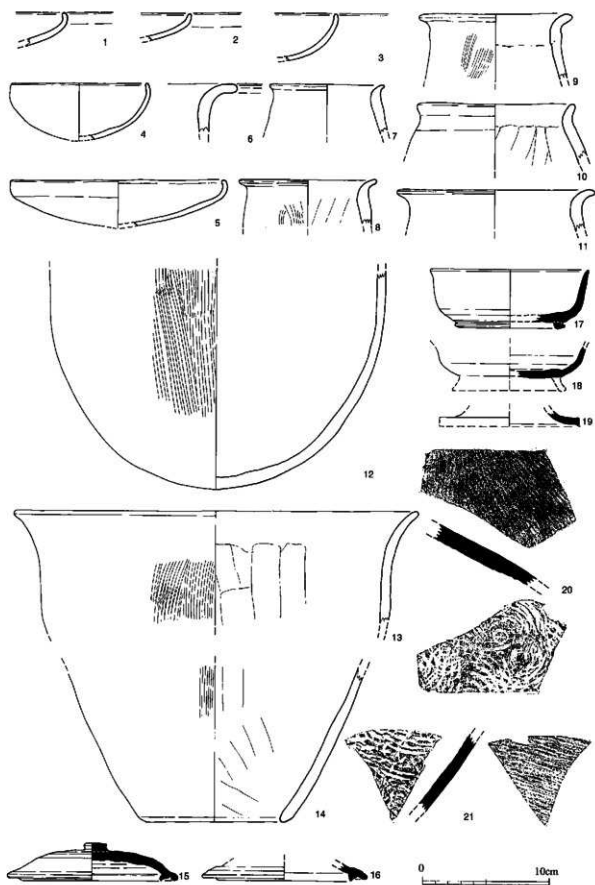


第52図 34号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

34号竪穴住居跡(図版13、第49図)

調査区の中央部南壁にかかるため半分ほどしか検出できず、さらに北壁を33号住居跡に切られる。主軸をほぼ南北にとり、北壁にカマドを設置している。東西幅5.0～5.2m、深さ15cm弱である。床面、掘り方下層にはいくつかビットがあるが、断面図を作製したP1、P2は支柱柱とするにはやや浅く、他にも候補となるものは見受けられない。下層では住居の壁沿いに0.6m程の幅で掘り方を巡らす、カマド付近では途切れている。

カマド(第52図) カマドは北壁のほぼ中央に位置している。奥壁を33号竪穴

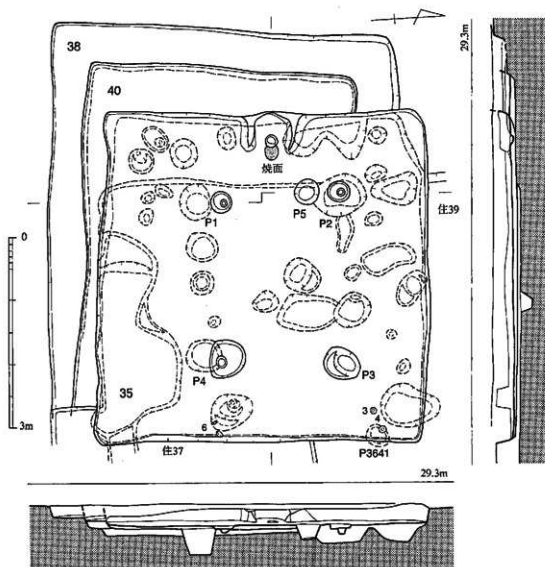


第53图 34号聚穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

住居跡に切られるが、床面の状況などから北壁より突出していたと考えられる。袖間50cm、左袖長40cmを測り、袖の間の床面は径25cm程の円形の範囲で熱変しており燃焼部であろう。袖の間は燃焼部から40cm程前面まで整穴住居の生活面より5cm程くぼんでいる。隣接する33号整穴住居跡カマドでもこのようなくぼみが見られ、両住居の貼り床下層の掘り方の類似も考え合わせると、同一集団が隣接地に建替を行ったと推測しても良いのではなかろうか。

出土土器 (図版57、第53図)

土師器 (1~14) 1~5は土師器坏で、口縁と底部との境の線がさほど明確でない。2~4は底部から口縁端部にかけて斜めに立ち上がるのに対して、1・5は口縁部が短く直立し、端部がやや肥厚気味である。7~12は甕である。7~11は口径9.0~15.6cmの小型で、いずれも胴上部がさほど張らずに内傾し、短く外反して口縁部をなす。カマド内出土の12は大型の甕胴下半部破片である。13は瓶口縁部破片で、14は瓶裾部破片でいずれもカマド付近より出土した。接合しないうち同一個体の可能性の高いものである。胴外面は粗い縦方向のハケを施し、内面は縦方向のヘラケズリで仕上げる。



第54図 35・38・40号整穴住居跡実測図 (1/60)

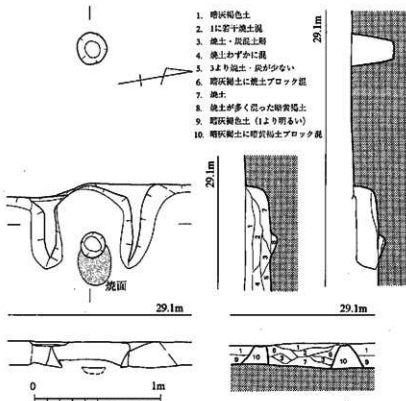
須恵器 (15~21) 15・16はかえりの付く坏蓋で、いずれもかえりが断面三角形に明瞭に突出し、15は天井部の丸みがやや大きい。17・18は高台付きの坏身である。18は高台から斜めに底部が立ち上がり、やや上方で折れて外反する口縁につながるが、17は低い高台が付き、高台近くで折れて直線的に口縁端部に至る点でやや新しい傾向が指摘できる。17は住居覆土上面出土のものであり、他の土器とは区別して扱うほうが良いのであろう。19は高坏脚踏部破片、20・21は甕胴部片である。以上の須恵器の中で住居の時期を示すものは15・16・18などであり、住居の時期は7世紀第3四半期から第4四半期の頃であらう。33号竪穴住居跡の須恵器をこれと比べると蓋のかえりの突出度、高台付き坏身の底部一口縁部の接続部分の形態においてやや新しい傾向が指摘でき、切合関係とも矛盾していない。したがって、33号住居跡の時期を7世紀末~8世紀初頭頃としたい。

35号竪穴住居跡 (図版14、第54図)

調査区の中央やや南より、32号住居跡の北西6m程のところに位置し、ほぼ東西に主軸をとる。37~40号住居跡を切っており、切合関係から32号竪穴住居跡よりも新しい。西壁にカマドを設置するほぼ正方形のプランを呈し、西壁5.0m、東壁5.15m、北壁・南壁5.25m、深さ25cm程で、床面積は27.12㎡を測る。先行する住居の覆土に掘り込まれている関係で貼り床は明確でない。4本柱とするならば図のP1~4がその候補となるが、この住居の床面、下層検出のピットには先行する住居の柱穴も含まれるであろうから確実ではない。ところでこの住居跡の発掘当初には切合関係にある38・40号竪穴住居跡を取り込んだ広い範囲をこの住居と誤って認識し、39号竪穴住居跡との境界も確定できていなかった。その結果、後述するようにこれらの住居に本来帰属していたと思われる遺物も35号竪穴住居跡出土として取り上げてしまうことになった。

カマド (第55図) 住居

の西壁はほぼ中央部に位置する。発掘時の平面プランとしては壁からさほど突出しないものと考えた。住居西壁自体が40号竪穴住居跡覆土に掘り込まれたものであるので不安も残るが、発掘時の認識のままに以下の説明を行うことにしたい。西壁から45cmほど離れたところに小穴があり、その前の床面に直径25cm程の範囲で円形に熱変しており、この部分が支脚採取穴、燃焼部になるだろう。袖は北袖長66cm、南袖長53cmを測るが、両袖とも支脚採取穴の位置



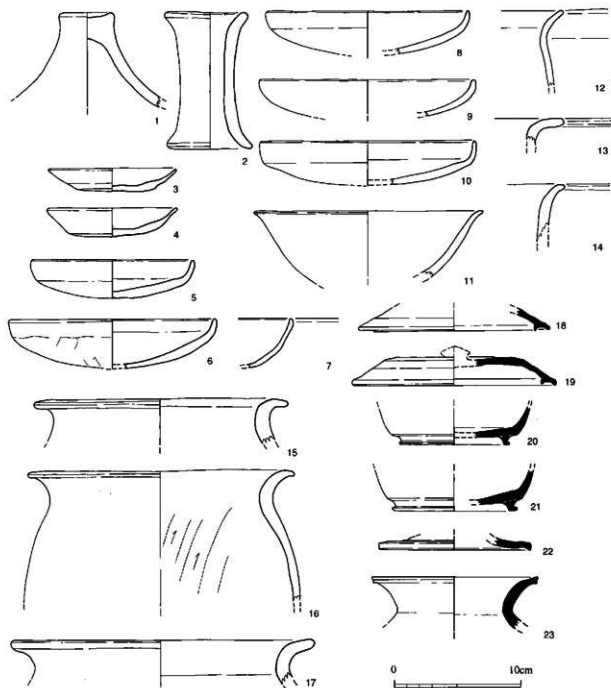
第55図 35号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

からすると短すぎる。なお、奥壁から西側カマド主軸方向に1.1m程離れたところに直径25cm程の焼土の詰まったピットがあるが、位置から考えて煙道の先端に設けられたものであろう。

出土土器 (図版58、第56図)

弥生土器 (1・2) 混入と考えられるもので1は蓋、2は器台である。

土師器 (3~17) 3・4は平底に直線的に外傾する口縁部がつくもので、底部はヘラ切りを行っている。11世紀代のもと考えられ、明らかに本住居の時期よりは新しい。これらは住居の東北部から出土したもので、近隣に位置するP3641からもほぼ同一型式の個体が出土している。P3641は35号竪穴住居跡の床面下層で検出したものであるが、恐らく住居覆上に掘り込まれた新しいピット



第56図 35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・2:1/4, 3~23:1/3)

で3・4もこれに属する可能性が高い。5～10は土師器坏、11は高坏口縁部で、12～17は甕である。11の高坏口縁部、12の甕口縁部以外は7世紀後半頃のものと考えられる。

須恵器(18～23) 18・19は杯蓋で、退化したかえりが付く。20、21は坏身で外にわずかに踏ん張り気味の高台が付く。体部はやや丸みをもつ。22は恐らく高坏脚裾部で、脚端は直立する。以上の須恵器は7世紀末～8世紀初頭のものと考えられる。24は甕口頸部の破片である。外面が無文でわずかに上下に拡張させて面をなす口縁端部の形態から初期須恵器であろう。先行する遺構からの混入品と考えられる。

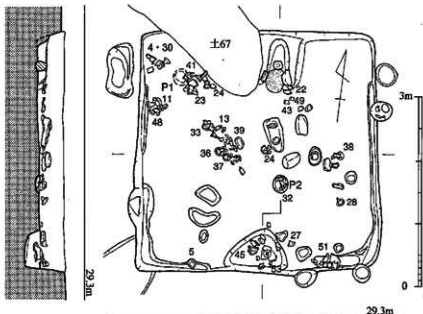
遺物は他に覆土から第200図37の凹石、第206図9の刀子、上層から第199図20の安山岩使用剥片、第204図90の滑石製石鍋、床面直上から第207図42の鉄滓が出土している。

36号竪穴住居跡(図版15、第57図)

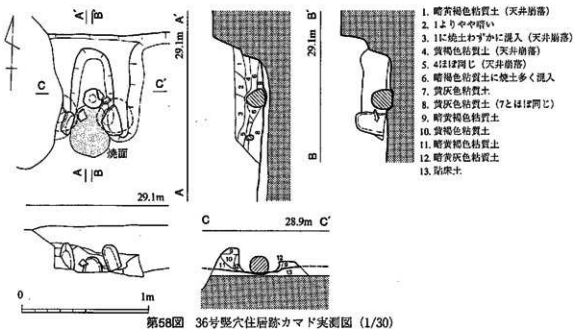
調査区のほぼ中央、33号竪穴住居跡の北北東9m程の所に位置するカマド付き竪穴住居跡である。北壁、カマドの左袖付近を67号土坑に壊されるが、平面プランを把握するには十分であり、北壁3.7m、南壁3.85m、東壁3.7m、西壁3.8m、床面積14.52m²を測るほぼ正方形プランを呈す。壁もよく残っており、深さ40cm程である。カマド付近では厚さ5cm程の貼り床が確認できたが全体的にははっきりした貼り床はなく、支柱穴も不明である。東西壁には幅10cm余の壁溝が確認され、南壁にはカマド対面土坑が検出された。覆土中より一括で多量の土器が出土しており、床面近くの深さから出土した土器が多いが、北西隅では覆土上面に近いところに集中している。したがって、住居廃絶後さほど経たない頃に北西隅の方角から住居内に投棄されたと考えられる。

カマド(図版15、第58図) 住居の北壁の中央よりやや東よりに設置されている。カマドは住居の

北壁に接して馬蹄形に粘質土を積んで構築している。奥壁から30cm前に人頭大の河原石をおいて支脚とし、その前面は長軸40cm、短軸25cm程の範囲で楕円形に熱変していた。袖は左外側が67号土坑に壊されている。左右とも壁からの長さ80cm程である。袖の先端には高さ20cm程の河原石を据え付けており焚き口を補強している。カマドの支脚から1m程前の床面で長さ55cm程の大きな河原石が出土したが、大きさから考えてこの袖先端の石に



第57図 36号竪穴住居跡実測図(1/60)



第58図 36号雙穴住居跡カマド実測図 (1/30)

かけたものである。

カマド対面土坑 カマドの対面の南壁に接し、底辺1.0m、高さ0.6mの平面隅丸三角形を呈す。深さは20cm程である。床面は南壁近くが低いが、ほぼ平らである。

出土土器 (図版58・59、第59～62図)

弥生土器 (1・2) 1は壺底部、2は壺口縁部破片である。いずれも弥生時代中期の混入品。土器 (3～50) 3～10は碗である。9は浅い器形で直立に近い口縁部をなし、器壁も薄い。7世紀後半以降の坏で、隣接する67号土坑などからの混入品かと考えられる。他は器形などから考えて古墳時代中期中葉前後に比定できる。調整不明のものも多いが、3・5・6・8は外面下半に手持ちヘラケズリを施している。口径10.6～17.0cm、器高3.7～5.4cmを測る。

11～23は高坏である。坏部と脚部の接合は脚部上端に粘土を充填した痕跡が観察できるもの (12・14・19・28・30) とそれが観察できないもの (11・21・23・29・32・33) に分かれる。しかし後者は11を除くと坏底部が厚い。これは12に見られるような充填した粘土の張出しをナデにより平らにする技法をさらに進めて、張出した粘土を脚内面にナデ付けたものと思われる。したがって、純粋に筒上部の上に坏部を接合したと言えるのは11のみである。調整は坏部内外にハケメを施し、脚内面をヘラケズリするものが多い。坏部は口縁が直線的に斜めに立ち上がる12・17以外は、内湾しながら立ち上がる深い坏部である。また坏底部と口縁部の接合部は段をなさないものがほとんどである。脚部は12・27・33以外は裾が厚く、28のように脚柱部の下方が広がって裾部との境界が曖昧になったものも見受けられる。12は口径16.1cm、裾径12.5cm、器高16.5cm、14は口径19.0cm、裾径14.0cm、器高13.9cmを測る。坏部片23はこの時期の高坏としては大型に属し、隣接した位置から出土した脚部片24と恐らく同一個体であろう。23は口径30.2cm、坏深10.0cmを測り、24は脚裾径16.1cmを測る。

34～39は中型の甕である。34は口縁部が短く斜めに立ち上がり、35～38は口縁部が比較的長く、直に近い角度で立ち上がる。39は頸部が強く締まり、口縁部は直線的に斜めに立ち上がる。いずれも頸部径の比較的小さい頸の締まった器形をなすものと思われる。口縁内外をナデ仕上げするもの

が多いが、35の内面のみヨコハケを施す。37の胴部は外面の一部にハケメが観察され、内面はナデ上げである。38は外面ハケメ、内面横ヘラケズリ仕上げである。39は内面ナデ、外面は上方に縦ハケメ、底部付近に横ハケメが観察される。40は口径17.0cmを測る二重口縁壺。一次口縁外面は段が退化し、丸く屈曲している。口縁端部はわずかに外反させている。

41～50は甕で、41～44はその中でも小型に属する。41は口縁が直立に近く、口縁部、胴部の境界がはっきりしない。口径11.0cm、器高14.7cmを測る。口縁部外面の縦方向のナデが特徴的である。44は口縁がやや屈曲して外反し、口径14.0cmを測る。42は口縁が直線的に外反し、口径12.8cm、器高16.2cmを測る。胴外面に一部タテハケが見え、内面はヘラケズリである。43は径の復元が困難で傾きも不安であるが、恐らく胴高の低いものであろう。45～50は中型の甕である。48・49は口縁部の器壁が薄く、直線的に外反するというやや古い傾向を見せている。これに対して45は口縁部が直線的に外反するものの頭部近くの器壁が厚く、46・47はやや強く屈曲して外反するという新しい傾向をもつ。50は甕底部破片。

51は把手付きの大型甕で底部近くまで復元できる好資料である。口縁部はわずかに外反し、胴部との区別が比較的はっきりしている。端部は丸くおさめている。底部はレンズ状底に近い丸底で、焼成前に中央に1孔、その周辺に現状では3孔、復元すれば5孔ほどの楕円形の穿孔を施している。胴中程よりやや上位に取り付けられた把手は棒状で断面円形を呈しほぼ水平方向に延びている。対応する胴内面の肥厚から考えて、胴に穿孔した後、把手を差し込んだものと思われる。口径24.3cm、器高24.1cmを測る。

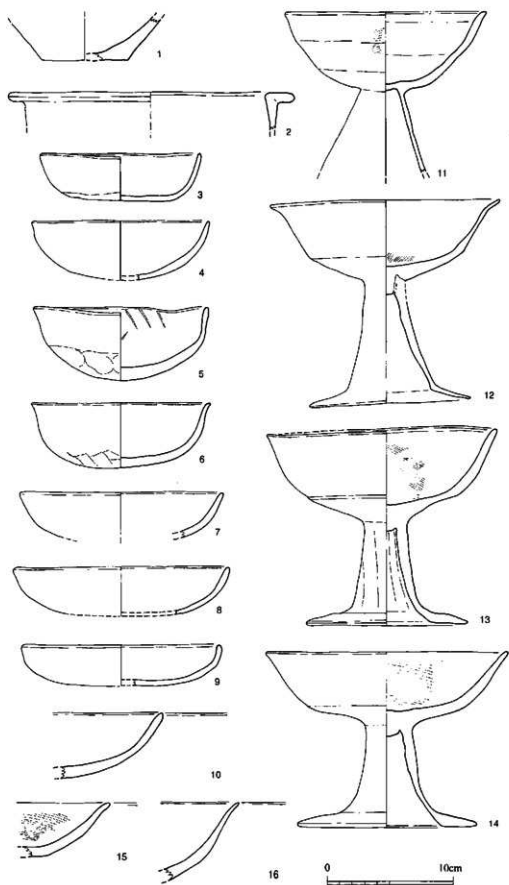
52～55は小型手握ね土器である。52は鉢で口径4.1cm、器高2.7cm、53は壺で口径5.3cm、器高6.2cmを測る。いずれも内外を粗いナデで成形、



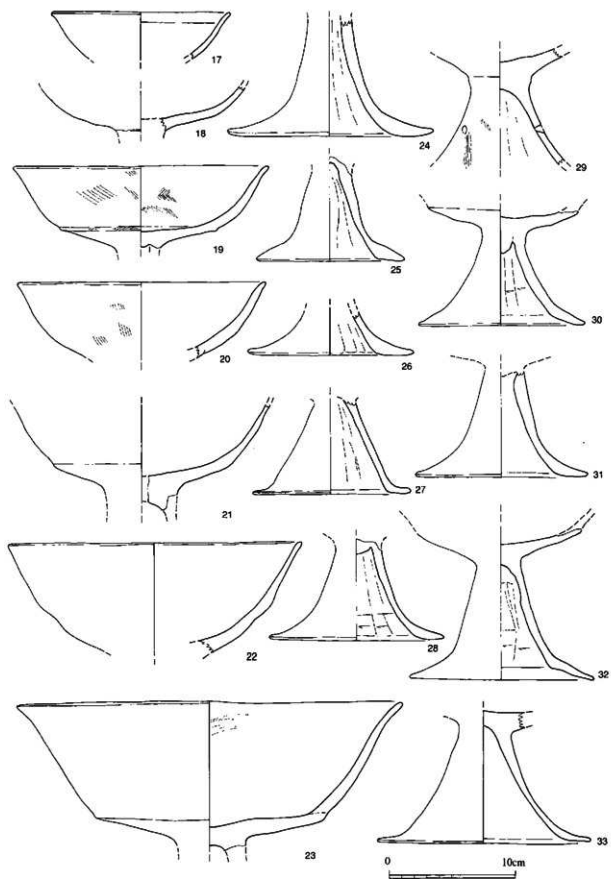
カマドに使用された石



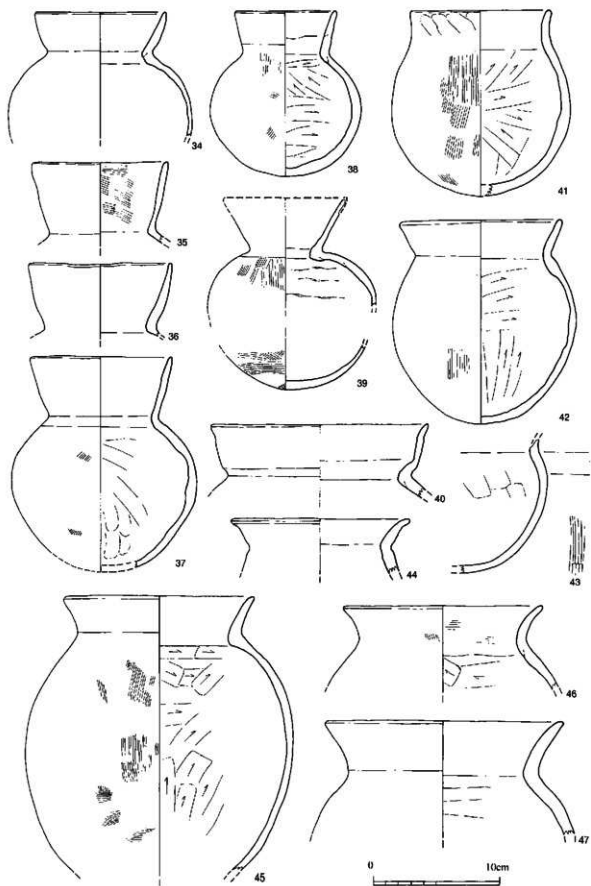
遺物出土状態



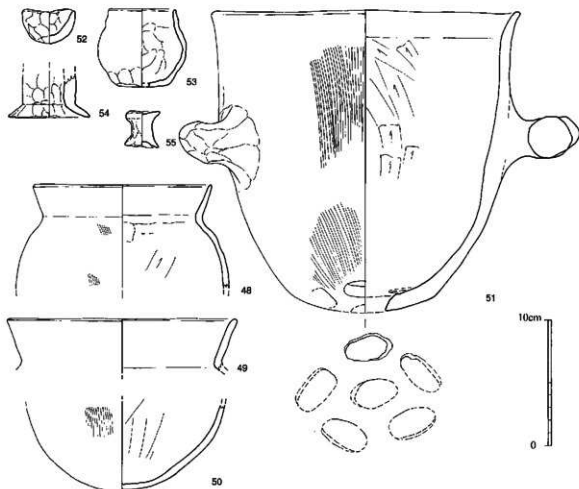
第59图 36号竖穴住居跡出土土器实测图① (1·2:1/4, 3~14:1/3)



第60圖 36号豎穴住居跡出土土器実測圖② (1/3)



第61图 36号窑穴层出土土器类图③ (1/3)



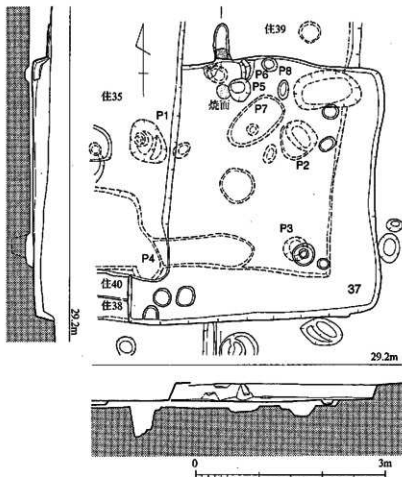
第62図 36号竪穴住居跡出土土器実測図④ (1/3)

調整している。54は高坏裾部かと考えられる。内外とも一般的な小型手捏ね土器と同様にナデ仕上げである。しかし、裾径6.2cmを測りやや大型であり、中空の脚柱部に明確に外反する裾部が付く点は周辺遺跡から出土する小型手捏ね土器の高坏には余り見られない。55は器台で高さ2.9cmを測る。

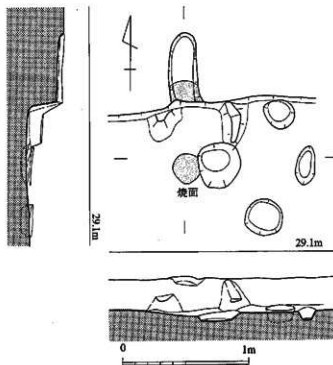
以上の土師器のうち、10・16はカマド内より、45、53はカマド対面土坑より出土した。これ以外はほとんどが覆土中から出土したものであるが、さほど大きな時期差は認められず、一括資料に準じた良好な遺物群と評価することができる。器種構成の上では高坏が多いことが特徴である。このような器種構成や高坏、甕、中型壺の形態から考えて、古墳時代中期中葉に編年できる。遺物は図示した土器以外に第199図17の黒曜石使用剥片が、床面直上から第206図46の刀子が出土している。

37号竪穴住居跡 (図版13、第63図)

調査区の中央部南寄りに位置し、35号竪穴住居跡に切られ北壁、西壁の一部が欠われている。また、32・38～40号竪穴住居跡を切っている。主軸をほぼ南北にとり、北壁にカマドを設置し、東壁3.9m、南壁4.0m、深さ25cm程を測る。貼り床は明確でなく、下層に先行する39号竪穴住居跡の覆土が残っていた。床面、および下層では先行する住居跡の柱穴も合わせて検出されているので主柱穴が明確でないが、仮に4本柱とすれば、P1～4が候補となる。P5～8はカマドからかき出した焼土、炭等を詰めた小穴である。出土遺物が少ないため、時期決定が難しい。



第63図 37号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第64図 37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド (第64図) 住居の北壁やや西寄りに壁から袖を突出させて構築しているカマドである。主軸上、奥壁から0.9m離れた床面に径25cm程の熱変が認められた。右袖は35cm、左袖は20cmを測るが、熱変部の位置からすると本来はさらに長かったと推測される。煙道は主軸上に長さ55cm残存し、幅24cmを測り、奥壁近くが熱変していた。

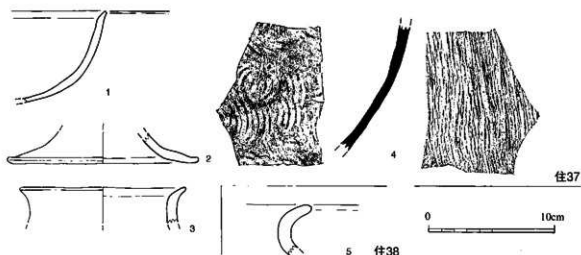
出土土器 (第65図)

土師器 (1~3) 1は鉢口縁部、2は高坏脚踏部である。いずれも5世紀中葉~後半に比定でき、住居の時期とは隔たりが認められる。恐らく39号竪穴住居跡からの混入品であろう。3は小型甕の口縁部である。

須恵器 (4) 4は甕胴部破片で、傾きは不安である。外面に平行タタキを施し、内面に同心円当て具痕が観察される。

38号竪穴住居跡 (図版13、第54図)

調査区の中央南寄りに位置する。35・37・40号竪穴住居跡に切られるため西壁と南壁・北壁の一部しか検出できていない。主軸をほぼ南北方向にとる。完存する西壁長さ5.35m、南壁現存長さ6.1mで東西に長い長方形プランを呈するがやや不自然であり、あるいは37号竪穴住居跡の西側に東壁が残存していたかも知れない。深さ20cmを測る。明確な貼り床もなく柱穴も検出できなかった。図示した土器の他、第197図1の焼



第65図 37・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

塩土器が覆土中から出土した。

出土土器 (第65図)

土師器 (5) 甕口縁部片で、木住居跡からの出土品で図示できるものとしてはこれが唯一である。器壁が厚く強く屈曲して外反している。

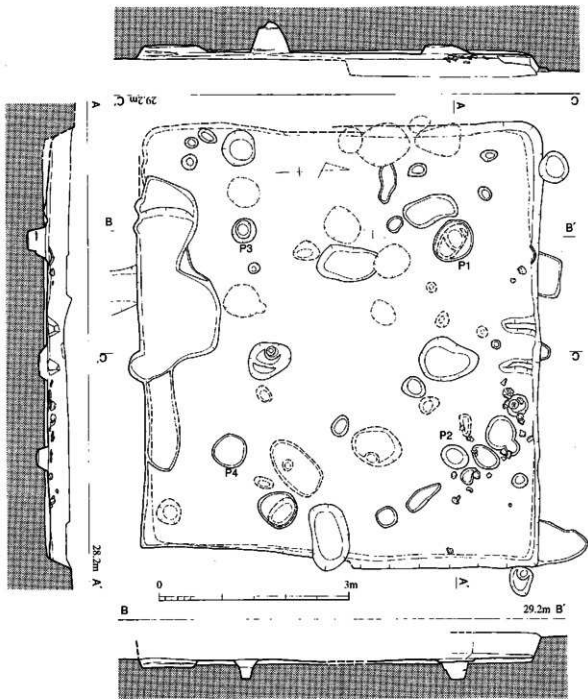
39号竪穴住居跡 (図版13、第66図)

調査区の中央やや南よりに位置する大型の住居跡である。南東部を35・37号竪穴住居跡により切られる。そのため西壁の大部分を失うが、貼り床掘り方からおおよその輪郭を捉えることができた。主軸をほぼ南北にとり北側にカマドを設置している。北壁7.0m、東壁6.3m、北側での壁の高さ40cm、床面積43.1㎡を測り、東西にやや長い比較的大型の住居となる。床面は全体的に厚さ3cm前後の貼り床を施している。床面、貼り床下層で多数のビットを検出しているが、後続する住居跡に伴うビットも含まれていると考えられる。仮に4本柱とすれば30cm前後の掘り方のP1～4が主柱穴として有力で、1辺3.5mのほぼ正方形をなしている。南壁沿いには深さ8cm程度の浅い掘り込みがある。

カマド (図版15、第67図) 北壁のほぼ中央に位置する。奥壁から55cmのところ長さ19cmの石を用いた支脚が遺存する。石製支脚の上には小型甕 (第68図19) を被せて高さを調節している。支脚の前面は直径50cm程の範囲で床面が熱変しており、燃烧部と考えられる。袖は両袖とも住居北壁から60cm程しか検出できていないが、燃烧部の位置から考えて本来はその2倍以上の長さがあったものと思われる。床面から20cm程の高さのところから15cmの長さで揮度がのびている。

出土土器 (図版59・60、第68図)

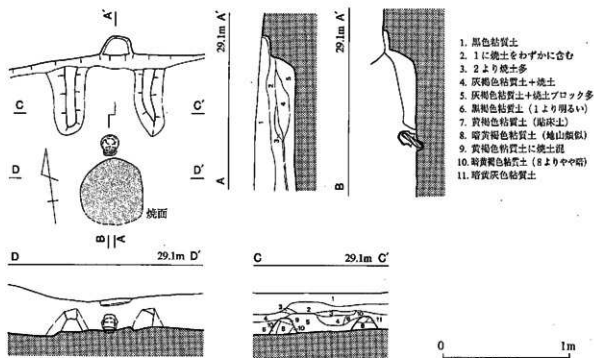
土師器 (1～24) 1～8は土師器柄である。2・3・5・7・8は外面下部をヘラケズリし、7・8にはハケメも観察される。口径10.2～14.0cm、器高5.0～6.1cmである。9～18は高坏である。10は完形に復元でき、口径16.4cm、裾径13.3cm、器高16.1cmを測る。坏部は深く、丸みをもって口縁が立ち上がり、脚裾はかなり厚い。坏部内面にハケメ、脚部内面にヘラケズリが観察されるが、他は摩滅が著しい。9・11～15は坏部破片で口縁が内湾しながら立ち上がるもの (11・12・15) と直線的に広がるもの (9・13・14) があるが、いずれも深い坏部である。16～18は脚部破片で



第66図 39号竪穴住居跡実測図 (1/60)

16・17は脚柱部と裾部の境界が曖昧になっている。18は坏部との接合部を残しており、脚柱上端に粘土を充填し坏部と接合したことが分かる。13も同様の接合方法である。19・20は直立に近い口縁をなし壺としても良いが、いずれも二次加熱が顕著であり小型の甕とした。21も比較的小型の甕で、口縁は外反する。22～24は小型手捏ね土器で、内外とも粗いナデで仕上げている。22・23は鉢、24はやや大振りの壺である。

以上の土器器はカマドの支脚として用いられた19、南壁沿いの掘り込みから出土した8・13・14・16、床面のピット出土11・12、埋土出土の17以外はカマド周辺の床面から出土した。全体的にみてほぼ古墳時代中期中葉の単一時期と評価できる。



第67図 39号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

須恵器(25) 床面出土の広口壺の口頸部破片で、外面に丁寧な波状文を施す。形態、焼成とも朝倉系初期須恵器に類似しており、池の上Ⅱ～Ⅲ式頃であろう。上述の土師器の時期とも矛盾しない。これらの土器の他に、第201図48の石製紡錘車が出土している。

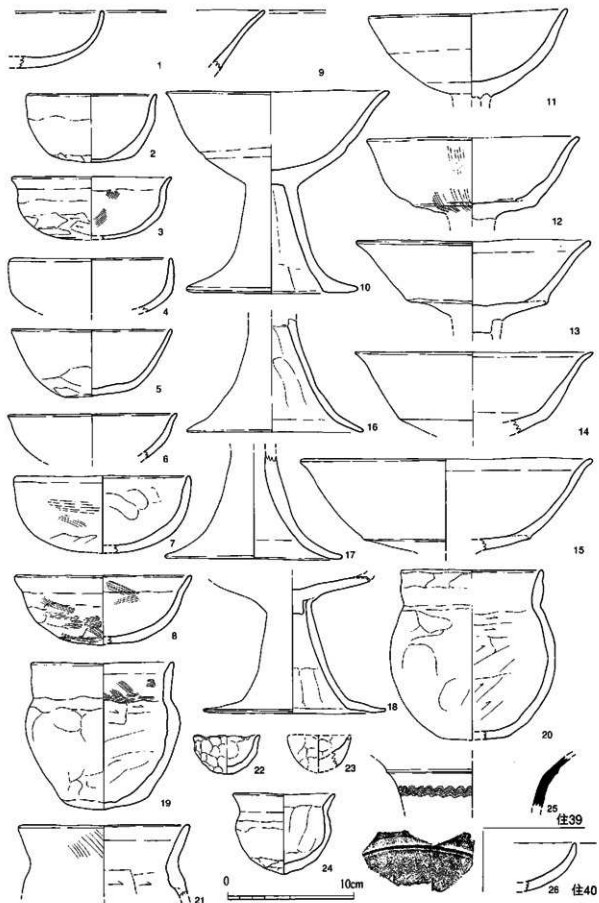
40号竪穴住居跡(図版13、第54図)

調査区はやや南よりに位置する。35号・37号竪穴住居跡に切られ、西壁と北壁・南壁の一部しか残っていない。主軸をほぼ南北にとり、完存する西壁の長さは4.25m、南壁の現存長は5.5mである。南壁はさらに延びるので、先行する38号竪穴住居跡と同様に東西に長いプランになってやや不自然である。35・38号竪穴住居跡を掘り進める途中でその存在に気が付いたために壁の高さは5cm程しか検出できていない。床面は残存部分全体に貼り床が認められた。

38・40号住居跡は平面プランが不自然であり、本来のプランがもう少し方形に近くなると37号との切合いがなかったことになる。これによると最も新しい住居跡は35号であるが、7世紀末～8世紀初頭の土器が出土している。37号は時期決定可能な土器が無いが、32号出土土師器坏が7世紀後半頃のものであるので32・37号とも7世紀後半を前後する時期と考えておきたい。38・40号は遺物がすくないが、上述した住居跡とそれほど大差ない時期を考えている。39号はこれらの住居跡の中で最も古く5世紀中葉である。

出土土器(第68図)

土師器(26) 椀口縁部1点のみが図示可能である。形態からみて古墳時代のものであるが、なにぶん小片であり本住居跡の時期決定に至らない。



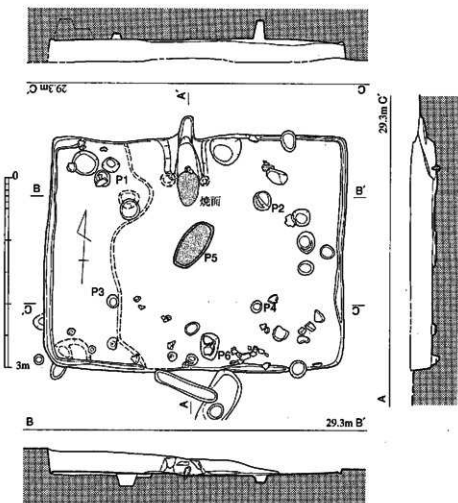
第68图 39·40号竖穴住居跡出土土器实测图(1/3)

41号竪穴住居跡 上述した35号竪穴住居跡周辺の住居群を発掘する過程で別の1棟の存在を想定し、41号住居跡と番号を付けたが、発掘の結果、住居跡と認定するには至らなかった。そこでこの番号を欠番とした。

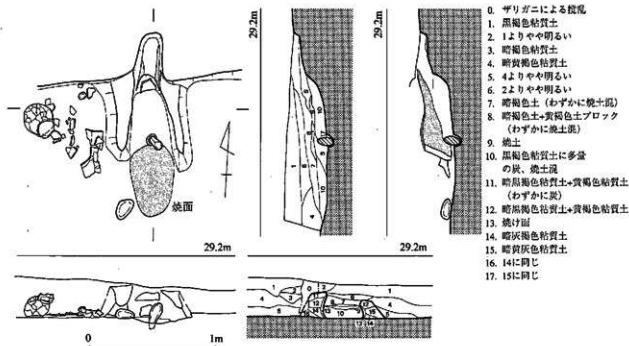
42号竪穴住居跡 (図版16、第69図)

調査区の中央部、36号住居跡の22m程東で検出した竪穴住居跡である。主軸をほぼ南北にとるやや東西に長い長方形を呈し、北壁にカマドを設置する。北東部は近世の溝のために削平されて周壁溝しか残っていない。また、27号溝にも切られている。北壁・南壁4.6m、東壁・西壁3.65mを測り、床面積は17.41㎡、良好な部分では壁高35cm程である。床面には多数のピットがあるが、支柱穴はP1～P4が想定される。いずれも掘り方20～30cm程と小さく浅いピットであり、心々で東西2.2m、南北1.7mを測る。カマド前面にある長軸80cm、短軸40cmの浅いP5からは焼土が検出された。焼土は恐らくカマドに由来するものであろう。また、ほぼカマドの対面にあるP6からは土師器がまともに出て出土している。長軸40cm、短軸30cm弱の楕円形の平面形で深さ10cm余りの小さなピットであるが、カマド対面土坑のような性格のものと思われる。壁溝は幅15cm程でカマド周辺と南壁のカマド対面部分は途切れている。西壁に沿って幅1m程の範囲で貼り床掘り方が認められるものの、その他の部分では貼り床は明確ではない。覆土中から河原石とともに多数の土器が出土した。

カマド (図版16、第70図) 住居の北壁中央よりやや西に設置されている。カマド奥壁から40cm程の所に高さ15cm弱の河原石を立てた支脚がある。この支脚のすぐ前の床面は長軸55cm、短軸35cmの範囲で熱変しており燃焼部と考えられる。袖は暗褐色粘質土と黄褐色粘質土を混ぜた土を主体に構築しており、左袖65cm、右袖70cmと比較的長いものである。袖の間隔は支脚部分で32cmを測る。両袖間が狭く、袖が長く伸びる特徴的な平面プラン



第69図 42号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第70図 42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

である。袖内面は前方半分の熱変がかなり進んでいる。なお袖先端では床面下層から径20cm弱の小穴を検出した。床面では検出できなかったが、位置から考えてカマド袖先端を補強するための袖石掘り方あるいはその抜取穴と推測される。煙道はカマドの床面から15cm程の高さの所に設けられ、先端に向かって若干傾斜して伸び、奥壁から30cm強のところ急に立ち上がる。最大幅20cmを測り、奥壁近くは熱変が進んでいる。カマドの左脇から甕等の土師器が出土した。

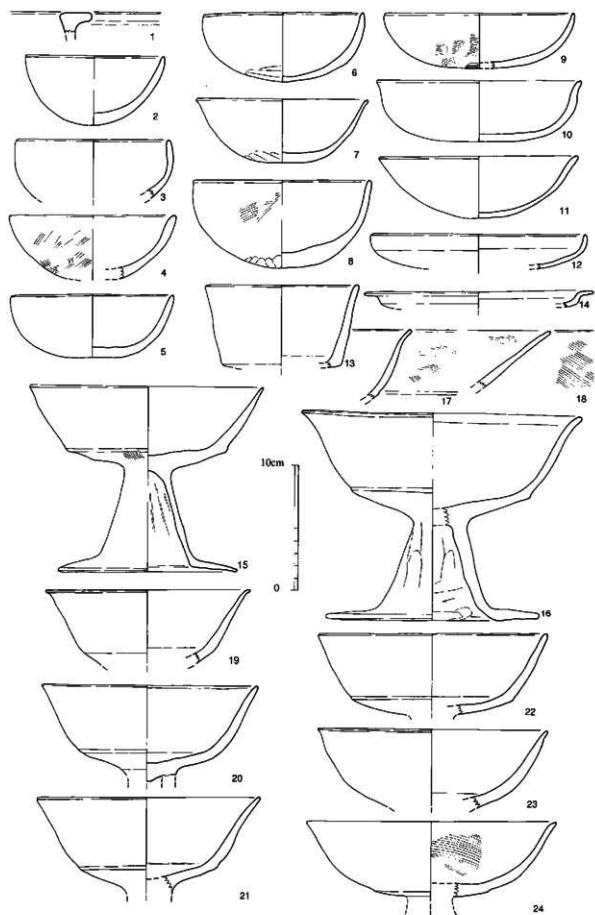
出土土器 (図版60、第71～73図)

弥生土器 (1) 弥生時代中期前半の甕口縁片で混入品。

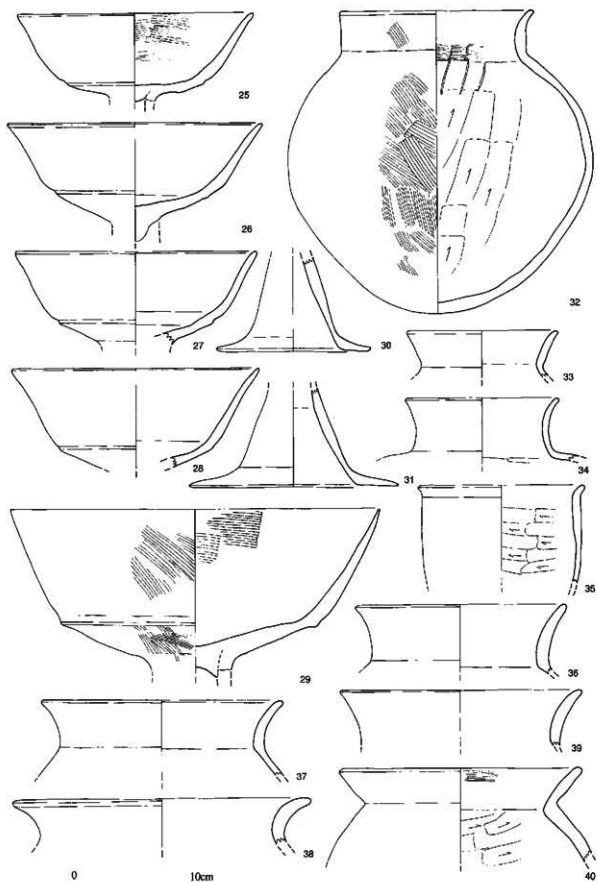
土師器 (2～44) 2～12は椀・坏である。12は直立した口縁の浅い器形のもので、器壁も薄い。7世紀後半以降のもので新しい遺構に由来する混入品であろう。それ以外はいずれも古墳時代中期中葉頃のものと考えられる。2・5・10は内外ナデで仕上げられる。4・9はハケメ、6～8はヘラケズリを外面下半に施している。口径10.8～15.9cm、器高4.4～6.9cmでやや法量にばらつきがある。

13・14はとりあえず鉢としたがいずれも類例の少ない器形である。13は直立に近い長く伸びた口縁が平底気味の底部につながっている。口径11.6cmを測る。14は直立して立ち上がりさらに屈曲して強く外反する口縁部で、器形は浅いようである。口縁部の小片であるが、あえて復元するならば口径18cm程になる。

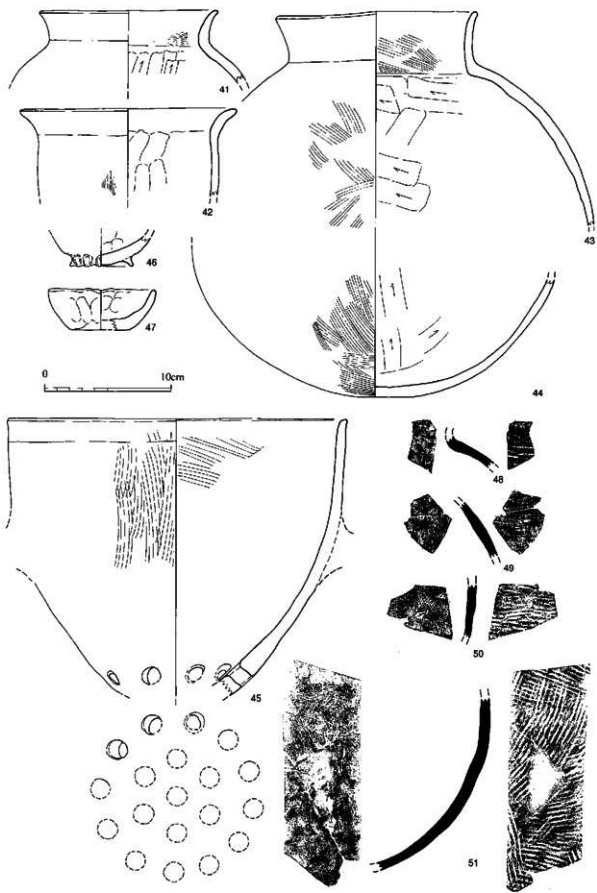
15～31は高坏である。坏はいずれも口縁部と底部の境が屈曲し、なかでもそこに段をなすものが多い。口縁部はやや内湾しながら斜めに立ち上がるものが多く、坏深も全体的に大きい。調整不明のものが多いが15は坏底部外面、18・29は口縁部内外、17・27は口縁部外面、24・25は口縁部内面にハケメが確認できるので、恐らく坏部はハケメで仕上げたと推測される。脚部はいずれも脚柱下部がかなり広がり、内面の脚柱、脚裾の境界位置が低いところにある。摩滅のために調整不明の31を除けば脚柱部内面にヘラケズリを施し、16は外面にも面取り風の板ナデを施している。脚部と坏部の接合法は20・25・26・29に脚上端への粘土の充填を確認でき、15・16も恐らく充填した



第71圖 42号壑穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第72图 42号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)



第73图 42号层穴住层出土土器实测图③ (1/3)

粘土を脚内面にナデ付けて日立たなくしたと推測される。15は口径18.2cm、裾径14.0cm、器高14.7cm、16は口径21.8cm、裾径16.6cm、器高16.8cmを測る。

32～44は甕である。35、38は頸部のさほどくびれない小型の甕で、35は口径13.0cm、42は口径17.0cmを測る。35は口縁部が短いので恐らくカマドと同じ頃に出現する小型の甕と推測される。一方42は35に比べ口縁部がやや長く、内面に粗い縦方向のヘラケズリを施すので、7世紀以降の混入品ではないだろうか。33・34・36は口縁部がやや長く伸びるため、甕との区別が難しい器形である。特に34は胴上部内面に水平方向に近いヘラケズリを施すことが特徴的である。他は一般的な中型の甕であるが、口縁部が直線的に斜めに立ち上がるもの(40)、わずかに外反するもの(37・39・41)、頸部から直立気味に立ち上がり口縁部の中程から強く外反するもの(32・43)に大きく分かれる。完形に復元できた32は口径15.2cm、器高25.0cm、胴部最大径24.2cmを測る。43は胴部が張る大型のもので口径16.0cmを測り、復元すると胴部最大径34cm程になる。32、44は胴部の煤付着、底部の二次加熱が進んでいる。

46・47は小型手捏ね土器の鉢である。46は1cm程の低い高台がつき、高台外面の指頭圧痕が顕著である。47は口径8.5cm、器高3.2cmに復元されるもので、底部は平底になると思われる。

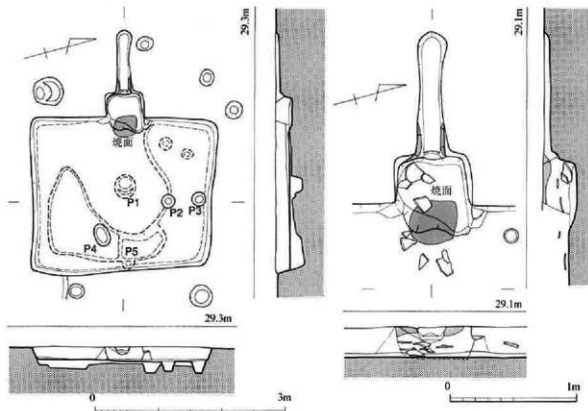
45は大型の把手付き甕であるが、把手は残っていない。口径26.6cmを測る。胴部から垂直に近く立ち上がり口縁部に至るため、口縁部は胴部との境が不明瞭である。口縁端は内傾する面をなす。底部は残っていないが恐らく丸底と推測される。蒸気孔は直径1.5cmで、直径12cm弱の円周上に3cm程の間隔で5つ確認できる。同じ大きさの小孔が並ぶとして大胆に復元すると同じ円周上に12孔、その内側の直径6cm程の円周上に6孔、さらに中心に1孔の配置が考えられる。胴部外面上位にタテハケ、内面の口縁からやや下に横斜め方向のハケメが確認できる。

以上の土師器のうち4・18はカマド内、10・17・32・43はカマド左脇の床面、8・20・34・36・41はP6から出土し、43はカマド左脇とP6の破片が接合した。一部に7世紀以降と推測されるものが混入しているが、他は古墳時代中期中葉を前後するものと考えて大過ないと思われる。上述した36号住居跡出土の土師器と比べると、本住居出土品には高坏の脚柱部と脚裾の境が明瞭であり、脚裾が全体的に薄い点、甕の口縁が直立し胴部との境が不明瞭であり、さらに孔数が多いこと点に若干ながら古い様相が見て取れるが、それほど大きな時期差は無いであろう。

須恵器(48～51) いずれも甕あるいは甕の胴部破片で、内面当て具痕をナデにより消した初期須恵器である。本住居出土の土師器と共存すると考えてよからう。48・50・51は外面に平行タキが確認され、51は下部でタキが交差するので底部近くと思われる。総じて焼成は良好で、灰色を呈する。

43号竪穴住居跡(図版16、第74図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、一帯は当遺跡の中で最も遺構が集中する。平面形は隅丸長方形で、西壁2.9m、北壁2.3m、深さ20cm、床面積7.20㎡を測る。西壁中央を大きく掘り込んでカマドを付設する。床面上でP2・P3・P4を検出したが、いずれも主柱穴としては認めがたいものである。貼り床を除去した段階で、不整形の掘り込みと共にいくつかのビットを検出した。この中でP1は床面のほぼ中央に位置し、径45cm、深さ20cmと非常にしっかりしたビットでもあり、このP1が主柱穴にあたるかと考えている。P5は東壁際中央に位置しており、出入口施設に伴う可能性



第74図 43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

を考えている。床面硬化は確認できなかった。遺物は少ない。

カマド (第74図) 西壁のほぼ中央に位置するカマドで、壁から40cm程突出する。煙道は中軸線上に位置し、1m程直線的に伸びる。カマド壁体には粘土を使用せず、覆土と同質の砂質シルトを使用し、掘り方を固むように5cmの厚さで積み上げる。カマド袖は両側に認められ、右袖15cm、左袖10cmを測る。火床は床面の高さより5cm程掘り込まれている。支脚は無く、また抜き取り穴も検出できなかった。カマド前面には赤変部分が広がり、また煙道出口から煙道基部にかけて、両側面が赤変していた。カマド内からは3の甕が出土した。

出土土器 (図版61、第75図)

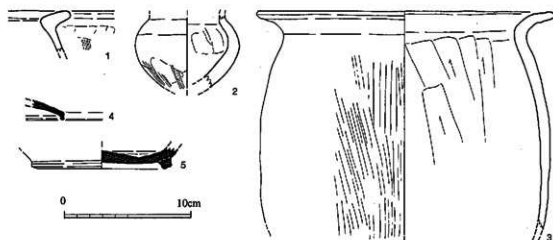
弥生土器 (1) 1は端部が外側に少し伸びた弥生時代中期の三角口縁の甕で、混入品である。

土師器 (2・3) 2は小型の壺で、指整形後、ナデ・ハケメ調整を行う。器壁は厚い。3は口縁部が大きく外反する甕で、胴部内面縦へラケズリ、外面ハケメ調整を行う。

須恵器 (4・5) 4は坏蓋で、端部が短く下方に伸びる。5は有高台の坏で、高台は断面四角形の低いものである。8世紀中葉～後半頃のものである。



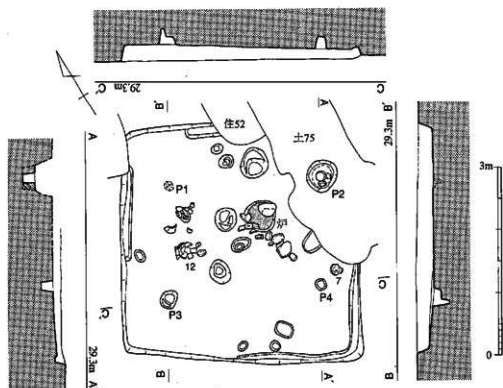
43号竪穴住居跡カマド



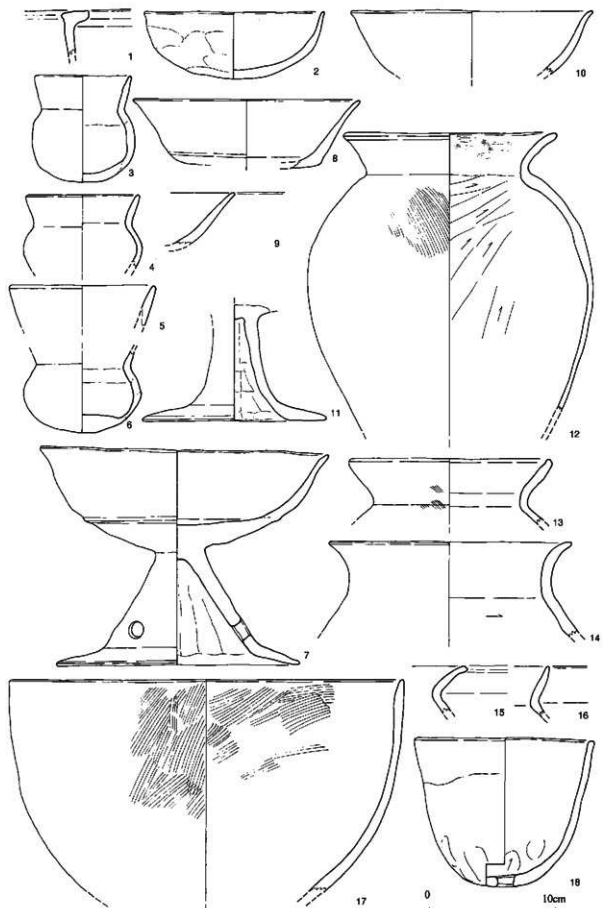
第75図 43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

44号竪穴住居跡 (図版17、第76図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、43・52号竪穴住居跡・75号土坑に切られる。平面形はほぼ正方形であり、南壁3.7m、西壁3.5m、深さ15~25cmを測る。床面積は14.1㎡程度となるだろう。床面中央東寄りの位置で、径50cm、深さ5cmの浅い炉跡を検出している。主柱穴はP1~P4を検出したがP4が北に寄った位置にあり、不規則な配置となっている。径15~50cm、深さも10~40cmとまちまちである。これらの主柱穴以外にもピットをいくつか検出している。壁際には壁溝が巡るが、全周しない。貼り床は認められず、また床面硬化は顕著ではない。床面上では数個の円礫とともに土器が比較的多く出土している。



第76図 44号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第77图 44号墓穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器（図版61、第77図）

弥生土器（1） 1は外側に短く水平に伸びる弥生時代中期前半の甕の口縁部で、混入品。

土師器（2～18） 2は上師器甕で、外面下半はヘラナデ調整を行う。3～6は小型壺で、口縁部はそれほど長く伸びず、またあまり開かない。胴部はややつぶれた球形となる。3は口径7.6cm、器高8.4cmを測る。7～11は高坏である。7は大型のもので、坏部の屈曲は不明瞭である。内面屈曲部下は平坦である。脚部は接合部から大きく開き、裾部は緩く屈曲してさらに開く。また3箇所に円形透かし孔を穿孔する。口径22.6cm、器高17.5cm、裾部径19.0cmを測る。8～10は坏部で、8は直線的に伸びる古相のもの。9・10は内湾気味に開く新相のもの。11の柱部はあまり開かない。裾部は大きく開き、幅広く接地する。

12～16は甕である。12は最大径が胴部上方にあり、頸部は締まり、口縁部は外反しながら大きく開く。14・15の口縁部もこれに似る。13・16の口縁部は直線的に開く古相のものである。17は大型の鉢で、口縁部は直立し、端部を丸くおさめる。内外面ハケメ調整を行う。18は深い鉢形の甕で、底部に焼成前穿孔を行う。口径14.1cm、器高11.8cmを測る。

高坏や甕の口縁部に新・古の様相が窺えるが、全体的にみて古墳時代中期前半頃に比定できる。器種構成面では小型壺がやや多い点が指摘できる。またこれらの土器以外に第203図77の砥石が出土している。

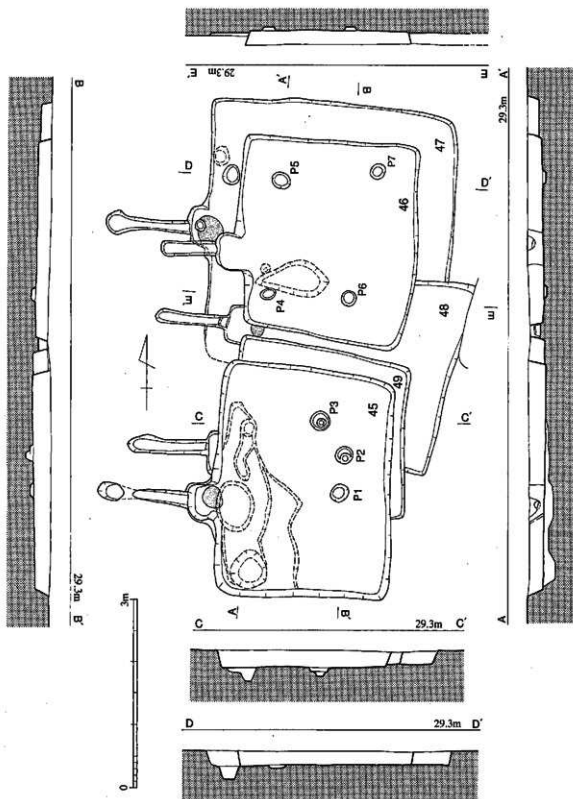
45号壑穴住居跡（図版17、第78図）

調査区中央東側で検出した壑穴住居跡で、後述する46～49号壑穴住居跡と共に一群を構成する。カマド方位、主軸ともすべて同一方向を指しており、また非常に狭い範囲内で重複することから、これらの住居跡の強い関連性が窺える。48・49・51号壑穴住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、西壁3.7m、北壁2.7m、深さ30cm、床面積10.29㎡を測る。西壁の中央からやや南に寄った所を大きく掘り込んでカマドを付設する。床面上でP1・P2・P3を検出しており、このうちP1は主柱穴と思われるが、P2・P3に関してはその可能性は低いように思える。貼り床は南西側のみ認められ、下層では不整形の掘り込み、ピットを検出した。床面硬化は確認できなかった。遺物は少ない。図示した土器の他、第196図21の管状土錘、第197図6の焼塩土器が覆土中から、第197図9の焼塩土器が貼り床下層から出土した。

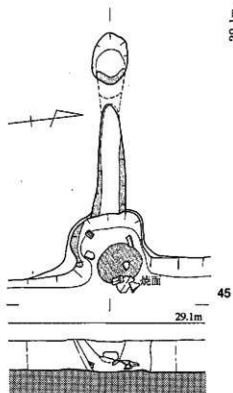
カマド（図版18、第79図） 西壁中央から南に50cm程の所に位置するカマドで、壁から40cm程突出する。掘り方は隅が丸く、不整形なものである。煙道は中軸線上に位置し、1.45m程伸びる。煙道の先端部は深く掘り込まれている。カマド全体には粘土を使用せず、覆土と同質の砂質シルトを使用し、掘り方を囲むように5cmの厚さで積み上げる。カマド袖は左袖のみ確認し、長さ25cmを測る。支脚は無く、また抜き取り穴も検出できなかった。カマド内面には30cm程の広さで赤変部分が広がり、またカマド左壁上部および煙道両側面が赤変していた。煙道先端東側は黒く変色していた。カマド内からは2の甕が出土した。

出土土器（図版61、第80図）

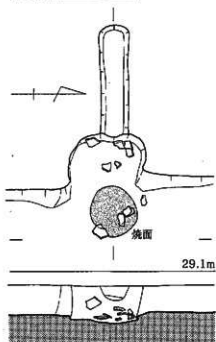
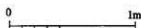
土師器（1～3） 1～3は甕である。1は口縁部が長く直線的に開くもので、51号壑穴住居跡からの混入品である可能性が高い。2は口縁部があまり開かないもの、3は口縁部が強く外反するものである。



第78圖 45~49号墓穴住居跡平面圖 (1/60)



45



46

第79図 45・46号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

した。

出土土器 (第80図)

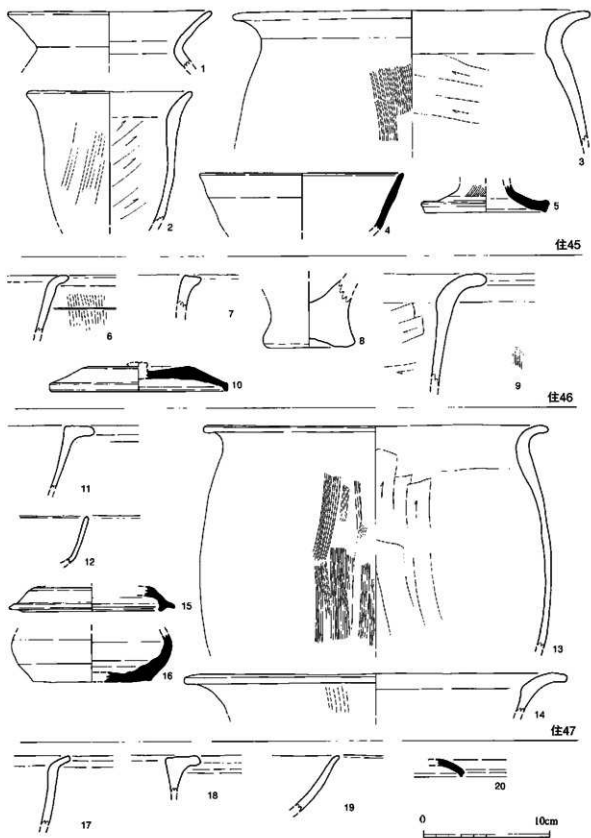
弥生土器 (6~8) 6は如意形口縁の甕で、1条の沈線を巡らす。7は三角口縁の甕。8は上げ底の厚い甕底部。いずれも弥生時代中期初頭のもので混入品である。

須惠器 (4・5) 4は体部が直線的に伸びる環。5は高環の脚部で、端部をつまみ出している。遺物の出土量が少なく決め手に欠けるが、8世紀後半頃のものであろう。

46号竪穴住居跡 (図版17、第78図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、47・48号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、西壁3.0m、北壁2.8m、深さ20cm、床面積8.82㎡を測る。西壁の中央からやや南に寄りの壁面を大きく掘り込んでカマドを付設する。支柱穴はP4・P5・P6・P7を検出したが、どれも径25cm、深さ5cmと小さく浅いものである。貼り床は全面に行われるが不明瞭である。床面下層では不整形のピットを2個検出した。床面硬化は確認できなかった。平面形の横長プランやカマドを西壁の中央からやや南寄りに付設する等、先述の45号竪穴住居跡との共通性が指摘できる。

カマド (図版18、第79図) 西壁中央から40cm程南に位置するカマドで、壁から35cm程突出する。掘り方は隅が丸く、不整形なものである。煙道は中軸線からやや北側にずれ、90cmの長さを測る。胴体、袖といったカマドを構築する積土は全く検出できなかった。カマド内は壁体を積み上げず掘り方のまま使用する。カマド袖は無く、わずかに内側への張り出しが確認できるに過ぎない。支脚は無く、また抜き取り穴も検出できなかった。カマドの奥壁から35cmほど手前で、径40cm程の広さの赤変部分を確認した。カマド内からは9の甕、第197図3の焼塩土器が出土



第80图 45~48号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/3)

土師器 (9) 9は口縁部が強く外反しており、胴が張らないことから飯または大型の鉢となるであろう。内面横へラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。

須恵器 (10) 10は杯蓋である。端部を短く下方につまみ出す。

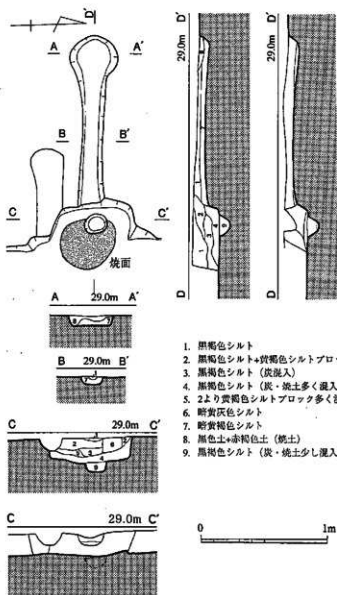
遺物の量が少なく時期比定が困難であるが、8世紀中頃を前後する時期であろう。

47号竪穴住居跡 (図版17、第78図)

調査区中央東側に検出した竪穴住居跡で、45・46・48・49号竪穴住居に切られ、また57号竪穴住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形で、西壁4.1m、北壁3.8m、深さ20cmを測る。西壁のほぼ中央を大きく掘り込んでカマドを付設する。床面の大半を他の住居跡に切られるため、支柱穴は確認できなかった。西壁近くでP8を検出したが、支柱穴ではないと思われる。貼り床は全面に行われている。床面硬化は確認できなかった。遺物は図示した土器の他、第197図2の焼壇土器が覆土中から出土した。

カマド (図版18、第81図) 西壁中央に位置するカマドで、壁から30cm程突出する。掘り方は隅が丸く、不整形である。煙道は中軸線からやや南側にずれ、1.3mの長さを測る。

先端はピット状に広がり、やや深くなる。壁体、袖といったカマドを構築する積土は全く検出できなかった。カマド袖は無く、左側のみわずかに内側への張り出しが確認できるに過ぎない。支脚は遺存していなかったが奥壁から10cmほど内側で、径15cm、深さ10cmの支脚抜き取り穴を検出した。この穴の東側では径45cmの広さで赤変部分が認められた。カマド内からは13の壺が出土した。



出土土器 (図版61、第80図)

弥生土器 (11) 11は水平に短く伸びる口縁で、鉢か甕であろう。弥生時代中期前半のもので、混入品である。

土師器 (12~14) 12は口縁部が直立する坏である。13は口縁部が強く外反する甕で、内面縦へラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。14は鉢または甕であろう。体部を強くへラケズリ調整するため口縁部内面に稜ができています。

須恵器 (15・16) 15は内面に短いかえりを有した須恵器坏蓋で、7世紀後半

1. 黒褐色シルト
2. 黒褐色シルト+黄褐色シルトブロック
3. 黒褐色シルト (炭混入)
4. 黒褐色シルト (炭・流土多く混入)
5. 2より黄褐色シルトブロック多く混入
6. 暗黄褐色シルト
7. 暗黄褐色シルト
8. 黒色土+赤褐色土 (粘土)
9. 黒褐色シルト (炭・流土少し混入)

第81図 47号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

～末頃のもの。16は底部が平底である。壺であらうか。

48号竪穴住居跡 (図版17、第78図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、45・46・49・50号竪穴住居跡に切られ、また47号竪穴住居跡を切って営まれる。かろうじて計測できる東壁は3.1mを測る。平面形は隅丸方形になると思われ、西壁にカマドを設置する。他の住居跡に大きく切られているため支柱穴は検出できなかった。貼り床は全面にわたって認められる。床面硬化は顕著ではない。

カマド (第82図) 西壁に位置するカマドで、壁から突出するタイプである。煙道はほぼ中軸線上に位置し、長さ110cmを測る。壁には約2cmの厚さで土を貼り付け壁体を構築しており壁体には粘土ではなく覆土と同様のシルト質土を使用する。カマド軸は他の住居に切られるため確認出来なかった。支脚の位置も不明。カマド奥壁から約35cm手前で、赤変部分を検出した。

出土土器 (第80図)

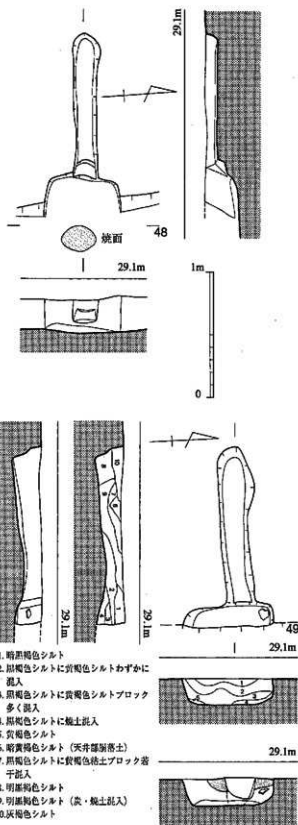
弥生土器 (17・18) 17は如意形口縁の甕である。18は短く水平に伸びる甕の口縁部。どちらも弥生時代中期初頭～前半の混入品である。

土師器 (19) 19は外反気味に大きく開く。古墳時代中期の高坏が混入したものである。

須恵器 (20) 20は須恵器坏蓋で、端部は僅かにつまみ出した程度である。8世紀代でも新しい時期のものである。

49号竪穴住居跡 (図版17、第78図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、45号竪穴住居跡に切られ、また47・48号竪穴住居跡を切る。東壁2.4cm、北壁2.7mを測る。



第82図 48・49号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

他の住居跡に大きく切られているので断定は出来ないが、平面長方形の住居跡となるだろう。深さは25cmを測る。西壁の中央からやや南に寄りの壁面を大きく掘り込んでカマドを付設するようである。主柱穴の位置は不明。貼り床は全面に行われる。床面硬化は確認できなかった。

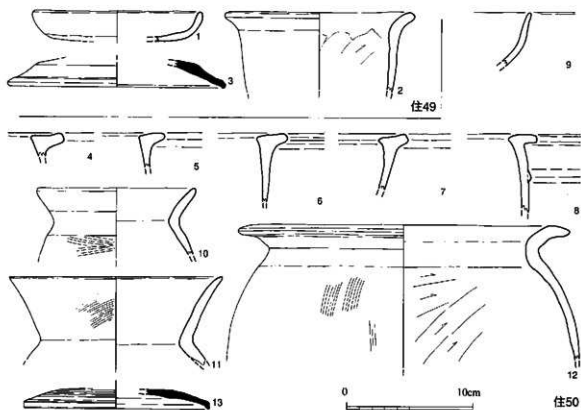
カマド(第82図) 45号竪穴住居跡に大きく切られ、カマドの一部しか遺存していない。西壁中央から南寄りに位置するカマドである。煙道は中軸線からやや北側にずれ、125cmの長さを測る。壁体、袖といったカマドを構築する積土は全く検出できなかった。カマド内からは3の須恵器蓋が出土している。

出土土器(第83図)

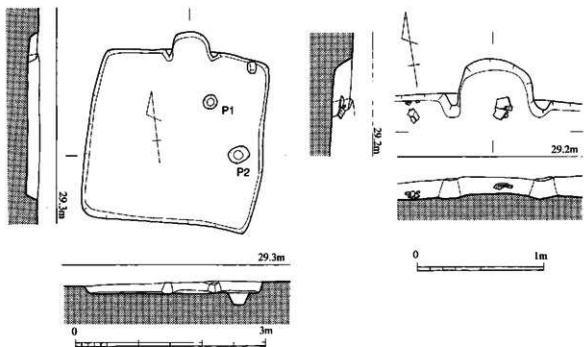
土師器(1・2) 1は器高の低い坏である。2は胴が張らない甕で、口縁部は緩く外反する。

須恵器(3) 3は坏蓋で、端部は丸く、僅かに下方につまみ出す程度である。8世紀後半前後のものである。

さて、上述した45～49号竪穴住居跡の先後関係及び時期であるが、切り合い関係から最も古いのが47号で、次が48号ということは問題ない。また45号と49号とは45号の方が新しい。ここで問題となるのが、46号と45・49号との先後関係である。遺物の出土量が少ないため断定は控えるべきだろうが、敢えて比較するならば、46号出土の須恵器坏蓋10と、49号出土の須恵器坏蓋3の端部形態である。どちらかといえば46号出土の10の方が古相であり、したがって46号の方が49号よりも先行すると考えた。すなわち、住居跡の先後関係は、古い方から47-48-46-49-45ということになる。造営された時期は、47号が7世紀後半頃、45号が8世紀後半頃に比定され、他の住居跡はこの間に収まるものである。



第83図 49・50号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)



第84図 50号竪穴住居跡・カマド突測図 (1/60・1/30)

50号竪穴住居跡 (図版19、第84図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、48・51号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸正方形で、北2.6m、東壁2.7m、深さ15cm、床面積7.62㎡を測る。北壁のほぼ中央を掘り込んでカマドを付設する。床面ではP1・P2を検出したが、その位置から支柱穴とはなり得ない。貼り床は行われていない。

カマド (第84図) 北壁中央に位置するカマドで、壁から25cm程突出する。煙道は削平されており、遺存していない。カマド袖は短く、右袖15cm、左袖20cmを測る。支脚は無く、また抜き取り穴も検出できなかった。カマド内からは12の甕が、左脇からは10の甕が出土した。

出土土器 (第83図)

弥生土器 (4~8) 4~7は口縁端部外側が短く水平に伸びた甕の口縁である。8は口縁部下に三角突帯を巡らすもので、口縁部付近が内傾する。全て弥生時代中期前半の混入品。

土師器 (9~12) 9は口縁部がやや外傾する甕である。10・11は口縁部が直線的に長く開く甕の口縁部、12は口縁部が強く外反する甕である。これらの内、9~11は51号竪穴住居跡からの混入の可能性がある。

須恵器 (13) 13は端部が下方へ短く伸びる坏蓋で、8世紀代でも新しい時期のものである。遺物はこれらの他、第199図24の打製石斧が出土している。

51号竪穴住居跡 (図版図版19、第85図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、45・48・49・50号竪穴住居跡に切られる。平面形は東西に長い隅丸長方形で、北壁5.1m、東壁3.3m、深さ30cm、床面積17.63㎡を測る。床面中央東寄り土坑を検出しており、炉跡であろう。また南壁際で壁際土坑を検出している。床面西側ではL字状の配置をとるベッド状遺構を検出している。高さは約5cm。支柱穴はP1・P2を検出したが、これ

以外にP3を検出しており、住居の建て替えが行われたようである。床面には貼り床が認められ、下層では不整形の掘り込み、ピットを検出した。遺物は図示した土器の他に第201図42の太型蛤刃石斧が、床面下層から第207図37の鉄製品が出土した。

出土土器 (図版61、第86図)

弥生土器 (1・2) 1は三角口縁の甕である。2は上げ底気味の甕の底部である。どちらも弥生時代中期のもので、混入品である。

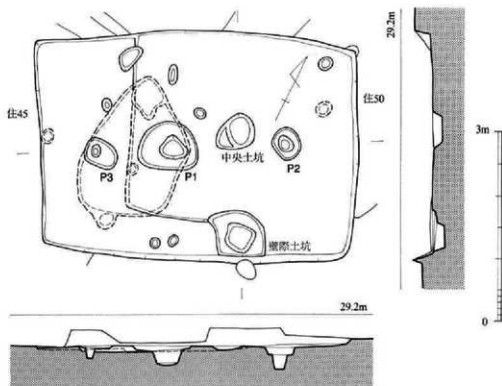
土師器 (3~15) 3~5は鉢である。3の底部は平底に近く、体部は直線的に開く。口径11.0cm、器高4.9cmを測る。4は口縁端部が短く外反し、尖っている。5は内外面に工具痕が残る。6は柱部が短く裾が大きく開く台付鉢の脚部である。7は高坏または鉢の口縁部であろう。8は椀型の坏部に短い脚柱部が付く。9は体部上半が内湾気味に開き、口縁部が外反する高坏の坏部である。

10は畿内系の二重口縁甕で、口縁部が大きく開き、内外面ともに8本1単位の柳描き波状文を施文する。口縁端部外側は面取りし、2個1単位の円形浮文を貼付する。またその下位にも円形浮文を巡らす。

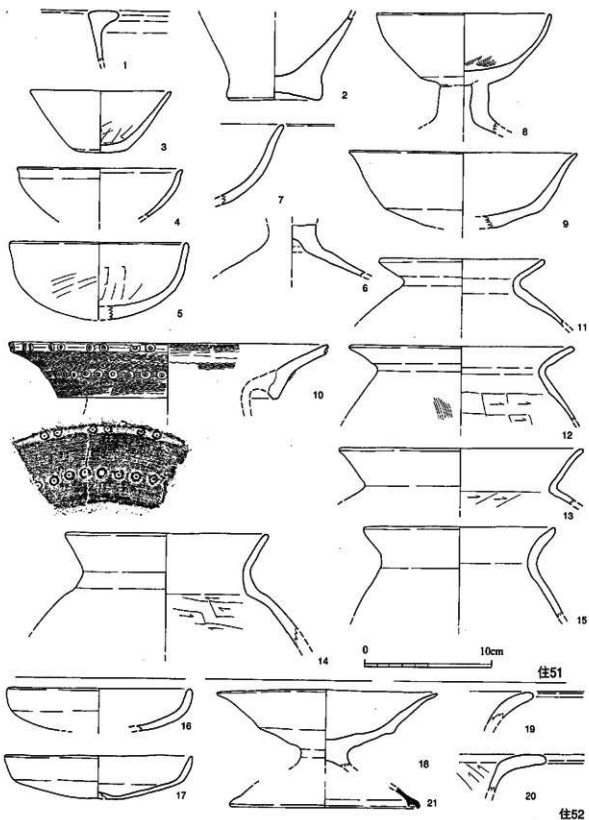
11~15は甕である。11~13は頸部で強く湾曲し、口縁部は大きく開く。口縁部には12の様以外反するものと、11・13の様直線的なものがある。端部は丸く仕上げられ、また器壁は薄い。14・15は11~13と比べて頸部があまり締まらず、また口縁部もあまり開かず外反気味に立ち上がる。器壁もやや厚めである。



50・51号竪穴住居跡

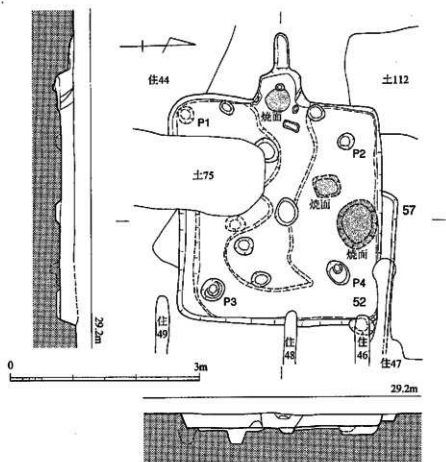


第85図 51号竪穴住居跡実測図 (1/60)

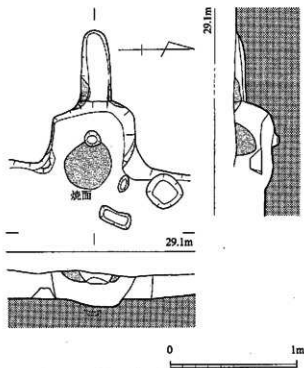


第86図 51・52号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物のうち、6や10には明らかに古相の特徴が認められる。甕に関しても、一見新しい様相と見て取れるものもあるが、13の様に屈曲部までヘラケズリを行う点や、そうでなくても12や14の様に丁寧な横ヘラケズリを行う点に古相の様相を見出しうる。従って、古墳時代前期初頭頃としておきたい。



第87図 52・57号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第88図 52号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

52号竪穴住居跡 (図版19、第87図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、46・47・48号竪穴住居跡、75号土坑に切れ、44・57号竪穴住居跡を切る。平面形はややいびつな隅丸長方形で、西壁3.2m、北壁3.4m、深さ20cm、床面積11.78㎡を測る。西壁のほぼ中央にカマドを付設する。支柱穴はP1～P4を確認しており、深さは10～20cmを測る。貼り床はほぼ全面に行われ、下層では不整形の掘り込み、ピットを

検出した。このうち北壁際で検出したピットは覆土に焼土を多く含んでいた。当初は北側にカマドを設置していたが、西側に造り替えたのであろう。床面硬化は顕著ではない。

カマド (第88図) 西壁のほぼ中央に位置するカマドで、壁から45cm程突出する。掘り方は隅が丸く、やや不整形である。煙道は中軸線からやや北に位置しており、長さ60cmを測る。カマド内面は壁体を積み上げず、素掘りのまま使用する。袖の構築は認められなかった。奥壁から20cm内側で径12cm、深さ5cmの支脚抜き取り穴を検出した。この抜き取り穴から手前は40cm程の広さで被熱・赤変面が認められた。またカマド左壁、煙道側面でも赤変面が認められた。カマド前面右側では焼土がまったピットを3個検出した。

出土土器 (図版61、第86図)

土師器 (16~20) 16・17は坏で、体部上半は屈曲して立ち上がる。18は高坏で、坏部上半が大きく開く。屈曲部外面の稜は明瞭である。古墳時代前期のものと思われ、明らかに混入品である。恐らく44号竪穴住居跡からの混入であろう。19・20は甕または瓶の口縁部である。口縁部は大きく外反している。

須恵器 (21) 21はかえりが短く伸びる坏蓋である。7世紀後半~末頃のものである。

これらの土器以外に、第206図5・7の刀子が床面より出土した。

57号竪穴住居跡 (第87図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡である。52号竪穴住居跡に大きく切られ、北壁をわずかに2.2m検出したに過ぎない。土器はわずかに1袋出土したが、図示できるものは無かった。第204図91の滑石製石鍋模造品が出土しているが、これは新たに掘り込まれたピットからの混入品であろう。

58号竪穴住居跡 (図版20、第89図)

調査区南端で検出した竪穴住居跡である。59号竪穴住居跡と重複するが、遺構確認時に59号竪穴住居跡の張り出し部と判断して掘り下げたため、果たして遺構が切り合っているのか、それとも同一遺構であるのか判断できなかった。そのため一応別の遺構として報告する。平面形は方形に近く、北東側が張り出したいびつな格好となる。現状では西壁で2.2m、張り出し部で1.5mを測る。残りが非常に悪く、深さは5cmを測るに過ぎない。床面上で数個のピットを検出したが、支柱穴と判断できるものは無かった。貼り床、床面硬化は確認していない。遺物は上層のものは取り上げ時に59号竪穴住居跡と混入してしまった。従って、出土土器は後述する59号竪穴住居跡と一緒に説明を行う。

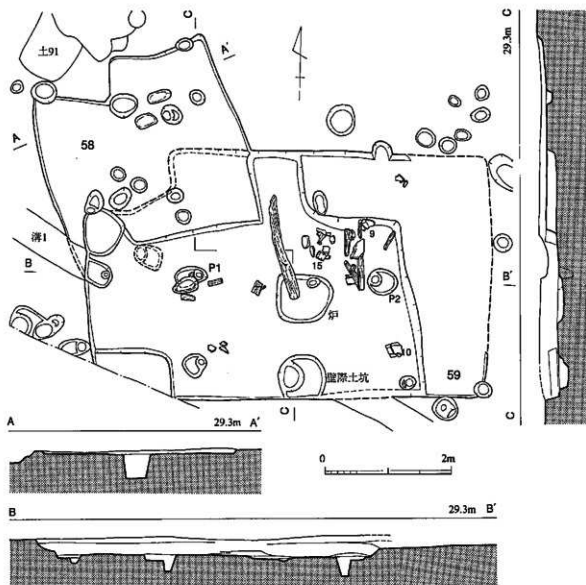
59号竪穴住居跡 (図版20、第89図)

調査区南端で検出した竪穴住居跡である。58号竪穴住居跡と重複するが、確認時に58号竪穴住居跡を当住居跡の張り出し部と判断したため、遺構の切り合いを判断できなかった。また面渠水路設置時に東側を大きく掘削されてしまった。北西コーナー付近がいびつな形であり、また南西コーナーが調査区外となるが、平面形はおおよそ6.1m×3.8mの長方形プランになるだろう。深さは最も残りの良い所で30cmを測る。東壁から北壁東側、北西コーナー、南西コーナーでそれぞれ高さ20cm前後のベッド状遺構を検出している。支柱穴はP1・P2を検出しており、深さはそれぞれ30cm、25cmを測る。床面中央で炉跡を、南壁際で壁際土坑を検出した。また床面上では炭化材がいくらか出土したが、焼失家屋と判断するまでには至らない。貼り床は全面に行われている。遺物は図示した土器の他に第201図39・40の磨製片刃石斧、第202図59の砥石が覆土上層から出土している。

出土土器 (図版62、第90・91図)

弥生土器 (1~5) 1は如意形口縁の甕で、一条の沈線を巡らす。2・3は三角口縁の甕である。4は端部の断面が四角に近い甕である。5は底部が柱状になる甕である。全て弥生時代前期末~中期前半の混入品である。

土師器 (6~31) 6~11は鉢である。6はレンズ状の底部となり体部は大きく直線的に開く。口径



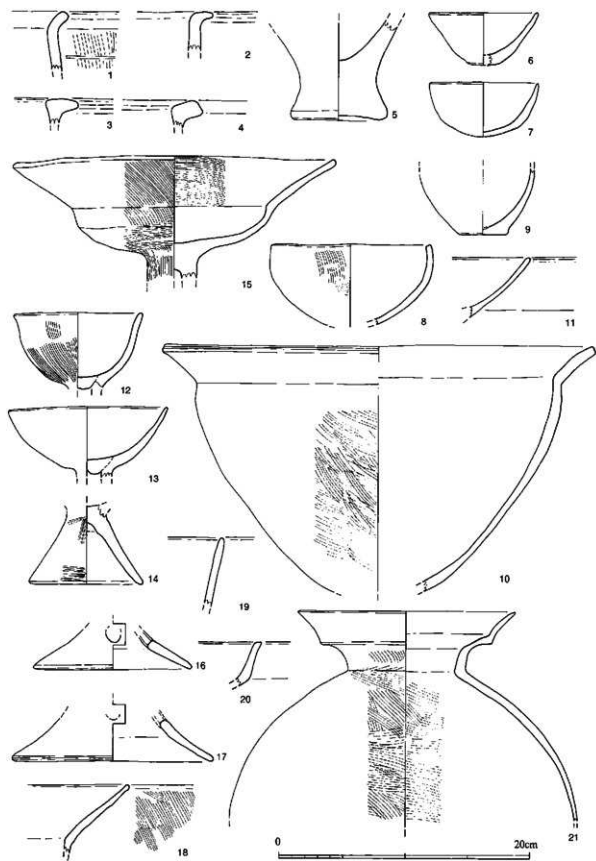
第89図 58・59号竪穴住居跡実測図 (1/60)

8.6cm、器高4.1cmを測る。7は真上に、8はやや内傾して立ち上がっている。9は底部が平底となるものである。10は大型の鉢で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は反転する。外面は粗い斜ハケメ調整を行う。口径34cmを測る。11は口縁部が長くのびる鉢である。12-14は台付鉢である。12は外面に明瞭なハケメが認められる。14は裾部が直線的に開き、外面は丁寧なヘラミガキ調整を行う。

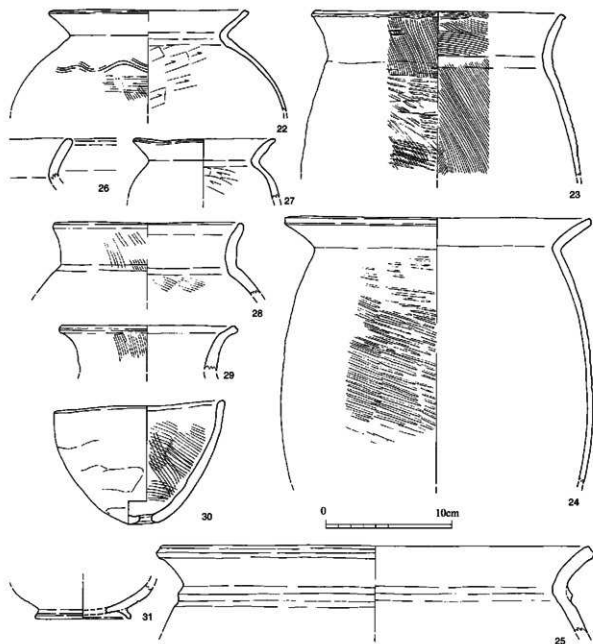
15-17は高坏である。15は在地系のもので、坏部は深く口縁部は反転して長くのびる。内外面ハケメ調整を行う。16・17は高坏の裾部で、どちらも円形の透かし孔を穿孔する。

18-21は壺である。18は小型丸底壺の口縁部で直線的に長く伸びている。外面にはハケメが認められるが内面は器表が風化しており調整不明である。19は直口壺の口縁部である。20は二重口縁壺の口縁部で、端部を面取りしている。21は畿内系の二重口縁壺で口縁部は大きく開く。頸部は強く締まり体部は球形になる。体部は内外面ともに横ハケメ調整を行う。口径は17cmを測る。

22-29は甕である。22は布留系の甕で、口縁部は直線的に開き、端部は面取りを行っている。また肩部に3条の波状沈線を巡らしている。内面のヘラケズリは頸屈曲部の少し下から行われる。器



第90图 58·59号双穴住居跡出土土器実測图① (1/3)



第91図 58・59号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3)

壁はかなり薄く、3mm程度である。23・24は長胴の甕で、在地色の濃いものである。胴部外面はタタキ、23の胴部内面は斜めハケメ調整を行う。25は頸部に三角突帯を巡らす在地系の甕である。26は口縁部があまり開かない器形になるだろう。27は頸部が締まっており、壺と称したほうが良いかもしれない。口縁部は短く外反気味に開く。28は口縁部が上方に立ち上がるもので、胴部内面はハケメ調整を行っている。29は口縁部が短く外反するもので、器表に化粧土を施す。30は鉢形の甎で、底部に焼成前穿孔を行う。外面は風化が著しく調整不明だが、内面は雑な斜めハケメ調整を行っている。口径13.3cm、器高9.9cmを測る。

31は高台付碗で、底径7.6cm。胎土は非常に精良である。明らかに混入品である。

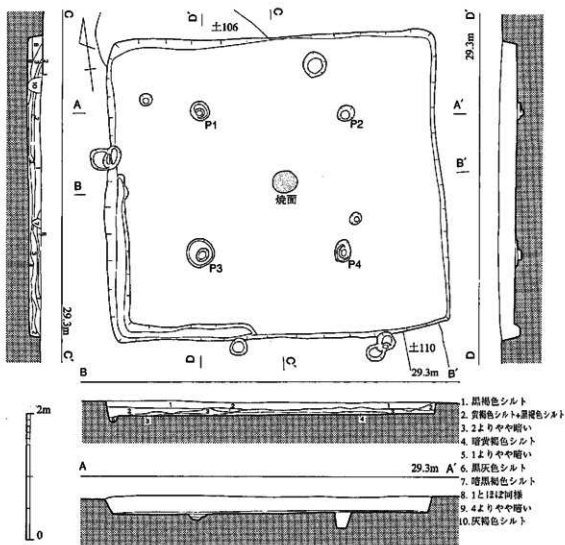
出土土器は先述した様に58号竪穴住居跡と混入してしまった。上記の土器のうち、6・7・9・11・13・16・17・20・25・27・28・31は両住居跡覆土上層、21・30は58号竪穴住居跡床面直上、

8・10・15は59号竪穴住居跡床面直上、12・22は59号竪穴住居跡ベッド上面直上、14はP4、27はP3からそれぞれ出土した。

出土遺物は畿内系と在地系のもとのが混在するが、ほとんど時期差は認められない。また58号竪穴住居跡と59号竪穴住居跡との時期差も無い様であり、同一の遺構と考えて良い様である。古墳時代前期初頭頃のものである。

65号竪穴住居跡 (図版20、第92図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡である。平面形は東西にやや長い長方形で、北壁5.2m、東壁4.6m、深さ25cm、床面積25.27㎡を測る。覆土は上層が黒褐色シルト、下層が黄褐色シルト+黒褐色シルトからなり、自然堆積の状況を示す。主柱穴はP1～P4を検出しており、径25cm～45cm、深さ10～25を測る。床面のほぼ中央で、径30cm程度の焼土の広がりを検出した。掘り込み等はないが、炉跡である。また、南東の壁際の一部で壁溝を検出している。貼り床、床面硬化は認められなかった。出土遺物はこの時期の住居跡にしては非常に少ない。



第92図 65号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第93図)

弥生土器 (1~3) 1は外反度の緩い如意形口縁の甕である。2は三角口縁の甕で、1条の沈線を巡らす。3は端部外面が水平に短く伸びた甕である。すべて弥生時代中期のもので、混入品である。

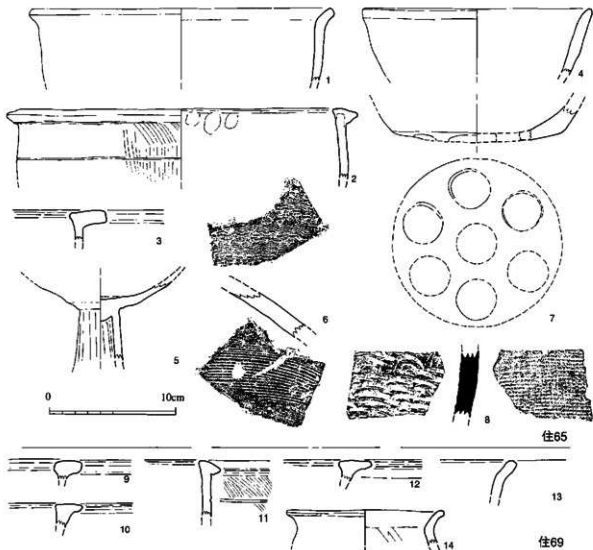
土師器 (4~7) 4は大型の土師器鉢で、器壁が厚い。5は高坏で、中影らみの柱部をもつ。6は外面に6本1単位の櫛描き波状文を配した畿内系二重口縁壺の肩部で、古墳時代前期初頭頃のものか。7は瓶の底部で、底部中央に1孔、その周囲に5~6孔を巡らすものであろう。カマドを持たない当住居跡からの出土という事で、住居埋没過程で廃棄されたものと思われる。

須恵器 (8) 8は壺の胴部片で、内面同心円当て具痕、外面平行タタキ調整を行う。傾きは不明である。混入品である。

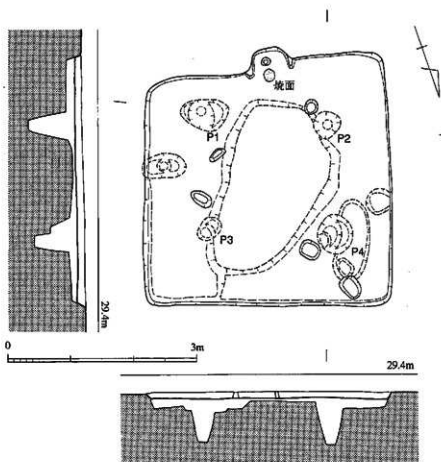
当住居跡の時期はカマド出現直前の古墳時代中期中葉頃に位置づけられる。

69号竪穴住居跡 (図版20、第94図)

調査区中央北東側に検出した竪穴住居跡で、78号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸正方形で、南壁3.7m、西壁4.0m、深さ10cm、床面積14.88㎡を測る。南壁のほぼ中央にカマドを付設する。主柱



第93図 65・69号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

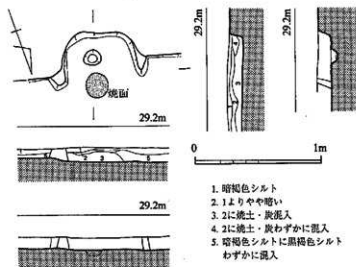


第94図 69号竪穴住居跡実測図 (1/60)

穴は床面上では確認できず、貼り床をはがした状態でP1~P4を確認した。径30~60cm、深さ70cmを測る。貼り床は全面に行われ、下層の掘り方は中央が鳥状に高くなる。

カマド (第95図) 南壁のほぼ中央に位置するカマドで、壁から35cm程突出する。掘り方は隅が丸く掘削されている。煙道は削平を受けており、遺存していない。カマド両端で袖を検出したが、非常に短く右袖20cm、左袖15cmを測る程度でしかない。奥壁から

15cm内側で径12cm、深さ5cmの支脚抜き取り穴を検出したが、この抜き取り穴から手前は約20cmの広さで赤変面が認められた。出土遺物は非常に少なく、また混入品も多い。図示した土器の他、第196図12の管状土甕が貼り床下層から出土した。



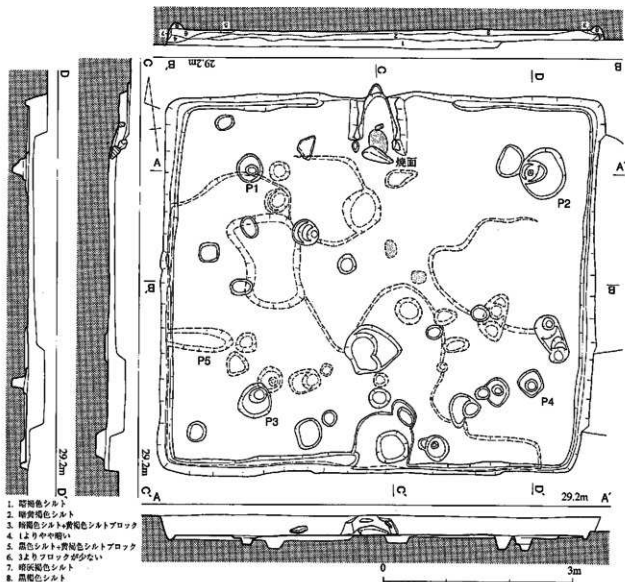
第95図 69号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (第93図)

弥生土器 (9~13) 9~11は三角口縁の甕である。11は1条の沈線を巡らす。12は端部外側が短く伸びた口縁の甕である。13は如意形口縁の甕である。全て弥生時代中期初頭~前半の混入品である。
土師器 (14) 14は口縁部が短く外反する甕である。当住居跡の時期を比定できる遺物はこの1点しかない。住居形態や後述する78号竪穴住居跡との先後関係とも考え合わせて、8世紀前半前後の時期であろう。

70号竪穴住居跡 (図版21、第96図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、47・71号竪穴住居跡に切られ、また81号竪穴住居跡を切る。平面形はやや東西に長い長方形で、北壁6.9m、東壁6.0m、床面積41.19m²を測り大型の部類に属する。深さは35cmを測る。北壁のほぼ中央にカマドを付設する。支柱穴はP1~P4を確認しており、径45~50cm、柱痕径20cm、深さ15~35cmを測る。他に床面上でいくつかのピットを検出したが、どれも浅いものばかりである。他に床面中央付近で赤変部分を2箇所確認している。南壁際の

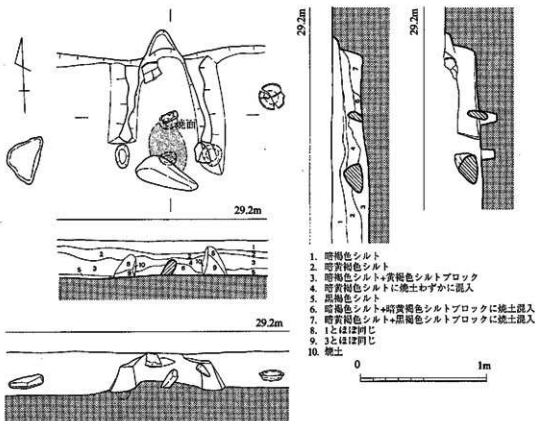


第96図 70号竪穴住居跡実測図 (1/60)

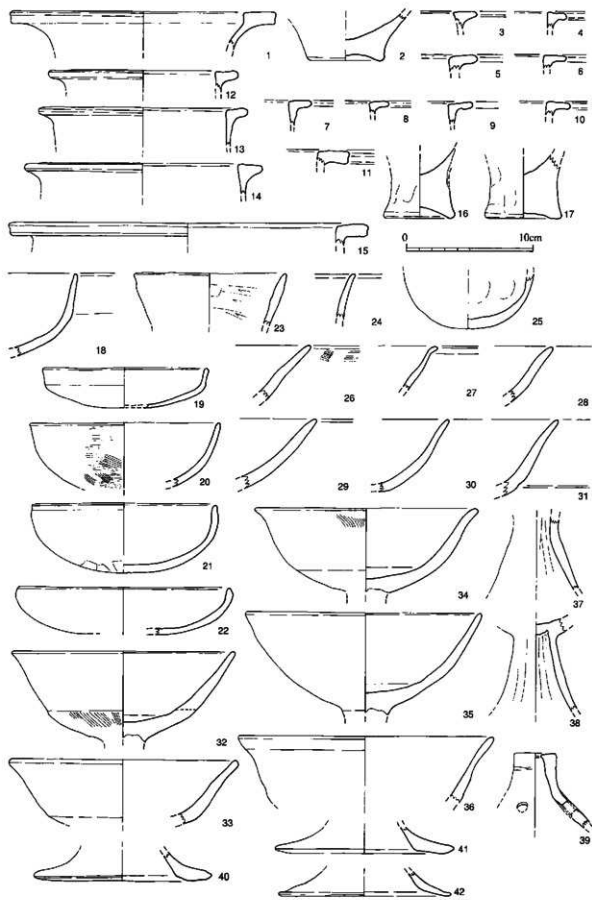
ほぼ中央にはカマド対面土坑が設置される。また床面壁際には、幅10cm前後の壁溝がカマド・カマド対面土坑を除いて全周する。貼り床はほぼ全面に行われ、下層では不整形の掘り込み、ビットを検出した。床面硬化は中央付近で顕著に認められた。貼り床下層からは18・19・23・49・55の土器が出土した。またP2から30の土器が、P5からは25の土器が出土した。他に床面直上で第206図14のU字形鋤先が出土した。

カマド (図版21、第97図) 北壁のほぼ中央に位置する造り付けカマドである。煙道は中軸線上に位置し、長さ20cm、幅25cm、火床面からの高さ20cmを測る。カマド袖は暗褐色のシルトを使用して構築しており、住居跡覆土とほとんど変わらず、焼土の広がりを目当てに袖の検出を行った。火床面は長さ90cm、幅50cmを測り、焚き口側が広くなるという古式の様相を呈している。長さは右袖で95cm、左袖で65cmを測る。焚き口には立石を設置し、その上に横石を架していたようで、右袖側には上部を失った立石を、左袖側には抜き取り穴を検出した。なお、この穴より約80cm西側で、抜き取られた長さ35cmの扁平石を検出した。また焚き口前面では立石に架した長さ50cmの横石を検出した。これらはカマド廃棄時に故意に行われたものである。支脚はカマド奥壁から50cm内側の中軸線上に位置し、長さ15cmの棒状石を使用する。火床面から支脚先端までの高さは10cmを測る。支脚前面は、長軸35cm、短軸30cmの広さで強く熱を受け、赤変していた。またこの赤変部分で、径10cm、深さ10cm程度の小ビットを検出した。カマド東側から34が、カマド内から57・60が出土した。

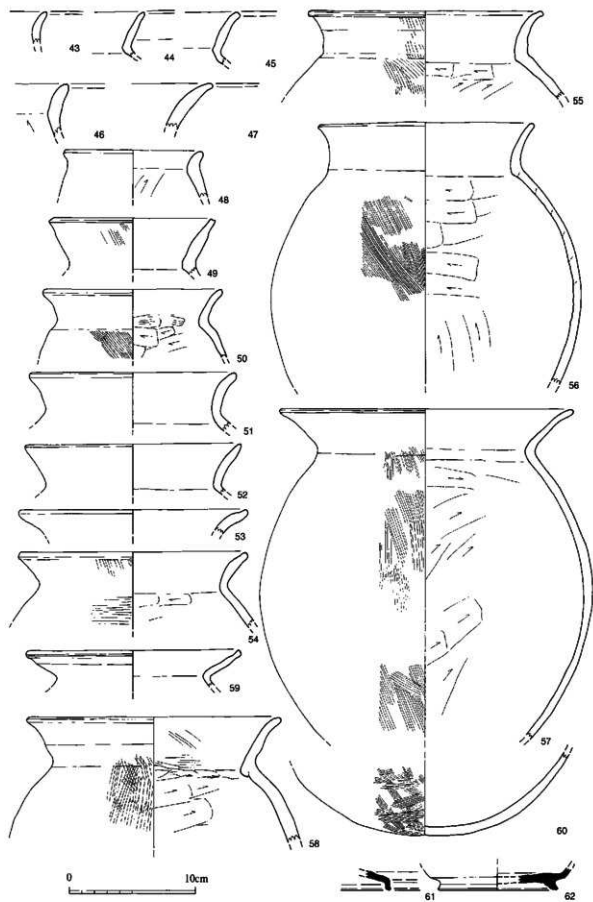
カマド対面土坑 (図版21、第100図) 南壁中央から30cm東寄りに位置する土坑で、二段掘りとなる。一段目は径90cm程度の半円形で、深さは3cmを測る。壁際は壁溝と接続する。二段目の土坑は一段目の東側に位置し、壁からは10cmほど離れる。径50cm、深さ20cmを測る不整形の土坑である。この土坑の内外から、21・29・32・37・38・42・50・51の土器が出土した。



第97図 70号壁穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第98图 70号窑穴住居跡出土土器実測图① (1~17: 1/4, 18~42: 1/3)



第99图 70号竖穴住居跡出土土器実測图② (1/3)

出土土器 (図版62、第98・99図)

弥生土器 (1~17) 1は水平に短く伸びる鋤先口縁の甕である。2は甕の底部であろう。やや上げ底となる。3~15は三角口縁または未発達な鋤先口縁の甕である。16・17は柱状の高い甕底部である。これらはすべて弥生時代中期初頭~前半に属し、明らかに混入品である。

土師器 (18~60) 18は深みのある椀である。19は浅く、体部上半で屈曲し、外反気味に立ち上がるもので、7世紀後半~8世紀前半の土師器杯と思われ、混入品であろう。20は外面にハケメ調整を行う椀である。21は外底部をヘラケズリ調整する椀で、口径14cm、器高5.6cmを測る。22は体部が浅く、これも恐らく奈良時代の土師器杯であろう。23は小型の鉢で、内面ヘラケズリを行う。24・25は小型の甕であろう。24は口縁部が直線的に伸びる。25は球形の体部となる。

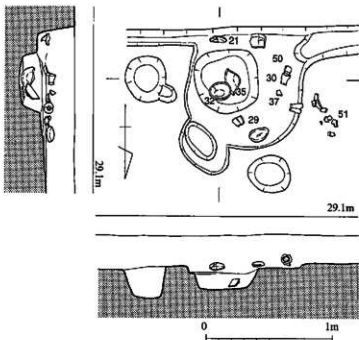
26~42は高坏である。坏部はどれも深く、屈曲部は不明瞭で稜をもたない。下半は内湾しながら立ち上がり、上半は外反気味に開く。柱部は接合部から徐々に開く37・38の様なものと、39のように柱部が短く、屈曲して裾部へと移行する古相のものがある。39は裾部に円形の透かし孔を3方向に穿孔する。裾部は外面には稜が認められず緩やかに外反し、内面では稜を有して大きく開いている。

43~60は甕である。43・46・48は口縁部が短く外反するものである。59は口縁部が内湾気味に大きく開くもので、器壁は非常に薄い。古墳時代前期前半頃の甕であり、恐らく混入品であろう。他のものは口縁部が緩く外反し、やや長めに伸びる。胴部は強く丁寧な横ヘラケズリを行っており、頸部内面に比較的明瞭な稜ができている。胴部は球形で、最大径は中位にある。口縁部は内外面横ナデ、胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整を行う。出土遺物は若干の混入品を伴うものの、これらを除けば比較的良好な一括出土遺物であると言える。これらは古墳時代中期中葉頃のものである。

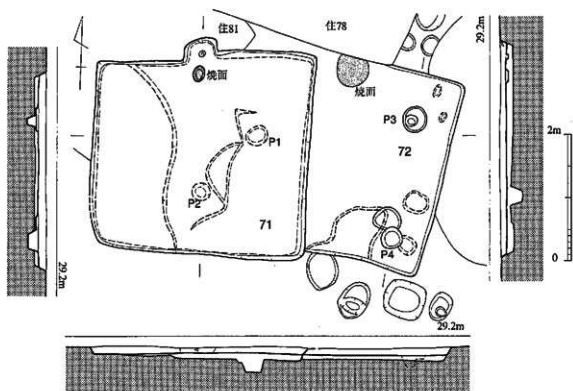
須恵器 (61・62) 61は端部が屈曲する甕で、割とシャープなつくりである。62は高台付坏で、高台部は内寄りに付き、断面三角形に近い。どちらも8世紀代の混入品である。

71号竪穴住居跡 (図版22、第101図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、70・72・81号竪穴住居跡を切る。平面形は隅丸長方形で、北壁3.5m、東壁3.3m、深さ10cm、10.93㎡を測る。北壁のほぼ中央にカマドを付設する。床面では柱穴は確認できなかった。貼り床は約10cmの深さで全面に行われ、下層では不整形の掘り込み



第100図 70号竪穴住居跡カマド対面土坑実測図 (1/30)



第101図 71・72号竪穴住居跡実測図 (1/60)

を検出した。またP1・P2を検出したが、このビットが当住居跡に伴う柱穴となるかは不明である。どちらも径30cm、深さ20cmを測る。床面硬化は顕著ではない。遺物は図示した土器の他、第198図6の石織未製品、7のスクレイパーが出土した。

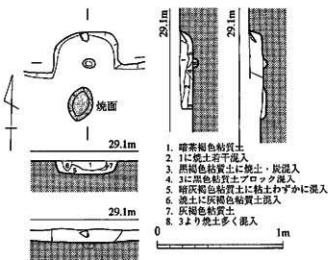
カマド (第102図) 北壁のほぼ中央に位置するカマドで、壁から30cm程突出する。担り方は隅が丸い。袖の構築は認められなかった。奥壁から20cm内側の中軸線上で、径10cm、深さ5cmの支脚抜き取り穴を検出した。この抜き取り穴から15cmほど手前で、長軸25cm、短軸20cm程の広さの赤変面が認められた。

出土土器 (第103図)

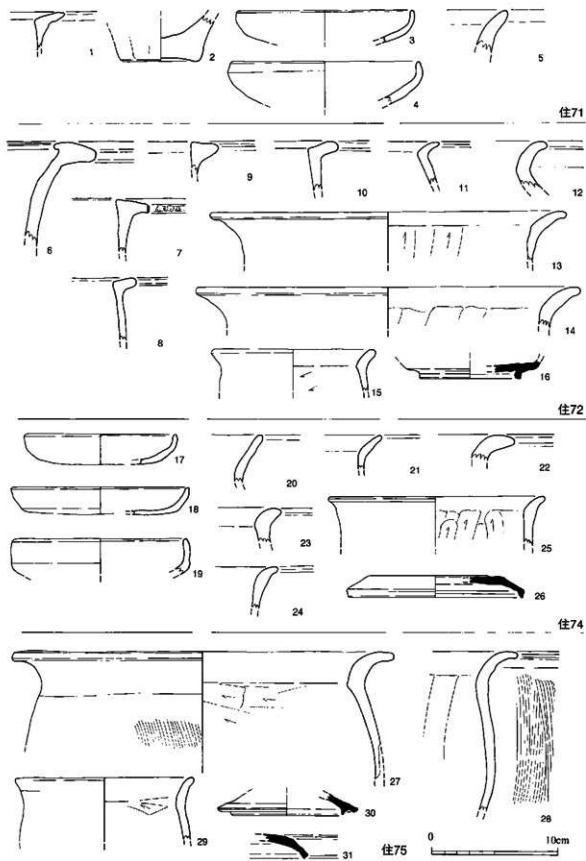
弥生土器 (1・2) 1は口縁端部外側がやや長く伸びた甕である。2は上げ底の甕で底部はやや厚い。土師器 (3~5) 3・4は浅い杯で、体部上半が短く湾曲し、口縁部は直立する。5は甕の口縁部で、短く緩やかに外反する。

72号竪穴住居跡 (図版22、第101図)

調査区中央東側で検出した竪穴住居跡で、71・78・81号竪穴住居跡に切られており、東側しか遺存



第102図 71号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第103圖 71・72・74・75号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

していない。東壁長は3.1m、深さ10cmを測り、ほぼ正方形プランの住居跡となるだろう。カマド本体は78号竪穴住居跡に切られており検出できていないが、北壁際で径50cm程の赤変面を検出しており、この位置にカマドを設置していたようである。主柱穴はP3・P4を検出した。径35cm、深さ15cmを測る。P3では柱痕を検出しており、径20cmを測る。貼り床は全面で確認しており、不整形の掘りこみ、数個のピットを検出した。床面硬化は顕著ではない。

出土土器（第103図）

弥生土器（6～10） 6は短い鑿先口縁の甕である。7～10は三角口縁の甕で、7は口縁端部に刻目を施す。10は端部が外側に短く伸びる。全て混入品である。

土師器（11～15） 11～15は口縁部が外反する甕である。11・15は小型のもので、口縁部の外反が弱い。13・14は甕の可能性もある。

須恵器（16） 16は高台付坏。高台は丸みを帯びた低いもので、やや内側に付けられる。

74号竪穴住居跡（図版22・23、第104図）

調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡で、後述する75～77号竪穴住居跡とともに一群を構成する。75・76号竪穴住居跡を切って営まれ、この一群の中では最も新しいものである。平面形は隅丸長方形で、北壁3.4m、東壁3.2m、深さ10cm、床面積10.12㎡を測る。北壁中央からやや東寄りにカマドを付設する。床面を精査したが、主柱穴は確認できなかった。貼り床は約10cmの深さで全面に行われ、下層では不整形の掘り込み検出した。掘りこみは南東側が高く、北西側が低い。また床面下層でピットを数個検出したが、このうちP1は当住居跡の出入口施設に関連する可能性があり、径30cm、深さ15cmを測る。床面硬化は顕著ではない。

カマド（第105図） 北壁の中央から約20cm東側に位置するカマドで、壁から50cm程突出する。掘り方は隅丸方形を呈する。カマド中軸線上で長さ90cmの煙道を検出した。火床面から15cm上に位置し、深さ5cmを測る。カマドについては、袖の構築は行っていない。火床面は床面から5cm程掘り窪めている。支脚の位置は不明だが、奥壁から25cm内側で、長軸35cm、短軸25cmを測る楕円形の赤変面を検出した。

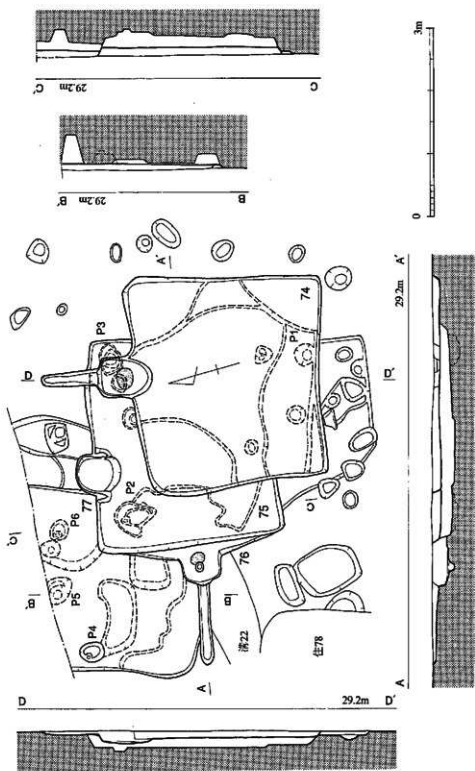
出土土器（第103図）

土師器（17～25） 17～25は浅い坏で、口縁部が短く直立する。20・21は小型の甕である。22・23は口縁部が短く強く外反する甕である。24・25は甕かまたは小型の甕になるだろう。

須恵器（26） 26は端部が下方へ屈曲する坏蓋。端部は短く屈曲し、断面三角形となる。8世紀でも新しい頃のものである。

75号竪穴住居跡（図版22・23、第104図）

調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡で、74・76・77号竪穴住居跡とともに一群を構成する。76・77号竪穴住居跡を切り、74号竪穴住居跡に切られる。平面形は隅丸長方形で、北壁3.4m、西壁2.9m、深さ10cmを測る。北壁中央からやや西寄りにカマドを付設する。床面には貼り床が行われる。床面上ではピットは検出できなかったが、床面下層でP2・P3を検出しており、主柱穴になると思われる。これらは径40～50cm、深さ15～30cmを測る。床面硬化は顕著ではなかった。遺物は図



第104圖 74~77号墓穴住居跡実測図 (1/60)

198図5の石織未製品が出土した。

カマド (図版23、第105図) 北壁の中央から約45cm西側に位置するカマドで、壁から30cm程突出する。掘り方は円形に近い。掘り方内面には約3cmの厚さで壁体を構築する。カマド袖は、右袖30cm、左袖25cmと短い。火床面は床面から5cm程掘り窪めている。支脚は扁平な河原石を使用し、奥壁から15cm内側の中軸線上に立てる。火床面から先端までの高さは12cmを測る。カマド内及び前面において、顕著な赤変面は認められなかった。カマド内からは27の甕、第197図7の焼塩土器が出土している。焼塩土器は覆土中出土のものとは接合しない。

出土土器 (第103図)

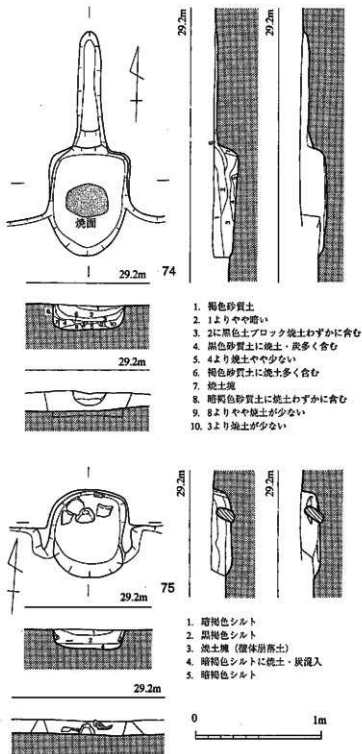
土師器 (27~29) 27は口縁部が強く外反する甕である。胴部内面は強い横ヘラケズリを行っており、屈曲部内面に稜がつく。28の甕は屈曲が緩やかである。内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。29は小型の甕で、口縁部の外反はあまり強くない。

須恵器 (30・31) 30はやや長めのかえりが付く蓋である。混入品であろう。31は端部を短く下方にひき出し、断面三角形となる坏蓋である。

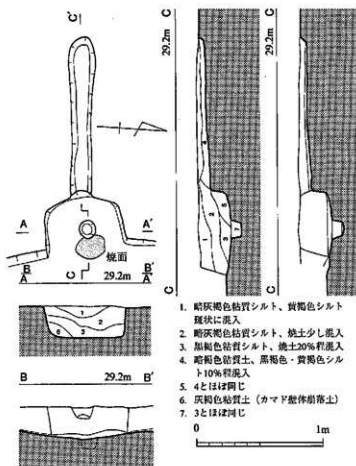
76号竪穴住居跡 (図版22・23、第104図)

調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡で、77号竪穴住居跡を切る。74・75号竪穴住居跡に大きく切られるため、床面はほとんど遺存しておらず、西壁の一部とカマドを検出したのみである。西壁はカマド付近がやや張り出した形となる。また、74・75号竪穴住居跡の南側で不整形の掘りこみを検出し、当住居跡の一部と考えていたが、あまりに不整形であるため別の遺構と判断した。

カマド (図版24、第106図) 西壁に



第105図 74・75号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第106図 76号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

77号竪穴住居跡 (図版22・23, 第104図)

調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡で、75・76号竪穴住居跡に切られ、また北側が調査区外へと続いている。検出した部分から推察すると、平面形は2.9m四方の正方形プランになるだろう。深さは10cmを測る。カマドは北側に設置するようで、調査区内では検出してはいない。床面には貼り床が行われ、床面下層では不整形の掘りこみ、ピットを検出した。P4～P6に関しては主柱穴の可能性のあるものの、配置上可能性は薄いようである。床面硬化は顕著ではない。出土遺物は非常に少ない。図示した土器の他、第198図4の石織が出土した。

出土土器 (第109図)

土師器 (4) 4は小型の甕で、胴部はほとんど張らない。

さて、上記の74～77号竪穴住居跡であるが、切り合い関係では新しい方から74-75-76-77の順になる。出土遺物が非常に少ないため、時期の決定は非常に困難である。74号出土の須恵器坏壺26は8世紀後半頃のもので、75号出土の須恵器31もこれとほとんど時期差はないと思われるので、75号竪穴住居跡は74号を少し遡るくらいの時期であろう。これに遡る76・77号竪穴住居跡は出土遺物からの詳細な時期の決定はできなかったが、74号・75号を大きく遡るものではないように思える。

78号竪穴住居跡 (第107図)

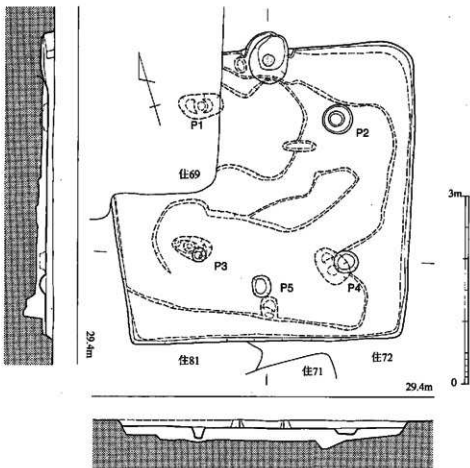
調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡である。72・81号竪穴住居跡を切り、また69号竪穴住居

する。掘り方は隅が丸く、比較的整った形である。カマド中軸線上で長さ120cmの煙道を検出した。火床面から12cm上に位置する。深さは8cm、幅は基部で15cm、先端部で20cmを測り、先端がやや広くなる。袖は構築していないのであろうか、検出してはいない。火床面は床面とほぼ同じ高さである。奥壁から20cm手前、中軸線から5cm北側の位置で支脚抜き取り穴を検出しており径15cm、深さ10cmを測る。この抜き取り穴の手前は径15cmの広さで赤変面が広がる。

出土土器 (第109図)

土師器 (1～3) 1は浅い坏の口縁部であろう。細片であり傾きにやや不安を残す。2は口縁部が強く外反する甕である。3は胴部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う甕である。

跡に切られる。平面形は北側が広いびつな隅丸方形で、東壁4.6m、南壁4.3m、深さ10cmを測る。北壁中央を掘り込んでカマドを付設する。主柱穴は床面上でP2~P4を、69号竪穴住居跡の床面下層でP1を確認した。これらの掘り方は径50cm、深さ20~35cmを測る。貼り床は10~20cmの深さで全面に行われ、床面下層では不整形の掘り込み検出しており、この掘りこみは北西側が高く、壁際が低くなる。床面硬化は顕著ではない。

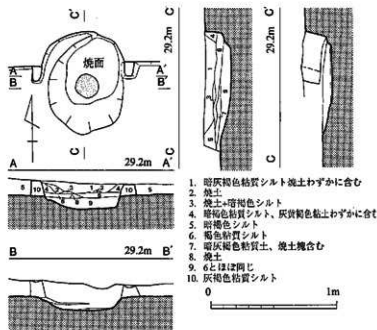


カマド (第108図) 第107図 78号竪穴

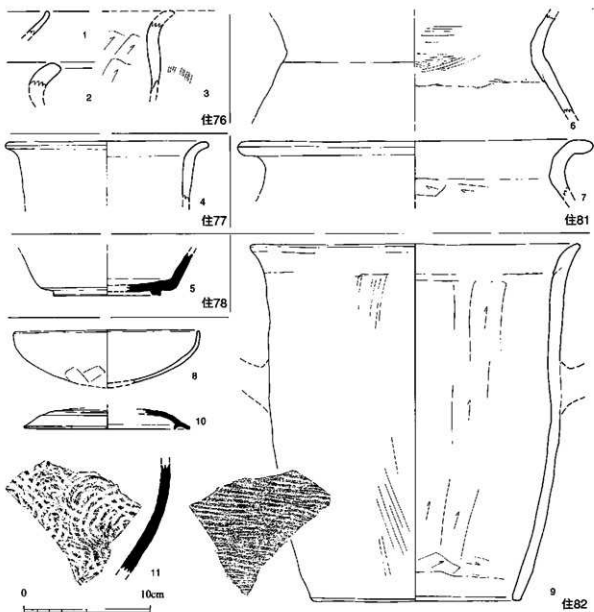
北壁中央付近に位置するカマドで、壁から30cm程突出する。掘り方は半円形に近い。袖は右袖・左袖ともに13cmしか検出できていない。火床面は床面から7cm程掘り窪めており、北東側がやや深くなる。支脚の位置は不明だが、奥壁から35cm内側のカマド中軸線上で、径20cmを測る円形の赤変面を検出している。遺物は非常に少なく、図示できたのは5の1点のみである。

出土土器 (第109図)

須恵器 (5) 5は高台付の坏で、体部は直線的に立ち上がる。高台は低平で断面台形に近く、屈曲部のやや内側に付けられる。



第108図 78号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

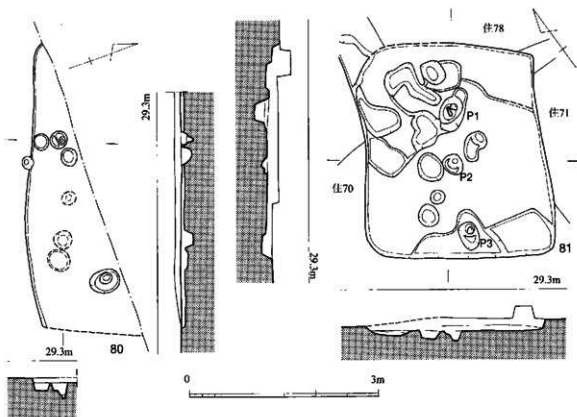


80号竪穴住居跡 (図版24、第110図)

調査区中央北東側で検出した竪穴住居跡である。大半が調査区外へと続いており、南壁を検出できたに過ぎない。また東側は削平を受け、消失する。検出した南壁の長さは4.5m、深さは最も深い所で10cmを測る。床面上でいくつかピットを検出したが、確実に主柱穴と判断できたものはなかった。出土遺物は数点に過ぎず、図示できるものは無い。

81号竪穴住居跡 (第110図)

調査区中央北東側で検出した。70・71・76号竪穴住居跡に切られており、大部分をこれらの床面下層で検出した。したがって、プランや柱穴など不明な点が多い。平面形は南北にやや長い不整隅丸方形で、南東壁3.1m、南西壁2.9m、深さ10cmを測る。床面の検出を試みたが、全く見当がつかなかったため、地山までの検出を行った。掘り方はいくつかのピットや不整形の掘りこみを形成し



第110図 80・81号竪穴住居跡実測図 (1/60)

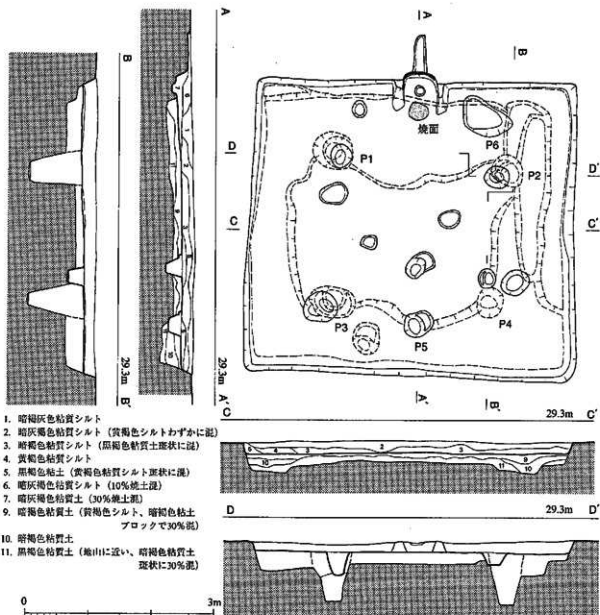
ており、底面はかなり凸凹になる。主柱穴も確実なものはないが、P1～P3を可能性のあるものと考えた。径は25cm、深さは10～20cmを測る。またP1・P3は根締め石を検出した。カマドは完全に削平されていた様で、検出できなかった。

出土土器 (第109図)

土師器 (6・7) 6・7は甕である。6は肩部が張らないもので、古墳時代中期のものである。恐らく70号竪穴住居跡からの混入品であろう。7は口縁部が強く外反する甕で、奈良期のものである。

82号竪穴住居跡 (図版24、第111図)

調査区中央部やや北側にあり、31号竪穴住居跡の7m程北に位置している。主軸をほぼ南北に向ける方形の竪穴住居で、北壁にカマドを設置している。北壁5.06m、東壁4.75m、床面積24.47㎡を測り、やや東西方向に長い。残りの良いところで床面からの壁の高さ15cm余りである。床面及び貼り床下層から検出された大小のピットの中で、P1～4が主柱穴と思われる。いずれも貼り床を除去した段階ではっきりと認識できたものであるが、床面からの深さ80cmを超え、直径50cm内外の非常にしっかりした柱穴掘り方である。掘り方埋土は地山である黄褐色粘質土、黒褐色粘質土がブロックで混じったものであった。カマド右脇にあるP6は長軸85cm、短軸50cmの略楕円形を呈し、深さは20cm余りを測る。埋土には恐らくカマドからかき出したと思われる焼土、炭などが含まれていた。貼り床の掘り方は壁沿いが1m程の幅で深く掘られており、中央が若干高く島状に掘り残されている。この島状に掘り残された範囲はほぼ主柱穴の内側にあたる。なお、図面に示した掘り方は土層図で言えば11層を除去した段階で作成したものであるが、同層は地山とよく似るのでその上面

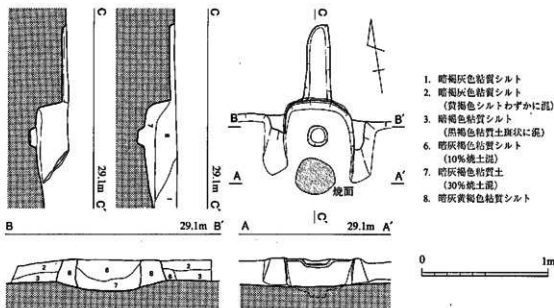


1. 暗褐色粘質シルト
2. 暗灰褐色粘質シルト (黄褐色シルトわずかに混)
3. 暗褐色粘質シルト (黒褐色粘質土層状に混)
4. 黄褐色粘質シルト
5. 黒褐色粘土 (黄褐色粘質シルト層状に混)
6. 暗灰褐色粘質シルト (10%焼土混)
7. 暗灰褐色粘質土 (30%焼土混)
8. 暗褐色粘質土 (黄褐色シルト、暗褐色粘土ブロックで30%混)
9. 暗褐色粘質土
10. 暗褐色粘質土
11. 黒褐色粘質土 (輪山に混、暗褐色粘質土層状に30%混)

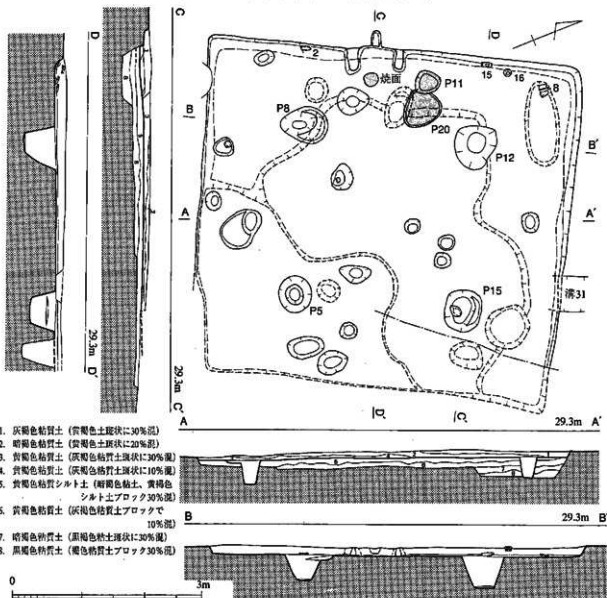
第111図 82号竪穴住居跡実測図 (1/60)

が掘り方下面となる可能性が高い。そうすると貼り床は薄いところで5cm程、壁沿いの厚いところで40cmに達する。

カマド (第112図) 北壁のほぼ中央に位置し、壁からわずかに15cm弱突出する。奥壁から20cm程離れたところに径15cmの小穴があり、内部に焼土が入っていたことから支脚の抜取穴と考えられる。そこから30cm程離れたところを中心に径30cm程の範囲の床面が顕著に硬化しており、燃焼部と分かる。暗灰黄褐色粘質土で構築された袖は北壁に接して造られており、長さ50cm弱である。支脚抜取穴の部分で測れば両袖の間隔は50cmである。袖間には下部、すなわち7層にかなりの焼土を含んでいた。煙道は床から高さ20cmのところから始まり、60cm程伸びている。最大幅21cmを測る。奥壁から袖にかけて上部がわずかに熟変していた。カマド内からは6・7層のほぼ境界にあたる深さで第109図9の瓶破片がまとめて出土した。



第112図 82号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第113図 83号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (図版62、第109図)

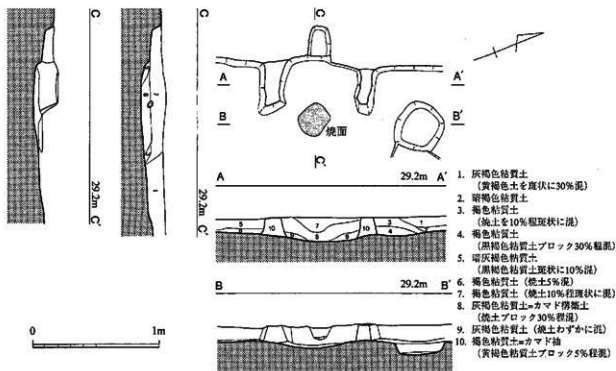
土師器 (8・9) 8は住居の北壁沿いから出土した土師器坏で口径14.7cmを測る。砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用い器壁が薄い。丸底から短く直立する口縁部に至る。9は4半周が残る大型の版であるが、把手部分が失われている。口縁部はわずかに外反し、胴部は筒状で裾径は比較的大きい。横ナデを施す口縁部と裾部を除くならば、他は外面タテハケ、内面粗い縦方向のヘラケズリである。口径26.0cm、裾径16.8cm、器高28.1cmを測り、外面の二次加熱が顕著である。

須恵器 (10・11) 10はかえりをもつ坏蓋で、口径13.2cmを測る。かえりはわずかに口縁端部より突出しており、7世紀後半を中心とするものである。10は外面平行タタキ、内面同心円当てで具痕が残る亮胴部片である。

83号竪穴住居跡 (図版25、第113図)

調査区中央部のやや北より、先述した82号竪穴住居の南東8m程のところに位置する。おおよそ東西方向に主軸をとり、西壁にカマドを設置する。東壁沿いに試掘トレンチが入るために壁が全く失われ、付近の床面も少し削られてしまったが、幸い下部の貼り床掘り方までは至っておらずおおよその平面形は確認できる。住居の平面形はやや歪な方形で、西壁5.9m、南壁5.3m、北壁5.5mを測り、床面積31.35㎡程に復元される。遺存状況のよい西壁は高さ15cm程である。床面で見つかった多数のピットのうちP5・8・12・15が主柱穴であろう。直径50~70cm程の円形で、深さ40~50cm程のしっかりした掘り方である。P15は上面近くで河原石を検出した。カマドの右前面に位置するP11・20はカマドからかき出した焼土などを埋土に含んでいた。貼り床掘り方は北壁から南壁にかけて幅1m前後を床面から40cm前後の深さまで掘るが、他の部分は浅く床面から15cmほどである。貼り床の最上層は黄褐色粘質土を主体としている。

カマド (図版25、第114図) 西壁の中央よりやや南側に設置されており、壁からほとんど突出し

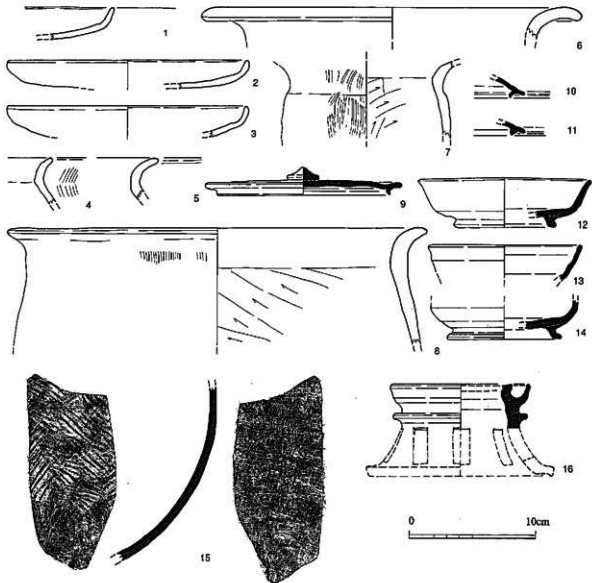


第114図 83号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

ない。主軸上の奥壁から45cm程離れたところを中心とした直径25cm程の円形の範囲で床面が熱変しており、ここが燃焼部と考えられる。この燃焼部と奥壁の間には支脚抜取穴が認められないので、恐らく土器転用支脚であり、住居廃絶時に支脚も取り除いたのではなからう。袖は覆土とほとんど土色の異ならない褐色粘質土を用いていた。そのため検出に頭を悩ませたが、カマド内外の焼土、炭泥じり土を取り除きながら発掘を行った。発掘の結果では左袖長40cm、右袖長35cmとなり、袖の間隔は先端付近で55cmである。袖の間にはかなり多くの焼土を含む埋土が堆積していた。煙道は床面から5cm程の高さから始まり、奥壁から20cm余りで急激に立ち上がる。最大幅18cmを測る。カマド内から第202図65の砥石が出土している。

出土土器 (図版62、第115図)

土師器 (1~8) 1~3は坏で浅く、斜め上方に屈曲して立ち上がり、2は口径21.0cm、19.0cmに復元される。いずれもわずかに砂粒を含むだけの精良な胎土である。4~8はとりあえず甕口縁部片として一括した。いずれも口縁が強く屈曲して外反するが、6は口縁部上面が水平に近く外反し、あるいは鉢などになるかも知れない。4・7・8は外面の粗いハケメ、胴部内面のヘラケズリが観



第115図 83号壺穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

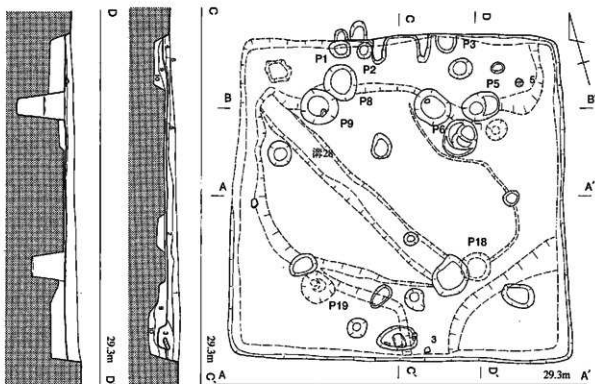
察できる。

須恵器(9~16) 9は貼り床下層から出土した坏蓋であり、焼ひずみのためやや低平で口縁が上方に反った歪な器形になっている。天井部外面には上部がやや大きく突出した低い宝珠握みがつく。かえり径13.6cm、口径15.4cm、器高2.2cmを測る。12~14は坏身で、12は口縁部が直線的に開くが、13・14はやや丸みをもって開く。12、14とも胴部の屈曲よりやや内側に入ったところに踏ん張り気味の高台を取り付ける。12は口径17.6cm、高台径8.0cm、器高4.0cmを測り、13は口径12.1cm、14は高台径9.0cmに復元される。15は内面に平行文当て具痕が残り、外面はタタキをほとんどナデにより消している。16は円面視で、住居の西壁沿い、西北隅近くの覆土上面から出土した。脚部、陸部はほとんど失われているが、海部は全周しており径、透かし個数が確認できる。陸部径8.0cm、海部形10.8cmを測り、透かしは上端幅1.3cm前後の長方形で9ヶ所あったことが確認できる。陸部と海外縁上端部はほぼ高さか揃い、海部が幅1.3cm、深さ1.1cmの溝状となる。海部の下には高さ0.8cm程の高い突帯がめぐっている。全体を丁寧な横ナデで仕上げている。胎土は精製されているがわずかに砂粒が混入し、内面淡赤褐色、外面灰色を呈する。このような須恵器の様相から見るならば、住居の時期は7世紀第4四半期~8世紀初頭と考えられる。

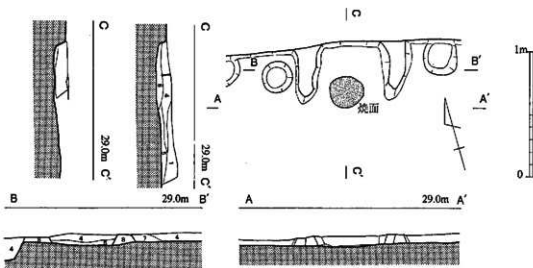
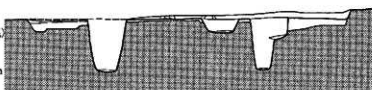
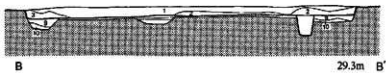
84号竪穴住居跡(図版26、第116図)

調査区の中央やや北より、82号住居跡にすぐ西に位置し、28号溝を切っている。北西隅が削平されて壁、床面を失っているが、下層で貼り床掘り方を検出したので平面形などの概要を把握することができた。平面形はほぼ方形を呈し、北壁にカマドを付設する。北壁5.0m、南壁5.4m、東壁5.15m、西壁5.05m、床面積27.02㎡を測り、残りのよい南壁沿いでは壁の高さ20cm程遺存している。住居床面では多数のピットを検出したがP5・9・18・19が主柱穴であろう。掘り方は直径45~60cmの円形を呈し、床面からの深さは50~80cmである。主柱間は東西2.5m、南北2.8m、2.6mを測る。カマドの周辺にあるP1~3・6・8は埋土にカマドからかき出したと思われる焼土を含む。またカマド左の竪穴外、P1・2のすぐ北側のピットにも焼土が多く含まれていた。北側には切り合ったり、隣接したりする住居はないので本住居に伴うものと考えられない。このピットが本住居に伴うものとするれば、竪穴外にも生活空間が広がっていたことになる。貼り床掘り方は壁沿いが1m前後の幅で溝状に深く、中央部が高く掘り残されている。深いところで床面から30cm、浅いところでは床面から3cm内外であるので住居中央部では明確な貼り床はないと言える。住居の下層では28号溝の底近くが残存していた。

カマド(図版26、第116図) 住居の北壁ほぼ中央に設置されたカマドで遺存は良くない。カマドの中軸より35cm程のところを中心に径25cm程の円形の範囲に床面が熱変していた。この熱変部と奥壁との間には石製支脚、支脚採取穴は認められない。袖は黄褐色粘質シルト土と暗褐色粘土を混ぜた土で構築している。現状では両袖長45cm前後を図るが、床面熱変部の位置から考えて本来の形状をとどめているものと思われる。袖の間隔は先端近くで50cm余りであり、袖間の埋土には少量の焼土を含んでいた。奥壁はわずか6cm程の高さしか遺存しておらず、そのために本来存在していたはずの煙道も失われたと考えられる。また、上述したようにカマドの周辺には竪穴内に5基、左側竪穴外に2基の焼土を埋土を含むピットがあった。



1. 暗褐色粘質シルト (黄褐色土斑状に30%混)
2. 暗褐色粘質土 (黒褐色粘質土斑状に30%混)
3. 褐色粘質土
4. 暗褐色灰色粘質土 (焼土20%程度)
5. 黄褐色粘質土 (焼土混)
6. 暗褐色粘質土 (焼土20%程度)
7. 黄褐色粘質シルト土
8. 黄褐色粘質シルト土+暗褐色粘質土
9. 黄褐色粘質シルト土 (暗褐色粘質土斑状に混)
10. 暗褐色粘質シルト土 (黄褐色シルト土斑状に混)



第116図 84号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

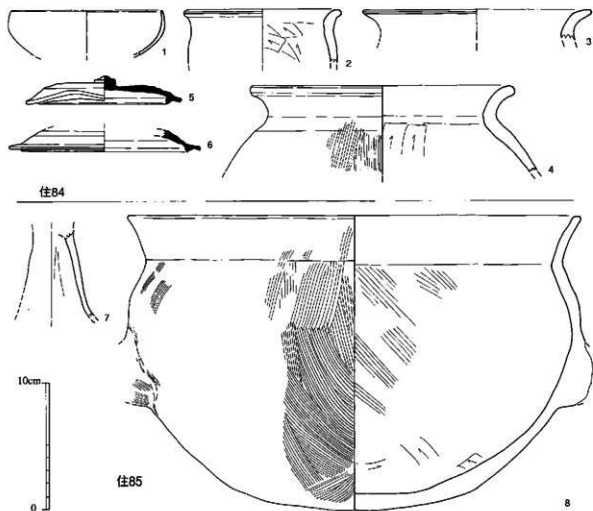
25cm程のピットがある。埋土は本住居跡の下部埋土と同様に褐色粘質土であった。埋土中より作業台的な平たい河原石が出土している。

出土土器 (図版63、第117図)

土師器 (1～4) 1は坏である。砂粒をほとんど含まない精良な胎土を用い、器壁は薄い。口縁部は直に立ち上がるが、82・83号住居跡川土品に比べ、深い器形でありやや古手の感がある。2～4は甕である。2は口径12.4cmの小型のもので口縁部は短く外反し、頸部はあまりくびれない。内面は粗くヘラケズリし、内面の調整は不明である。外面が二次加熱を受け、内面にはコケが付着している。3・4はそれぞれ口径18.0cm、20.8cmを測る大型品で、いずれも口縁部が強く屈曲して外反する。4は胴部外面をタテハケ、内面を縦方向のヘラケズリで仕上げている。

須恵器 (5・6) いずれもかえりの付く坏蓋で5は口径12.8cm、かえり径10.1cm、器高2.3cm、6は口径15.0cm、かえり径13.0cmを測る。5は小さくやや高い宝珠撮みを持ち、5・6ともかえりは厚く明瞭に口縁端部より突出する。5は北東部隣近くのほぼ床面直上から出土した。いずれも7世紀第4四半期頃に編年できるが、このような形態は82・83号住居跡出土品と比べてわずかに先行すると思われる。

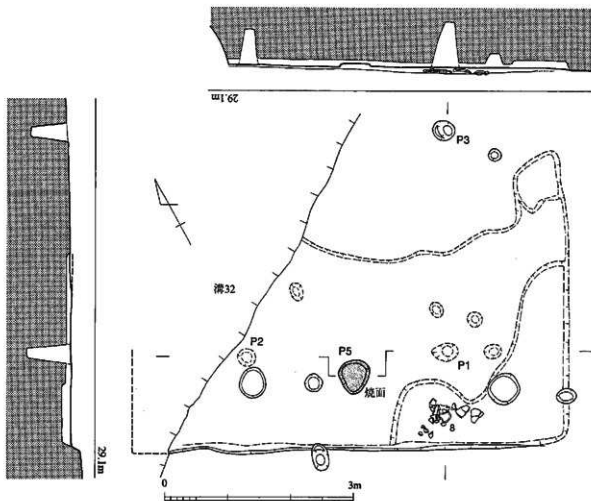
これらの土器の他、第207図35の鉄製品が出土している。



第117図 84・85号壺穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

85号竪穴住居跡 (図版26、第118図)

調査区の中央やや西部、28号竪穴住居跡の北7m程の所に位置し、北東-南西に主軸をとる住居である。北側を32号溝に切られている。また北側が削平されるために南壁と南半分の貼り床掘り方しか遺存していない。埋土は暗褐色粘質シルト土であった。住居の南壁は現存長6.4mを測るが、南西隅が32号溝に切られるために本来の長さは不明である。この南壁の中間部分から12m程離れたところに深さ5cm、直径50cm程の略円形の焼土の詰まった落ち込み(P5)がある。これは炉跡の可能性もあるが、壁に近づきすぎている点で難がある。むしろ南壁にカマドが設置されたことを想定し、その焼土をかき出したかあるいは燃焼部そのものであったと考えたほうがよいと思われる。P5の南東1.5m程のところの床面から土師器把手付き鍋(第117図8)が出土しており、これもカマド脇に置かれたものとして納得がゆく。したがって、本住居では上部構造の削平されたカマドが南壁沿いにあったと考えておきたい。本遺跡のカマドは北壁、西壁に設置されるものが多いので、南壁沿いのカマドは異例であるが、後述する87号竪穴住居跡では南壁沿いのカマドの存在が確定である。両住居の位置も比較的近い。主柱穴はP5より南東、北西にそれぞれ1.5m、1.7m離れたところに位置するP1とP2、そしてP1より東壁に平行して北東に3.5m離れた所に位置するP3と考えられる。いずれも直径30cm前後の小さな円形の掘り方であるが、深さは60cmを超えるもので、主柱穴としては十分な大きさである。これら主柱穴とP5を基準に対称的に住居を復元するならば



第118図 85号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1辺6.7m前後の比較的大型の方形住居となる。このような平面形からしてもP5の位置は余りにも壁に接近しすぎていて、カマドの存在の蓋然性はさらに高くなる。

出土土器（図版85、第117図）

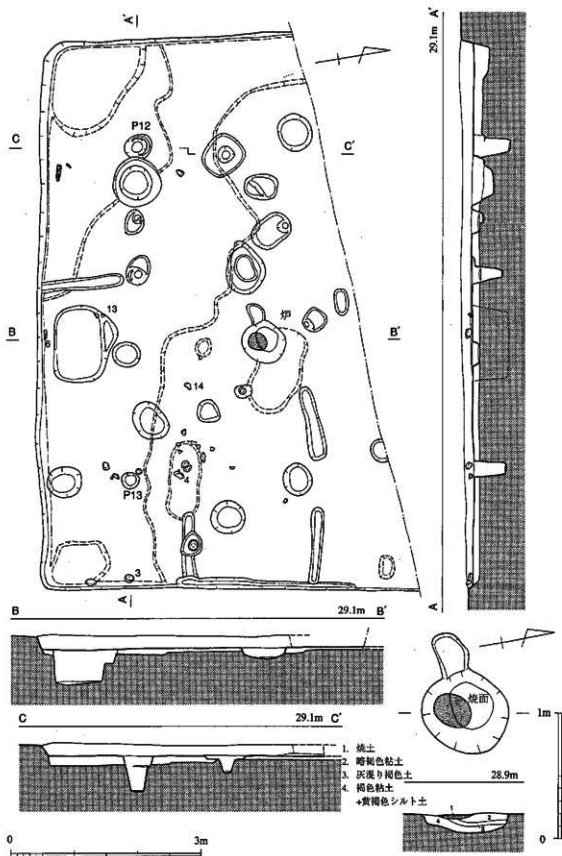
土師器（7・8）7は高坏脚柱部の破片で内外とも摩滅のため調整は不明である。形態、遺存状況からみて脚部上端に粘土を充填して坏部と接合した5世紀中葉以前の高坏と考えられる。8は住居の南壁沿い床面から出土した把手付きの大型鍋である。口径35.6cm、器高23.3cmを測る。口縁部は直線的に外反し、端部は面をなす。把手は基部のみ遺存していて胴部最大径の付近に取り付けられている。底部は丸底である。外面をタテハケ、内面上部を粗い斜めハケ、底部近くをヘラケズリで仕上げる。本住居はカマドを設置していたと考えられ、把手付き大型鍋という器種自体も恐らくカマドと同時に出現したものであろう。8は口縁部の形態など古い様相を残しており、カマドの出現時期のものと考えられる。これらの土器以外に第202図54の砥石が覆土から出土している。

86号竪穴住居跡（図版27、第119図）

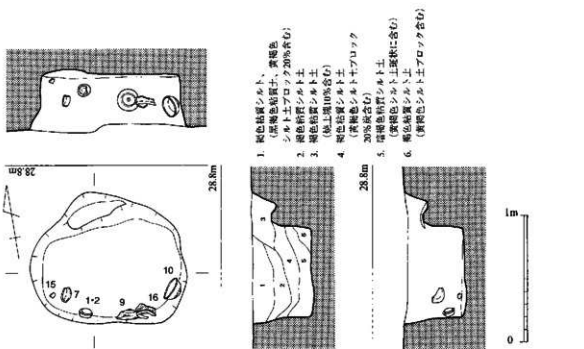
調査区の中央部やや西寄り北壁沿い、85号竪穴住居跡の北西12mの所に位置し、ほぼ南北に主軸を向ける。調査区壁にかかるため南半分を検出したにとどまるが、南壁長8.7mを測る特大型の住居である。南壁中央やや東寄りに大型の壁際土坑があり、同じ軸線上、南壁から3.5m程離れたところに炉跡がある。床面および貼り床下層では多数のピットを検出したが、他のピットよりも深く、南壁に平行して位置するP12・13が支柱穴であろう。いずれも掘り方は直径30～40cmの円形でさほど大きくないが、深さ50cmを超えるしっかりしたものである。この炉跡を中心に対称的に南壁を折り返すと南北7.0m程になり、やや東西に長い住居の平面形が考えられる。東壁の中央部には長さ2.8mにわたって幅10cm余りの周壁溝がある。また壁際土坑の西側には長さ1.3mに及んで幅20cm余りの間仕切り溝がある。壁際土坑の東側にあると釣り合いがとれるが検出していない。また南壁から2.3m、4.3m離れたところに東壁に直行する長さ1m、幅20cm弱の2条の間仕切り溝がある。これらの溝は調度、炉跡を通る東西方向の中軸線を挟むような配置をなしている。北側の溝はさらに内側に続く可能性が高く、住居に伴うピットに切られている。埋土は上部が暗褐色シルト土、南側下部に黒褐色粘質土があった。南壁際西よりの床面から炭化材が出土している。貼り床掘り方は南壁沿いが深く、中央部は高い。貼り床は黄褐色シルト土のブロックをかなり含んだ暗褐色粘質土が主体であった。

炉跡（第119図）住居床面のほぼ中央に位置し、直径70cmの円形の掘り方に東に長さ30cm程の半楕円形のくぼみが接続した掘り方をなす。深さ20cm余りである。南寄りの上面に顕著に焼けた焼土面が3～4cm程度の厚さで形成されている。この焼土の下部には暗褐色粘土を挟んで炭混じりの褐色土が検出された。恐らく上面の焼土は使用の最終段階のもので、それ以前に炉を何度も掘り返す過程で炭混じりの土層が堆積したものである。

壁際土坑（第120図）住居の南壁沿い、壁の中央よりわずかに東寄りに位置する。この土坑の存在は床面を検出した段階では気が付かず、貼り床掘り方を下げていく途中で明確になった。土坑は東西方向にわずかに長い略楕円形を呈し、長軸125cm、短軸115cm、深さ47cmを測る。床面がほぼ平らで壁は直に近い角度で立ち上がる。住居内側方向、床面から30cm程の高さのところ幅45cm、奥



第119図 86号壑穴住居跡・炉跡実測図 (1/60・1/30)



第120図 86号竪穴住居跡壁際土坑実測図 (1/30)

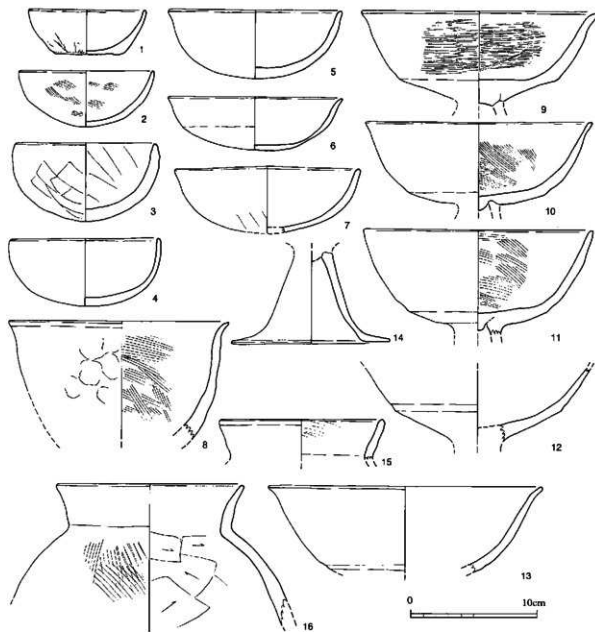
厨中、南壁沿いからまとまって土器 (第121図1・2・7・9・10・15・16) が出土した。

出土土器 (図版63、第121図)

土器 (1~13) 1~7は土師器椀である。法量にはややばらつきがあり口径9.2~14.6cm、器高3.5~6.2cmを測る。平底をなす1以外は丸底で、口縁は底部から立ち上がって断面の丸い端部に至る。4~6は内外ともナデで仕上げられるが、1は底部にヘラ状工具痕、2は内外にハケメ、3は外面ケズリと内面の強いナデ、7は外面下半のヘラナデが観察される。8は恐らく丸底と思われるやや深めの鉢で、外面は指によるナデ、内面には粗いハケが観察される。口径17.5cmを測るが歪みが大きい。9~13は高坏坏部、14は高坏脚部の破片である。坏部はいずれも口縁が内湾しながら立ち上がるもので、坏深も大きい。口径17.8~21.0cmである。9~11は脚との接合部まで残存しており、いずれも脚上端に粘土を充填して坏部と接合したことがわかる。9はこの型式の高坏には珍しく、内外とも横方向に丁寧なミガキを施している。10・11の内面は斜め方向のハケメが観察されるが、他は調整不明である。14は高坏の脚部で裾径12.5cmを測る。脚柱下部が広がり、裾部との境界がやや不明瞭になる。15・16は甕でそれぞれ口径13.0cm、14.7cmを測る。15は口縁部が直線的に開き、内面にやや粗いハケメを施す。16は口縁がやや屈曲して外反するもので、胴部外面に粗いハケメ、内面に粗いケズリを施す。外面は煤が付着するとともに二次加熱が顕著である。本住居は炉跡をもち恐らくカマドを付設しないと思われるが、出土土器は古墳時代中期中葉前後で他の出現期のカマド付き住居出土品と大差はない。

87号竪穴住居跡 (図版28、第122図)

町道より西側の調査区西部の東北隅、86号竪穴住居跡の23m程西に位置し、ほぼ南北に主軸をおく。町道や北側の畑地にかかるため南壁の中央から南西隅にかけて北壁の一部を検出したにとどまる。南北は3.5mを測る。南壁沿いにカマドを設置している点で珍しい住居である。このカマドが南壁中心にあると仮定して住居平面形を復元するならば図に破線で示したように東西5.2mのかなり長方形の平面形になる。壁は南壁35cm、北壁45cmの高さで残っている。やや隅に近すぎるが、南西

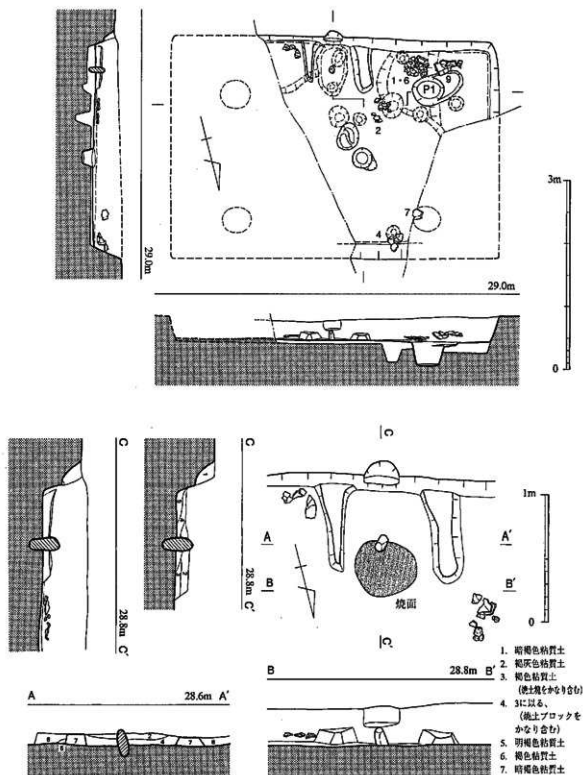


第121図 86号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

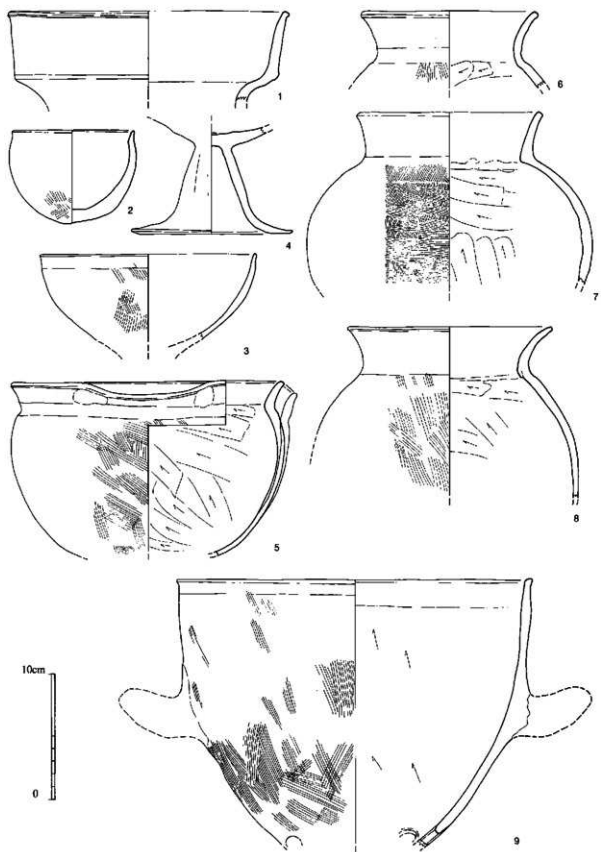
にあるP1が支柱穴と思われる。平面は径50cm程の略円形を呈し、深さ40cmを測る掘り方である。住居の埋土は上層が黒褐色粘質シルト土、下層が褐色粘質シルト土である。貼り床掘り方は中央から北壁にかけて高くなり、南西隅、カマド東側、カマドの下部が深くなっている。厚いところでは15cm、薄いところでは5cm程の黄褐色粘質土混じりの暗褐色粘質土を敷いて貼り床としている。カマド付近と北壁沿いの住居床面よりやや浮いたレベルより土器がまとめて出土した。

カマド (第122図) この住居の発掘当初は南壁にカマドが付設する可能性を全く考慮していなかった。カマドの存在に気が付いたのは、15cm程覆土、カマド上部と思われる焼土混じりの土を下げて支脚石が頭をのぞかせた後のことである。そのため袖の高さ10cmほどしか残っていない。奥壁から40cm程離れた中軸線上に径10cm、高さ25cm程の棒状河原石を立てた支脚がある。支脚の前面は直径50cm程の範囲で円形に床面が熟変しており、その中央部は顕著に硬化していた。袖は暗褐色粘質

土を用いて構築しており、両袖とも壁から70cm余りの長さ残存している。燃烧部の位置を考えるとほぼ本来の長さが残っていると思われる。袖の間隔は先端近くで70cmを測る。袖間には焼土塊をかなり含んだ褐色粘質土が堆積していた。奥壁主軸上、床から高さ15cm程の所に幅30cm弱、奥行き20cmの段状の煙道を検出した。短く斜め方向に急激に立ち上がっている。



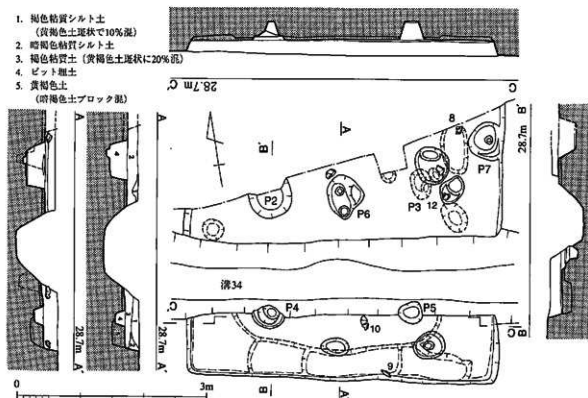
第122図 87号堅穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第123图 87号整穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版63、第123図)

土師器 (1~9) 1は口径22.0cmを測る二重口縁壺である。一次口縁外面の屈曲部は明確な段を形成せず、かすかな稜が立つのみである。口縁は直立にかなり近く、端部をわずかに外につまみ出している。2は小型の鉢で口径9.7cm、器高7.4cmを測る。胴部は丸く、口縁部は短く外反している。底部に粗いハケメが確認される。3は高坏坏部口縁が鉢口縁部か判断に迷う資料で、口径17.2cmに復元される。器形は深く口縁部はかなり薄く仕上げている。内面はナデ、外面はタテハケ。4は高坏の脚部から坏底部にかけての破片である。脚径12.7cmを測る。脚部と坏部の接合部に粘土を充填したかどうかは不明である。脚柱部は下部が広がり、裾部近くで急激に外反する。摩滅して調整不明な部分が多いが、内は接地面近くまでヘラケズリを施すものと考えられる。5は片口をなす鉢で復元口径21.4cm、片口幅10cm程である。丸底で短い口縁部がつく。胴部内面は粗い斜めハケ、外面は粗いヘラケズリを施す。片口部は両端を指で強くおさえて作り出し、口縁部のなす面より外、下にそれぞれ1cmほど突出している。6~8は中大型の甕である。口径はそれぞれ14.0cm、14.8cm、16.0cmを測る。口縁部は器壁が薄く、わずかに屈曲しながら外反する。胴部外面は6・8が粗いタテハケのまま仕上げるのに対して、7はタテハケの後ヨコハケを施している。胴部内面はいずれもヘラケズリである。9は大型の把手付き甕である。1/2周程の破片で把手部分を欠損している。口径は28.0cm。直口で胴部と口縁部との境界が不明瞭になっており、口縁端部上面が面をなす。胴部外面はタテハケ、内面はヘラケズリで仕立てている。底部は丸底になるよう復元すると楕円形の穿孔が円周上に5ヶ所配置されていたと推測される。高坏、甕、壺ともカマド出現期の古墳時代中期中葉頃に編年される。これらの土器以外に第202図53の磁石が覆土から出土している。



第124図 88号墓穴住居跡実測図 (1/60)

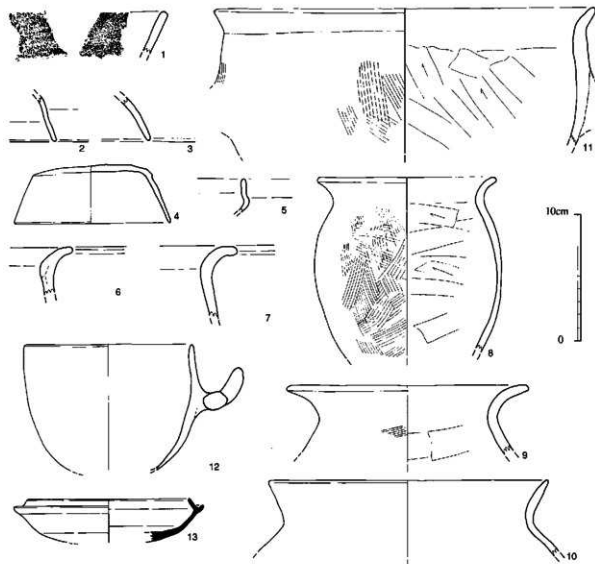
88号竪穴住居跡 (図版28、第124図)

調査区西部の北壁にかかり、南側を34号溝が横断して切っている。87号住居跡の40m程東に位置し、ほぼ南北に主軸をおく。南壁は4.9mを測り、南側の壁の高さ20cm余りである。主柱穴はP2～5が考えられる。掘り方は平面円形、楕円形を呈し不ぞろいで、直径は40～70cm、床面からの深さ20～30cmである。P6の北東壁際には焼土が分布していたので、北側にカマドを付設する可能性が高い。埋土は褐色～暗褐色粘質土である。

出土土器 (図版64、第125図)

縄文土器 (1) 1は縄文時代後晩期の粗製深鉢口縁部である。外傾し立ち上がる口縁部で、端部は面をなす。無文で内外ともナデで仕上げる。本住居の東側に広がる縄文土器包含層に由来するものであろう。

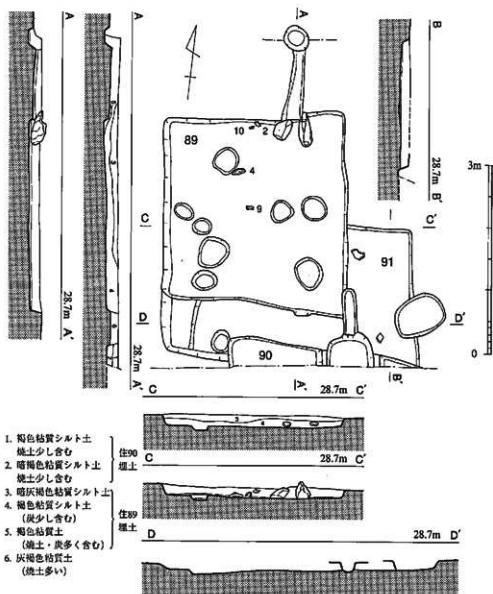
土師器 (2～12) 2～4は坏壺で、4は住居東壁沿いのP7より出土した。いずれも内外とも摩滅で調整は不明である。4は口径12.2cm、器高4.6cmを測る。5は坏身で蓋受け部がわずかに突出し、短く内傾して直立する口縁部に至る。6～10は甕である。いずれも口縁が強く屈曲して外反し、



第125図 88号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

6・7は頸部付近の器壁がかなり厚くなる。8はやや小型で口径14.0cm前後に復元される。9・10は大型でそれぞれ口径19.0cm、22.0cm前後。いずれも摩滅のため調整不明の部分があるが、8・9は外面を粗いハケメ、内面をヘラケズリで仕上げている。11は口径30.0cm前後に復元される大型の鍋で、把手を取り付けた痕跡が確認できる。口縁部は短く外反し、胴部はやや膨らみをもつ。外面粗いハケメ、内面ヘラケズリで仕上げる。12は把手付鉢である。直口をなす口縁から5cm程下がった場所に棒状の把手が1ヶ所つく。把手は断面楕円形で胴部との接合部に比較的近いところから強く屈曲して上方を向く。先端は丸くおさめている。内外とも摩滅のため調整は不明である。口径は13.2cmを測る。

須恵器(13) 受部はやや強く突出するが、立ち上がりは短い坏身である。ヘラケズリの範囲は底部の中程までにとどまっている。口径12.7cm、受部径15.1cmを測る。6世紀末頃に位置づけることができ、土師器もこれに矛盾しない。



89号竪穴住居跡（図版28、第126図）

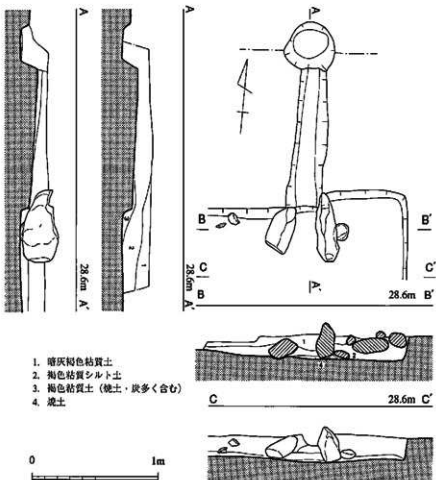
調査区西部の南壁近くに位置し、主軸をほぼ南北にとる。91号竪穴住居跡を切り、90号竪穴住居跡に切られている。北壁の東寄りにカマドを付設している。北壁2.85m、南壁2.9m、東壁3.25m、西壁2.85mで、壁の高さ15cm程である。黄褐色の明確な貼り床を施すが、厚さは2～3cm程で掘り方は明確でなかったため図示していない。この貼り床を除去すると拳大の礫からなる層が露出した。床面には浅いピットがいくつかあるが、礫層に掘り込まれているためか支柱穴も明確ではない。床面近くから土器（2・4・7・8）が出土している。また上層から第197図5の焼塩土器が出土している。

カマド（図版29、第127図） 住居の北壁に構築されている。支脚の位置、床面の熱辺部分はほとんど見られない。右袖は長さ55cm、高さ25cm、厚さ15cm程、左袖は長さ35cm、高さ15cm、厚さ20cmの大きな石を用いて構築している。カマドの内部上層から暗灰褐色粘質土が堆積していたので、これが上部構造を構成していた可能性が高いが、恐らく下部はほとんどこの石で構築していたものと考えられる。袖の間隔は先端で20cm余りで、床面は凹凸が激しい。なお右袖石の下にはカマド内から焼土が連続して堆積している。カマドを何度も作り直したことによるものであろうか。カマド奥壁の床面より高さ5cmの所から煙道が始まっている。煙道は北側に110cm程の長さで伸び、直径35cmほどのピットに至る。このピットは煙道より深く掘られているが、恐らくここで煙道が立ち上がっていたものと思われる。煙道の基部は幅30cmを測り、袖の間隔よりも広い。カマド内より第

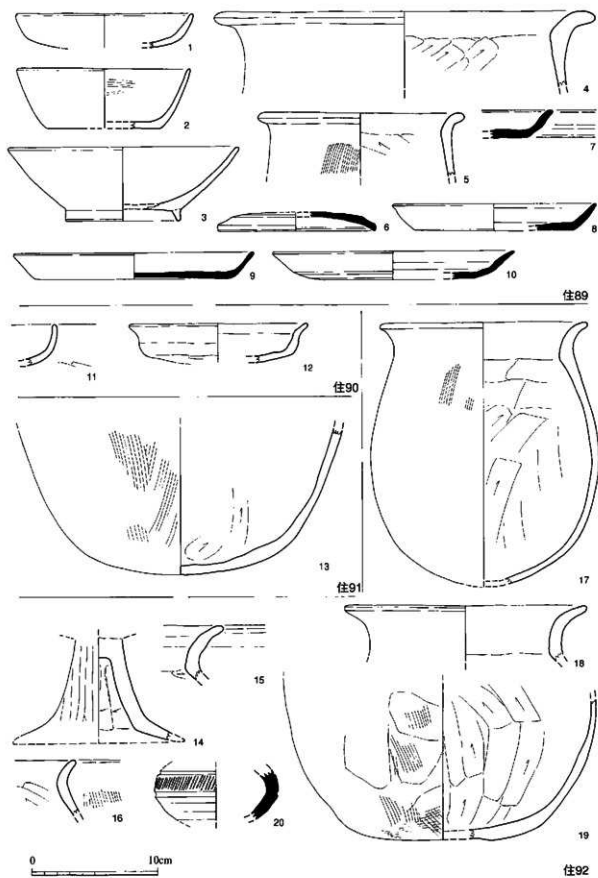
128図の3土師器坏が、煙道先端のピットより同10の須恵器皿が出土した。また、カマドの東外側覆土には礫が集中して堆積していた。

出土土器（図版64、第128図）

土師器（1～5） 1～2は坏である。1が浅くやや丸底をなすのに対して、2は平底で直線的に立ち上がる口縁部をもち、深い器形である。1は口径14.0cm程、2は口径18.4cmを測る。3はカマド内から出土した高台付きの坏で口径17.8cm、器高4.8cm、高台径9.2cmを測る。焼成は良好で灰黄



第127図 89号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第128圖 89~92号聚穴住居跡出土土器実測圖 (1/3)

褐色を早する。口縁はわずかに内湾しながら斜めに立ち上がっている。高台はほぼ直立し、比較的高い。4・5は甕であり、4は大型で口径30.0cm程、5はやや小型で口径16.3cmに復元される。いずれも内面を粗くヘラケズリし、5は外面に縦方向のハケが施される。カマド内から出土した3から考えると8世紀末～9世紀初頭頃に比定できる。

須恵器（6～10） 6は口径12.5cmに復元される須恵器の坏身である。天井部は2/3回回転ヘラケズリを施し、口縁端部が下方に断面三角形に突出する。7～10は須恵器の皿で、器形は浅く平底をなす。7～8は接地面に回転ヘラケズリが限定されるが、10は接地面より広く、器高の1/4程のところまで回転ヘラケズリが及んでいる。8～10の口径はそれぞれ16.1cm、19.0cm、19.0cm、器高は2.0cm、2.0cm、2.2cmである。これらの土器以外に第202図55の砥石が床面直上から、覆土から第207図41の鉄滓が、89・90号竪穴住居跡上層から第207図39の鉄滓が出土した。

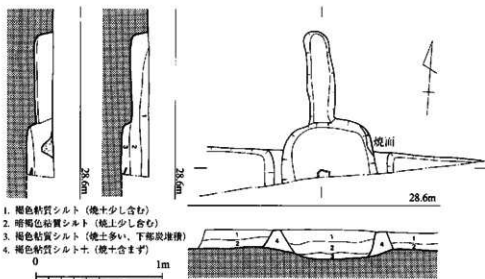
90号竪穴住居跡（図版28、第126頁）

調査区西部の南壁にかり、89・91号竪穴住居跡を切っている。大半が調査区外でわずかに北壁とカマドのみを検出した。壁は15cm程の高さである。カマドが北壁の中心にあると仮定すると東西方向4m程に復元される。床面は黄褐色の貼り床が認められたが、91号竪穴住居跡と同様に薄い。時期を考えるための資料が少ないが、切り合いから考えると89号住居跡より新しく、9世紀初頭頃か。

カマド（第129図） カマドも大半が調査区外になる。そのためか支脚、床面の熱変部は検出されなかった。奥壁は住居北壁から20cm程突出している。褐色粘質土を用いて構築しており、60cm程の間隔である。袖の間は床面近くに多量の焼土が堆積していた。また、奥壁東側の上部にわずかに熱変が認められた。

出土土器（図版64、第128頁）

土師器（11・12） 出土土器が少なく、図示できるのはわずかに2点である。いずれも土師器坏で11は丸底に直立に近い口縁部が付く。12は底部にヘラケズリを施した平底気味のもので、口縁は底部から丸く立ち上がって、口縁下で外反する。



第129図 90号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

91号竪穴住居跡 (図版28、第126図)

89・90号竪穴住居跡に切られ、4壁それぞれの一部しか検出していない。住居の西側は掘り間違えによりテラスをなすが、内が本来の住居壁。東西3.5m、南北2.2m程で壁の高さは15cm余りである。黄褐色の貼り床があったが、89号住居跡と同様にさほど厚いものではなかった。床面のピットは全く確認できず、カマドの有無も不明である。出土遺物が少なく時期は不明である。

出土土器 (図版64、第128図)

土師器 (13) 13は甕の底部片である。内面はヘラケズリ、外面はハケメを施し、煤の付着が顕著。

92号竪穴住居跡 (図版29、第130図)

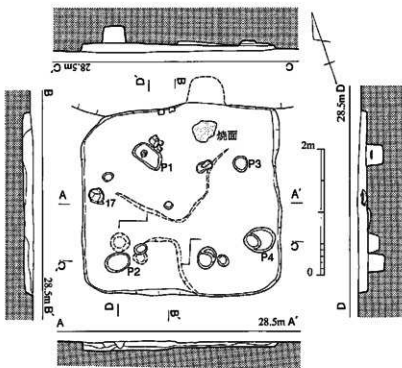
調査区西端で検出した竪穴住居跡で、北側の一部を水路により破壊される。平面形は隅丸正方形で、北壁3.0m、東壁3.0m、深さ15cm、床面積9.03㎡を測る。北壁中央からやや東に寄った所で焼土を検出しており、この位置にカマドを付設したようである。検出時にはP1~P4を主柱穴と考えたが、P3・P4は非常に浅く、主柱穴とはなり得ない。従って、主柱穴と推定できるのはP1・P2のみである。貼り床は全面に行われ、下層では不整形の掘りこみとピットを2個検出した。床面硬化は中央付近で顕著に認められる。遺物は図示した土器の他、第200図33の磨石、第201図49の石製紡錘車が出土した。

出土土器 (図版64、第128図)

土師器 (14~19) 14は高坏の脚部で、柱部内面横ヘラケズリ、外面縦ヘラナデ調整を行う。15~19は甕である。口縁部はどれも緩やかに外反している。17は全体の器形がわかる甕で、胴部はあまり張らず、また胴部を強くヘラケズリするため口縁部の内側に強い稜線ができています。外面は縦ハケメ調整を行う。口径16.2cm、器高21cm前後となるだろう。

19は平底気味の甕底部である。

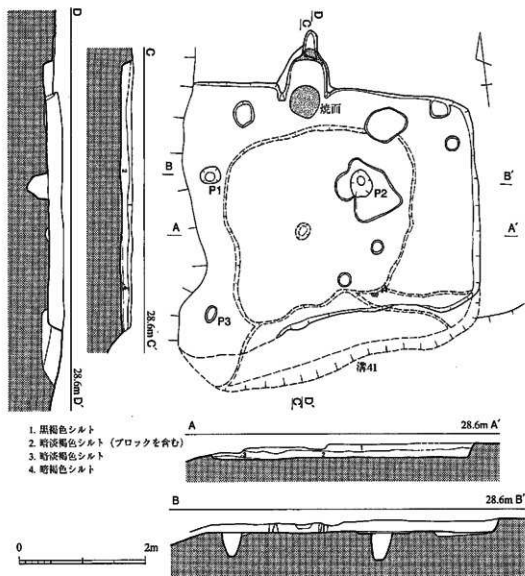
須惠器 (20) 20は甕で、体部中位の沈線で画された範囲に櫛掻斜線文を巡らせる。体部下位はヘラケズリを行う。以上の土器は周辺の住居跡出土土器と同様6世紀末前後に比定できる。



第130図 92号竪穴住居跡実測図 (1/60)

93号竪穴住居跡 (図版29、第131図)

調査区西端で検出した竪穴住居跡である。西側は削平され、また南側は41号溝に切ら



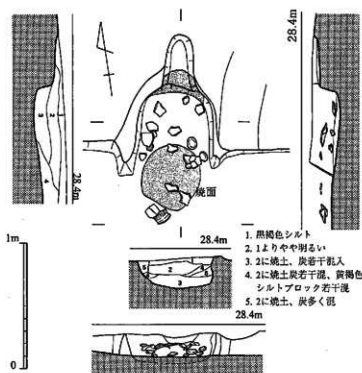
第131図 93号竪穴住居跡実測図 (1/60)

れるが、一辺5m程度の方形プランの住居跡となるだろう。カマドは北壁に設置する。支柱穴はP1～P3を検出しており、径20～40cm、深さ40cmを測る。南東側の支柱穴は41号溝に削平され、遺存していない。床面下層は中央部分を島状に残し、周囲を浅く掘り窪めている。床面硬化は中央付近で顕著に認められた。貼り床下層からは2・4・11の土器が出土している。

カマド (図版30、第132図) 北壁に付設するカマドで、壁から50cm突出しており、更に長さ40cmの煙道が付く。カマド掘り方の壁に沿って、厚さ10～30cmの壁体を積み上げてカマド壁体の構築を行い、さらにカマド袖が短く内側へ伸びる。右袖15cm、左袖25cmを測る。火床面は床面より5cm程掘り窪めている。支脚はなく、また支脚抜き取り穴も検出できなかった。カマド前面で、径50cmの広さで赤変面が認められ、またカマド奥壁および煙道基部でも赤変面を確認した。カマド内覆土は自然堆積であり、覆土中位から3・5～9・12の土器が出土している。

出土土器 (図版64、第133図)

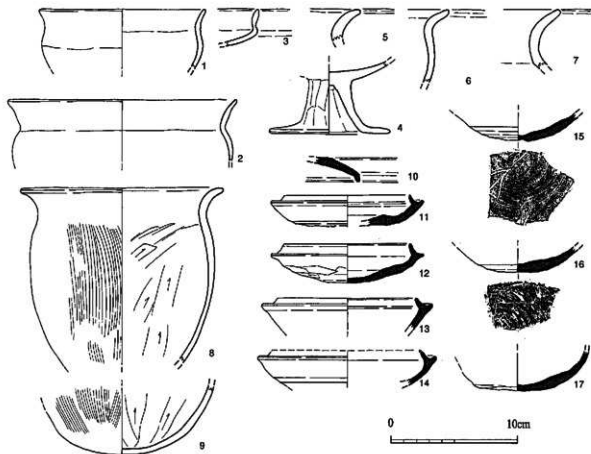
土師器 (1～9) 1は口縁部が外反する鉢である。2は1と同形だがやや大きめの鉢。3は模倣坏であ



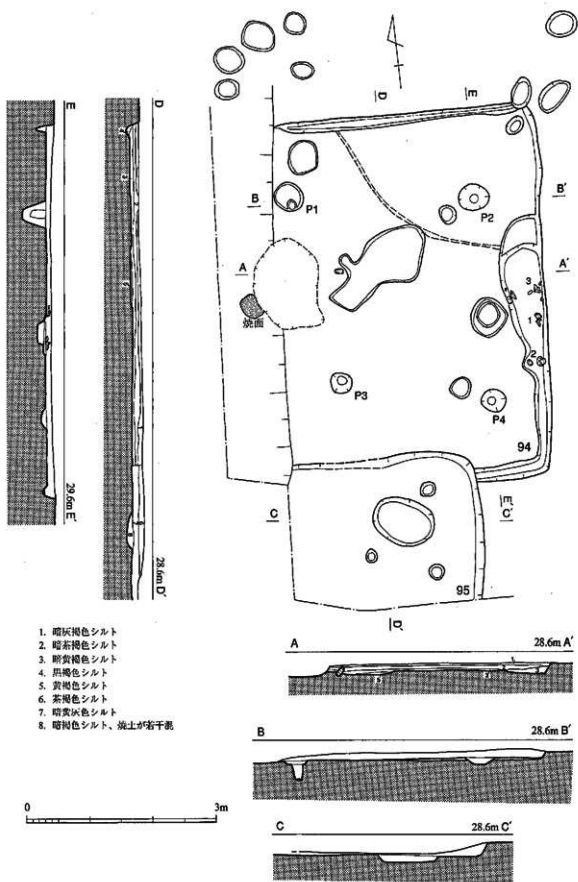
第132図 93号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

る。4は高坏の脚部で、裾部が水平に開き、広く接地する。5-9は土師器甕で、口縁部が緩やかに外反する。胴部は内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケメ調整を行う。

須恵器 (10~17) 10は端部が短く下方に屈曲した8世紀代の坏蓋で、混入品であろう。11~14は立ち上がり短く内傾する坏である。12の外底部は手持ちヘラケズリを行う。15・16の坏は外底面にヘラ記号を記している。17は平底に近い壺の底部で、内外面ナデ調整を行う。これらの遺物は6世紀末頃に比定できるものである。



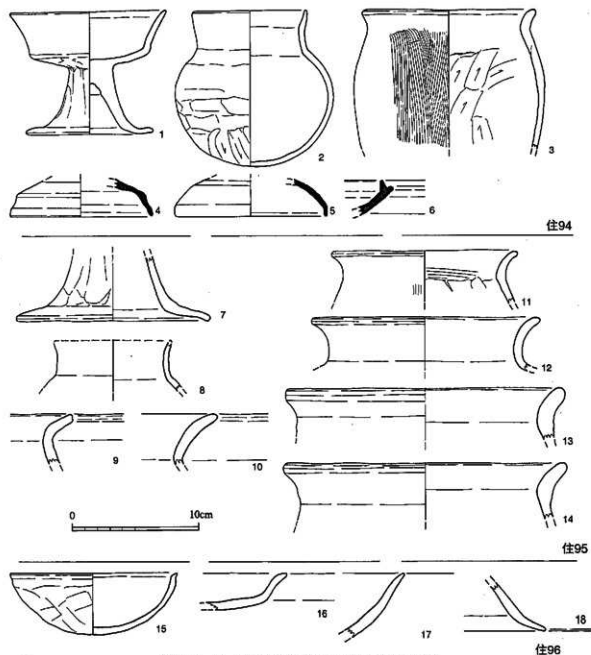
第133図 93号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第134図 94・95号竪穴住居跡実測図 (1/60)

94号竪穴住居跡 (図版30、第134図)

調査区南西端で検出した竪穴住居跡で、95号住居と重複し、これより古い。西側は削平を受けており、西壁は全く遺存していない。南壁は6.0mを測るが、焼土の位置からすると東西壁はこれより短くなることが予想され、南北に若干長い方形プランの住居跡が想定できる。西端で径30cmほどの大きさで広がる焼土を検出しており、西壁中央付近にカマドを付設していたと考えられる。壁溝は東壁の一部を除き、ほぼ全周する。東壁中央は長軸250cm、短軸60cmの大きさで土坑状に広がるが、深さは5cm程度に過ぎない浅いものである。この中からは1~3が出土している。主柱穴はP1~P4を想定したが、このうちP3・P4については深さ10cm程度と浅く、若干疑問が残る。P1・P2は径40cm、深さ40cmを測り、またP1には径10cmの柱痕が残る。貼り床は全面に行われており、床面下層は北東隅を浅く掘り込んでいる。



第135図 94~96号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (図版64、第135図)

土師器 (1~3) 1は坏部上半が外反する高坏で、脚柱部は短く裾部は水平に広がる。口径12.3cm、器高9.8cm、裾部径10.0cmを測る。2は小型の壺で、口縁部はほとんど開かず体部は球形となる。口径9.2cm、器高12.4cmを測る。3は小型の甕で、口縁部は短く外反する。

須恵器 (4~6) 4、5は坏蓋である。6は坏身で器壁が厚く、受け部との境も不明瞭である。出土遺物はいずれも6世紀末頃のものである。

95号竪穴住居跡 (図版30、第134図)

調査区南西端で検出した竪穴住居跡で、94号住居と重複し、これを切っている。また南側、西側は調査区外へと伸びており、全体の形状は把握できないが、方形プランで4支柱プランの竪穴住居跡となるだろう。床面上でピットを4個検出したが、どれも浅く、支柱穴とは思われない。貼り床・床面硬化は確認できなかった。

出土土器 (第135図)

土師器 (7~14) 7は高坏の脚部で、裾が水平に近く開き、端部を下方につまみ出す。8は小型壺の頸部で、口縁部はあまり開かない。9~14は甕の口縁部で、いずれも口縁部が大きく外反する。13、14は口縁部が厚く、若干後出する要素を持つ。以上の出土遺物は時期比定の決め手に欠けるが、諸特徴から94号竪穴住居跡と大差ない頃とみてよいだろう。

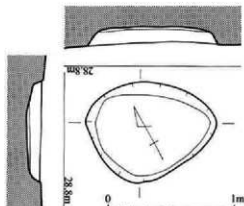
96号竪穴住居跡 (第137図)

87号竪穴住居跡の東7m程に長さ1m程の土坑があり、これを「136号土坑」と名付けて発掘し、出土遺物の整理を行った。発掘時には5世紀中頃の土器を出土する土坑として気にはかけていたが、住居との認識はなかった。しかし、報告書を作成する過程で単なる土坑よりは住居の壁際土坑であった可能性を考え図上で検討したところ、北側にP1~P4という支柱穴として適当なピットを見つけた。したがって、土坑の北側に壁の失われた住居跡があったと考えて、報告書作成時に新たに番号を付けた。P1~4は東北-南西方向に主軸をおき、3.2m×2.8mの東西方向にやや長い長方形を呈する。掘り方は直径20~30cmの円形で深さ30cm前後である。周辺の遺構面の土質は他と特に異ならなかったので貼り床があったとしても厚いものではなかっただろう。

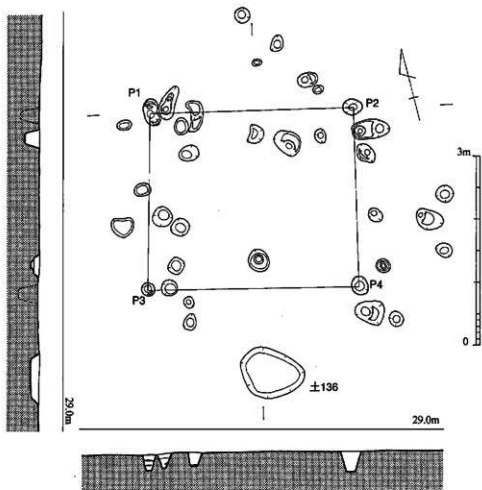
壁際土坑 (第136図) 長軸方向に1.05m、短軸方向に0.75mの略楕円形を呈する。深さは15cm余りである。床面はほぼ平らで壁がやや斜めに立ち上がる。埋土の上層は暗褐色粘質土、下層は灰褐色粘質土で



96号竪穴住居跡壁際土坑



第136図 96号竪穴住居跡壁際土坑実測図 (1/30)



第137図 96号竪穴住居跡実測図 (1/60)

あった。

出土土器 (図版64、第135図)

土師器 (15~18) ここでは壁際土坑とP1~P4の周辺ピットから出土した土器を提示した。15は壁際土坑出土のもので、丸底にわずかに外反させる口縁部のついた椀である。口径12.1cm、器高4.7cmを測る。外面はヘラケズリを施す。16はP4出土のもので椀と考えたが傾きは不安である。17は内湾しながら立ち上がる高坏口縁部であろう。18は高坏脚裾部である。15・18から考えて、古墳時代中期中葉でもやや新しい頃と考えられる。

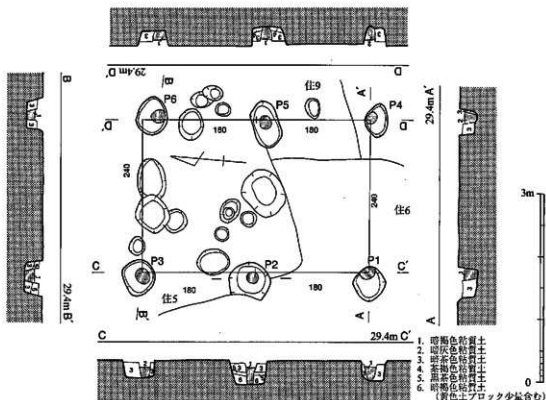
掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版31、第138図)

調査区中央東側で検出した1間×2間の南北棟建物で、主軸方位は北に対して5°東を向く。柱間は梁間が8尺(240cm)、桁間が6尺(180cm)等間に復元できる。柱穴掘り方は径40~60cmの不整形円で、深さは25~40cmを測り、ばらつきがある。覆土は暗茶褐色土が主である。全ての柱穴で、径15cmの柱痕を確認している。総床面積は8.64㎡。

出土土器 (第150図)

弥生土器 (1~5) 1・2は如意形口縁の寛、3~5は三角口縁の寛である。いずれも弥生時代中期初



第138図 1号独立柱建物跡実測図 (1/60)

頭～前半のものであり、混入品である。

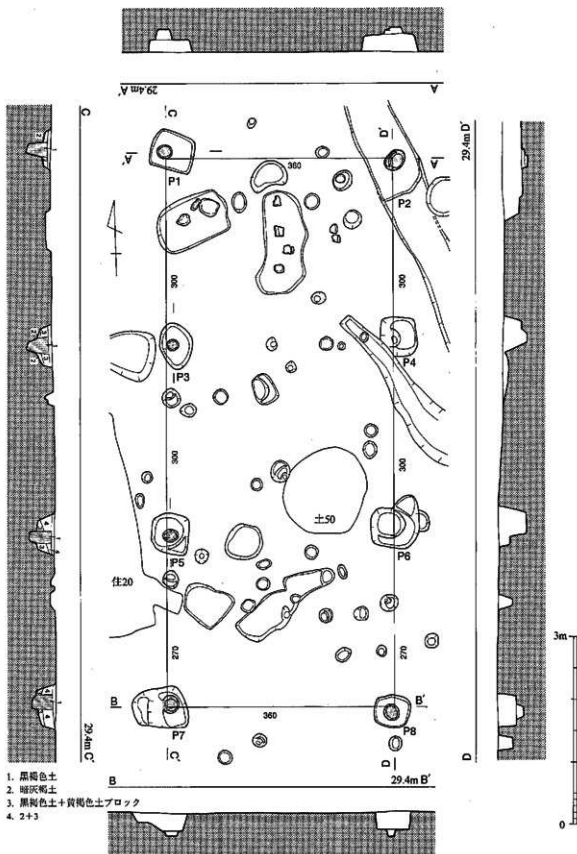
土師器 (6) 6は口縁部が大きく外反する甕で、口縁部内面を横ハケメ調整した後、横ナダを行う。当独立柱建物跡に伴うと思われる唯一の土器で、P2から出土した。時期比定の決め手に欠けるが、7世紀後半～8世紀代のものであろう。

2号独立柱建物跡 (図版31、第139図)

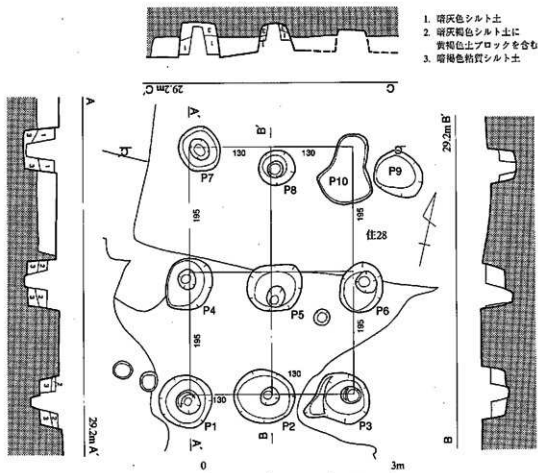
調査区東側で検出した1間×3間の南北棟建物で、主軸方位は北に対して2.5° 東を向く。柱間は梁間が12尺 (360cm)、桁間が北から10尺 (300cm) - 10尺 (300cm) - 9尺 (270cm) に復元できる。柱穴掘り方は一辺50～60cmの不整形形で、深さは30～45cmを測り、かなりのぼらつきが見られる。覆土は上層が黒褐色土、下層はこれに黄褐色土がブロック状に混入する。P4・P6を除く柱穴で、径15～30cmの柱痕を確認した。総床面積は31.32㎡。土器は小片がわずかししか出土しておらず、図示できるものはない。時期決定の決め手に欠けるが、覆土の色調や主軸方位から7世紀後半～8世紀代の掘立柱建物跡と考えている。

3号独立柱建物跡 (図版31、第140図)

調査区中央部の西よりに位置し、28号竪穴住居跡を切る2間×2間の総柱掘立柱建物である。主軸をN-13° -Wにとる。面積は10.3㎡を測る。発掘時は掘り間違えによりP9を北東隅と考えていたが、28号竪穴住居跡の床面で検出したP10の方が北東隅柱として適当である。西側は心々395cm、南側は心々260cmを測り、南側の柱行列の柱痕間距離より1尺32.5cmの尺度が導かれる。これによると南北方向の柱間6尺、東西方向の柱間4尺が復元できる。ただ中心、東面中央の柱は想定



第139図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第140図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

される企画よりかなりのずれがある。柱穴掘り方は直径50cm前後の円形で、深さ30～50cm。

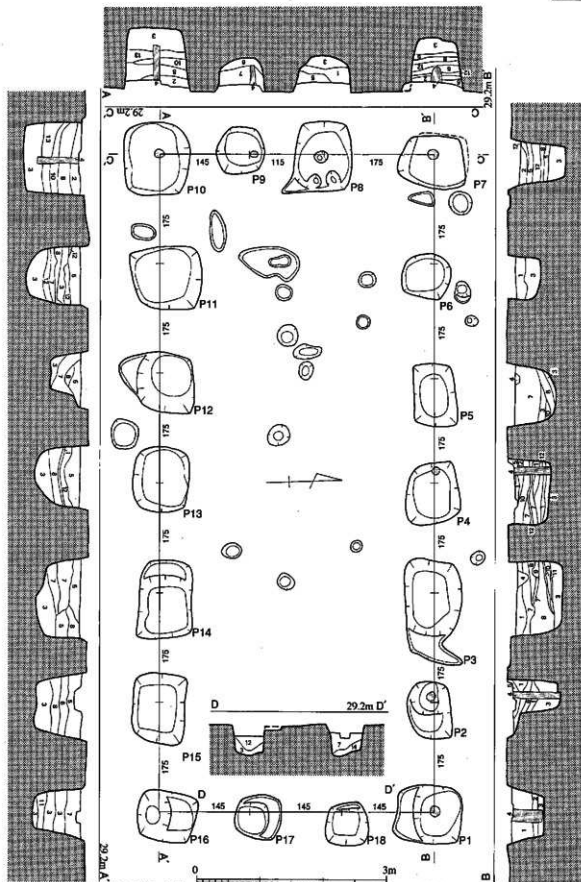
出土土器 (図版64、第150図)

土師器 (7～11) 7は鉢口縁部片、8は脚付き鉢脚部破片である。9は傾き不安であるが恐らく中型の壺の口縁部か。10は土師器高坏脚部破片、11は甕口縁部片である。これらの遺物はいずれも古墳時代中期中葉頃と考えられるものであり、恐らく28号住居跡に伴うものであろう。

須恵器 (12) 6世紀末頃と考えられる坏身口縁部である。28号竪穴住居跡に由来するとは考えられないので、小片ではあるがこの須恵器が建物の時期を示すと考えておきたい。

4号掘立柱建物跡 (図版33、第141図)

調査区中央部のやや西より、3号掘立柱建物跡の東25m程のところに位置する。東西棟建物で梁行3間、桁行6間になり、当遺跡では最大規模の建物である。南北方向の軸はN-2°-Eに置いている。面積は45.8㎡を測る。北側隣の柱痕間で1,045cm、西側隣の柱痕間で435cm、1尺29.0cm前後の尺度が適当である。そうすると南北桁行は6尺等間、東梁行は5尺等間になる。西梁行は北から6尺、4尺、5尺の間隔になり、東桁行の柱穴は想定される軸線よりやや外側にずれている。P1・2・4・7・9・10で暗灰褐色粘質シルトを埋土とする直径15cmの柱痕が確認された。柱痕の深さは揃っていない。このように柱は太くないのに対して、柱穴掘り方は桁行で一辺100cm前後の隅丸方形、梁行の中間2基は1辺60cm程の隅丸方形を呈し大型である。深さは50～100cmで壁はほ



1. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色シルト土層状に30%混)
2. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色シルト土層状に30%混)
3. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色シルト土層状に30%混)
4. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色シルト土層状に30%混)
5. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色粘質土層状に10%混)
6. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色粘質土層状に20%混)
7. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色粘質土層状に20%混)
8. 黒褐色粘質シルト土 (黒褐色粘質土層状に20%混)
9. 黒褐色粘質シルト土 (均質、ブロック等少ない)
10. 黒褐色粘質シルト土 (均質、粘質土層状に20%混)
11. 黒褐色粘質シルト土 (均質、粘質土層状に20%混)
12. 黒褐色粘質シルト土 (均質、粘質土層状に5%混)
13. 黒褐色粘質シルト土 (均質、粘質土層状に5%混)
14. 黒褐色粘質シルト土 (均質、粘質土層状に5%混)

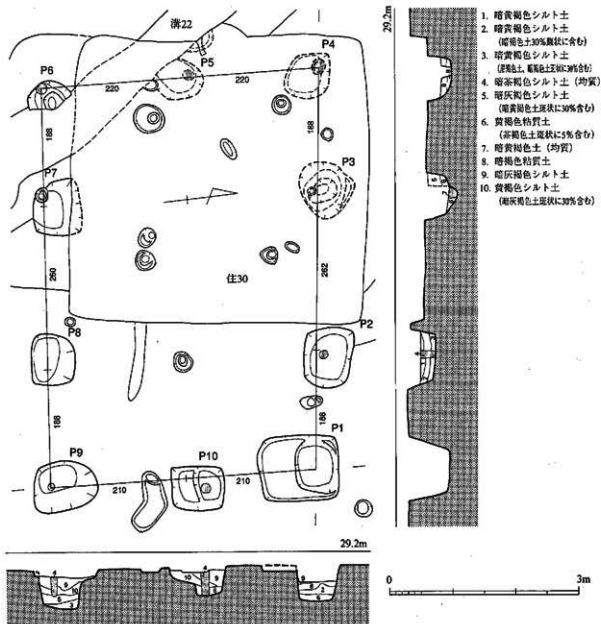
第141図 4号独立柱建物跡実測図 (1/60)

は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土と黄褐色粘質土が10cm前後の厚さで互層となっていた。図示した土器の他、第198図2の石鏝がP12から、第201図43の太型蛤刃石斧がP7から出土した。

出土土器 (第150図)

土師器 (13~16) 13・14はそれぞれP16、P4出土の土師器坏口縁部である。15・16はP15、P11から出土した土師器甕口縁部である。

須恵器 (17~22) 17はP16から出土した坏蓋口縁部片で、かえりは断面三角形でしっかりしたつくりであり、口縁端部より突出する。18はP16出土の坏口縁部で体部は丸みをもつ。19・20はいずれもP15から出土した高台付坏身で脚部はやや高く、踏ん張り気味であるが、20はやや新しい傾向をもつ。21は壺胴部破片か。22は平瓶口縁部である。これらの須恵器は7世紀末頃のものである。



第142図 5号掘立柱建物跡平面図 (1/60)

5号掘立柱建物跡 (図版34、第142図)

調査区中央部やや西南に位置し、22号溝、30号竪穴住居跡に切られる。北には4号掘立柱建物跡、南には6号掘立柱建物跡が隣接している。梁行2間、桁行3間の東西棟で、南北方向の主軸はN-2°-Eである。西梁隅の柱痕間で440cmを測り、1尺31.4cm程度が考えられる。すると西梁は柱間7尺で等間隔、東梁行は柱間210cmで7尺に少し足りず、柱痕位置もずれる。南北桁行の柱間は6尺、8.3尺程、6尺に復元され、中央が広くなる。柱痕は10~20cmでさほど大きくなく、埋土は均質な暗茶褐色シルト土、暗褐色粘質土であった。柱掘り方は1辺60~80cmの隅丸方形、長方形を呈し、深さ60cm程である。掘り方内は暗黄褐色土、暗灰褐色土、暗褐色土が10cm余りの厚さで堆積するが、4号掘立柱建物跡、6号掘立柱建物跡のような水平方向の縞模様は余り発達していない。出土土器は4号掘立柱建物跡出土土器とほとんど時期差はなく、7世紀後半でも新しいころと考えておきたい。ただ、両者は余りにも近接しており、同時併存していたとは考えられない。

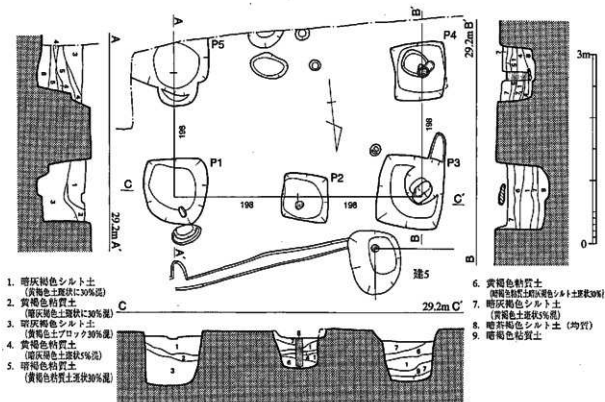
出土土器 (第150図)

土師器 (23) 23はP2より出土した土師器口縁部である。

須恵器 (24~26) 24はP10より出土したかえりの付く坏蓋で、かえりは断面三角形で、口縁部よりもわずかに突出する。7世紀末頃と考えられ、4号掘立柱出土遺物と大差ない。35は坏身口縁部でP8より出土した。26は高坏脚裾部と考えられる。

6号掘立柱建物跡 (図版35、第143図)

調査区中央部やや西よりの南壁にかかるもので、5号掘立柱建物跡の南に隣接する。調査区を拡張して用地境近くまで発掘したが、検出できたのは建物の北側一部にとどまる。恐らく桁行2間、



第143図 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

梁行3間以上の南北棟と考えられる。主軸は $N-5^{\circ}-E$ で正南北よりやや東に振っている。柱痕を確認できたのは一部であるが、柱掘り方の心々で考えると1尺33.0cm前後で梁行、桁行とも柱間6尺で揃っている。柱痕はP2とP4で平面、断面ともに検出でき、直径12cm程である。埋土は均質な暗茶褐色土。掘り方は隅は1辺100cmの隅丸正方形、他はやや小さく1辺60~70cmの隅丸方形を呈する。深さは60~80cmである。掘り方埋土は灰褐色土、黄褐色土、暗褐色土が互層になっていた。なお、P3は上面から40×25cmの板石が出土しており、建物廃絶後に置かれたものと考えられる。また、P4底部で検出された2個の10cm大河原石は恐らく根固め石であろう。図示できる遺物は少ないが、規模、掘り方の特徴から考えて、4・5号掘立柱建物とはほぼ同時期であろう。

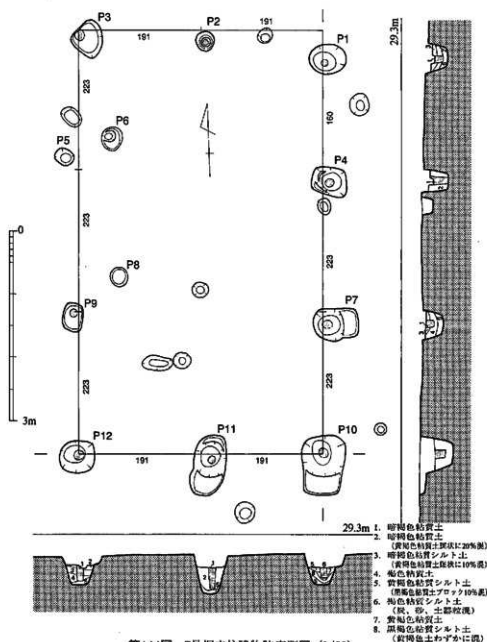
出土土器 (第150図)

土師器 (27) 器形不明の口縁部で、端部が面をなす。P1より出土した。

7号掘立柱建物跡

(図版36、第144図)

調査区中央部やや西よりに位置し、4号掘立柱建物跡の北に隣接する。梁行2間、桁行3間の南北棟で主軸は $N-2^{\circ}-E$ とほぼ正南北を向く。面積は26.1㎡を測る。柱痕はほとんどの柱穴で確認されたが、南梁行の柱痕心々距離から1尺31.9cm前後であろう。すると梁行柱間6尺、桁行柱間7尺で設計されたと考えられる。ただ西側はP3とP9の間に位置するP5、P6のいずれが建物の柱掘り方が不明であり、いずれとしてもP3、P9との間の距離尺度が整数とならない。また東側は



第144図 7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

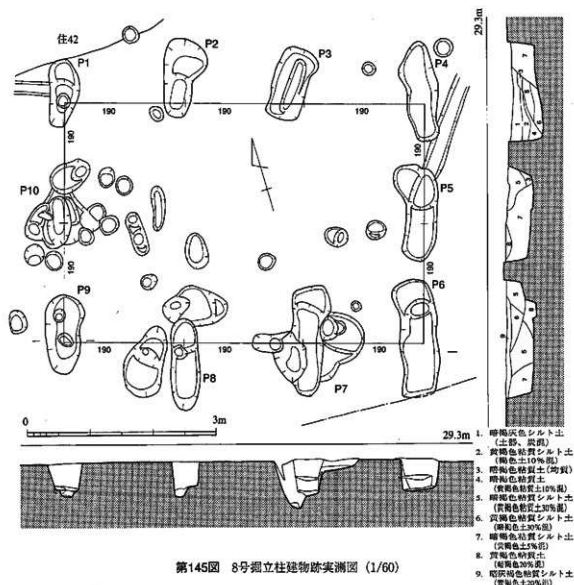
P1-P4間の距離が7尺より短く、5尺程度になっている。このような点でやや不規則な柱配置をなすと言える。柱痕は径10~15cmでさほど太いものではない。埋土は均質な暗褐色粘質土であった。掘り方はかなり円形に近い隅丸方形を呈し、1辺40~60cm、深さ40~60cm程度である。検出面が北側に向かって低くなることを差し引いても、4~6号掘立柱建物跡と比べて浅い掘り方で平面規模も小さい。埋土は黄褐色土、暗褐色土、褐色粘質土。図示できる遺物は少ないが、主軸方向が4~6・10号掘立柱建物跡と揃うことから、それらと同時期であることは間違いないだろう。

出土土器 (第150図)

土師器 (28) 高坏脚裾部小片で、時期は不詳。P11より出土した。

8号掘立柱建物跡 (図版36、第145図)

長楕円形の掘り方が特徴的な桁行2間、梁行3間の東西棟で、調査区の中央やや南壁際、42号堅穴住居跡の南東に位置する。面積は21.7㎡を測る。発掘当初は掘立柱建物跡と気が付かなかったため、ほとんどの柱穴を柱痕の確認、土層図の作製を行わないままに掘り下げ、東側の土層図を記録したにとどまる。各柱穴とも柱痕を確認していないので東西方向の柱掘り方中心々距離から1尺31.7cm前後と考へて企画を復元した。これによると柱間は梁行、桁行とも190cm=6尺とするのが適



第145図 8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

当である。南北方向の軸は $N-16^{\circ}-E$ でかなり東に振っている。掘り方は長楕円形を呈し、長軸105~190cm、短軸50cm程度、深さ40~50cm程度である。東に行くにつれて掘り方が長くなる傾向が見て取れる。東梁行の断面図ではP4・5で柱を抜き取ったような土層をなしているが、長楕円形の掘り方平面自体が柱の抜き取りによってできた可能性もあるだろう。

出土土器 (第150図)

土師器 (29~33) 21~33は坏口縁部破片である。全体的に器壁が厚く、胴部から丸みを帯びて端部に至る口縁部であり、8世紀には下らないと思われる。34は甕口縁部である。29・36はP1より、30・31はP6、33・34はP7より出土した。

須恵器 (35~37) 35~37はかえりの付く坏蓋口縁部である。いずれもかえりが明瞭であり、35・36は口縁端部より突出するので、7世紀後半と考えられる。35はP8、36はP9出土である。37はP7とP9から同一個体の破片が出土している。

9号掘立柱建物跡 (第146図)

調査区中央東寄りで検出した1間×2間の南北棟建物で、主軸方位は北に対して 20° 東を向く。面積は $5.4m^2$ を測る。柱間は梁間が6尺 (180cm)、桁間が5尺 (150cm) 等間に復元できる。柱穴掘り方は径50~80cmの不整形で、深さは40~50cmを測る。覆土は黒褐色土からなる。全ての柱穴で、径20cmの柱痕を確認した。総床面積は $5.4m^2$ 。土器は小片がわずかしか出土しておらず、また図示したものは明らかに混入品である。時期決定の決め手に欠けるが、覆土の色調や主軸方位から7世紀後半~8世紀代の掘立柱建物跡と考えている。

出土土器 (第150図)

弥生土器 (38) 38は弥生土器甕の口縁部で、短い鋤先口縁となるものである。混入品である。

10号掘立柱建物跡 (図版36、第146図)

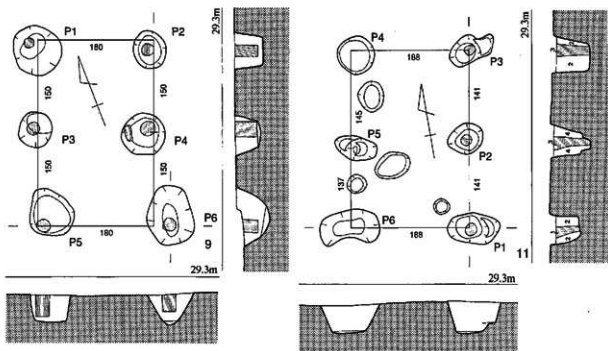
調査区中央部西よりの南壁近く、4・6号掘立柱建物跡に隣接する。梁行2間、桁行3間の南北棟である。面積は $12.6m^2$ を測る。掘立柱建物を意識せずに柱穴を掘り下げたために、土層図の作製、柱痕の確認を怠ってしまった。東梁行及び北梁行の柱掘り方中心距離より考えると1尺30.3cm前後か。これを基準に復元すると梁行柱間5尺、桁行14尺で5尺、4尺、5尺の柱間が企画として考えられる。ただし、南梁行のP6-P7間が146cmで5尺に足りず、西桁行のP3-P4間が162cmで5尺を超えるので、やや歪な柱配置となっている。掘り方平面形は多様であるが、40~70cmの隅丸方形を基調とするものである。深さは25~60cmと余り揃っていない。 $N-3^{\circ}-E$ に主軸をおき、正南北よりわずかに東にずれている。なお、P3掘り方中より須恵器坏の完形品が出土した。

出土土器 (図版64、第150図)

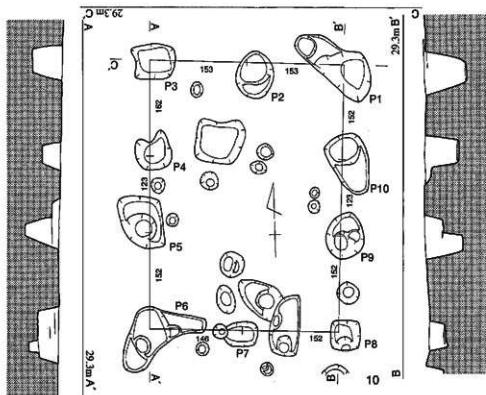
須恵器 (39) P3より出土した高台付き坏身の完形品。高台は断面方形に近く、底部一口縁部の稜に近いところに貼り付けられる。口縁部は直線的に立ち上がっている。口径14.0cm、高台径9.6cm、器高3.7cmを測る。器形から考えて8世紀前半~中葉頃であろう。

11号掘立柱建物跡 (図版37、第146図)

調査区の中央北壁近くで検出した梁行1間、桁行2間の南北棟である。主軸は $N-10^{\circ}-E$ を測



1. 暗灰褐色粘質シルト土 (均質)
2. 黄褐色粘質シルト土 (黄褐色土質灰30%混)
3. 暗褐色粘質シルト土
(黄褐色粘質シルト小ブロック5%混)
4. 暗褐色粘質シルト土 (黄褐色粘質土ブロック20)



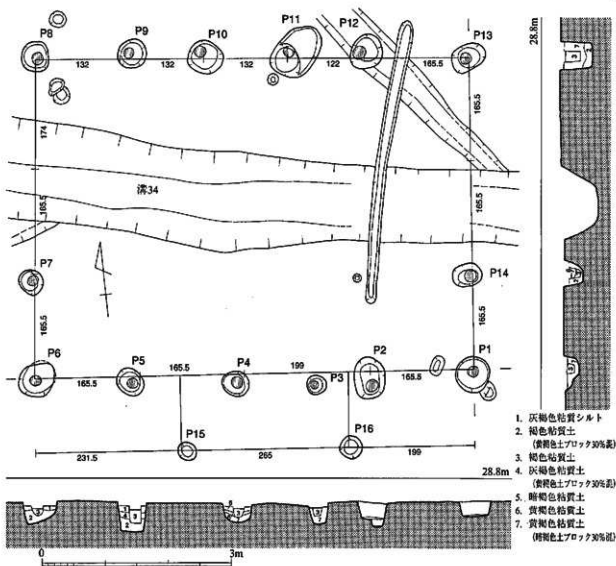
第146図 9~11号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

り、やや東に振っている。面積は5.3㎡を測る。東桁行では柱痕が残っており、その心々は141cm等間である。西桁行は掘り方心々で145cm、137cmを測り、わずかに等間隔ではない。梁行は181cm前後。これらの数値からは設計時に尺を用いたとは考えられない。柱痕は直径15~20cmでいずれも底部が掘り方下面に接している。掘り方は径、長軸60cm程の円形、楕円形を呈し、深さは45~60cmを測る。図示できないが掘り方より龍泉窯青磁片が出土しており、中世の建物跡と推測される。

12号掘立柱建物跡 (図版37、第147図)

調査区西部の南壁近くに位置し、36号溝を切り、34号溝に切られている。北桁行5間、梁行3間の東西棟であるが、後述するように南桁行の柱列は不規則である。東梁行間497cmを測り、そこから1尺33.1cmが導きだせる。以下、この尺度をもとに説明を進めていきたい。

梁行は柱穴が一部34号溝に削られて不明であるが、柱間は5尺等間と想定される。ただ、西梁行は505cmとなり、15尺よりわずかに長い。北桁行はP8とP11の間が柱間132cm=4尺、P12-P



第147図 12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

13間が165.5cm = 5尺として無理はないが、P11-P12間は4尺よりやや小さい。南桁行はP3を含めて考えると北梁行と同様に5間となる。柱間は北梁行より広いものが多く、P1-P6間、P4-P5-P6間は5尺等間と考えられる。ただP2-P3間は87cm、P3-P4間は112cmでいずれの数値を33.1cmで割っても整数にならない。むしろP2-P4間の199cm = 6尺を基準に設計したと考える方が適当である。このような点からP3が桁行の柱列を構成していたものか疑問が残る。また桁行の前面にはP15、P16からなる柱列がある。これは桁行方向とはほぼ平行し、柱間も265cm = 8尺であるので建物の一部を構成した柱穴と考えられる。南側のほぼ中央に位置することから、建物出入口の廂の柱穴と解釈したい。P3も出入口と関係する柱穴になるのではなからうか。廂を除いた面積は33.3㎡、含めると36.6㎡を測る。柱痕は直径15~20cmでさほど大きくない。柱掘り方は径、長軸40~60cmの円形~楕円形を呈し、深さは25~50cmを測る。図示できる出土遺物はないが、掘り方から古代と考えられる土器片が出土している。36号溝が奈良時代、34号溝は中世と考えられるので切合いとも矛盾しない。

13号掘立柱建物跡 (図版37、第148図)

調査区東側で検出した。小ピットが多数集中しており建物跡の特定が非常に困難な状況であった。従って、確実に建物跡と断言できるものではなく、復元案の一例として提示するものである。2間×3間の南北棟建物で、主軸方位は北に対して14°東を向く。柱間は不均一だが、東西両桁とも中央の桁間が短い。柱穴は17~30cm、深さ20~45cmを測る。覆土は灰褐色土の単一層である。総床面積は30.24㎡。遺物は数点出土しているが、図示できるものはない。

14号掘立柱建物跡 (図版37、第148図)

調査区東側で検出した。上記同様復元案の一例として提示する。梁行1間、桁行は北側2間、南側3間の変則的配置となる東西棟の建物で、主軸方位は北に対して65°西を向く。柱穴は不整形で、径30~60cm、深さ30~45cmを測る。覆土は灰褐色土の単一層。総床面積は5.45㎡。遺物は数点出土したが、図示できるものはない。

15号掘立柱建物跡 (図版37、第149図)

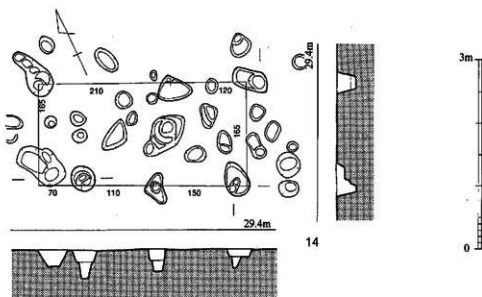
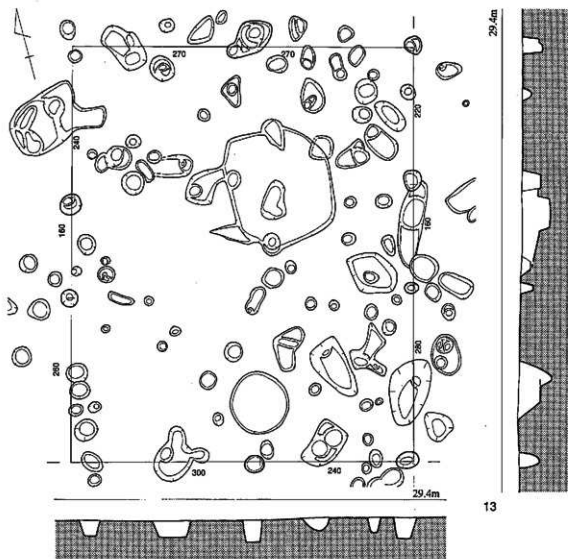
調査区東側で検出した。上記同様復元案の一例として提示する。梁行2間、桁行は北側が3間、南側が5間の東西棟建物で、主軸は北に対して69°西を向く。柱穴は径20~30cm、深さ20~40cmを測る。覆土は灰褐色土の単一層。総床面積は21.42㎡。

出土土器 (第150図)

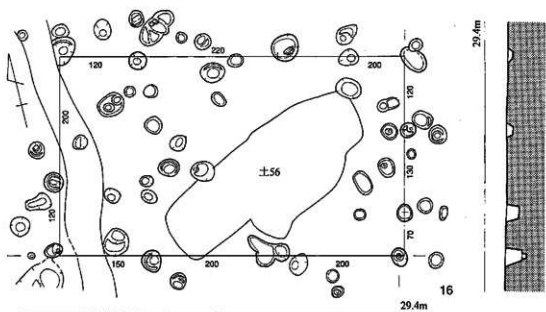
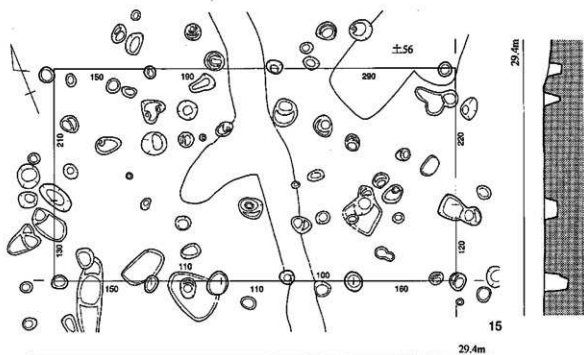
須恵器 (40) 40は東播系の須恵質こね鉢で、口縁端部を玉縁状にする。

16号掘立柱建物跡 (図版37、第149図)

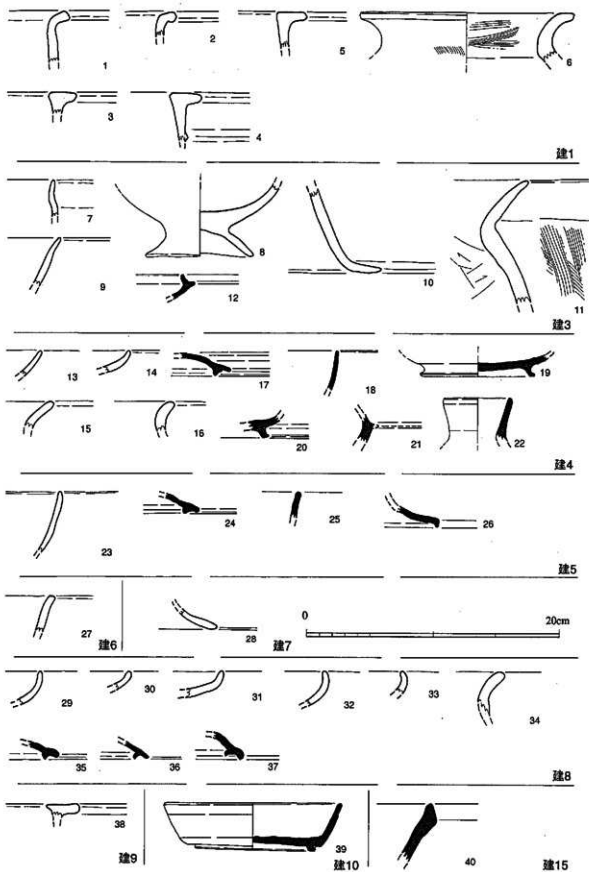
調査区東側で検出した。上記同様復元案の一例として提示する。梁行は東側で3間、西側で2間、桁行3間の東西棟建物で、主軸は北に対して71°西を向く。柱穴は径25~45cm、深さ10~35cmを測る。覆土は灰褐色土の単一層。総床面積は17.6㎡。遺物は数点出土したが、細片で図示できない。



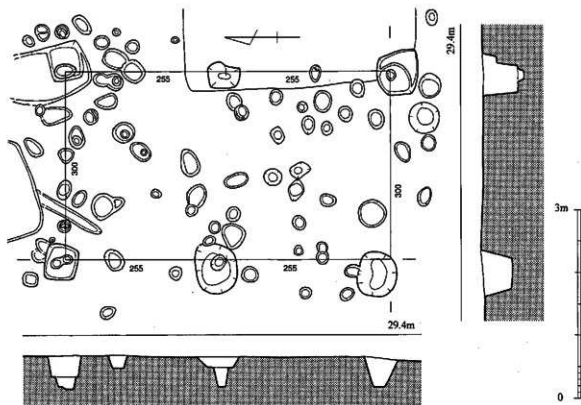
第148图 13·14号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第149图 15·16号独立柱建物跡実測図 (1/60)



第150图 掘立柱建物跡出土土器実測图 (1/3)



第151図 17号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

17号掘立柱建物跡 (第151図)

調査終了後に図上で確認・復元したものである。調査区北東側で検出した1間×2間の南北棟建物で、主軸方位は座標北と平行する。柱間は梁行10間 (300cm)、桁行8.5間 (255cm) 等間に復元できる。柱穴は50~65cmの方形で、深さは45~65cmを測る。覆土は黒褐色系の土である。総床面積は15.3㎡。遺物は細片で図示できない。覆土および主軸方位等から見て、1・2号掘立柱建物跡と大差ない時期のものであろう。

土坑

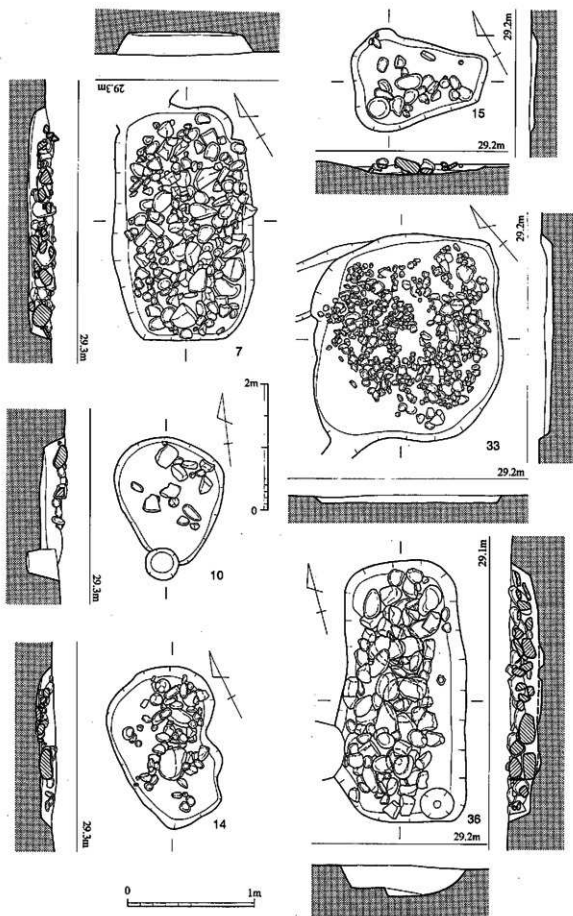
7号土坑 (図版38、第152図)

調査区中央東側で検出した長方形の土坑で、主軸方位を北北東にとる。長軸183cm、短軸110cm、深さ15cmを測る。遺構確認当初から円礫が露頭しており墓塚の可能性を考えたが、調査の結果、内部で検出した多数の礫は面をそろえるといった規則的な配置ではなく、ただ乱雑に放り込んだ感じであり、墓塚ではないとの判断を得た。円礫は大半が安山岩河原石であり、付近で採集できるものである。大きさは拳大位から人頭大位のものまで様々ある。出土遺物は礫の間隙に挟まって出土した。非常に少なく、大半が磨滅する。

出土土器・陶磁器 (第153図)

須恵器 (1) 1は甕の胴部片で、内面同心円当て具痕、外面平行タキキを行う。表面がかなり磨滅している。混入品であろう。

磁器 (2) 2は青磁碗の底部で、外面に鎮連弁を配する。高台は露胎となる。



第152图 7·10·14·15·33·36号土坑平面图 (33: 1/60, 他: 1/30)

10号土坑 (図版38、第152図)

調査区中央東側で検出した土坑で、2号竪穴住居跡を切る。平面形は北側が幅広くなる不整形円形で、長軸105cm、短軸85cm、深さ20cmを測る。土坑内部で十数個の円礫を検出したが、どれも底面から10cm程浮いていた。出土遺物は少ない。

出土土器 (第153図)

土師器 (3・4) 3・4は坏である。3は口縁部が湾曲し、上方を向く。風化のため調整不明である。

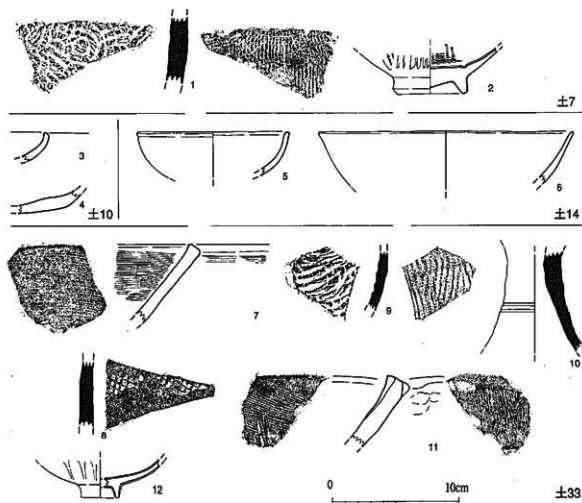
覆土や土坑の様相から中世のものと考えているが、出土した土器は奈良期のものであり、時期が符合しない。出土遺物は2号竪穴住居跡からの混入品とも考えられる。

14号土坑 (図版38、第152図)

調査区中央東側で検出した不整形の土坑で、長軸130cm、短軸83cm、深さ15cmを測る。土坑内部で多くの円礫を検出したが、大きさ、配置に統一性、規則性は見られない。図示した以外に第206図17のU字形鋤先が出土している。

出土土器 (第153図)

土師器 (5・6) 5は口縁端部を外側につまみ出す椀である。6は口縁端部が外反気味に開く高坏で



第153図 7・10・14・33号土坑出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

ある。

15号土坑 (図版39、第152図)

調査区中央東側で検出した不整形の土坑で、長軸110cm、短軸82cm、深さ8cmを測る。土坑内部で十数個の円礫を検出したが、規則的な配置でなく放り込んだ様な感じを受ける。遺物は数点出土したが、図示できるものはない。

33号土坑 (図版39、第152図)

調査区北東側で検出した不整形の土坑で、6号溝の屈曲部に接続しており、この溝に関連する遺構であろう。長軸325cm、短軸295cm、深さ15cmを測る。土坑内部で大小多数の円礫を検出したが、大きさ、配置ともに規則的ではなく放り込んだ様な感じを受ける。遺物は礫の間隙に挟まって出土した。図示した土器・陶磁器の他、第196図5の管状土鉢、第199図26の打製土斧、第202図57の砥石、第204図94の滑石製品が出土している。

出土土器 (第153図)

土師器 (7) 7は土師質のこね鉢で、内外面横ハケメ調整を行う。

須恵器 (8~10) 8・9は甕の胴部片で、8は外面格子タタキ、内面当て具ナデ消し、9は外面平行タタキ、内面同心円当て具。10は高坏の脚部で、2条の沈線を巡らす。9・10は混入品。

瓦質土器 (11) 11は瓦質播り鉢で、内外面ハケメ調整を行う。

磁器 (12) 12は外面に連弁を配する青磁碗で、高台は径が小さく、高く薄くつくられ、高台内部まで施釉する。

36号土坑 (図版39、第152図)

調査区東側で検出した長方形の土坑で、主軸方位を北北東にとる。長軸205cm、短軸95cmを測る。土坑内部には円礫がぎっしりと詰め込まれていたが、規則的な配置ではなく、無造作にただ詰め込んだといった感を受ける。円礫は拳大位から人頭大位まであり、大半が安山岩である。円礫除去後、土坑底面で浅いピットをいくつか検出した。遺物は非常に少なく図示できるものはないが、青磁片などが出土している。

50号土坑 (図版40、第154図)

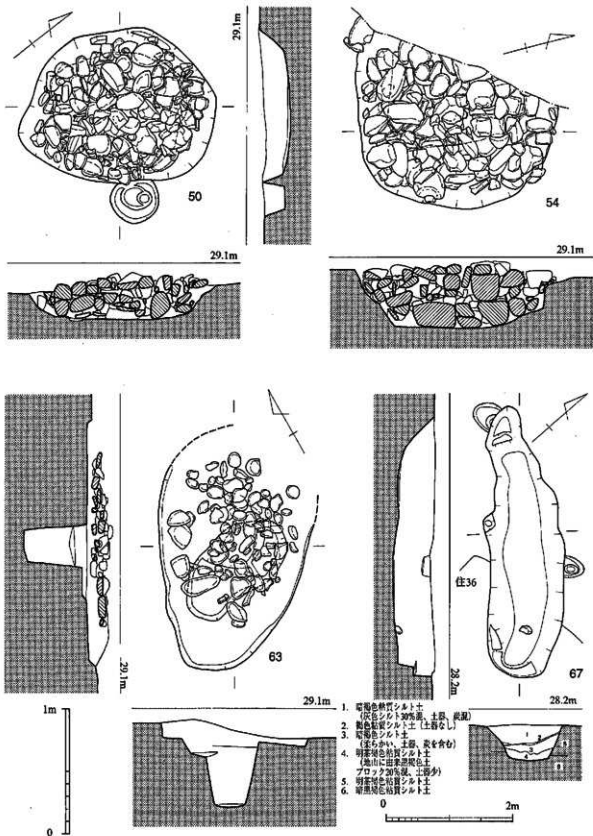
調査区東側で検出した不整形の土坑で、長軸160cm、短軸125cm、深さ25cmを測る。土坑内部には円礫・角礫がぎっしりと詰め込まれていたが、規則的ではなく、放り込んだような感じである。礫は大半が安山岩である。遺物は礫の間隙に挟まるようにして出土した。図示した土器・磁器の他、第196図18の管状土鉢、第200図35の敷石、第204図84の滑石製石鍋が出土した。

出土土器・陶磁器 (第155図)

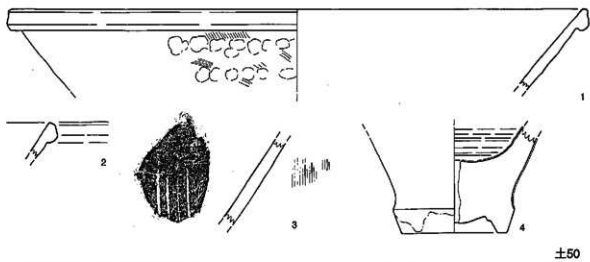
土師器 (1・2) 1・2は土師質のこね鉢で、口縁部を玉縁状に仕上げた。

瓦器 (3) 3は瓦質の播り鉢で、播り目は4本。

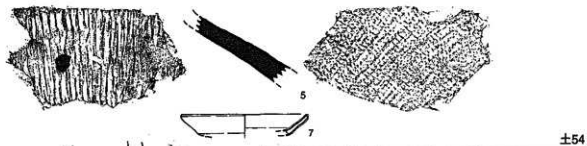
磁器 (4) 4は白磁四耳壺の底部で、高台部は焼きが悪く、赤褐色を呈する。内面はロクロ目が明瞭に残る。



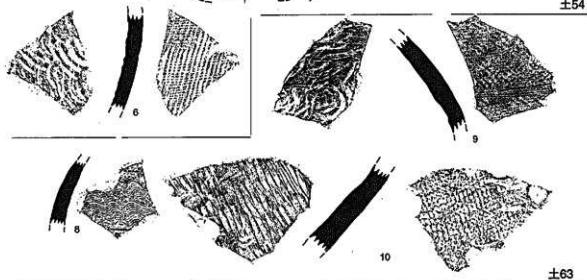
第154図 50・54・63・67号土坑実測図 (67: 1/60, 他: 1/30)



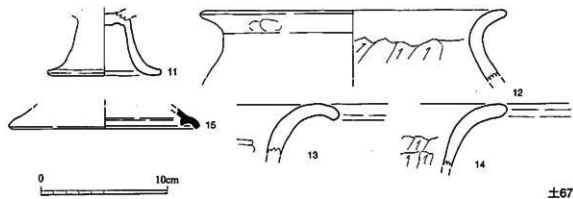
±50



±54



±63



0 10cm

±67

第155图 50·54·63·67号土坑出土土器·陶磁器实测图 (1/3)

54号土坑 (図版40、第154図)

調査区北東で検出した土坑で、北西側が調査区外へと大きく伸展するため平面形は不明だが、円形または楕円形になるだろう。調査した範囲では、長軸150cm、短軸120cmを測る。内部には大小さまざまな円礫、角礫が詰め込まれていたが、規則的に配置している訳ではなく、放り込んだような感じである。礫は大半が安山岩。遺物は図示した土器・磁器の他、第197図11のガラス小玉、第205図100・101の石臼が出土した。

出土土器・陶磁器 (第155図)

須恵器 (5・6) 5・6は甕の胴部片で、5は内面平行当て具痕、外面格子タタキ、6は内面同心円当て具痕、外面格子タタキ調整を行う。

磁器 (7) 7は青磁皿で、口径10.0cmを測る。

63号土坑 (図版41、第154図)

調査区南東側で検出した不整楕円形の土坑で、北東側は削平を受ける。遺存する部分で長軸195cm、短軸120cm、深さ15cmを測る。土坑内では多くの円礫を検出したが、規則的な配置ではなく、散乱した状態である。礫は大半が安山岩。礫除去後に底面のほぼ中央で長軸100cm、短軸55cm、深さ50cmのピットを1個検出した。遺物は礫の間隙に挟まって出土した。

出土土器 (第155図)

須恵器 (8~10) 8は甕の頸部で、外面に櫛指波状文を巡らす。9は甕の肩部で、外面は斜格子タタキの後、カキ目を入れる。10は甕の胴部で、内面平行当て具痕、外面格子タタキ。

67号土坑 (図版41、第154図)

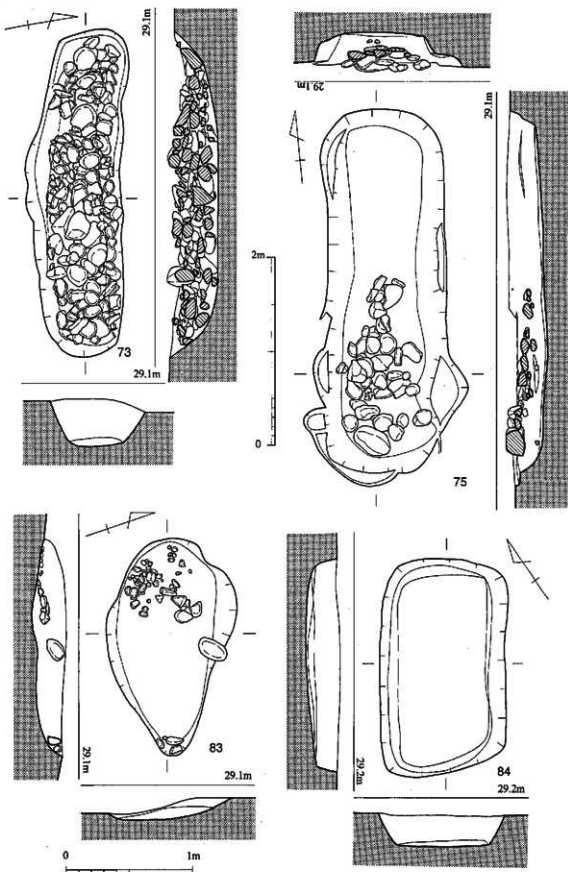
調査区のほぼ中央部に位置し、36号竪穴住居跡の北西部分を切っている。長楕円形の土坑で長軸4.3m、短軸1.2mを測り、長軸は北西-南東方向を向く。北西端の床面から30cm程の高さのところにはテラスがある。床面は幅50cm前後ではほぼ平らになる。壁は斜めに立ち上がるところがほとんどであるが、南東部分はかなり直に近い角度である。土器は上層から出土したものが多く、時期は7世紀後半でも新しい頃か。この土坑の西側にはほぼ同時期の31・82~84号竪穴住居跡があり、それらからの廃棄物を捨てる土坑となっていたのであろう。

出土土器 (図版65、第155図)

土師器 (11~14) 11は高坏脚部で裾径9.0cmを測る。脚内面は工具によってナデを施している。12は甕で、口径24.0cm程に復元される。13・14は口縁部の傾きから考えて、甕よりは大型の鉢になると思われる。口縁部は強く外反して、13は下方にやや垂れ気味である。内面へラケズリ、口縁部横ナデを施す。

須恵器 (15) 口径15.0cm前後に復元されるかえりの付く坏蓋口縁部である。かえりは断面三角形で比較的、しっかりした作りであるが、先端は口縁端部より上方に位置している。白灰色を呈し、やや軟質である。

73号土坑 (図版41、第156図)



第156图 73·75·83·84号土坑实例图 (75·84:1/40, 73·83:1/30)

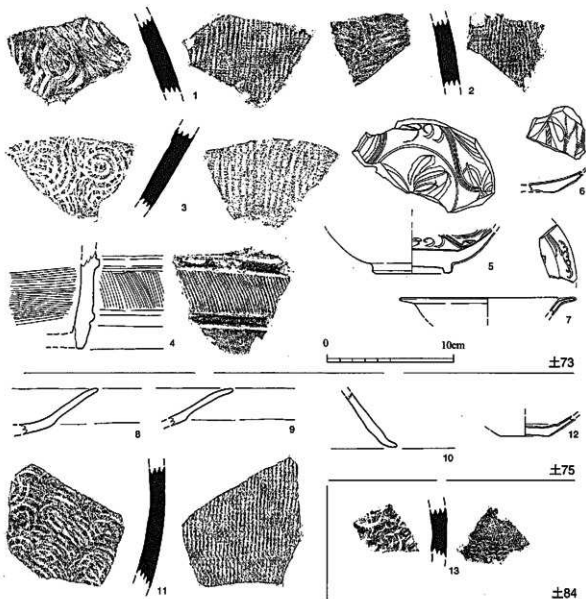
調査区南東側で検出した不整形円形の土坑で、長軸260cm、短軸75cm、深さ38cmを測る。土坑内には大小多くの円礫が詰め込まれていたが、規則的に配置されている訳ではなく、放り込んだ様な感じである。礫は大半が安山岩である。覆土は灰褐色シルトの単一層からなる。遺物はこの礫の間隙に挟まって出土した。図示した土器・磁器の他、第196図11の管状土錘、第202図61の砥石が出土した。

出土土器・陶磁器 (第157図)

須恵器 (1~3) 1~3は甕の胴部片で、内面同心円当てで具痕、外面格子タタキ。

瓦器 (4) 4は瓦質火鉢で、外面の突帯間に粗い斜ハケメを入れる。内面は横ハケメ。

磁器 (5~7) 5は内面にヘラ・獅状工具による草花文をいれた龍泉窯系青磁碗。5は内面にヘラ・櫛による文様を施した同安窯系青磁皿。7は口縁部が水平に伸びる皿で、口縁部上面のみ緑色釉、他は無色釉を施釉する。この口縁部上面に、赤色塗料による流雲文を描く。近世以降の混入品か。



第157図 73・75・84号土坑出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

75号土坑 (図版42、第156図)

調査区東側の遺構集中箇所にて検出した不整形の土坑で、44・52号竪穴住居跡を切る。長軸390cm、短軸160cm、深さ30cmを測る。土坑南側からは、底面から20cmほど浮いた状態で円礫がまともって検出されたが、規則的に配置したという感じではなく、雑に放り込んだ印象を受ける。遺物はこの礫付近から出土した。図示した土器の他、第196図14の管状土錘、第203図72の砥石、第207図40の鉄滓が出土した。

出土土器 (第157図)

土師器 (8~10) 8・9は口縁部が外反気味に大きく開く高坏。10は接合部から開く高坏の脚部。これらは恐らく44号竪穴住居跡からの混入品であろう。

須恵器 (11) 11は甕の胴部片で、内面同心円当て具痕、外面格子タタキを行う。

磁器 (12) 12は白磁皿の底部で、内面の屈曲部に沈線状の段を巡らす。外底部のみ露胎となる。

84号土坑 (図版42、第156図)

調査区中央東側で検出した長方形の土坑。長軸230cm、短軸135cm、深さ35cmを測る。覆土は灰白色土で全くしまりが無い。底部近くの周壁は黄褐色に変色しており、滞水状態にあったと思われる。遺物は混入品しか出土しておらず、時期決定は困難だが、覆土から少なくとも近世以降のものと思われる。遺物は図示した須恵器の他、第196図6の管状土錘、第206図13の環状鉄製品が出土した。

出土土器 (第157図)

須恵器 (13) 13は甕の胴部片で、内面に同心円当て具痕が認められる。表面がかなり磨滅する。この土器は当土坑の時期を示すものではなく、混入したものである。

89号土坑 (図版43、第158図)

調査区中央東側で検出した不整形の土坑である。長軸135cm、短軸70cm、深さ15cmを測る。土坑中央から南西側にかけて多くの円礫が集中していたが、規則的に配置したものではなく放り込んだ様な状況である。出土遺物はわずか数点にすぎず、図示できるものはない。

91号土坑 (図版43、第158図)

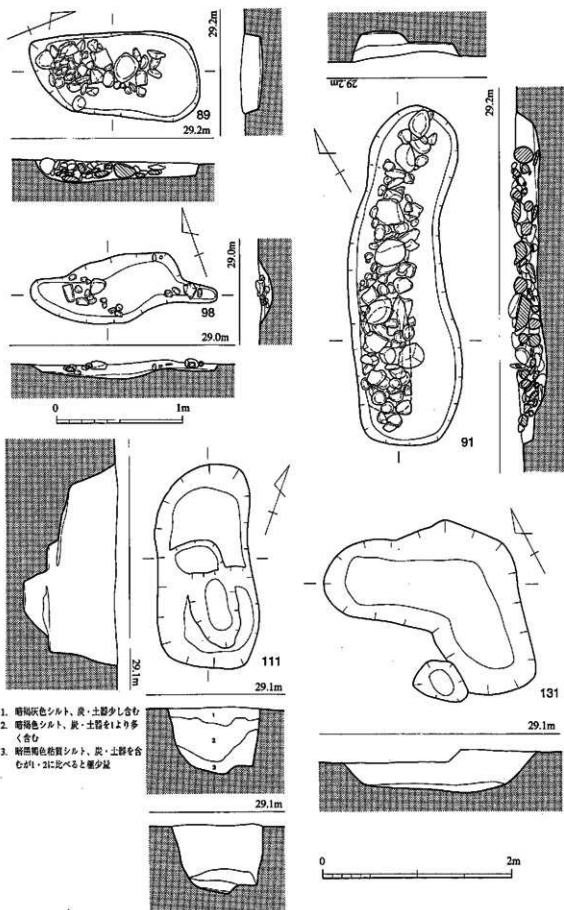
調査区中央東側で検出した不整形の土坑である。長軸270cm、短軸85cm、深さ22cmを測る。土坑内では多くの円礫がかたままって検出されたが、規則的に配置ではなく、放り込んだような状況である。土坑底面は南西側がやや窪む。遺物は礫の間隙に挟まった状態で出土した。図示した土器の他に第196図15の管状土錘、第199図23の打製石斧が出土している。

出土土器 (第159図)

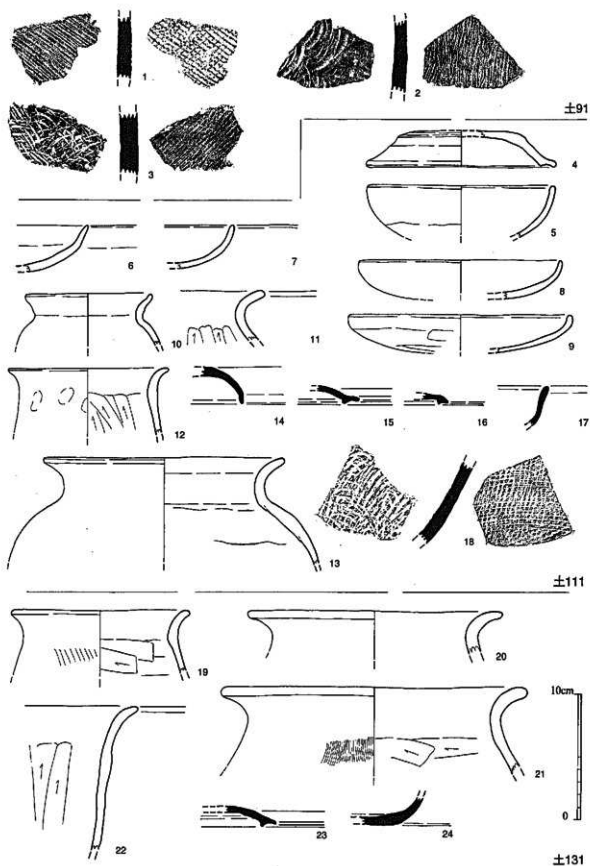
須恵器 (1~3) 1~3は甕の胴部片である。1は内面ハケメ、外面格子タタキ。2・3は内面同心円当て具痕、外面平行タタキ調整を行う。

98号土坑 (第158図)

調査区中央南東側で検出した不整形の土坑である。長軸150cm、短軸55cm、深さ10cmを測る。覆



第158図 89・91・98・111・131号土坑実測図 (111・131:1/40, 他:1/30)



第159图 91·111·131号土坑出土土器实测图 (1/3)

土は灰褐色土。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はすり鉢状に中央が窪む。土坑内では東端と中央西寄りの2箇所で見られる。土器はわずかに数点に過ぎず、図示できるものは無かった。土器以外では第201図44の太型蛤刃石斧、第207図46の銅銭が出土した。



98号土坑銅銭出土状態

111号土坑 (図版43、第158図)

調査区中央北東側で検出した長方形の土坑で、主軸方位は北北西を向く。長軸215cm、短軸110cmを測る。土坑内は階段状になっており、南側がもっとも深く、95cmを測る。覆土は上層が暗褐色シルト、下層が暗黒褐色粘質シルトからなり、自然堆積の状況である。遺物は大半が上層からの出土である。図示した土器の他、第201図47の石包丁が出土した。

出土土器 (図版65、第159図)

土師器 (4~13) 4は須恵器坏蓋の器形を模した蓋で、内面にわずかにかえりが付く。5~7は碗である。6は口縁部が外反し、端部が尖る。8・9は皿で、口縁部が短く内湾して上方を向く。10~12は小型の甕で、12は肩部が張らない。

須恵器 (14~18) 14~16は坏蓋。14は古相であり混入品か。15・16は内側に短いかえりが付く。17は坏で、口縁部がわずかに外反する。18は甕の胴部で内面同心円当て具痕、外面平行タタキの後カキ目。

131号土坑 (図版44、第158図)

調査区の中央部、83号竪穴住居跡と67号土坑の間に位置している。2つの楕円形を鈍角に接続したような平面形を呈しているため、2つの土坑が切合っていた可能性もあるだろう。底面はほぼ平らで、壁はやや斜めに立ち上がる。南北方向2.9m、東西方向は最大で3.0mを測る。深さは35cm程である。出土土器からは7世紀後半でも新しい頃が考えられる。

出土土器 (第159図)

土師器 (19~22) 19~21は土師器甕で、それぞれ口径14.0cm、20.2cm、24.3cmを測る。口縁はいずれも横ナデを施し、19・21の胴部は外面タテハケ、内面ヘラケズリで仕上げている。22は土師器甕の屈曲しながら外反する口縁部で、胴部内面にヘラケズリを施している。

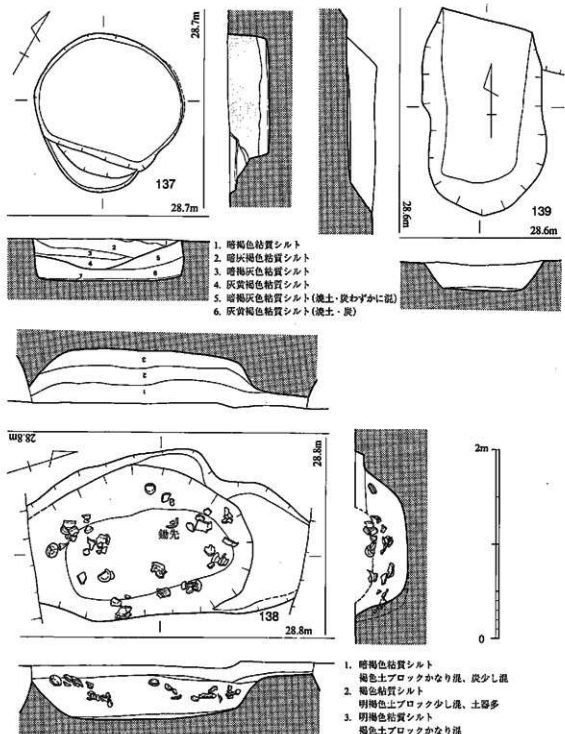
須恵器 (23・24) 23はかえりの付く坏蓋の口縁部である。かえりは口縁部より突出するものの、突出がやや小さくなっている。24は高台のない坏か皿の底部である。底部は接地面ほぼ全体をヘラケズリし、上部は横ナデを施す。

136号土坑

先述したように96号竪穴住居跡隣土坑に変更したため欠番とした。

137号土坑 (図版44、第160図)

調査区西側、町道のすぐ西にあり、33号溝と34・35号溝に挟まれた場所に位置する。直径1.2m程のほぼ円形を呈するが、南東部が80cm余りの幅でわずかに突出している。深さ33cm程を測り、床面はほぼ水平で壁が直立する。壁は床から高さ10cmより上の壁面が顕著に熱を受けて硬化していた。また、床面には2cm程の厚さで焼土・炭層が堆積し、埋土の下部にも焼土、炭が含まれていた。突出部分には床面から高さ25cm程のところに10cm程の幅で弧状にテラスが形成されていた。土坑内に



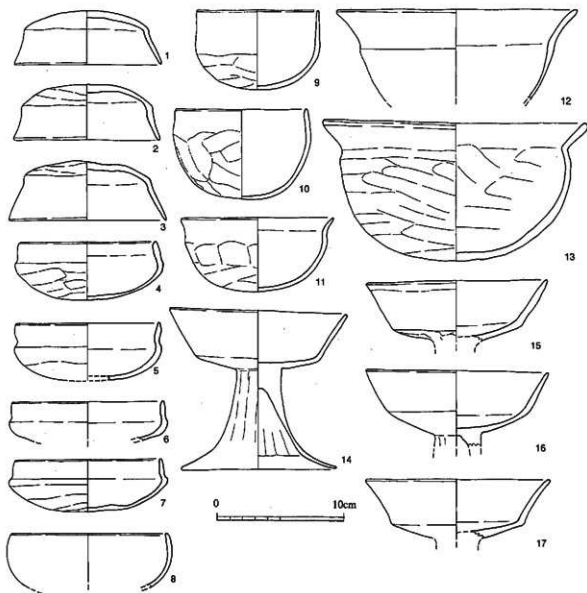
第160図 137~139号土坑実測図 (1/40)

降りるための足場として用いられたものであろうか。以上のような特徴から、何らかの目的のため火を焚いて作業する場所として機能していたと考えられる。

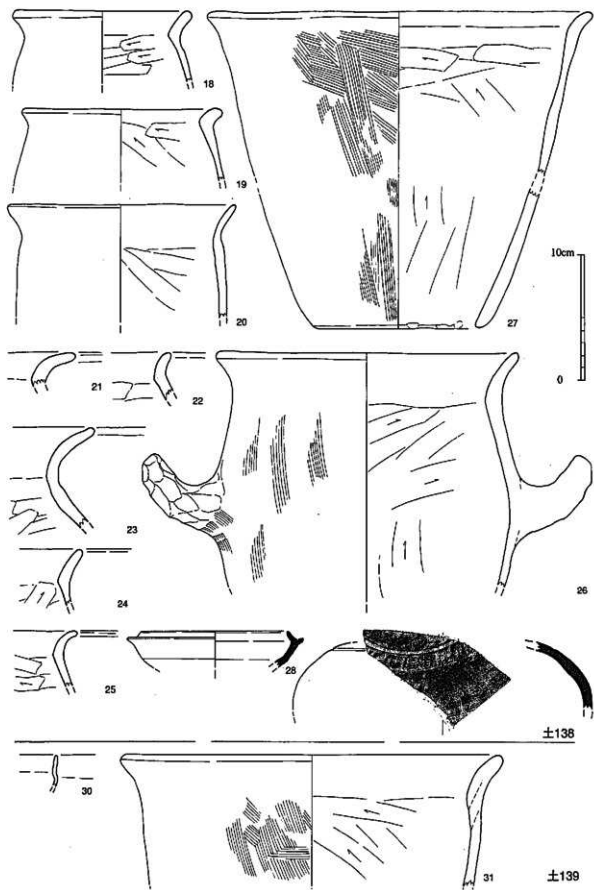
土坑内から出土した土器はいずれも土師器、須恵器の小片で図示できないが、埋土上層は周辺にある33～35号溝埋土と類似していた。それらと近い時期であろう。

138号土坑（図版44、第160図）

調査区の西部、12号掘立柱建物跡の東に位置し、34・40号溝に南北に切られる。楕円形の平面形を呈しているが、西側、北側は床面から高さ45cm程のところまでテラスをなしている。特に北側のテラスは広い。テラスの部分まで含めると南北の現存長2.98m、東西幅1.70m、テラスの内側では南北現存長2.33m、東西幅1.60mを測る。深さは58cm。覆土中の第2層を中心として多量の土器と鉄製鋤先（第206図15）が出土し、時期は6世紀末頃と考えられる。この土坑の西18mのところを同時期の88号竪穴住居跡があり、密接な関連をもつものと考えられる。なお、第3層は無遺物層であった。



第161図 138号土坑出土土器実測図（1/3）



第162图 138·139号土坑出土土器实测图 (1/3)

出土土器 (図版65、第161・162図)

土師器 (1~27) 1~3は坏蓋である。口縁部はかなり高く内傾しており、須恵器の器形とはかなり乖離している。2・3は天井部に手持ちヘラケズリの痕跡が確認される。口径、器高は1が11.5cm、4.3cm、2が11.5cm、4.5cm、3が12.4cm、4.7cmを測る。器形には大差があるが、口径は共伴する28須恵器坏身に近い。4~7は坏身である。底部は丸底で口縁下面に後の甘くなった蓋受部ないしはその痕跡がある。4・5・7の底外面には手持ちヘラケズリの稜線が残る。8は椀で丸底からやや内傾して口縁端にいたる。内外とも摩滅のため調整は不明。口径10.7~11.9cm、器高は4が4.6cm、7が4.2cmを測る。9~11は丸底で椀よりもやや深い器形であるのでひとまず小型の鉢に分類する。口径9.8~12.2cm、器高5.9~7.3cm。9・10は口縁部がほぼ直立し、11は口縁内面に稜をなして外反する。いずれも外面底部を手持ちヘラケズリし、他はナデで仕上げる。12は口径19.1cm、13は口径20.9cm、器高10.5cmを測る中型の鉢である。12は口縁部がわずかに屈曲して外反する。13は内外ともヘラナデを施し、底部が丸く、口縁が鴨面くの字に外反する。14~17は高坏である。完形に復元できる14は口径14.2cm、器高12.6cm、裾径12.3cmを測り、脚柱部内面はヘラケズリ、脚柱部外面はヘラナデ、他の部分はナデで仕上げる。坏部破片の15~17は口径は14.3cm前後で、14を含めて法量にほとんど差がない。いずれの坏部も土師器坏蓋を倒置したような形態で、器壁がかなり薄い。18~25は壺口縁部破片である。18~20はそれぞれ口径14.2cm、15.9cm、17.8cmを測る。18・19・22・25は口縁部が短く、21・23は口縁部が強く屈曲して外反する。20・24はその中間的な形態である。26は把手付きの甕で口径は23.5cmに復元される。口縁部はやや屈曲して外反する。把手は胴部中位に付き強く上方に屈曲する。27は大型甕で把手があったと思われるが、残存部分には見られない。口縁部はわずかに屈曲して外反する。体部は裾から斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁部に至る。口径30.3cm、裾径12.0cmを測る。



138号土坑

須恵器 (28・29) 28は坏身で復元口径11.5cmを測る。口縁部は短く内傾して立ち上がる。29は須恵器の胴部片で、口縁部、把手など残っていないが恐らく提瓶か。肩部に乱れた櫛掛波状文をほどこし、その上方に凹線を巡らしている。28は6世紀末頃に比定でき、土師器も同時期と考えて矛盾はない。出土状況も良好であり、この時期の典型的な一括遺物として評価できるであろう。

139号土坑 (第160図)

調査区の西部やや北寄りに位置し、西に92号堅穴住居跡が隣接する。主軸をほぼ南北にとる長楕円形の平面プランが想定されるが、北側は近現代の溝に切られている。底面は平らで、壁は斜めに立ち上がる。現存長2.2m、幅1.25m、深さ32cmを測る。出土土器から6世紀後半前後で、近接する88・92号堅穴住居跡もその頃であり、138号土坑と同様にこれらの住居群に関連するものであろう。

出土土器 (第162図)

土師器 (30・31) 30は坏身口縁部か。31は口径30.0cm前後に復元される甕口縁部で、口縁部はわ

ずかに外反している。30は6世紀後半頃の時期が考えられる。

井戸

49号井戸 (図版52、第163図)

調査区南東で検出した平面円形の井戸で、検出面では径120cm、底面では径50cm、深さは128cmを測る。掘り方は検出面から40cm、90cmの所で段を持つ。井戸枠は底面に径35cm、高さ40cmの桶を設置し、外側を円礫で裏込めする。また内底部にも円礫を一段敷き詰める。覆土は上層が灰褐色粘質土、下層は黒色粘土の自然堆積である。

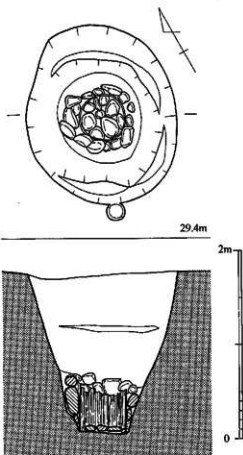
出土土器・陶磁器 (第164図)

土師器 (1~4) 1は小皿で底部糸切り。口径9.8cm、器高1.2cm。2・3は皿。2は底径7.8cm、底部の切り離しは不明。3は底径9.8cm、底部糸切り。4は土師質の土鍋で、口縁部上面に縄目を施文する。

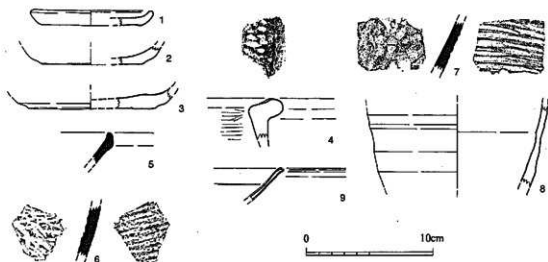
須恵器 (5~7) 5は小型のこね鉢で、口縁部は小さな玉縁となる。6は甕の胴部で内面同心円当て具痕、外面格子タタキ。7もやはり甕の胴部で内面格子当て具痕、外面平行タタキ。

陶器 (8) 8は陶器壺の胴部片。釉は薄灰緑色に発色する。

磁器 (9) 9は口縁部が短く外反する白磁碗。体部内面に一条の沈線を巡らす。



第163図 49号井戸実測図 (1/40)

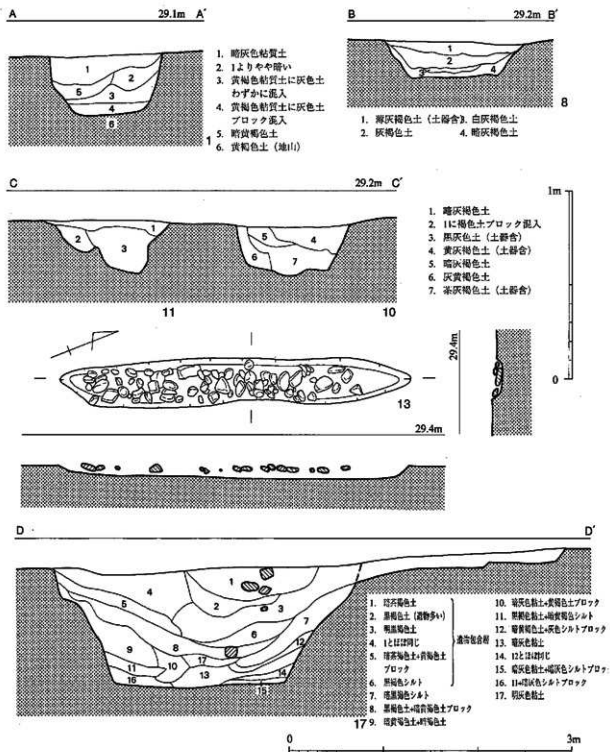


第164図 49号井戸出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

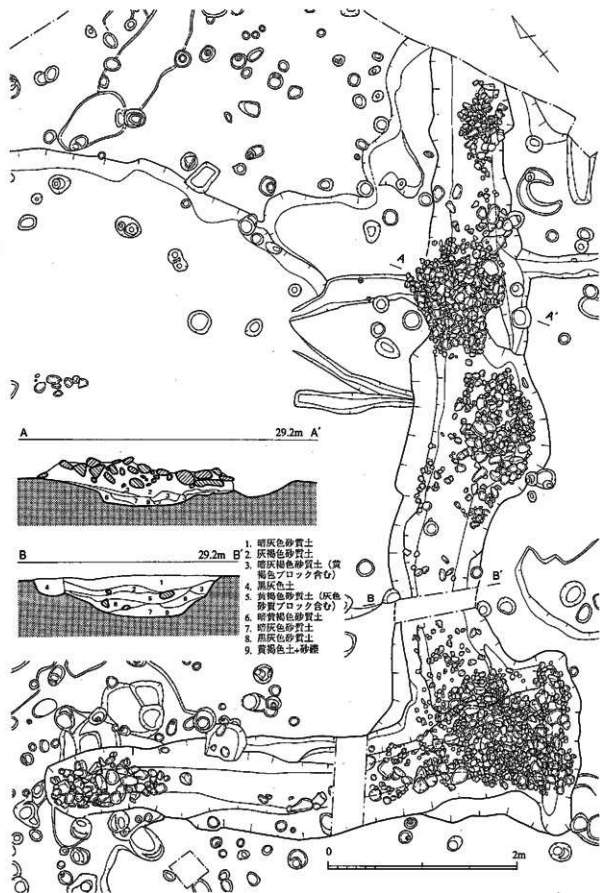
溝

1号溝 (第165図)

調査区中央東側で長さ70mにわたって検出した溝である。幅60cm、深さ30cm、断面の形状は逆台形となる。溝底はほぼ水平で、幅35cmを測る。



第165図 1・8・10・11・13・17号溝断面実測図 (1・8・10・11:1/20, 13・17:1/40)



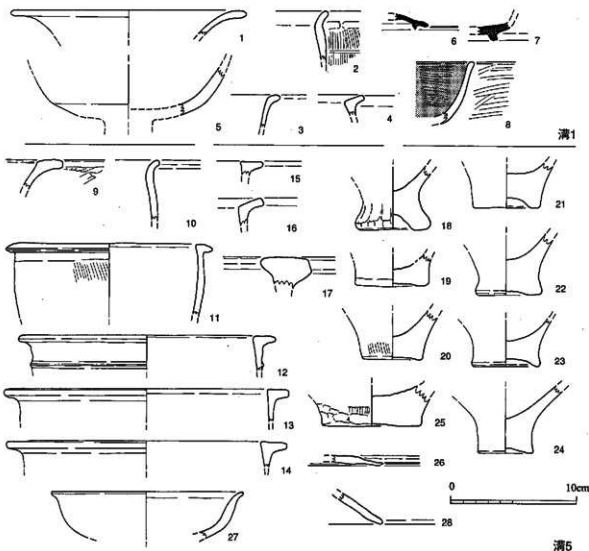
第166図 5号溝実測図 (1/80・1/40)

出土土器 (第167図)

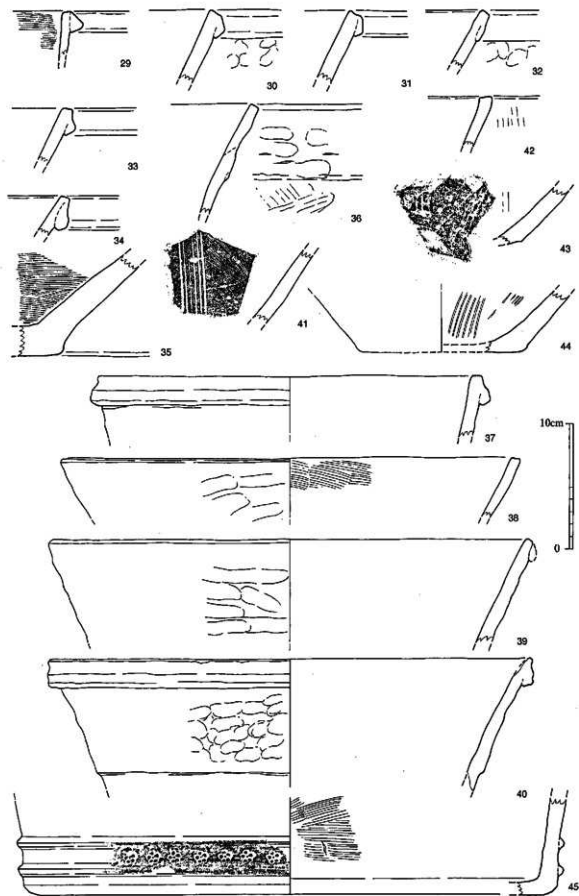
弥生土器 (1~4) 1は口縁部が大きく開く素口縁の甕。2・3は如意形口縁の甕。4は三角口縁の甕。
土師器 (5) 5は高坏の坏部である。屈曲部の稜は不明瞭で内湾気味に立ち上がる。器表が風化しており調整不明。
須恵器 (6・7) 6はかえりの短い坏蓋。7は断面台形に近い高台をもつ坏である。
黑色土器 (8) 8は内面のみ黒色となる黑色土器で、口縁部がわずかに外反する。混入品である。

5号溝 (図版45、第166図)

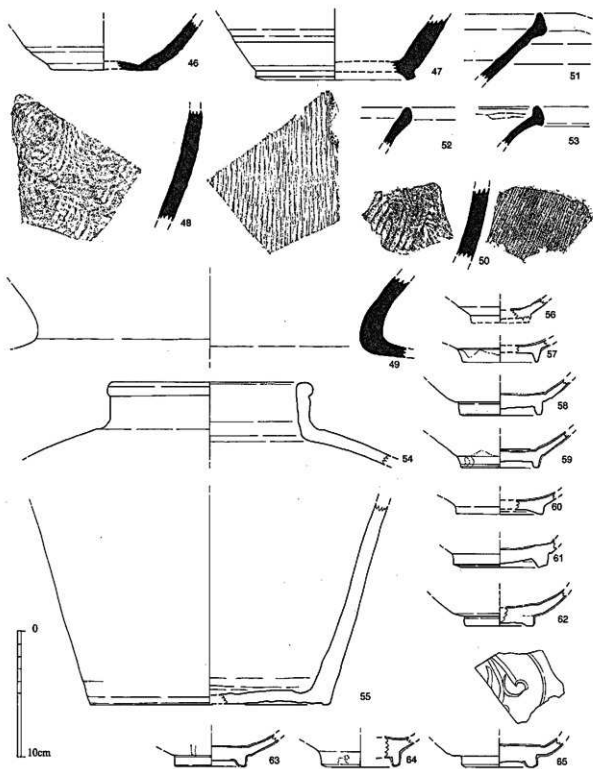
調査区北東端で検出したL字状の溝である。主軸方位を北に対して60°西をとる東西溝は、長さ11.3m、幅は西側1.3m、中央2.2m、東側3.8m、深さは西側80cm、中央70cm、東側40cmを測る。礫は東端と西端に集中し、東端に比べ西端の礫は大型のものが多く、壁の立ち上がりは緩やかで、溝底は平坦である。南北溝は東西溝の東端から1mほど西側に垂直に接続し、やや蛇行する。長さ13.5mに亘って検出しており、北側は調査区外へと伸びる。幅は北側1.6m、中央2.5m、南側2.4m、深さは北側20cm、中央30cm、南側40cmを測り、東西溝に比べて浅い。壁は緩やかに立ち上がり、溝



第167図 1・5号溝出土土器 (1~4・9~25:1/4, 他:1/3)



第168图 5号溝出土土器尖洲图 (1/3)



第169図 5号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

底は凸凹が激しい。礫は3箇所に集中し、特に小溝が接続する部分に多く集中する。この溝は居住域を区画する方形区画溝であろうが、溝で仕切られた区画内は周囲より30cm程すり鉢状に窪んでおり、掘立柱建物跡等は検出されなかった。

遺物は図示した土器・陶磁器の他に、第196図8・13の管状土錘、第199図25・29の打製石斧、第200図34の敲石・36の石錘、第202図69、第203図70・71の砥石、第204図80・86・88・93の滑石製石

銅等、第205図98・100・102・103の石臼、第207図43の鉄滓が出土した。

遺物には混入品が多く含まれる。また溝に伴う遺物にも時期幅が認められる。12世紀代に掘削され、以降14世紀頃まで存続した様である。

出土土器・陶磁器 (図版66、第167～169図)

弥生土器 (9～25) 9は鑊先口縁の壺。10は如意形口縁の甕。11～15は三角口縁の甕で、12～15は端部がやや外側に伸びる。16は口縁部が内傾する甕。17は甕楯に使用される大型甕の口縁部。18～24は甕の底部で、厚いものが多い。25は甕の底部。全て混入品である。

土師器 (26～41) 26は蓋か。27は坏で、口縁部が外反する。28は高坏の脚部。29～40は土師質鍋。口縁部を折り返して玉縁状にするものと、素口縁のものがある。41は土師質播り鉢で、6本の播り目を入れる。

瓦質土器 (42～45) 42は端部上面を面取りする瓦質こね鉢。43・44は播り鉢。45は花文を印刻する火鉢。

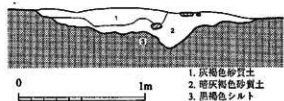
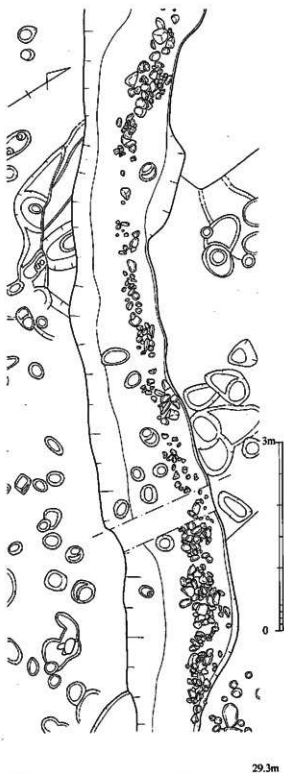
須恵器 (46～53) 46・47は壺の底部。48～50は甕。51～53は口縁部が玉縁状になる須恵質こね鉢。

陶器 (54・55) 54・55は備前系の甕で、接合しないが同一個体であろう。口縁部は短く直立し、端部を丸く仕上げる。肩部は大きく張る。体部下半は直線的で、底部は平坦である。

磁器 (56～65) 56は白磁小椀、57～62は白磁椀である。57～59は高台が高い。58・59は内面に沈線状の段を巡らす。60は高台が低く、高台内面の体部との境が不明瞭である。61・62は器壁が厚く、高台は低い。63～65は高台内部まで施軸する青磁椀。63は外面に鎗蓮弁を巡らす。64は内面に一条の沈線を巡らす。65は内面見込みにキノコ状の文様を片彫りする。

6号溝 (第170図)

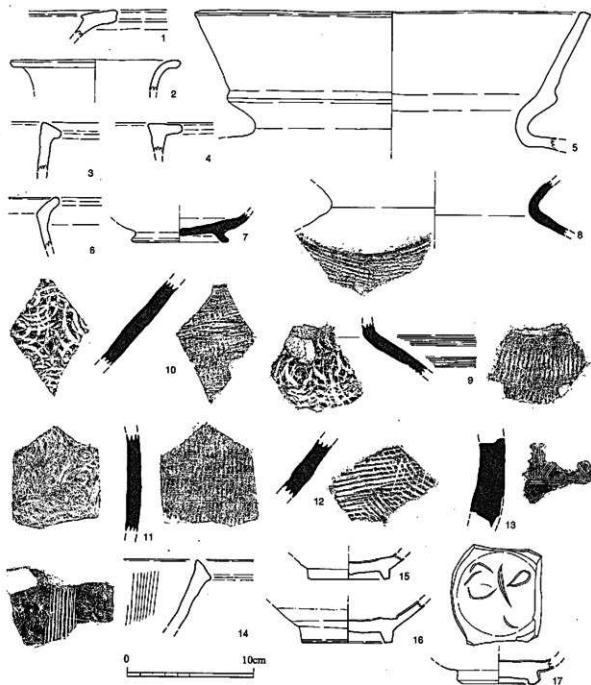
調査区北東で検出したL字状の溝で、5号溝から



1. 灰褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土
3. 黒褐色シルト

第170図 6号溝実測図 (1/60・1/30)

6m南側に位置する。8号溝に切られる。東西溝は5号溝とはほぼ平行し、主軸方位を北に対して65°西にとる。長さ17mに亘って検出しており、西側は調査区外へと続き、東側は土坑状になる(33号土坑)。幅は西側1.8m、中央1.2m、東側1.3m、深さは西側30cm、中央25cm、東側20cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、溝底は凸凹が多い。礫は溝の北半に集中し、溝底からはかなり浮いている。南北溝は東西溝にやや鈍角に接続し、長さ9mに亘って検出した。南側は消滅する。12号溝がこれに続くものと考えたが、同時期の遺物が出土せず、断定するには至らなかった。幅1.2m、深さ5~15cmを測り、東西溝と比べて浅い。礫の集中箇所は認められない。遺物は混入品を多く含むが、それらを除いたものが当溝に伴うものである。時期の決め手には欠けるものの、5号溝と同時期と



第171図 6号溝出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

見て大差ないだろう。図示した土器・陶磁器の他、第196図4の管状土錘、第202図58・67、第203図74の砥石が出土している。

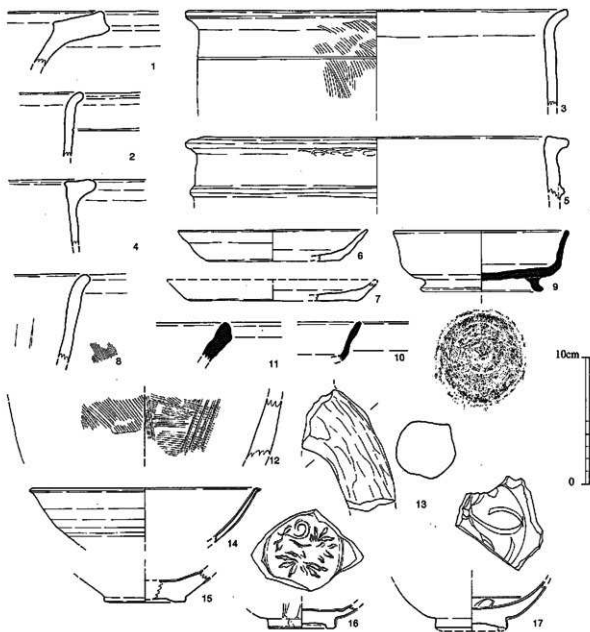
出土土器・陶磁器 (第171図)

弥生土器 (1~4) 1は鬺先口縁の甕。2は素口縁の甕。3は三角口縁の甕。4は短い鬺先口縁の甕。

土師器 (5・6) 5は二重口縁甕で、口縁部は大きく開く。6は口縁部が短く外反する甕。

須恵器 (7~14) 7は高台が長めの坏。8は甕の頸部で、肩部外面には格子タタキを行う。9は平行タタキ後カキ目を廻らす甕の胴部。10~12は甕の胴部片。13は器壁が非常に厚く、内面ナデ、外面ハケ状工具による施文を行う。甕の胴部か。14は口縁部が断面三角形となる須恵質の播り鉢で、10本の播り目を入れる。

磁器 (15~17) 15・16は内面見込みの釉を輪状にかき取る白磁碗。どちらも体部下半以下は露胎。



第172図 7号湧山土器・磁器実測図 (1/3)

17は内面見込みに草花文を片彫りする龍泉窯系青磁碗。外面は高台付近まで施釉する。

7号溝

調査区北東で検出したL字状の溝で、5号溝・6号溝の東側に位置する。10号溝を切り、8・12・14号溝に切られる。南北溝は5号溝とほぼ平行し、主軸方位を北に対して30°東にとる。長さ32.5mに亘って検出しており、北側は調査区外へと続く。幅は北側2.0m、中央1.1m、南側1.7m、深さは北側20cm、中央10cm、南側10cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、溝底は凸凹が多い。礫は溝の南半に若干見られた。東西溝は南北溝にやや鈍角に接続し、検出した部分で長さ17.5mを測る。西端は調査区外へと続く。11号溝と接続するが、遺構の切り合いは認められない。幅0.4～1.2m、深さ5～15cmを測る。遺物は図示した土器の他、第196図2・3・16の管状土錘、第203図76の砥石、第206図18・19の鉄釘が出土している。遺物には混入品が多く含まれるが、溝の時期は5号溝と大差ない時期と思われる。

出土土器（図版66、第172図）

弥生土器（1～5） 1は口縁部が肥厚した壺。2・3は如意形口縁の甕で、口縁部下に一条の沈線を巡らす。4・5は三角口縁の甕で、5は口縁部下に三角突帯を巡らす。

土師器（6～8） 6・7は皿で、6は口縁部が外反する。8は口縁部がやや外反する甗。

須恵器（9～11） 9は高台が比較的高い坏で、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部にはヘラ記号を有す。10もやはり口縁部が外反する坏。11は口縁部が玉縁状になる須恵質こね鉢。

瓦質土器（12・13） 12は瓦質のすり鉢で、内外面ハケメ調整。13は足釜の足。

磁器（14～17） 14・15は白磁碗である。14は口縁部が外側に短く屈折する。15は底部が非常に厚く、高台は低平である。16・17は青磁碗。16は内面見込みに草花文をスタンプし、外面に蓮弁を片彫りする。釉は高台外面まで施釉され、釉色は澄んだウグイス色に発色する。17は内面見込みに草花文を片彫りする。釉は高台外面まで施釉され、釉色は深緑色に発色する。

8号溝（第165図）

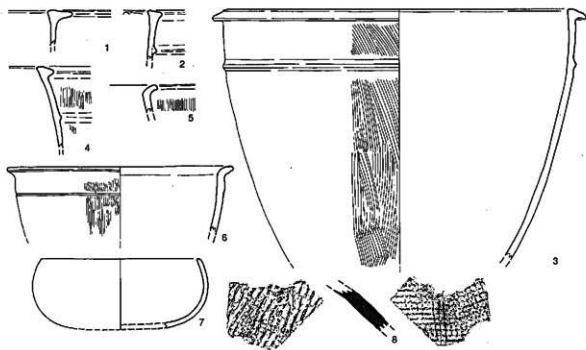
調査区北東で検出したL字状の溝で、6・7号溝を切る。東西溝は5・6号溝とほぼ平行し、主軸方位を北に対して65°西にとる。長さ20mに亘って検出しており、西側は調査区外へと続く。幅90cm、深さ20cm、溝底の幅50cmを測り、断面逆台形となる。東西溝は南北溝にやや鈍角に接続し、検出した部分で長さ5mを測る。段丘崖面に位置しており、後世の造成時に大きく削平される。幅70cm、深さ10cmを測る。溝内からは礫が多く出土した。遺物は少量出土したが、図示した土器は全て混入したものである。これら以外に第201図50の石製紡錘車、第202図68の砥石が出土した。遺物からは時期の比定はできないが、遺構の切り合い関係から12世紀以降のものではない。

出土土器（図版66、第173図）

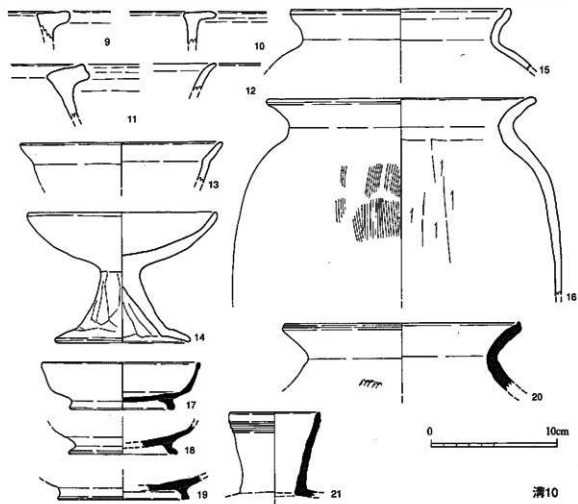
弥生土器（1～6） 1は短い鋤先口縁の甕。2～4は三角口縁の甕で、口縁部下に三角突帯を巡らす。5・6は如意形口縁の甕で、6は口縁部下に一条の沈線を巡らす。

土師器（7） 7は口縁部が内湾する碗で、胎土が精良。

須恵器（8） 8は甕の胴部片で、外面格子タタキ、内面は同心円当て具の後、格子タタキを行う。



清8



清10

第173图 8·10号溝出土土器実測図 (1~6:1/4, 7~21:1/3)

10号溝 (図版46、第165図)

調査区東側で検出した直線的に伸びる溝で、長さ35.2mを検出した。主軸を北に対して22°西にとる。7・11・17号溝に切られ、また北側は調査区外へと伸びる。幅60cm、深さ25cm、溝底の幅40cmを測り、断面は逆台形となる。遺物は混入品を除けば7世紀後半のものである。図示した土器の他に、第196図1の管状土錘、第198図1の石鉢、第207図44の鉄滓が出土している。

出土土器 (図版66、第173図)

弥生土器 (9~11) 9・10は口縁部の外脣が短く伸びた甕。11は口縁部が内傾する甕で、端部が肥厚する。

土師器 (12~16) 12は口縁部が外反する椀である。13は口縁部が短く外反する鉢で、混入品である。14は坏部が碗形となる高坏である。15・16は口縁部が外反する甕で、15は器壁が薄い。

須恵器 (17~21) 17~19は長めの高台をもつ坏。20は甕の口縁部で、口縁端部を面取りし、1条の沈線を巡らす。21は提瓶等の口縁部であろう。口縁部に2条の沈線を巡らす。

11号溝 (第165図)

調査区北東で検出した溝で、北端は調査区外へと伸び、南端は7号溝に接続する。遺構確認時に10号溝との先後関係を把握できなかったため、10cmほど掘り下げた後に再度確認を行い、11号溝の方が新しいと判断するに至った。長さ9m、幅70cm、深さ30cmを測る。溝底は若干凸凹がある。遺物は図示した土器・陶磁器の他、第196図8・17・19の管状土錘が出土した。

出土土器・陶磁器 (第174図)

弥生土器 (1) 1は三角口縁の甕で、口縁部下に1条の沈線を巡らす。

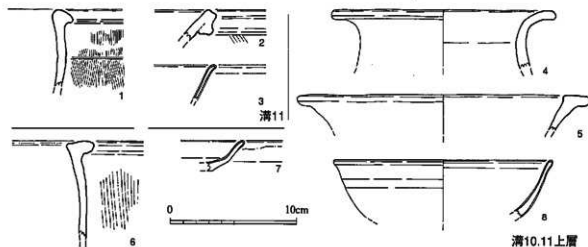
土師器 (2) 2は土師質鍋の口縁部で、端部を外側に折り曲げて玉縁状にする。

磁器 (3) 3は青磁碗の口縁部で、器壁が薄い。釉色はくすんだ緑色。

10・11号溝上層出土土器 (第174図)

弥生土器 (4~6) 4は素口縁の甕。5は未発達な鋤先口縁甕。6は三角口縁の甕。

磁器 (7・8) 7は口縁部が外反する白磁皿。外面は口縁部以下露胎となる。8は白磁碗。



第174図 11号溝、10・11号溝上層出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

これらの土器・磁器の他に、第196図7・10・20の管状土錘が出土した。

13号溝 (第165図)

調査区北東で検出した小溝で、16号竪穴住居跡を切る。長さ3.7m、幅50cm、深さ7cmを測る。内部からは多くの礫が出土した。出土遺物は1袋と非常に少なく、16号竪穴住居跡からの混入品が大半である。細片で図示できるものはない。

14号溝

調査区北東で検出した小溝で、16号竪穴住居跡、12号溝を切る。長さ5.2m、幅50cm、深さ10cmを測る。遺物は弥生土器が数点出土しただけで、この溝に伴う時期の遺物は出土していない。細片で図示できるものはない。

16号溝

調査区東端で検出した小溝で、10号溝にほぼ平行する。長さ8m、幅80cm、深さ10cmを測る。遺物は全く出土しなかった。

17号溝 (図版46、第165・175図)

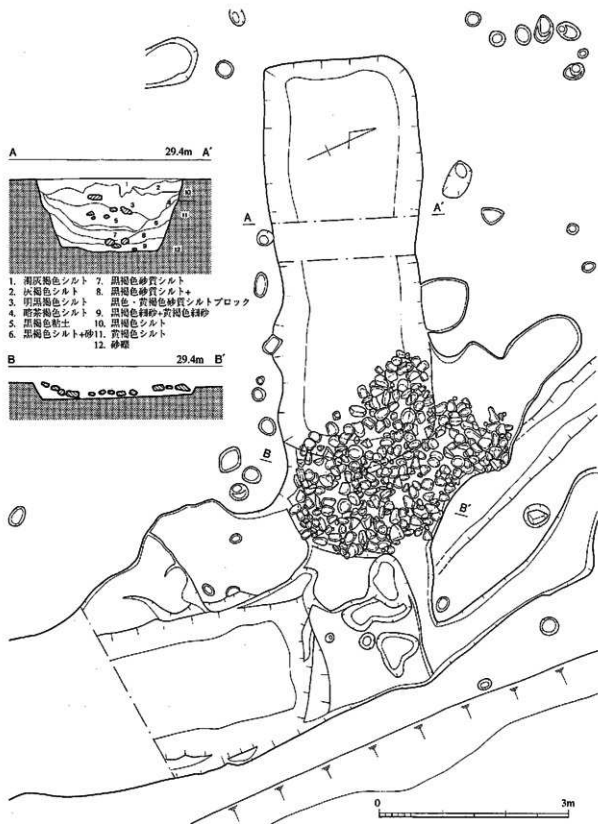
調査区南東で検出したL字状の溝である。主軸方位を北に対して70°西にとる東西溝と、同じく10°東にとる南北溝とからなる。東西溝は長さ6.5m、幅2.2m、深さ1.35mを測り、大きな長方形状になる。底面はほぼ平坦で、長さ5.7m、幅1.65mを測る。南北溝は長さ12mに亘って検出しており、南側は調査区外へと伸びる。幅3.3m、深さ1.3m、底面はほぼ平坦で、幅1.9mを測る。西側には溝の覆土上層と同じ黒褐色土が広がるが、これは溝の壁が漏水のため崩壊したものであろう。南北溝と東西溝とは鈍角に屈曲し、屈曲部付近は深さ10~20cmと非常に浅くなっている。底面は凸凹を形成しており平坦ではない。またこの屈曲部の西側では径2.5mの広さで円礫を敷き詰めた場所を検出した。遺物は比較的多いが、大半が上層出土で下層はほとんど出土していない。図示した土器・陶磁器の他、第198図11のスクレイパー、第199図21の黒曜石原石・27の打製石斧、第201図41の挟入片刃石斧・46の石包丁、第202図62~64、第203図75の砥石、第204図78・79・81・82・83・87・89・92・95・96の滑石製石鍋等、第205



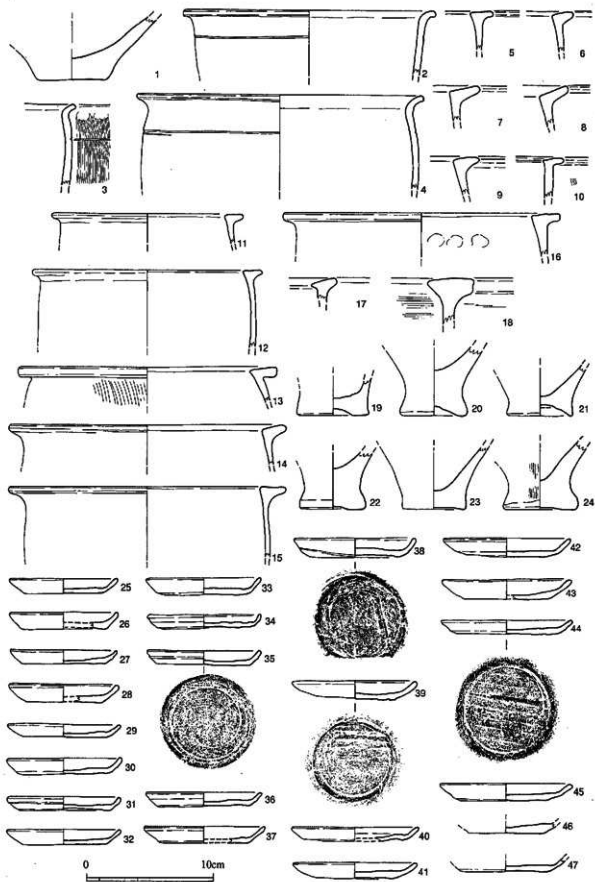
17号溝



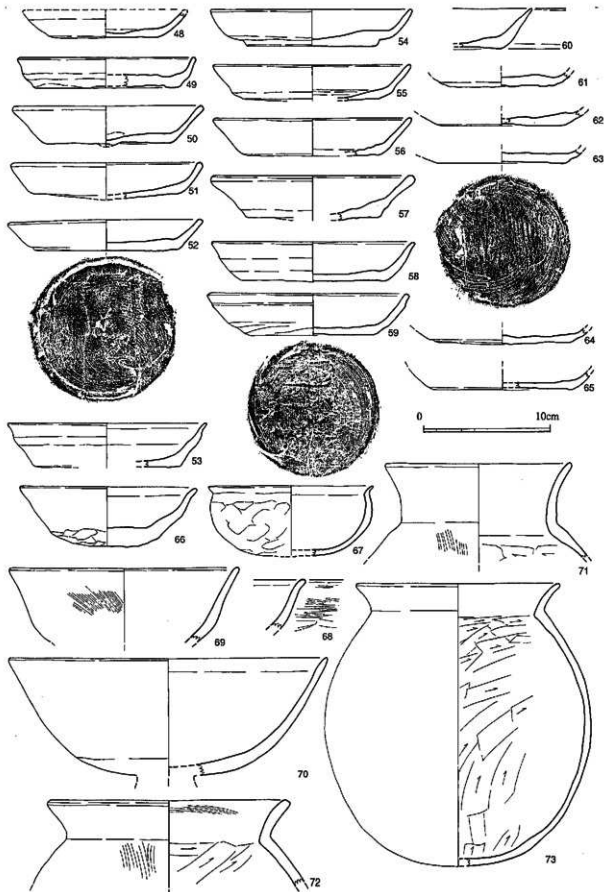
17号溝遺物出土状態



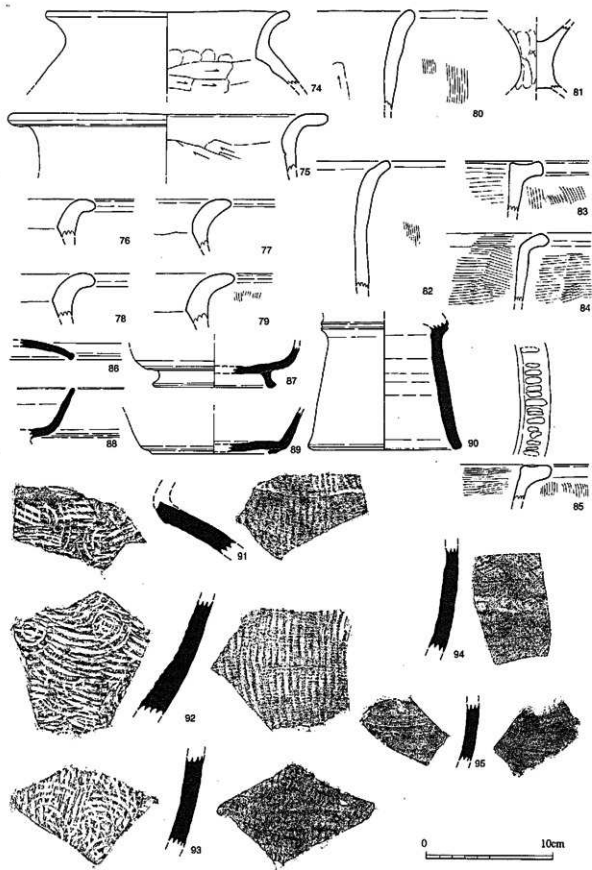
第175図 17号溝屈曲部付近実測図 (1/60)



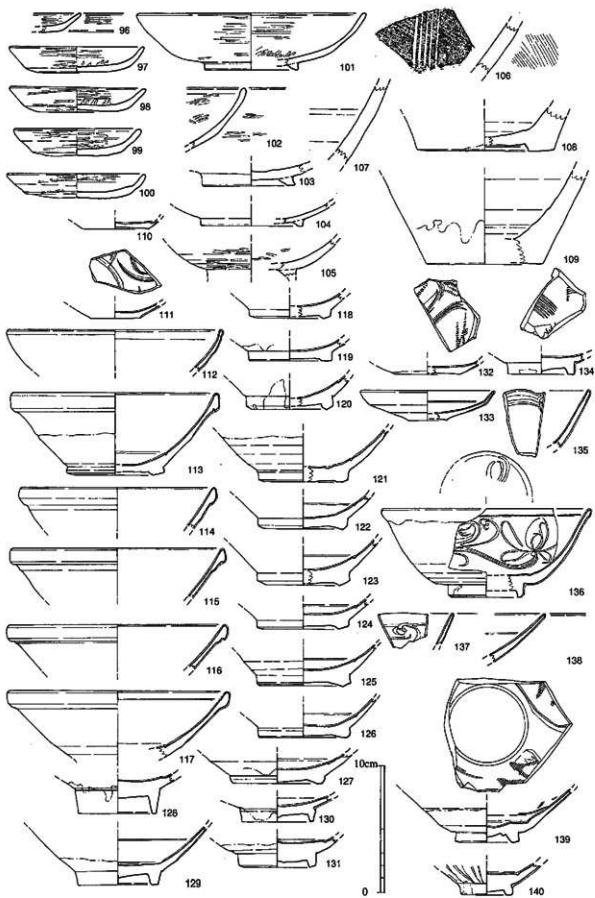
第176图 17号溝山土器実測図① (1~24: 1/4, 25~47: 1/3)



第177图 17号清出土器实测图② (1/3)



第178图 17号清出土土器实测图③ (1/3)



第179图 17号溝出土土器·陶磁器実測図 (1/3)

図97の石臼が出土した。混入品を除く出土遺物の時期は若干時期幅を持つようであり、12世紀中葉～13世紀前半頃に位置づけられるものである。

出土土器・陶磁器（図版66・67、第176～179図）

弥生土器（1～24） 1は壺の底部。2～4は如意形口縁の甕で、口縁部下に1条の沈線を巡らす。5～16は口縁端部の外側が短く伸びる甕。17は内側に短く伸びる甕の口縁。18は甕棺に使用する大型甕の口縁部で、内外に短く伸びる。19～24は厚い甕の底部。全て混入品である。

土師器（25～85） 25～47は小皿。口径8.6～10.3cm、器高1.1～1.5cm、底径6.2～7.8cmを測る。底部は糸切りを行うが、丁寧なヘラナデ調整が認められるものがある。48～65は皿で、口径13.5cm～14.7cm、底径9.7～11.0cmを測る。底部は糸切りだが、丁寧なヘラナデ調整を行うものもある。66は口縁部が大きく開く鉢。67は体部上半が直立し、口縁部が外反する鉢。68～70は高坏で、70は口径25cmを測る大型品。70～79は甕。71は口縁部が長く、頸部が縮まる。75は胴部があまり張らない。80は口縁部がほとんど開かない甕。81は高坏形の小型手づくね土器。82は土師質銅で、口縁部は短く外反する。83～85は口縁部が外側に屈曲する土師質銅で、内面は横ハケメ調整。85は上面に縄目押圧の刻目を施す。これらの土師器のうち、66～73・81は明らかに古墳時代中期のものであり、当溝に切られた21号整穴住居跡に帰属するものである。

須恵器（86～95） 86は端部を僅かに下方に丸くつまみ出す壺蓋。87は長い高台をもつ坏。88は直線的に開く口縁部の坏。89は低い高台の坏で、口縁部は直線的に開く。90は類例を知らないが、非常に長い高台となる壺のようなものか。91～94は甕。95は提瓶であろう。

瓦器（96～106） 96～100は小皿で、口径10.6～11.0cm。101～105は椀で、101は口径18.0cm、器高5.1cm、高台径7.4cmを測る。106は瓦質摺り鉢で、摺り目は5本。

陶器（107～109） 107～109は褐軸陶器の壺。108は低い高台状になる。109は平底。

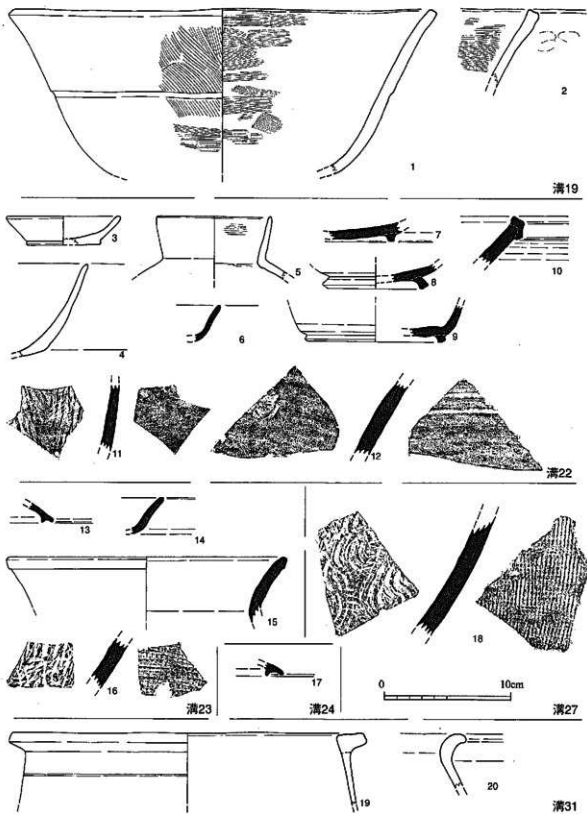
磁器（110～140） 110～131は白磁である。110・111は皿。110は内面に沈線状の段を入れている。111は見込みに草花文を片彫りする。112は口縁内面に浅い段を有した椀である。113～117は口縁部を玉縁状にする椀である。118～127は高台部が低い椀である。120～127は内面に沈線状の段を巡らす。128は高い高台の椀で、内面に沈線状の段を巡らす。129～131はやや低めの高台の椀で、129は内面の軸を輪状に掻き取り、また内面中位に1条の沈線を巡らす。130・131は内面に沈線状の段を巡らす。132～140は青磁である。132は内面にヘラ・櫛による文様を施文する皿。133は焼きが非常に悪い皿。体部下半以下は露胎となっている。134～140は椀である。134は櫛による文様を施文する。135は口縁部が花卉形になる。136・137は内面にヘラによる花文を片彫りする。138は無文で、内面体部中位に1条沈線を巡らす。139は内面にヘラ・櫛による花文を施文する。140は外面に編遊弁を片彫りする。

19号溝

調査区東側で検出したL字状の小溝。東西溝は主軸方位を北に対して80°西にとる。長さ3.1m、幅60cm、深さ5～10cm。南北溝はこれと直交し、長さ70cm、幅45cm、深さ5cmを測る。溝の形状から掘立柱建物の雨落ち溝のようなものと考えたが、肝心の掘立柱建物の方は不明である。

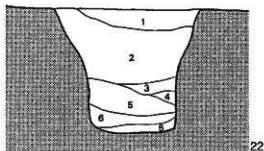
出土土器（第180図）

土師器（1・2） 1・2とも土師質の鍋。口縁上端を面取りする。1は外面に炭化物が多く付着する。



第180图 19·22~24·27·31号晋出土土器实测图 (1/3)

E 28.9m E'

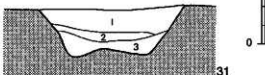


1. 暗褐色粘質シルト土 (黄褐色シルトわずかに混)
2. 褐色粘質シルト土
3. 暗褐色粘質シルト土
4. 3より厚く粘性あり
5. 暗灰褐色粘質土
6. 暗褐色粘質シルト土 (黄褐色粘質シルト土、括弧色粘質土) (ブロック30%混)

F 29.2m F'

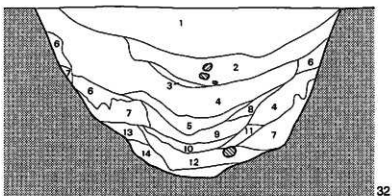


G 29.0m G'



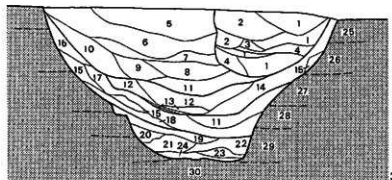
1. 暗灰褐色粘質シルト土 (均質)
2. 褐色粘質シルト土 (黄褐色粘質シルト土混、下部砂分混)
3. 暗黒褐色粘質土 (褐色粘質土底状に30%程度混)

H 29.1m H'



1. 褐色砂質シルト (砂・礫多)
2. 暗褐色シルト土
3. 暗灰褐色粘質シルト土 (2のブロック10%混)
4. 暗灰褐色シルト土 (2底状に混)
5. 黄灰褐色シルト土 (砂分混、暗黒褐色粘質土10%混)
6. 暗褐色粘質土 (池山崩落)
7. 黄褐色シルト土 (池山崩落)
8. 暗灰褐色粘質シルト土
9. 灰褐色シルト土 (砂分多、暗褐色シルト土) (20%程度状に混)
10. 灰黄褐色シルト土 (灰褐色シルト土底状に30%混)
11. 黄褐色粘質シルト土 (池山崩落)
12. 灰褐色砂質シルト土 (11ブロック20%程度混)
13. 黄褐色砂質土 (池山崩落)
14. 灰褐色砂質土 (砂分多)

I 28.6m I'



1. 灰褐色土
2. 褐色シルト土
3. 暗灰褐色粘質シルト土
4. 暗褐色シルト土
5. 褐色シルト土 (池山崩落混5%混)
6. 褐色粘質シルト土
7. 灰褐色粘質シルト土 (浮砂土・粘性土混20%混)
8. 暗灰褐色粘質シルト土 (池山崩落)
9. 暗灰褐色粘質シルト土
10. 褐色粘質シルト土 (浮砂土、黄褐色土ブロック0%混)
11. 灰褐色粘質シルト土 (浮砂土・黄褐色土ブロック10%混) (褐色土混5%混)
12. 暗灰褐色粘質土
13. 灰褐色
14. 灰褐色粘質シルト土
15. 暗褐色粘質土 (池山崩落)
16. 褐色粘質シルト土
17. 灰褐色シルト土 (黄褐色土ブロック5%混)
18. 暗褐色粘質シルト土
19. 暗灰褐色粘質土 (黄褐色土ブロック5%混)
20. 灰褐色土
21. 暗褐色粘質シルト土 (黄褐色土ブロック5%混)
22. 灰褐色砂
23. 灰褐色粘質土 (浮砂土、黄褐色土ブロック10%混)
24. 灰褐色 (砂分混)
25. 暗褐色粘質シルト土
26. 暗褐色粘質シルト土
27. 暗褐色粘質シルト土
28. 暗灰褐色粘質シルト土
29. 黄褐色粘質土
30. 暗灰褐色砂 (10m以上露多)

第181図 22・30～32号溝断面実測図 (32号溝：1/40，他：1/20)

22号溝 (図版47、第181図)

調査区中央部やや西より位置し、北西-南東方向に延びるほぼ直線的な溝である。幅は中央部でやや広くなり1.0m前後、南北調査区境近くでは0.7mである。深さは南半が80cm前後、北半は浅いところで55cm程であるが、これは北半の遺構面標高が低いためである。断面は逆台形を呈し、壁は急傾斜で立ち上がる。底面の標高は28.05~28.15mを測る。土層は自然堆積と考えられるものであった。29号竪穴住居跡、5号掘立柱建物を切り、30号竪穴住居跡、32号溝に切られている。遺物は図示したもの他、第198図14のスクレイパー、第207図35の鉄製品が出土した。

出土土器 (第180図)

土師器 (3~5) 3は口径9.0cm、器高2.3cmを測る平底の土師器坏である。4は高坏口縁部、5は甕でいずれも5世紀のもの。

須恵器 (6~12) 6~9は高台付きの坏身で7世紀後半~8世紀前半。10は須恵器甕口縁部で、11は甕の胴部片。12は内外を丁寧なナデを施すので、鉢の可能性がある。

23号溝

調査区中央部の南壁から北にのびて途中で途切れる浅い溝である。ほぼ南北を向くが、北側がやや東に曲がる。幅0.7m程、深さ15cm、底面標高28.75m前後である。断面逆台形を呈する。32・37号竪穴住居跡を切っていることから7世紀後半以降である。図示した土器の他、第207図38の鉄洋が出土している。

出土土器 (第180図)

須恵器 (13~15) 13はかえりの付く坏蓋、14は坏身口縁部片、15は甕口縁部片である。

24号溝

調査区中央部を23号溝と2.5m程の間隔でほぼ平行するように走る浅い溝で、23号溝と同様に途中で途切れている。幅1.1~0.5mで揃っておらず、深さは10cmに満たない。底面標高は28.85m程であるが、大小の凸凹が生じている。33・34号竪穴住居跡を切っているため、23号溝と同様に7世紀後半以降のものである。

出土土器 (第180図)

須恵器 (17) かえりの付く坏蓋口縁部である。

27号溝

調査区中央部やや南寄りの8号掘立柱建物跡の北西隅付近から始まり途切れ途切れに北西に走る細い溝である。溝は42号竪穴住居跡の覆土を掘り込み、8m程して25号溝と交差する地点で無くなる。幅0.2m、深さ10cm前後である。42号竪穴住居跡、8号掘立柱建物跡、25号溝を切っている。

出土土器 (第180図)

須恵器 (18) 須恵器甕の胴部片である。

28号溝 (図版47)

調査区中央部を南北に横断する溝で、途中、31・32・35・37～40・84号竪穴住居跡に切られている。方向は北北西―南南西であるが、北はやや西に振っている。幅0.7m程、深さ40cm弱であるが、調査区北壁付近では遺構面が低いため幅0.35m、深さ5cm程と小さくなる。底面標高は28.65～28.55mで北側がわずかに高くなる。須恵器片を含むが弥生土器が主体である。また、他の弥生時代遺構と覆土が類似していたので弥生時代の可能性が高い。

30号溝 (第181図)

調査区中央部やや北よりに位置し、83号竪穴住居跡を切る溝である。南北方向に走り、長さ8m程を検出した。

幅0.5m、深さ10cm程の浅い溝で、床面標高は28.9m前後。断面逆台形を呈し、埋土は灰褐色粘質土であった。図示できる遺物は無いが、覆土から考えて古墳時代以降と思われる。

31号溝 (第181図)

調査区中央部やや西よりに位置し、「住居29北東黒褐色土」の東から始まり、途切れながら96号竪穴住居跡の東を走り、調査区外へと続いていく。「住居29北東黒褐色土」自体がこの溝の覆土であった可能性があり、恐らく22号溝から分岐した溝であろう。南部で幅0.6m、深さ20cm程で、調査区北壁際では検出面が低いため幅0.35m、深さ10cm程になる。床面標高は28.6m前後。断面は逆台形を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は自然堆積の状況を呈していた。出土遺物より8世紀を中心とするものである。

出土土器 (第180図)

弥生土器 (19) 弥生時代中期前半の甕口縁部と考えられる。口縁よりやや下に1条の沈線を巡らしている。

土師器 (20) 甕口縁部小片で8世紀にまで下るものだろう。

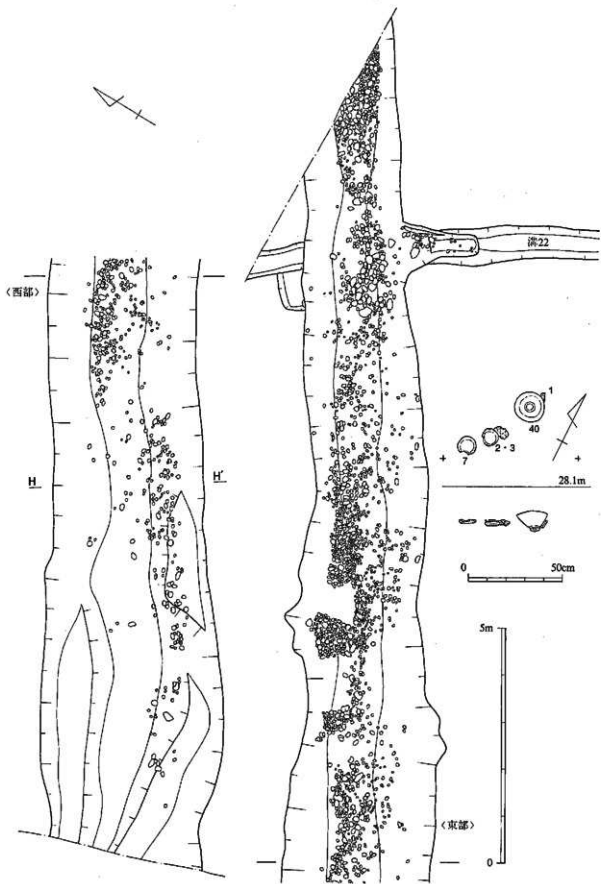
32号溝 (図版47～49、第181・182図)

調査区西部の町道を挟んで東北東―西南西に直線的に走る大溝で、85号竪穴住居跡、22・33～36号溝を切っている。町道より東側では幅2.0～3.2m、深さ150～170cm、標高27.0m余りである。覆土上面には拳大～人頭大の石が堆積していた。

また調査区北壁から12m程南西の標高27.9m前後の深さで青磁椀1点と土師器皿5点が並んで出土した。町道より西側では幅4.1～3.15m、深さ180cm程である。底面標高は26.6～26.9mを測り、町道東側より低くなる。断面は全体的にU字形を呈し、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は下部が鉄分を多く含む層と、細砂と地山の崩落土が互層に堆積し、流水、湛水、壁の崩落を繰り返したと思われる。上部は町道東に見られる石を多く含む層の解釈が難しいが、それ



32号溝遠景



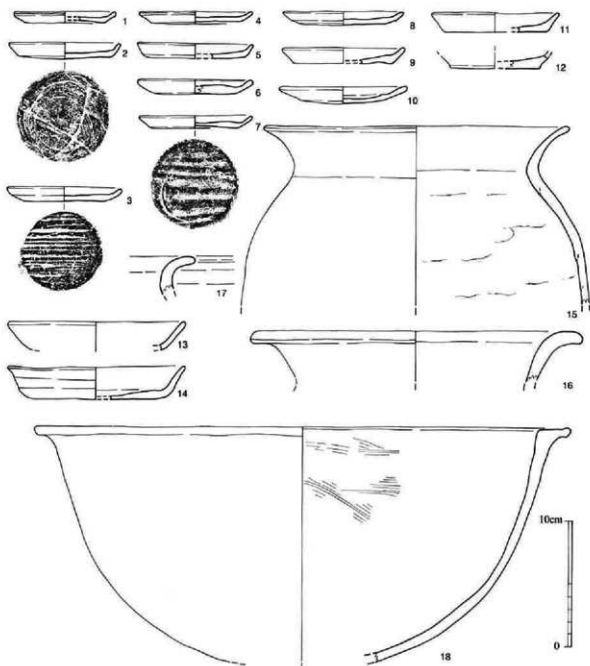
第182图 32号溝・同冚磁碗・土師里出土状況実測図 (1/80・1/20)

を除けば自然堆積と理解してよいと思われる。

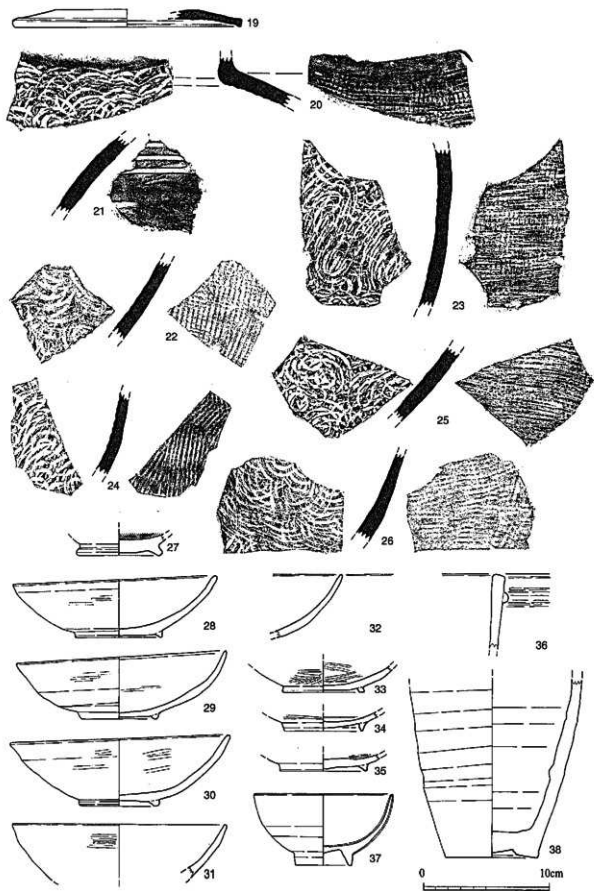
この溝の西南西はさらに調査区外へと続くが、現在は溝の延長線上に宅地の境界が置かれている（図版3参照）。出土遺物から埋没時期は13世紀前半と考えられるが、その後、現代にいたるまで土地の区画として引き継がれていたと言える。また、22号溝と切合う部分では32号溝の覆土が22号溝の方向に突出していた。両者の間には時期差があるが、22号溝の埋没後もそのラインが区画として意識されていたことを示すもの



32号溝遺物出土状態



第183図 32号溝出土土器実測図 (1/3)



第184图 32号清出土土器·陶器实测图 (1/3)

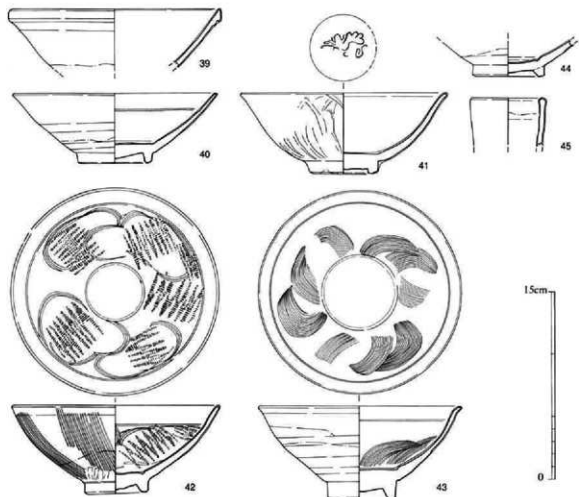
であろうか。出土遺物から12世紀中葉頃に掘削され、13世紀前半頃に埋没したものと思われる。

出土土器・陶磁器 (図版67、第183～185図)

土師器 (1～18) 1～12は小皿で口径8～10cmで、9cm前後に中心がある。底部は8・10はヘラ切り、他は糸切りである。3と7には糸切りの後、板状圧痕が付いている。なお、1～3・7は41の青磁と並んで出土したものである。13・14は土師器の坏でいずれも復元口径14.0cm。14は茶褐色～茶灰色でかなり硬く焼成されており、底部には板状圧痕が残っている。15～17は土師器の甕である。15は5世紀のもので内面に粘土紐接合痕が明瞭に残っている。16・17は7～8世紀のものか。18は口径42cmに達する大型の鍋である。胴部は丸く、口縁部が水平に屈折して、上方に幅広の面が形成される。内面はハケをナデ消しており、外面はナデである。



32号溝遺物出土状態



第185図 32号溝出土磁器実測図 (1/3)

須恵器 (19~26) 19は口縁部がわずかに三角形に突出する蓋である。20~26は莖破片で、20は頸部、21は口縁部、他は胴部破片である。これらの須恵器はいずれも先行する遺物の溝に流入したものであろう。

黒色土器 (27) 内面黒色の椀で、底部には低く踏ん張った高台が付き、内面はミガキを施す。10世紀のものと考えられ、やはり溝に直接伴うものではなからう。

瓦器 (28~36) 28~35は瓦器椀である。高台は低く三角形に近くなったものが多いが、33は低い方形を呈す。ほとんどが摩滅のため調整不明であるが、29・30・33は内外面のミガキが観察される。口径は16.0~17.2cm、器高4.9~5.7cm、高台径6.0~7.0cmを測る。これらは12世紀後半を中心とするものか。36は瓦質鉢である。口縁は直立し面をなし、口縁下に低く断面の丸い突帯が付く。

陶器 (37~38) 37は高台付きの椀で、茶色の釉を外面高台直上から内面にかけて施し、高台内外は露胎である。上面から出土したもので、近世の遺物の混入品か。38は褐釉陶器壺の胴下部から底部にかけての破片である。釉の発色は悪く、オリーブ色を呈している。底部外面は回転ヘラズリにより高台風に作り出している。

磁器 (39~45) 39は玉縁口縁の白磁である。41は気泡の少ない緑青色の釉を施した青磁椀である。口縁部は直線的に外反し、内面の口縁端からわずかに下がった所に圈線をめぐらす。高台よりやや上から高台にかけて露胎となる。釉の発色、口縁形態からみてやや特異であるが、底部の形態から考えると同安窯系の青磁か。41は外面に片刃彫りによる鎮蓮弁文を施した龍泉窯青磁椀である。42は同安窯青磁椀の完形品。43も同様に完形の青磁椀である。底部は厚く、口縁部が明瞭に外反する。内面の口縁よりやや下に圈線を巡らし、その下は放射状に菊歯文を施す。外面中位より高台にかけて露胎である。見込みには褐色の泥状附着物が残る。釉は濁った暗灰青色を呈し、不純物がかなり混じっている。釉の発色、器形、文様は独特であるが、底部、口縁部の器形、菊歯文から考えてやはり同安窯系の青磁か。44は青磁椀底部で、釉は緑灰色を呈する。45は青磁壺の口縁部で、内面は口縁下1.5cm程の所まで釉を施す。下は露胎である。これらの磁器類は13世紀を中心とするものである。

これらの土器・陶磁器以外に、第199図28・30の打製石斧、第206図4の刀子・11の鉄鏃が出土している。

33号溝 (図版49、第186図)

調査区西部、町道の西側に位置し、調査区を南北に横断する。調査区南壁から北西方向に延びるが、30m程の所で北に屈曲する。35号溝を切り、32・39号溝に切られている。32号溝より北の部分では幅0.7~0.9m、深さ30~40cmを測る。32号溝の南では2段掘りになり上面では幅2.6mを測り、段部分は幅0.7mで、深さ50cm、段からの深さ25cm程である。この部分の土層では掘り直しの状況を呈しており、段も掘り直し時に形成されたものである。底面標高は北側で28.2m、南側で27.95mで北から南にわずかに傾斜している。出土遺物と切り合いから考えて9世紀~11世紀のものとして推測される。

出土土器 (第187図)

土師器 (1~6) 1は古墳時代の坏蓋。2・3は坏で、3は口径13cmを測る。4は古墳時代の壺口縁部。5・6は7~8世紀の甕口縁部である。

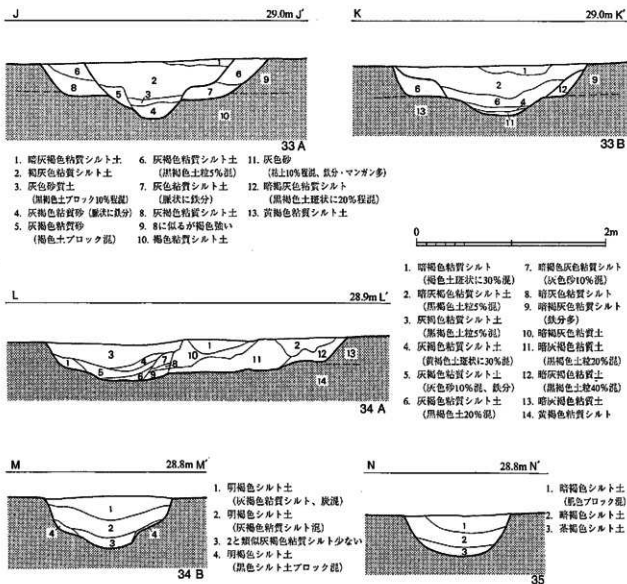
須恵器(7) 8世紀代の高坏脚部である。

34号溝 (図版49、第186図)

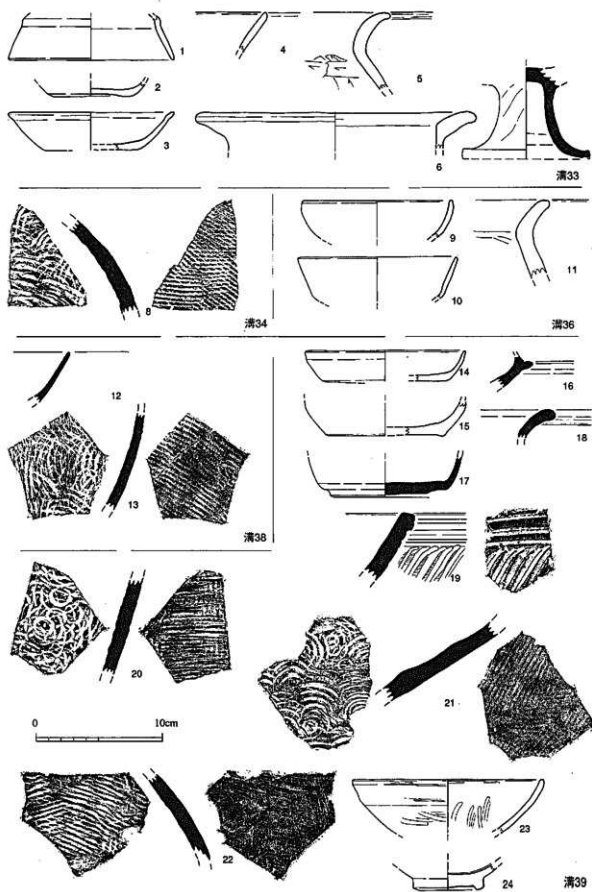
調査区の西側を南東-北西方向に走る溝である。南東部は33号溝と4m程の間隔で平行して走るが、20m程で大きく西に曲がる。88号竪穴住居跡、12号掘立柱建物跡、138号土坑、35・36・38・41号溝を切り、32号溝に切られている。西部では幅1.25m、深さ55cm、底面標高27.9mを測る。32号溝より南東の部分では幅2.5m、深さ50cm、標高28.0mを測る。南東で幅が広がるのは土層図に見るように何回かの掘り直しが行われたためである。西部では断面ゆるやかなU字形を呈している。出土遺物は少ないが、33号溝と一部平行して走るので、9~11世紀頃のものと考えられる。

出土土器 (第187図)

須恵器(8) 甕の胴部片で内面に同心円当てで具痕、外面に平行タタキを施す。



第186図 33~35号溝断面実測図 (35号溝: 1/20, 他: 1/40)



第187图 33·34·36·38·39号清川土器·陶磁器实测图(1/3)

35号溝 (図版49、第186図)

調査区の西側、32号溝と34号溝の交差点付近から始まり北北西にのび、途中で北北東に屈曲して調査区外へと続く。幅0.7～0.4m、深さ20～40cm、底面標高28.35～28.15mでわずかに北から南に傾斜している。断面は緩やかなU字形を呈す。33号溝とほぼ平行するが、33号溝に切られる。図示できる遺物はないが、他の溝との関係を考えて33号溝と同様に9世紀～11世紀頃のものか。

36号溝 (図版49、第188図)

調査区の西側を南東～北西に直線的に横断する溝である。12号掘立柱建物跡、32・34号溝に切られている。幅は0.6～0.7m、深さ30～40cmを測る。底面標高は28.1～28.3mで南から北にわずかながら傾斜している。断面は逆台形を呈し、壁はやや急に立ち上がる。出土遺物、切合いから考えると6～7世紀のものである。

出土土器 (第187図)

土師器 (9～11) 9は椀、10は坏で、6世紀後半～7世紀と考えられる。11は甕口縁部。

37号溝 (図版49)

調査区西側に位置する細くて浅い溝。35号溝の北部にほぼ平行して走るが、長さ3.5m程しか検出してない。幅0.45m、深さ10cm余りで、底面標高は28.45m前後。図示できる遺物はない。

38号溝 (図版49・50、第188図)

調査区西側に位置するほぼ東西方向の溝で、35号溝を切り、33・34・39号溝に切られると考えて発掘した。しかし、33号溝と34号溝に切られる部分より東西には延びないので、両者から分岐した溝の可能性もあるだろう。幅1.75m、深さ25cm、底面標高28.5m程である。断面は壁の傾斜が緩やかな逆台形を呈する。33号溝と同様の時期と考えておきたい。

出土土器 (第188図)

須恵器 (12・13) 12は坏口縁部、13は甕胴部片である。

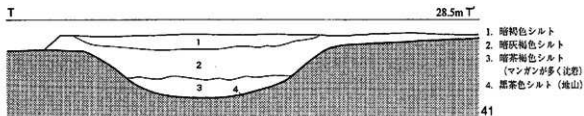
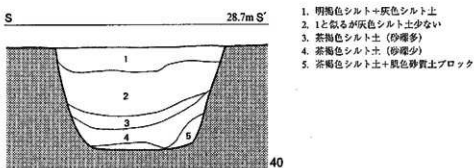
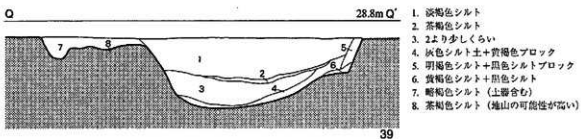
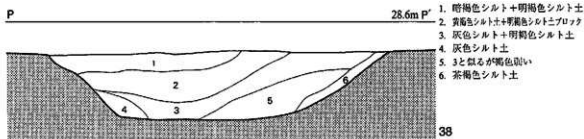
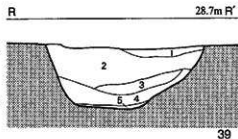
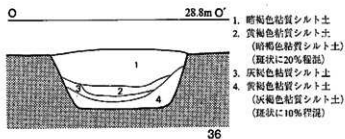
39号溝 (図版49・50、第188図)

調査区西部、町道下より始めて西に延び、10m余りで北西に屈曲して調査区北壁外へと続く。町道の東側では検出してない。東端で幅1.5m、深さ70cmを測る。北壁際では2段掘りになり上面は幅3.1m、段部分で幅1.85mを測り、深さは75cm前後である。底面標高は27.8m前後ではほぼ揃っている。底は丸く、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。33・35・38号溝を切っている。12～13世紀のものである。

出土土器 (第187図)



32～41号溝遺景



第188図 36・38・39～41号溝実測図 (39号溝: 1/40, 他: 1/20)

土師器 (14・15) 14・15は坏であるが、いずれも摩滅のため底部調整は不明である。
 須恵器 (16~22) 16は古墳時代の坏身口縁部。17は8世紀の坏底部片である。18・19は甕口縁部、
 20~22は甕胴部片である。

瓦器 (23) 23は椀の口縁部で内外にミガキを施す。口縁下に微かな稜をなしている。

磁器 (24) 24は白磁の底部片で、外面は露胎である。

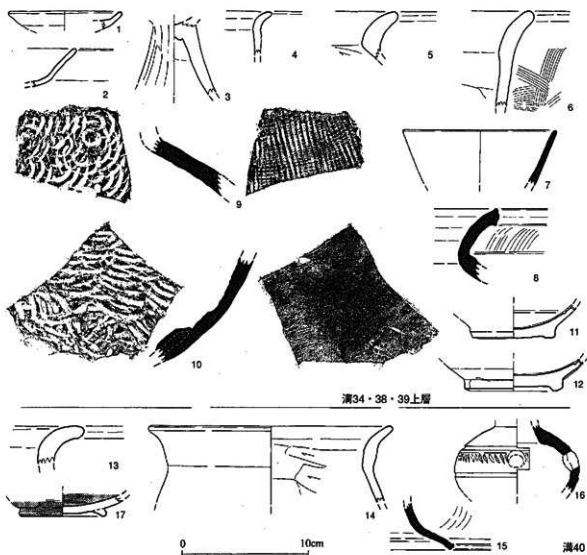
これらの土器・陶磁器の他、第204図85の滑石製石鍋、第206図10の鉄鎌が出土している。

34・38・39号溝上層出土土器 (第189図)

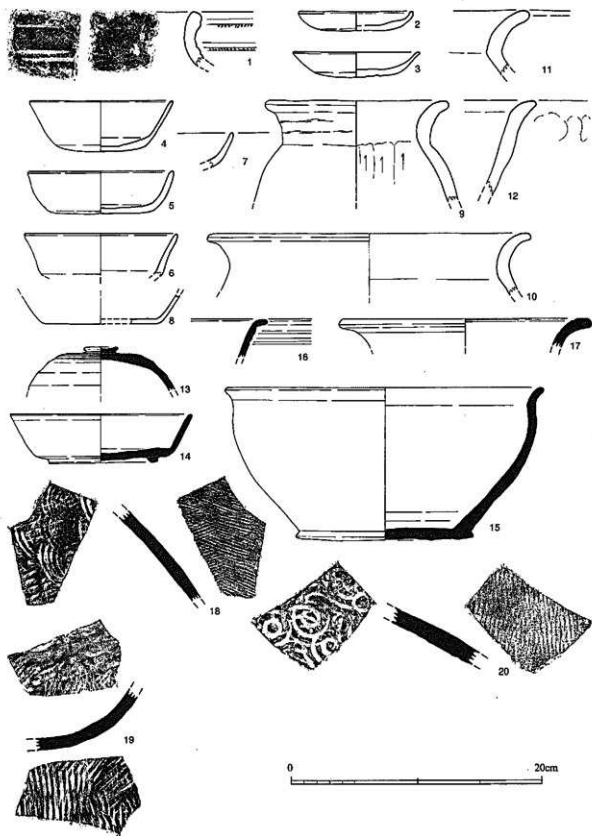
土師器 (1~6) 1は小皿で径9.0cmを測る。2は坏口縁部片であるが、内外とも摩滅のため調整は不明。口縁は直線的に斜めに立ち上がる。3は高坏脚部で、外面にヘラナデによる縦方向の稜が立つ。4~6は甕口縁部。

須恵器 (7~10) 7は小型の壺の口縁部か。8や甕の口縁部で外面に縦方向の線刻を施す。9・10は甕の胴部片である。

磁器 (11・12) いずれも白磁碗の底部である。



第189図 34・38・39号溝上層、40号溝出土土器・磁器実測図 (1/3)



第190图 41号溝出土土器実測图 (1/3)

40号溝 (図版49、第188図)

調査区の西側、38号溝と40号溝の交差点付近から始まり、おおよそ北西方向に蛇行しながら延びる。幅0.65～0.8m、深さ50cm前後、床面標高28.0m前後である。断面逆台形で壁はかなり急傾斜で立ち上がる。138号土坑を切り、38号溝に切られている。

出土土器 (第189図)

土師器 (13・14) いずれも土師器甕の口縁部で6～8世紀のもの。

須恵器 (15・16) 15は廻胴部片で、頸部は締まっている。胴部は凹線をめぐらし、その間に刺突文を施す。15は高坏の脚部か。

黒色土器 (17) 内外黒色の椀底部片である。内外ともミガキを施し、高台は低い。

41号溝 (図版50、第188図)

調査区西側で検出した直線溝で、東側は34号溝に接続し、西側は崖面で消失する。主軸方位を北に対して70°西にとり、長さ32.5m、幅1.3m、深さ35cmを測る。遺物は図示した土器の他、第197図4の焼塩土器、第198図15の黒曜石使用剥片が出土した。遺物には混入品を多く含むが、遺構の時期は9世紀後半～10世紀頃であろう。

出土土器 (図版68、第190図)

縄文土器 (1) 1は有文深鉢で、口縁部の沈線下と、その下の2条沈線間にR L縄文を施す。

土師器 (2～12) 2・3は小皿。2は口径9.0cm、器高1.5cm。3は口径10cm、器高2.0cm、底部ヘラ切り。4～8は体部が直線的に開く坏。9～11は口縁部が強く外反する甕。12は飯または大型の鉢。

須恵器 (13～20) 13は天井部外面にカキ目を巡らす高坏の蓋。14は低い高台の坏。体部は直線的に伸びる。15は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する鉢。胎土・焼成はあまり良くない。兵庫県相野古窯跡群出土品に類似例が見られる。16は坏のようなものの口縁部か。口縁部下にロクロ目が明瞭に残る。器壁は薄い。17は甕の口縁部。18～20は甕の胴部片。

墓

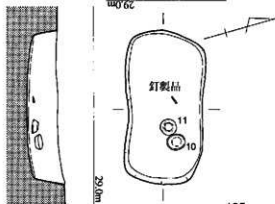
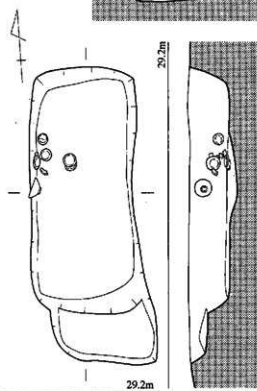
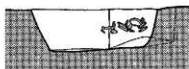
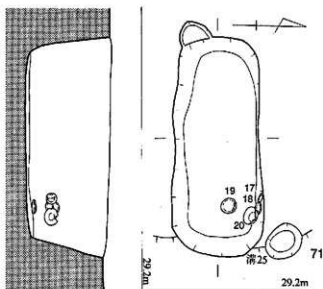
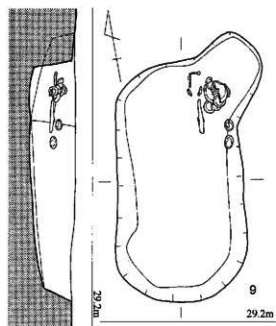
9号墓 (図版51、第191図)

調査区中央東側で検出した。長軸190cm、短軸100cmを測る隅丸長方形の墓塚で、北東側が大きく張り出す。主軸方位は北を向く。底面は長軸175cm、短軸75cm、深さは北側が35cm、南側が20cmを測り、南側が浅くなる。北東隅からは第206図1の小刀、1～14の土師器小皿、15の土師器皿がまとまって出土した。遺物の出土状態および墓塚の形状から、頭位を北に向けたものと思われる。また墳内から第206図20～33の計14点の鉄釘が出土しており、木棺墓であったことが判明した。しかし十字にベルトを残して精査しながら掘り下げていったが、木棺の痕跡は確認できなかった。覆土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が黒灰褐色粘質土からなる。出土遺物は13世紀初頭頃のものである。

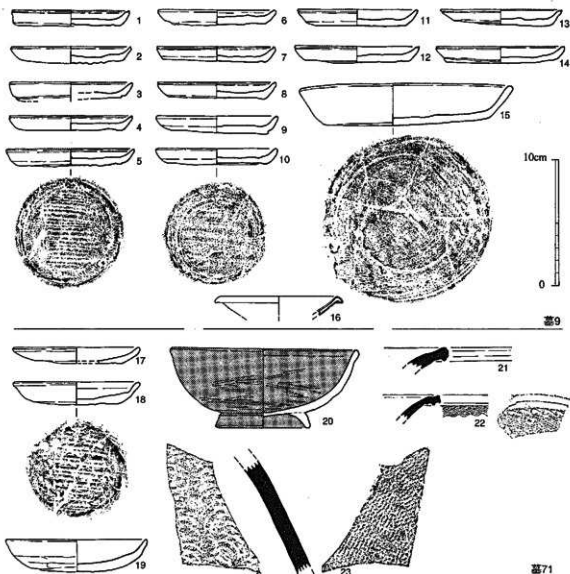
出土土器・陶磁器 (図版68、第192図)

土師器 (1～15) 1～14は土師器小皿で、全て底部糸切り。口径9.3cm～10.0cm、器高1.2cm前後、底径8.0～8.6cm。15は底部糸切りの皿で、口径18.8cm、底径10.6cm。

磁器 (16) 16は口縁部が屈曲する白磁皿。



第191图 9·71·90·135号墓实测图 (1/30)



第192図 9・71号墓出土土器・陶磁器実測図(1/3)

71号墓 (図版51、第191図)

調査区の中央部、42号竪穴住居跡の8m程北西に位置しており、25号溝を切っている。当初は墓とは認識していなかったため木棺の有無の確認、土層図の作成を行っていない。底部近くで土器がまとまって出土して、初めて墓と気が付いた。墓壙はほぼ東西に主軸をもつ隅丸長方形を呈し、長さ1.73m、幅0.66mを測る。深さは65cmである。底面は平らで、壁はほぼ直に近い角度で立ち上がる。東小口の底部付近の床面で土師器皿1点、内を墓壙内に向けて壁に貼り付くようにして土師器皿2点と黒色土器椀が出土した。出土遺物からみて11世紀後半に比定できる。

出土土器 (図版68、第192図)

土師器 (17~19) いずれも床面近くで出土した皿で口径10.0~11.0cm、器高1.2~2.5cmを測る。口縁部は短く、底部はヘラ切りで18には板状圧痕が見られる。

黒色土器 (20) 黒色土器B類の椀である。高台はやや高く、底部から口縁にかけて丸みをおびて立ち上がり、口縁端部がわずかながら外反する。高台を除いて丁寧な横ミガキを施す。

須恵器 (21~23) いずれも墓壇覆土から出土した甍の小片である。21は7世紀以降で、22は初期須恵器か。

90号墓 (図版52、第191図)

調査区中央東側で検出した。長軸185cm、短軸85cmを測る隅丸長方形の墓壇で、南側に深さ15cmの浅い段が付く。主軸方位は北を向く。底面は長軸172cm、短軸72cm、深さは北側が33cm、中央が38cm、南側が32cmを測り、中央付近が若干深くなる。北西壁際および壇底からは土師器小皿が7点、青磁碗が1点出土した。遺物の出土状態および墓壇の形状から、頭位を北に向けたものと思われる。また遺物の大半が壁に貼り付いて出土したことから木棺の可能性を考えて精査したが、木棺の痕跡は確認できなかった。出土遺物は13世紀初頭頃のものである。

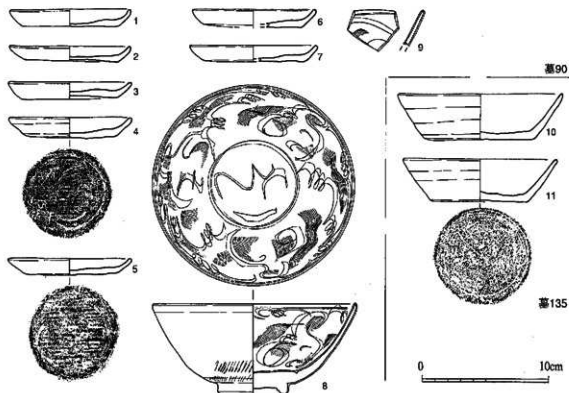
出土土器 (図版68、第193図)

土師器 (1~7) 1~7は底部糸切りの小皿で、口径9.6~10.0cm、器高1.3~1.5cm、底径7.0~7.6cm。

磁器 (8・9) 8は内面にヘラ・柳描きの花文を施文する能楽窯系青磁碗。釉はオリープ色に発色し、高台内面は露胎となる。外面の体部下半にはカンナ痕が巡る。9も同様。

135号墓 (図版52、第191図)

調査区中央部北寄り、82号竪穴住居跡の北に位置する。単なる土坑として発掘したため木棺の有無は確認していないが、床面近くから完形土師器甍が出土したため墓の可能性が高い。墓壇は隅丸長方形を呈し、ほぼ東西方向に主軸をとる。長さ1.20m、幅0.65mで、深さ29cmを測る。墓壇東寄りの底面近くから土師器甍が2点正置、倒置された状態で出土し、中央の底面近くから第206図3の鉄製品が出土した。墓壇の埋土は均質な茶褐色粘質シルト土であった。出土遺物は9世紀前半のもの



第193図 90・135号墓出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

のである。

出土土器 (図版68、第193図)

土師器 (10・11) 10・11とも土師器坏で、底部はヘラ切りによる平底をなし、口縁部は直線的に外反する。10は口径12.8cm、器高3.7cmを測り、11は口径12.2cm、器高3.4cmを測る。11の底外面には×字のヘラ記号がある。

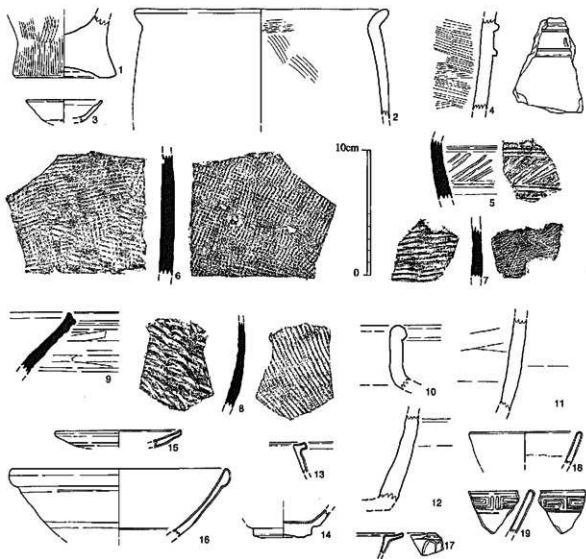
落ち込み

1号落ち込み

調査区北東端で検出した。5号溝に囲まれた内側に位置する。長軸13.5m、短軸9.0mを測り、中心に向かってすり鉢状に30cmほど窪む。覆土は全くしまりのない灰白色砂質土の自然堆積で、5号溝等より確実に新しい。遺物は図示した土器・陶磁器の他、第198図8・13のスクレイパー、第202図60の砥石が出土した。出土遺物は14・15世紀代を中心とする。

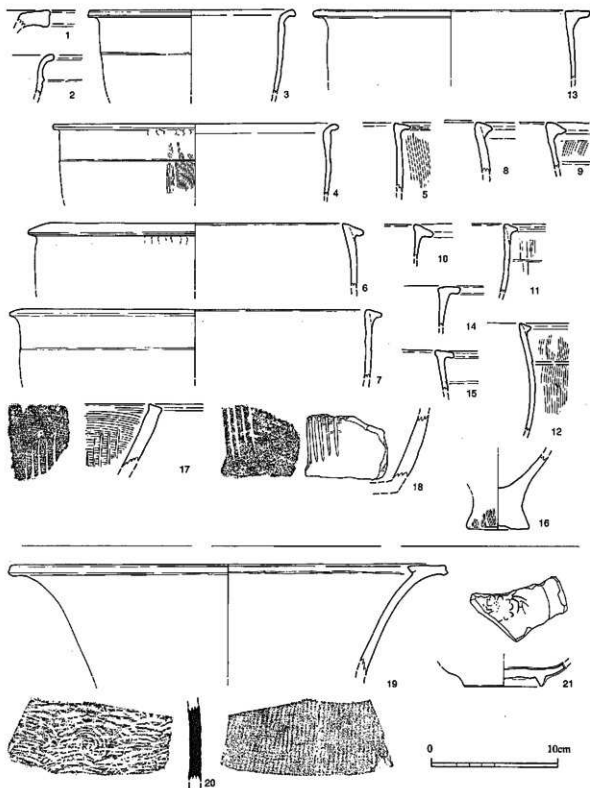
出土土器・陶磁器 (第194図)

弥生土器 (1・2) 1は厚い甕の底部。2は口縁部が短く外反する甕で、内面にはハケメ調整。



第194図 1号落ち込み出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

土師器 (3・4) 3は小皿で口径6.0cm、器高1.9cmを測る。4は土師質の火鉢で突帯間の印刻は不明。
 須恵器 (5-9) 5は甕の胴部片で、沈線間にヘラ描き斜線を入れる。6-8は甕の胴部で、内面平行当て具痕、外面格子タタキ。9は須恵質のこね鉢で、粗い横ナデ調整を行う。
 陶器 (10-14) 10-12は備前系の甕。口縁部は丸く仕上げる。13は口縁部が短く屈曲する。甕



第195図 2・3号落ち込み出土土器・磁器実測図 (17・18・20・21:1/3, 他:1/4)

か。14は天目茶碗の底部。

磁器 (15-19) 15は白磁皿。16は玉縁口縁の白磁碗。17-19は青磁。17は口縁部が屈曲する小碗で、外面に蓮弁を配する。18は内面体部下半は露胎となる。19は内面口縁部付近に雷文を巡らす。

2号落ち込み

調査区北東で検出し、5号溝の西側に位置する。長軸5.5m、短軸2.5mを測り、不整長方形となる。中央へ向かってすり鉢状に10cmほど窪む。覆土はしまりがいい灰白色砂質土の自然堆積。出土遺物はこの落ち込みと重複する30号土坑からの混入品が大半である。

出土土器 (第196図)

弥生土器 (1-16) 1は端部が肥厚する壺の口縁部。2-4は如意形口縁の甕。2は三角突帯を、4は1条の沈線を巡らす。5-12は三角口縁の甕。5は端部に刻目を入れる。7・9・11・12は沈線を巡らす。13-15は外端部が短く伸びる甕の口縁部で、15は1条の沈線を巡らす。16は柱状となる甕の底部。

瓦質土器 (17・18) 17・18はどちらも瓦質播り鉢で、内面ハケメ調整後、播り目を入れる。

3号落ち込み

調査区北東で検出した。6号溝の南側に灰白色砂質土が広がっており、これを3号落ち込みとした。長軸12m、短軸4.5m、深さ5-10cmを測る。覆土にはしまりがいい。遺物は図示した土器・陶磁器以外に第199図18の黒曜石使用剥片が出土している。

出土土器・陶磁器 (第195図)

弥生土器 (19) 19は短く水平に伸びる鋤先口縁の壺。

須恵器 (20) 20は甕の胴部で、内面同心円当て具痕、外面格子タタキを行う。

磁器 (21) 21は青磁碗で、内面見込みに草花文を彫る。高台内側は露胎。釉は暗緑色に発色する。

その他の遺物

土製品 (図版69、第196・197図)

管状土鍾 (1-21) 1は樽型の管状土鍾で、復元すると長さ3.5cm、径2.5cm、孔径1.0cm位になる。

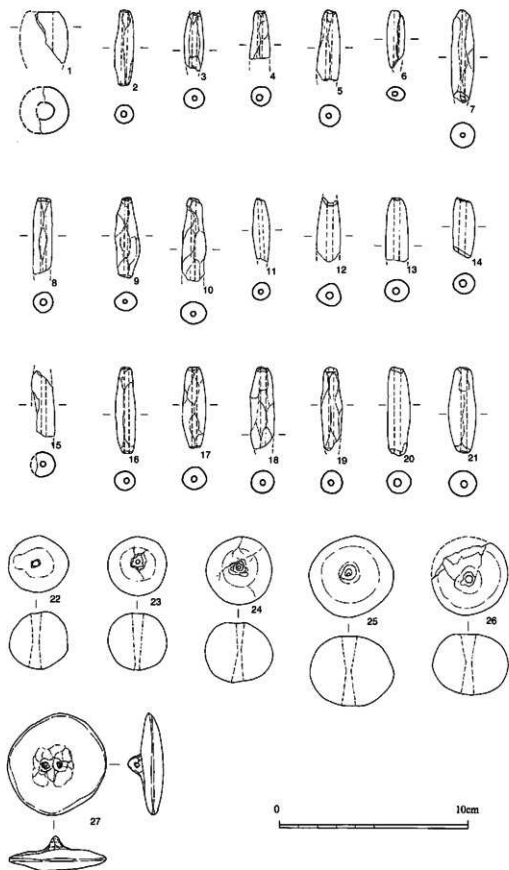
弥生時代のものか。2-21は細長の管状土鍾で、長さ3.0-4.9cm、径0.9-1.4cm、孔径0.2-0.4cm。

指ナデ・指オサエ整形。

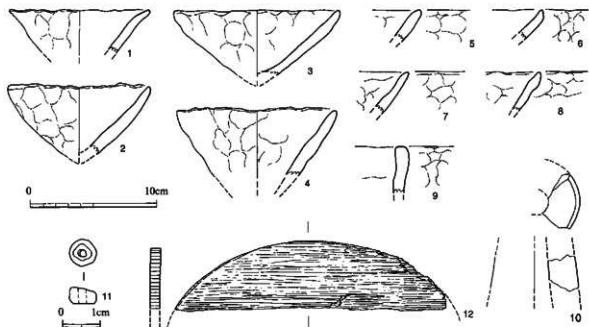
土玉 (22-26) 全て25号堅穴住居跡出土の土玉。径3.1cm、孔径0.2-0.8cm。指ナデ、指オサエ整形で丁寧に作られる。穿孔は両側から穿孔。胎土は微砂を若干含んだ良質の粘土を使用し、黄灰色を呈す。

横造鏡 (27) 1号堅穴住居跡出土の土製横造鏡で、径5.2-5.4cm、厚さ1.1cm、紐の高さ0.8cm、孔径0.3cm。指ナデ・指オサエ整形で丁寧に作られる。胎土は微砂粒を若干含んだ精良な粘土を使用し、灰茶色を呈す。

焼塩土器 (1-9) 1-8は尖底鉢形、9は円筒形の焼塩土器。強い二次加熱と風化のため、器表の剥落が著しい。外面はかろうじて指圧痕が認められるが、内面に布圧痕が残るものは一点もない。胎土には粗砂を多く含む。



第196图 土製品実測图 (1/2)



第197図 焼埴土器・燧石・ガラス玉・木製品実測図 (11: 1/1, 他: 1/3)

燧石 (10) 細片のため部位は不明だが、強い二次加熱を受け変色しているのが先端部に近い所であろう。胎土に砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。

ガラス製品 (第197図)

ガラス小玉 (11) 54号土坑出土。径0.7cm、厚さ0.4cm、孔径0.15cmを測り、コバルトブルーを呈す。

木製品 (第197図)

木桶底板 (12) 49号井戸の最下層出土。井戸枠に使用された木桶の底板であろう。復元径28.6cm、厚さ0.8cm。

石器・石製品 (図版70～74、第198～205図)

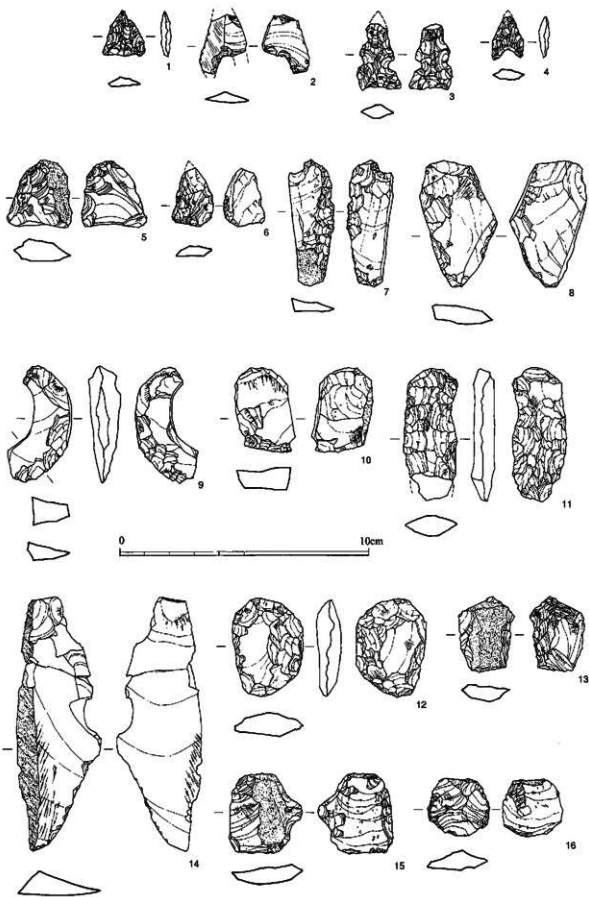
石鏃 (1～6) 1は平基式で粗雑な作り。2は凹基式で比較的丁寧な作られた三角鏃。3は両側縁に抉りを入れる凹基式鏃で、調整は粗く不整形である。4は姫島産黒曜石製の凹基式有肩鏃。5は整形段階の石鏃未製品。6はサヌカイト製で、側縁のみ粗い剥離調整を行っており、未製品の可能性もある。

スクレイパー (7～14) 7はサヌカイトの縦長剥片の側縁を剥離調整したもので、バルブカットを行う。一部に自然面を残す。8は身厚のサヌカイト素材の側縁に細かい剥離を施したものの。9は弧状に剥離したサヌカイト素材の側縁に剥離調整を行ったもの。10は身厚のサヌカイト剥片に粗い剥離を施したものの。11は全面に丁寧な調整を行う。12は全側縁に剥離調整を加えたもの。13は不定形剥片の両側縁を調整したものの。14は縦長剥片の基部のみ若干の調整を行ったもの。

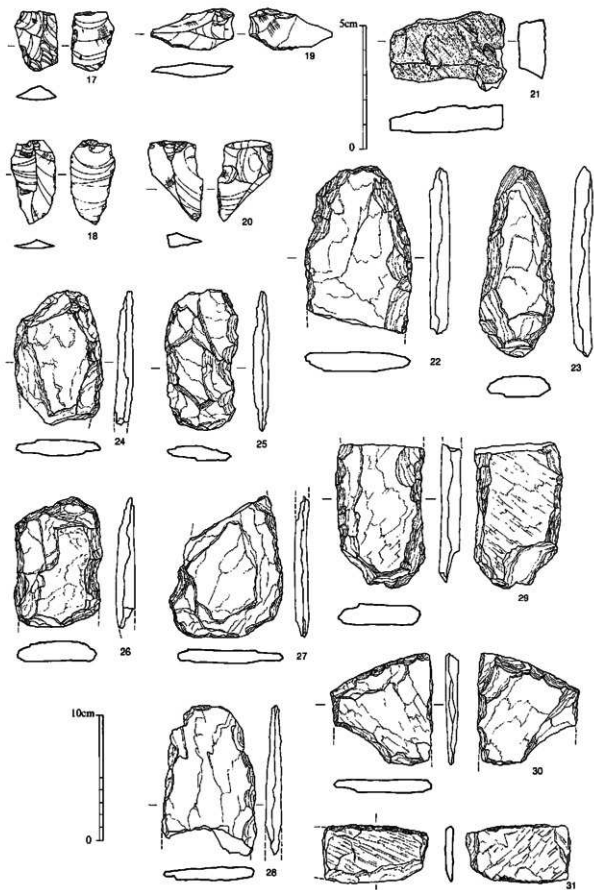
使用剥片 (15～20) 15は不定形剥片の側縁に若干の調整を加えたもの。16～20は側縁に微細剥離が認められるもの。

黒曜石原石 (21) 21は全く剥離のない黒曜石原石。長さ9.15cm、幅6.3cm、厚さ2.2cm。

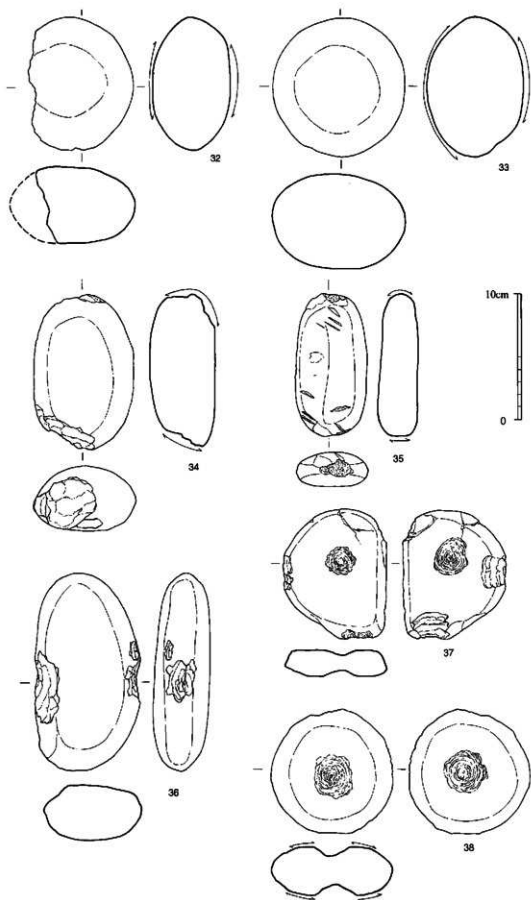
打製石斧 (22～30) 22～30は扁平打製石斧。石材には付近で採集される緑色片岩、結晶片岩を使



第198圖 石器・石製品実測図①(2/3)



第199图 石器·石制品类图② (18~21: 2/3, 22~32: 1/3)



第200図 石器・石製品実測図③ (1/3)

用する。

打製石包丁 (31) 31は打製石包丁。背部には細かい剥離調整を行い、刃部は表面に粗い剥離、裏面に細かい剥離を加えて片刃とする。側縁には浅い抉りを入れる。緑色片岩製。

磨石 (32~33) 両方も安山岩製。32は両面ともによく使用しているが、33の片面はあまり使用していない。32は16号壘穴住居跡の床面直上で出土しており、確実に当住居跡に伴う。

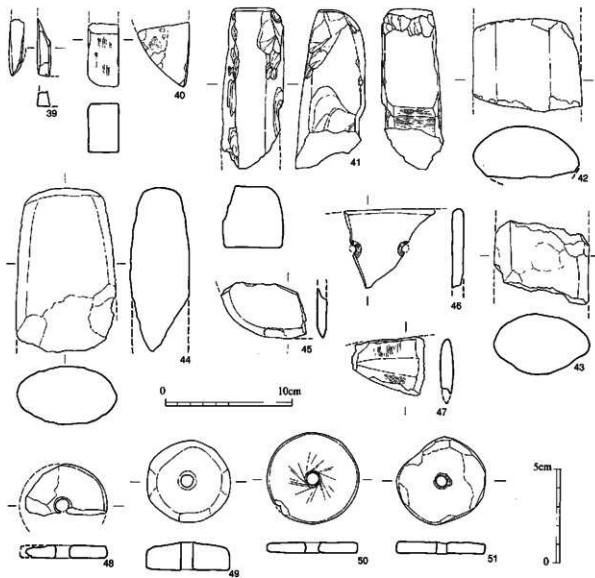
敲石 (34・35) 35は両側縁に粗い敲打痕。36は両側縁に細かい敲打痕が、また表面に擦痕が認められる。

石錘 (36) 36は石錘で。細長い円礫の側面2箇所に敲打を加えて抉りを入れる。

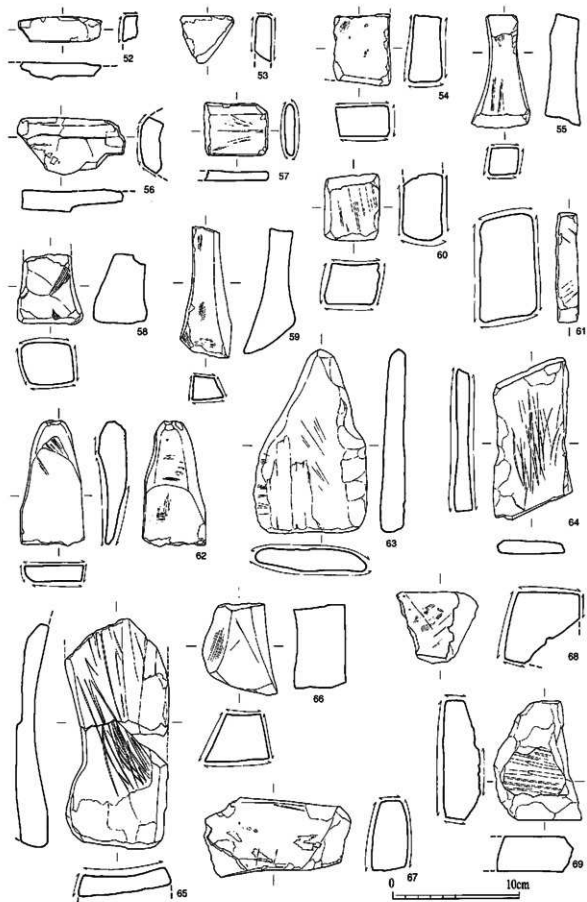
凹石 (37・38) 37・38はともに両面から敲打・回転を加えて凹ませたもの。37は2箇所に敲打痕がある。

片刃石斧 (39) 39は小型の片刃石斧で、欠損のため形状は不明。

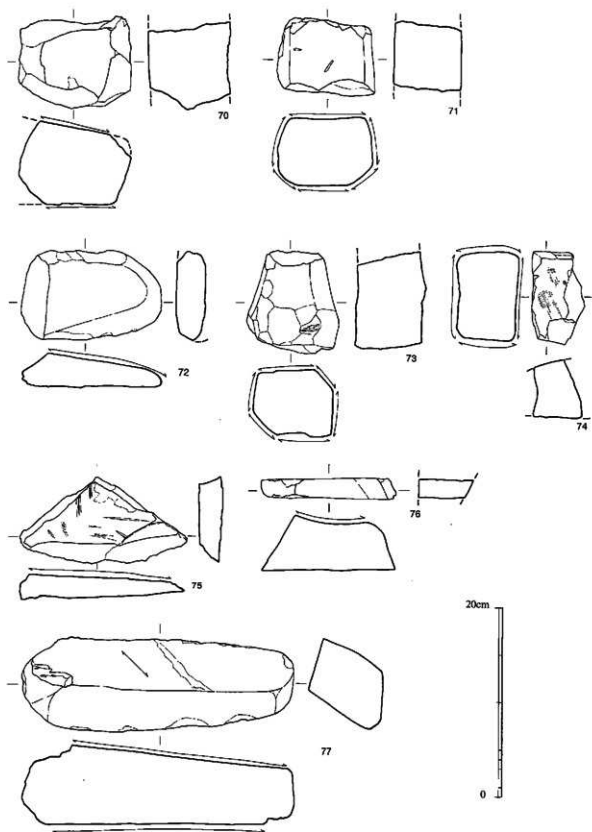
挟入片刃石斧 (40・41) 40は挟入片刃石斧の先端部。折損後、再加工したようで、刃部両端の角度が異なる。41は挟入片刃石斧の基部。背部に敲打時の剥離痕が残る。



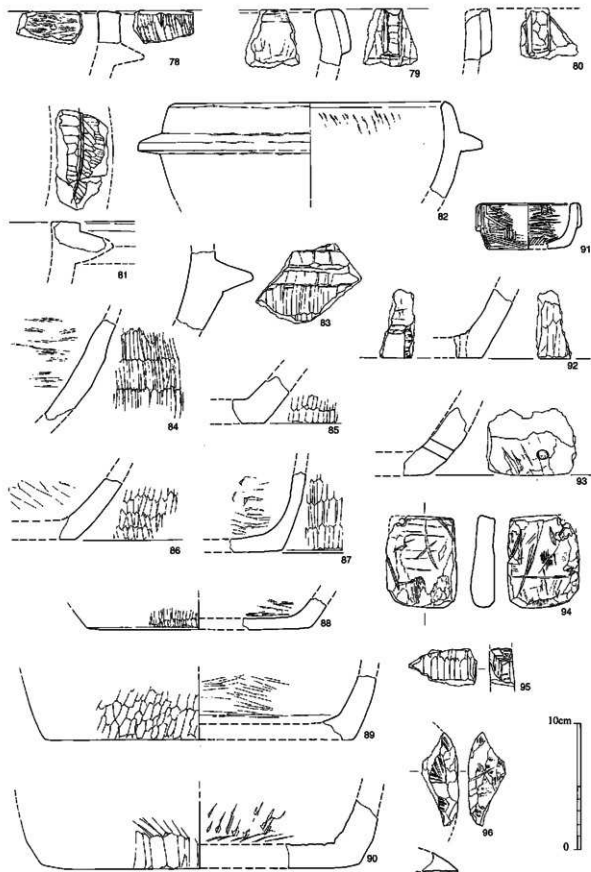
第201図 石器・石製品実測図④ (4~6:1/3, 他:1/2)



第202図 石器・石製品実測図③ (1/3)



第203圖 石器・石製品実測図⑥ (1/4)



第204圖 石器・石製品実測図② (1/3)

太型蛤刃石斧 (42~44) 42・43はともに今山産凝灰岩製石斧。44は安山岩製の石斧で表面の風化が著しい。

磨製石包丁 (45~47) 45~47はいずれも石包丁片。47は杏仁形のものか。

磨製紡錘車 (50~53) 51は蛇紋岩製、他は結晶片岩製。51は表面と裏面の区別がある。53は風化が著しい。

砥石 (52~77) 54は砂岩で、よく使用されている。表面は強く熱を受け赤変する。55は細粒砂岩で非常によく使用され、砥面に擦痕が顕著に残る。56は粘板岩で風化が著しい。57は片岩で、砥面は丸みを帯びており、砥石ではない可能性もある。58は砂岩であり使用されていない。59は細粒砂岩でよく使用されている。60は粗粒砂岩で砥面に擦痕が顕著。62は粘板岩で、砥いだ場所に傷りがあり手で握った部分が判る。表面に同心円状の浅い彫り込みがある。63は緑色片岩で、手で握った部分が判る。64は緑色片岩で、非常によく使用されており、砥面に無数の擦痕が認められる。65は片岩で、大きさから置いて使用したもの。66は砂岩でよく使用される。67は片岩で砥面が丸みを帯びる。68は細粒砂岩で砥面に擦痕が残る。69は層灰岩で砥面に太い擦痕が多く残る。73は砂岩でよく使用される。74は砂岩で砥面に同心円状の彫り込みがある。筒状製品の端部を回転して研いだものか。75は緑色片岩で、砥面に太い擦痕が残る。77は大型の片岩砥石で、接地面に対して砥面が水平にならない。地中に埋めて使用したものか。

滑石製石鍋 (78~91) 78は石鍋の口縁部。79・80は断面長方形の把手部。81~83は断面三角形の鍔が巡るもの。84は体部。85~90は底部付近。内外面に炭化物が付着するものが多い。90は内底面に粗い工具痕が多く残る。91は径7.6cmの小型石鍋で、使用痕は認められない。

滑石製石鍋転用品 (92~96) 92は底部端に円孔を穿孔したもの。93は体部に穿孔したもの。94は全面を面取りし、擦痕が多く認められるが使用目的は不明。95は切り離した痕跡が明瞭。96は断面三角形に面取りするが、元の形状は不明。

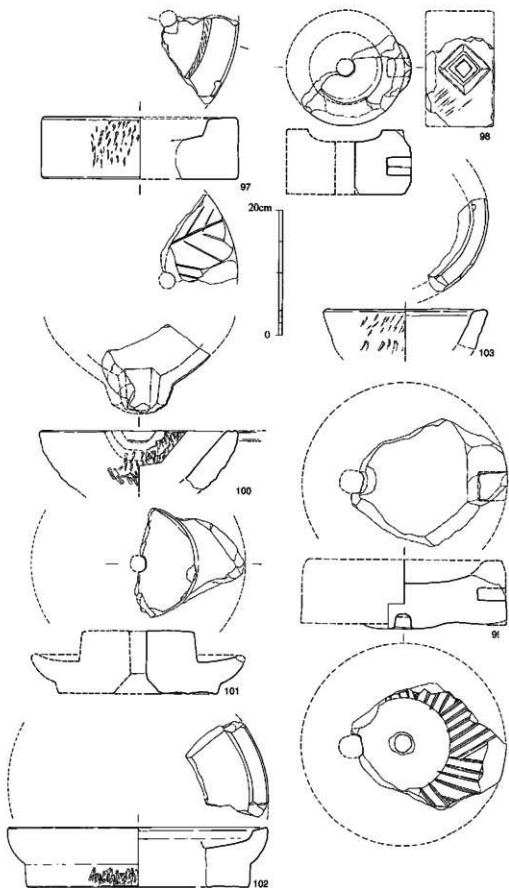
石臼 (97~103) 全て凝灰岩製。97は受け皿、物配り穴のある上臼で、摺面には粗い摺目をいれる。98は受け皿をもつ上臼で、芯棒穴は貫通する。側面には菱形の挽手穴がある。摺面には摺目をいれない。99は受け皿、物配り穴をもつ大型の上臼で、芯棒穴は貫通しない。芯棒穴周辺は凸面を作り、下臼との安定を図る。側面には方形の挽手穴がある。100は注口をもつ下臼で、摺部を完全に失う。101は受け皿を持つ下臼で、摺目はない。102は受け皿を持つ下臼で、摺部を完全に失う。103は下臼の受け部と考えたが、通常と異なり深すぎるため、他の製品の可能性もある。

鉄器・鉄製品等 (図版75、第206・207図)

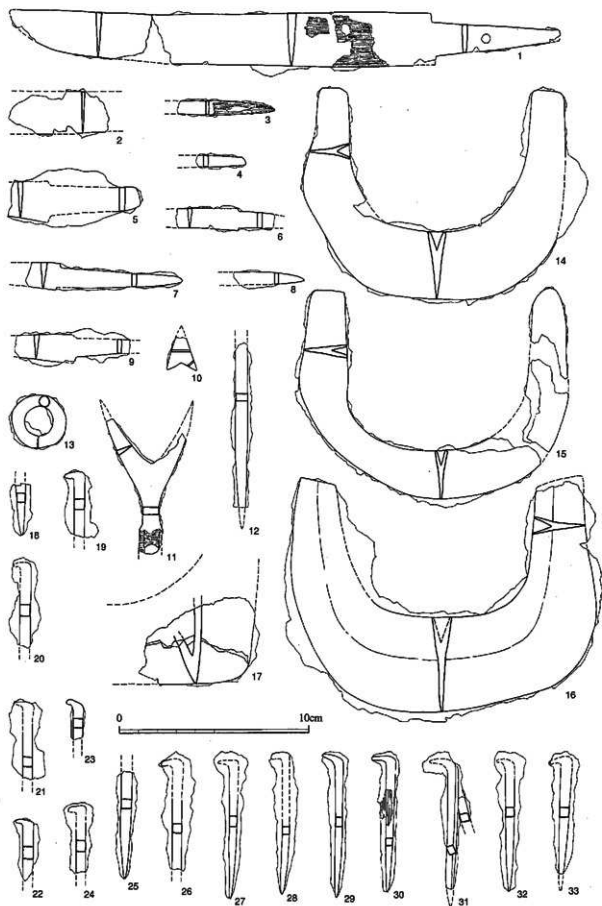
小刀 (1) 1は9号墓に副葬された小刀。全長28.9cm、身部長22.1cm。茎には目釘穴を1個設ける。身部に鞘の木質が残る。

刀子 (2~9) 2は身部で、厚さ1.5mm。3は刀子として図示したが、鉄釘の可能性もある。木質が残存している。4は刀子の茎部か。やや厚すぎる気もする。5は刀子の茎部だが、錆着が著しく闊部の形状は不明。6は両側に間がつく。身部の厚さ2mm。7は茎部が6.4cmと長く、身部が欠失するが恐らく大型の刀子だったであろう。現存する身部はかなり研ぎ減りする。8は茎部。9は錆着が著しく闊部の形状は不明。

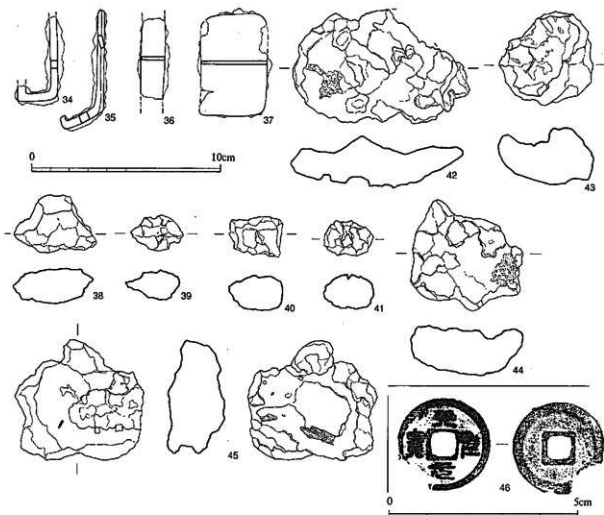
鎌 (10~12) 10は無茎式三角鎌で、厚さ1mm。11は雁又鎌で、身部内側は刃部を形成する。茎部



第205图 石器·石製品実測図⑧ (1/6)



第206图 铁器·铁製品等実測图① (1/2)



第207図 鉄器・鉄製品等実測図② (34~45: 1/2, 46: 1/1)

には樹皮が残る。12は長頸鎌の茎部。篋被は無い。

鉄輪 (13) 13は断面径6.5mmの鉄輪。端部は接着する。

U字形鋤先 (14~17) 14は70号壑穴住居跡の床面直上から出土。長さ11.3cm、最大幅13.8cm、刃部幅3.6cm。15は一部欠失するがほぼ完形のもので、138号土坑出土。長さ11.2cm、最大幅14.1cm、刃部幅2.6cm。研ぎ減りが著しい。16は25号壑穴住居跡の床面直上から出土。長さ12.4cm、最大幅15.9cm、刃部幅5.0cm。17は14号土坑出土のU字形鋤先片で、身がかなり厚い。

鉄釘 (18~33) 18・19は7号溝出土。20~33は9号墓出土で木棺に使用されたもの。長さ7.5cm前後で、断面は一辺4mm前後の方形。

不明鉄製品 (34~37) 34はU字形に曲がる鉄製品。断面正方形で、一辺4mm。35は不整U字形に曲がる鉄製品で、断面は長方形の部分と正方形の部分とがある。36は幅1.2cm、厚さ2mmの板状鉄製品。37は長さ5.4cm、幅3.5cm、厚さ2mmの板状鉄製品。一方は隅が丸くなる。

鉄滓 (38~45) 38は恐らく大きめの鉄滓を破砕したもの。39~41は小型の鉄滓。42~45は塊形滓。45には木炭が付着する。

銅錢 (46) 46は仁宗元年 (1023) 初鑄の「天聖元寶」。鑄上りが悪く、ややつぶれている。径2.4cm、孔辺0.65cm、厚さ0.15cm。

押出番号	種類	出土場所	長さ(m)	幅・径(m)	厚・孔径(m)	重量(g)	材質	登録番号	備考
第196図-1	管状土師	10号溝	2.7		径2.5 孔径0.9	5.7		2021	
第196図-2	管状土師	7号溝コーナー	4	1	0.3	3.2		2001	
第196図-3	管状土師	7号溝	3	1.05	0.25	3		2002	
第196図-4	管状土師	6号溝	2.55	1	0.3	1.8		2003	
第196図-5	管状土師	33号溝	3.7	1.2	0.25	4.4		2004	
第196図-6	管状土師	84号溝	3.05	0.75	0.9	1.5		2005	
第196図-7	管状土師	10・11号溝上層	4.9	1.2	0.2	7.4		2006	
第196図-8	管状土師	5号溝	4.05	1.1	0.3	4.1		2007	
第196図-9	管状土師	11号溝	4.2	1.0~1.3	0.15	4.4		2008	
第196図-10	管状土師	10・11号溝上層	4.4	1.2	0.25	5		2009	
第196図-11	管状土師	73号土坑	3.35	0.9	0.2	2.5		2010	
第196図-12	管状土師	69号竪穴住居跡貼床下層	3.35	1.25	0.3	3.9		2011	
第196図-13	管状土師	5号溝	3.35	1.2	0.3	4.8		2012	
第196図-14	管状土師	75号土坑	3.15	1.15	0.4	2.8		2013	
第196図-15	管状土師	91号土坑	3.45	1.3	0.25	3.9		2014	
第196図-16	管状土師	7号溝	4.55	1.1	0.2	4.5		2015	
第196図-17	管状土師	11号溝	4.3	1.2	0.25	5.3		2016	
第196図-18	管状土師	50号土坑	4.4	1.2	0.2	5.4		2017	
第196図-19	管状土師	11号溝	4.4	1.1	0.25	5.1		2018	
第196図-20	管状土師	10・11号溝上層	4.7	1.2	0.35	6.9		2019	
第196図-21	管状土師	45号竪穴住居跡	4.5	1.4	0.3	6.7		2020	
第196図-22	土玉	25号竪穴住居跡			3.1 0.3~0.6	22.8		2026	
第196図-23	土玉	25号竪穴住居跡			3.1 0.2~0.6	25.1		2025	
第196図-24	土玉	25号竪穴住居跡			3.2~3.5 0.2~0.6	33.4		2024	
第196図-25	土玉	25号竪穴住居跡			3.7~4.3 0.3~0.8	56.1		2023	
第196図-26	土玉	25号竪穴住居跡			3.25~4.0 0.35~0.7	41.7		2022	
第196図-27	土製模造鏡	1号竪穴住居跡		径5.2~5.4	孔径0.25	1.8		2028	
第197図-1	焼瓦土器	38号竪穴住居跡						531	
第197図-2	焼瓦土器	47号竪穴住居跡						2192	
第197図-3	焼瓦土器	46号竪穴住居跡カマド						643・644	
第197図-4	焼瓦土器	41号溝						1670	
第197図-5	焼瓦土器	89・90号竪穴住居跡上層						2190	
第197図-6	焼瓦土器	45号竪穴住居跡						2191	
第197図-7	焼瓦土器	75号竪穴住居跡カマド						2201	
第197図-8	焼瓦土器	75号竪穴住居跡						2202	
第197図-9	焼瓦土器	45号竪穴住居跡床下						2189	
第197図-11	ガラス製小玉	54号土坑	径0.7	孔径0.15	0.4	0.2		2029	
第198図-1	打製石斧	10号溝	1.8	1.7	0.4	0.8	黒曜石	2033	
第198図-2	打製石斧	4号建特12	2.35	1.8	0.45	1.2	黒曜石	2030	
第198図-3	打製石斧	15号竪穴住居跡	2.6	1.7	0.5	1.8	黒曜石	2034	
第198図-4	打製石斧	77号竪穴住居跡	1.7	1.25	0.4	0.5	極高黒曜石	2035	
第198図-5	打製石斧未製品	75号竪穴住居跡張床下層	2.65	2.56	0.85	5.7	黒曜石	2032	
第198図-6	打製石斧未製品	71号竪穴住居跡張床下層	2.3	1.6	0.45	1.6	サマカイト	2036	
第198図-7	スクレイパー	71号竪穴住居跡張床下層	4.95	1.8	0.5	5	サマカイト	2042	
第198図-8	スクレイパー	1号溝ち込み	5	3	1.3	15.9	サマカイト	2044	
第198図-9	スクレイパー	25号竪穴住居跡	4.7	1.6	1.3	10.5	サマカイト	2047	
第198図-10	スクレイパー	25号竪穴住居跡	3.35	3.1	0.9	10.3	サマカイト	2043	
第198図-11	スクレイパー	17号溝	5.3	2.1	0.9	11.7	スクレイパー	2048	
第198図-12	スクレイパー	16号竪穴住居跡	3.9	2.75	0.95	11.4	安山岩	2045	
第198図-13	スクレイパー	1号溝ち込み	3	2.2	0.7	4.3	黒曜石	2041	
第198図-14	スクレイパー	22号溝	10.2	3.35	0.9	22.3	サマカイト	2061	
第198図-15	使用潤片	41号溝	3.25	2.85	0.85	6.4	黒曜石	2038	
第198図-16	使用潤片	17号竪穴住居跡	2.25	2.4	0.8	4.2	黒曜石	2040	
第199図-17	使用潤片	36号竪穴住居跡	2.35	1.7	0.55	2.3	黒曜石	2037	
第199図-18	使用潤片	3号溝ち込み	3.35	1.75	0.5	1.9	黒曜石	2039	
第199図-19	使用潤片	10・11号溝上層	1.65	3.25	0.55	2.8	安山岩	2046	
第199図-20	使用潤片	35号竪穴住居跡上層	3.2	2.15	0.55	4.3	安山岩	2049	
第199図-21	原石	17号溝	9.15	6.3	2.2	161.5	黒曜石	2060	
第199図-22	打製石斧	15号竪穴住居跡貼床下層	15.1	8.4	1.6	236.9	緑色片岩	2108	
第199図-23	打製石斧	91号竪穴住居跡	15	5.9	1.6	206.5	緑色片岩	2107	
第199図-24	打製石斧	50号竪穴住居跡	10.6	6.95	1.3	130.5	緑色片岩	2101	
第199図-25	打製石斧	5号溝	11.1	5.7	1.2	93.6	緑色片岩	2098	
第199図-26	打製石斧	33号土坑	10.3	6.9	1.5	144.8	緑色片岩	2100	
第199図-27	打製石斧	17号溝	11.2	8.9	1.1	123.2	緑色片岩	2099	
第199図-28	打製石斧	32号溝下層	11.9	7.4	1.1	121.8	緑色片岩	2097	
第199図-29	打製石斧	5号溝	11.3	7	1.7	237	緑色片岩	2106	石包丁未製品?

第1表 土製品・石製品・金属製品製表①

採掘番号	種類	出土場所	長さ(m)	幅・径(m)	厚・孔径(m)	重量(g)	材質	登録番号	備考
第199図-30	打製石斧	32号溝下層	8.8	8.1	1.1	90.4	結晶片岩	2102	石包丁未製品?
第199図-31	打製石包丁	29号壑穴住居跡	8.2	4.6	0.66	45.9	緑色片岩	2105	
第200図-32	礫石	16号壑穴住居跡	10.5	8.2	6	747.4	安山岩	2081	
第200図-33	礫石	92号壑穴住居跡	11	10.3	7.5	1154.4	安山岩	2095	
第200図-34	礫石	5号溝	12.3	7.8	5.1	612.3	安山岩	2096	
第200図-35	礫石	50号土坑	11.3	5.6	5.2	263.2	安山岩	2089	
第200図-36	礫石?	5号溝	15.7	8.2	4.5	820.3	安山岩	2092	石鏝?
第200図-37	礫石	35号壑穴住居跡	10.3	8.1	2.1	319.4	安山岩	2088	
第200図-38	礫石	16号壑穴住居跡	9.8	9.5	3.8	494	安山岩	2090	
第201図-39	片刃石斧	59号壑穴住居跡上層	3	0.7	0.8	2	凝灰質泥岩	2058	
第201図-40	挟入片刃石斧	59号壑穴住居跡上層	3.4	1.6	2.7	23.1	凝灰質泥岩	2057	
第201図-41	挟入片刃石斧	17号溝	8.5	3.4	3.25	155	凝灰質泥岩	2069	
第201図-42	太型給刃石斧	51号壑穴住居跡	7.4	8.4	4.2	456.6	凝灰岩	2104	
第201図-43	太型給刃石斧	4号短溝	6.9	7.4	4.7	343.8	凝灰岩	2103	
第201図-44	太型給刃石斧	98号土坑	13	7.8	4.6	730.5	安山岩	2094	
第201図-45	石包丁?	1号壑穴住居跡カマド	4.45	2.8	0.5	9.9	片岩	2034	
第201図-46	石包丁	17号溝	4.75	4.15	0.6	14.1	凝灰岩	2055	
第201図-47	石包丁	111号土坑	3.85	3.1	0.7	11.1	片岩	2056	
第201図-48	石製紡錘車	39号壑穴住居跡	径4.6	孔徑0.7	0.65	9.9	結晶片岩	2053	
第201図-49	石製紡錘車	93号壑穴住居跡	径4.35	孔徑0.6	1.5	48.6	粒粒岩	2050	
第201図-50	石製紡錘車	8号溝	径4.75	孔徑0.7	0.55	2.1	片岩	2051	
第201図-51	石製紡錘車	75号壑穴住居跡	径4.6	孔徑0.55	0.6	22	結晶片岩	2052	
第202図-52	礫石	1号壑穴住居跡	6.4	2	1.2	22.4	粘板岩	2077	2面使用
第202図-53	礫石	87号壑穴住居跡	4.2	3.7	1.2	23.8	細粒砂岩	2070	3面使用
第202図-54	礫石	85号壑穴住居跡	5.7	4.45	2.4	116.7	砂岩	2064	4面使用
第202図-55	礫石	89号壑穴住居跡床底	9	4.6	2.7	116.6	細粒砂岩	2062	4面使用
第202図-56	礫石	13号壑穴住居跡	8.4	4.6	1.8	59.6	粘板岩	2076	3面使用
第202図-57	礫石	33号壑穴住居跡	5.1	4.2	0.7	35.6	片岩	2071	4面使用
第202図-58	礫石	6号溝石蔵	5.5	5.1	4.1	160.6	砂岩	2074	4面使用
第202図-59	礫石	59号壑穴住居跡上層	10.4	4	3.1	120.9	粗粒砂岩	2063	4面使用
第202図-60	礫石	1号溝ち込み	5.3	4.3	3.2	125.1	砂岩	2068	5面使用
第202図-61	礫石	73号土坑	8.6	1.8	4.4	134.9	片岩	2080	4面使用
第202図-62	礫石	17号溝	10	5	2.2	111.5	粘板岩	2072	4面使用
第202図-63	礫石	17号溝	14.6	8.9	1.9	340.1	緑色片岩	2081	2面使用
第202図-64	礫石	17号溝	12.7	6.2	1.1	179.7	緑色片岩	2073	2面使用
第202図-65	礫石	83号壑穴住居跡カマド	18.2	8.2	2.6	476.9	片岩	2069	2面使用
第202図-66	礫石	14号壑穴住居跡	7.4	5	4.1	216.9	砂岩	2065	4面使用
第202図-67	礫石	6号溝石蔵	11.5	6	2.9	322.5	片岩	2078	3面使用
第202図-68	礫石	8号溝コーナー	6.4	5.6	4.3	172.8	細粒砂岩	2066	4面使用
第202図-69	礫石	5号溝	9.35	5.8	2.75	262	凝灰質泥岩	2062	4面使用
第203図-70	礫石	5号溝	11.7	9.9	8.7	1592.8	花崗岩	2086	2面使用
第203図-71	礫石	5号溝	8.4	10.2	7.2	1056.3	花崗岩	2084	6面使用
第203図-72	礫石	75号土坑	14.7	9.6	3.1	607.5	片岩	2083	1面使用
第203図-73	礫石	16号壑穴住居跡	11	9.6	7.7	1104.5	砂岩	2065	6面使用
第203図-74	礫石	6号溝石蔵	9.8	5.6	6.6	593.6	砂岩	2067	4面使用
第203図-75	礫石	17号溝	17.5	9.2	2.9	470	緑色片岩	2075	1面使用
第203図-76	礫石	7号溝	14.1	2.3	6.3	295.7	片岩	2079	2面使用
第203図-77	礫石	44号壑穴住居跡	28.3	9.8	7.8	2999.3	片岩	2087	3面使用
第204図-78	石鏝	17号溝					滑石	2162	
第204図-79	石鏝	17号溝					滑石	2159	
第204図-80	石鏝	5号溝					滑石	2160	
第204図-81	石鏝	17号溝					滑石	2161	
第204図-82	石鏝	17号溝					滑石	2167	
第204図-83	石鏝	17号溝					滑石	2158	
第204図-84	石鏝	50号土坑					滑石	1086	
第204図-85	石鏝	39号溝					滑石	2166	
第204図-86	石鏝	5号溝					滑石	2171	
第204図-87	石鏝	17号溝					滑石	2165	
第204図-88	石鏝	5号溝					滑石	2168	
第204図-89	石鏝	17号溝					滑石	2170	
第204図-90	石鏝	35号壑穴住居跡上層					滑石	2169	
第204図-91	小型石鏝	57号壑穴住居跡					滑石	736	
第204図-92	石鏝	17号溝					滑石	2157	底部穿孔
第204図-93	石鏝	5号溝					滑石	2164	体下部穿孔
第204図-94	不明滑石製品	33号土坑					滑石	2163	石鏝転用品
第204図-95	不明滑石製品	17号溝					滑石	2155	石鏝転用品

第2表 土製品・石製品・金属製品観察表②

発掘番号	種類	出土場所	長さ(m)	幅・径(m)	厚・孔径(m)	重量(g)	材質	登録番号	備考
第204図-96	不明滑石製品	17号溝					滑石	2156	石炭灰用品
第205図-97	石臼	17号溝					凝灰岩	2179	
第205図-98	石臼	3号溝					凝灰岩	2176	
第205図-99	石臼	5号溝					凝灰岩	2181	
第205図-100	石臼	5号溝					凝灰岩	2177	
第205図-101	石臼	54号土坑					凝灰岩	2178	
第205図-102	石臼	5号溝					凝灰岩	2180	
第205図-103	石臼	54号土坑					凝灰岩	2182	
第206図-1	小刀	9号土坑	28.9	2.9	0.4			2109	銅製品
第206図-2	刀子	28号型穴住居跡	5.2	2.6	0.15			2140	
第206図-3	刀子または鉄釘	135号土坑	5.2	1	0.2			2125	
第206図-4	刀子	32号溝上層	2.6	0.6	0.25			2129	
第206図-5	刀子	52号型穴住居跡床直	7	2.2	0.25			2132	
第206図-6	刀子	36号型穴住居跡床直	6.2	1.3	0.2			2126	
第206図-7	刀子	52号型穴住居跡床直	8.2	1.5	0.3			2124	
第206図-8	刀子	19号型穴住居跡カマド側直	3.75	3.9	0.2			2127	
第206図-9	刀子	35号型穴住居跡	6	1.8	0.25			2131	
第206図-10	鉄線	39号溝	1.8	1.6	0.1			2141	
第206図-11	鉄線	32号溝	7.2	4.2	0.4			2136	
第206図-12	鉄線	33号型穴住居跡	8.7	0.7	0.4			2137	
第206図-13	環状鉄製品	84号土坑		径3.0	身径0.7			2133	
第206図-14	U字形鋤先	70号型穴住居跡	11.3	13.8	0.8			2142	
第206図-15	U字形鋤先	138号土坑	11.2	14.1	0.7			2144	
第206図-16	U字形鋤先	25号型穴住居跡床直	12.4	15.9	1			2143	
第206図-17	U字形鋤先	14号土坑	6.3	4.6	1.2			2139	
第206図-18	鉄釘	7号溝コーナー	2.8	0.4	0.4			2128	
第206図-19	鉄釘	7号溝	3.5	0.6	0.6			2130	
第206図-20	鉄釘	9号土坑	4.6	0.55	0.6			2119	
第206図-21	鉄釘	9号土坑	4.1	0.5	0.5			2123	
第206図-22	鉄釘	9号土坑	3.3	0.6	0.6			2118	
第206図-23	鉄釘	9号土坑	2.1	0.5	0.5			2122	
第206図-24	鉄釘	9号土坑	3.6	0.5	0.6			2121	
第206図-25	鉄釘	9号土坑	5.7	0.6	0.6			2120	
第206図-26	鉄釘	9号土坑	6	0.5	0.5			2117	
第206図-27	鉄釘	9号土坑	7.4	0.4	0.5			2110	
第206図-28	鉄釘	9号土坑	7.6	0.4	0.4			2111	
第206図-29	鉄釘	9号土坑	7.7	0.4	0.5			2112	
第206図-30	鉄釘	9号土坑	7.3	0.4	0.4			2113	
第206図-31	鉄釘	9号土坑	7	0.4	0.4			2114	
第206図-32	鉄釘	9号土坑	7.1	0.5	0.5			2115	
第206図-33	鉄釘	9号土坑	6.3	0.55	0.5			2116	
第207図-34	不明鉄製品	22号溝	4.7	0.4	0.4			2134	
第207図-35	不明鉄製品	84号型穴住居跡	6.4	0.4	0.5			2135	
第207図-36	不明鉄製品	5号溝	4.3	1.2	0.2			2149	
第207図-37	不明鉄製品	51号型穴住居跡貼床下層	6.7	3.7	0.2			2138	
第207図-38	鉄滓	35号型穴住居跡	9.3	5.9	2.7			2146	
第207図-39	鉄滓	5号溝	5	5	3			2154	
第207図-40	鉄滓	23号溝	4.3	3.1	1.9			2130	
第207図-41	鉄滓	89・90号型穴住居跡上層	2.7	1.9	1.6			2151	
第207図-42	鉄滓	75号型穴住居跡	2.8	2.1	1.9			2152	
第207図-43	鉄滓	89号型穴住居跡	2.6	1.8	1.8			2153	
第207図-44	鉄滓	10号溝	5.8	5.9	2.6			2147	
第207図-45	鉄滓	19号型穴住居跡カマド	6.8	6.4	3			2148	
第207図-46	銅鉄	96号土坑		径2.4	孔0.6	0.1	2.2	2145	天竺元寶

第3表 土製品・石製品・金属製品観察表③

IV おわりに

1. 仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年

仁右衛門畑遺跡では調査区全域に堅穴住居跡などの古墳時代遺構が分布している。道路部分に発掘が限られたとは言え、この地域の集落変遷、当時の生活の様相を考えるための典型的な資料として扱うことができる。なおかつ古墳時代の遺構間での切れ目はほとんどなく、良好な土器の一括資料を知ることができた点でも重要である。この古墳時代の堅穴住居跡の中でも中心となるのがカマド、須恵器出現の時期のものである。これらは浮羽郡にとどまらず北部九州の古墳時代研究において、カマド、須恵器出現という古墳時代を大きく二分するような画期の年代的な限定、移行の具体的な状況を論じる場合に重要な意義をもつものとして評価することができるだろう。そこで、ここでは仁右衛門畑遺跡を含む浮羽郡の古墳時代土師器の編年を見たとえて、カマド、須恵器出現前後の土器の変遷について検討を加えてみたいと思う。

1. 浮羽郡の古墳時代中後期の土師器編年

北部九州全域では古墳時代前期の土師器編年は古墳出現、古墳時代開始などの問題を解明する目的でここ20年ほどの間に活発な議論が行われてきた。浮羽郡においても「塚堂遺跡 I」において小池史哲氏によって前期の土師器編年が明らかにされている（小池1983、以下「塚堂編年」と呼ぶ）。一方、北部九州地域での古墳時代中期の土師器については前期の土師器編年との関連で取り上げられることが多いため、古墳時代後期の土師器へどう展開していくかという点に言及されることは少ない。もちろん古墳時代中期後半以降になると須恵器編年によって遺構、遺跡の時期が決定できることが多いこともこれに影響しているだろう。

しかし、カマド、須恵器出現という現象は弥生時代～奈良時代に至る土器様式の中で大きな画期として位置付けねばならないものであり、その影響を受けて土師器自体も大きく変化する（横山1959）。したがって、カマド、須恵器出現前後の土器の変化を検討するためには古墳時代を通じた土師器編年の整理が必須の作業となる。

浮羽郡では近年、浮羽バイパス関係の浮羽町日永遺跡（緒方1994）、吉井町塚堂遺跡（馬田編1983、副島編1984、佐々木編1984、馬田1985）、同人院遺跡（水ノ江編1994）、阿鷹取五反田遺跡（水ノ江編1999）、同船越高原遺跡、旧主丸町船越二ノ上遺跡（吉田編1999）において古墳時代の生活遺構が多数、調査・報告されている。また、浮羽町、吉井町、旧主丸町の各教育委員会によりほ場整備事業などに関連して古墳時代の集落遺跡がかなり調査されている。それによって古墳時代各時期の土器資料が充実しつつあり、北部九州の中でも古墳時代土師器の変遷を知るための良好な地域となっている。さらに上述のように、古墳時代前期の土師器については塚堂編年によりすでに整理されているので、それに立脚して古墳時代中後期の編年が可能である。塚堂編年は前期を1～3期に区分しており、以下では古墳時代中後期を4期＝中期初頭、5期＝中期前葉、6期＝中期中葉、7期＝中期後葉～後期初頭、8期＝後期前半、9期＝後期後半に6分して（第208・209図）、土師器編年について説明を加えていきたい。また、論の展開により古墳時代前期の土師器に言及する場合も塚堂編年の分期に依拠することにした。

4期(第208図1~7) 中期初頭にあたり、図示したものは仁右衛門畑13号竪穴住居跡の資料であるが、浮羽郡全体として資料は少ない。浮羽郡に近接する地域では小郡市乙隈天道町遺跡83号竪穴住居跡(児玉編1989)の出土土器がこの時期に属する。

甕は図示した直口壺(1)、小型丸底壺(2・3)に加え、乙隈天道町83号住居跡出土のような中型壺、山陰系二重口縁壺から構成されると考えられる。小型丸底壺はいずれもハケメによる雑な調整のものがほとんどで、3期以前と区別される特徴の一つである。また、3期以前は壺の出土量が多く、器形、法量による器種分化も活発であるのに対して、この時期になると小型丸底壺、中型壺を除くと出土量も減少し、器種も少なくなる。

甕は良好な例が少ないが、図示した4は口縁部断面が直線的に外傾し、胴部外面を斜め方向の雑なハケメで仕上げている。内湾気味に立ち上がり端部を内側に肥厚させる口縁で、肩部に横方向のハケメを施すことの多い2~3期に一般的な布留式系甕と比べると差がある。

高坏は脚柱部下方がわずかにひろがり、屈曲して明確な裾部を形成するもの(5・6)と坏との接合部から直線的に広がり脚端部にいたるもの(7)がある。乙隈天道町83号住居跡では5と類似する例が出土している。いずれも脚筒上部に粘土を充填して坏部との接合を行っているが、このような接合技法は3期以前はさほど一般的ではないので¹⁰⁾、3期と4期を画する特徴の一つとしてみなすことができよう。4~6期にかけてはミガキによって仕上げた高坏は一部の例外を除いてほとんど見られない。このような粗製化は、小型丸底壺、中型壺の粗製化、甕のハケメ調整の粗雑化と歩調を合わせており、この時期の土師器の様式的特徴とも言える。

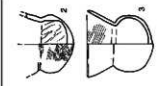
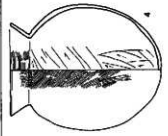
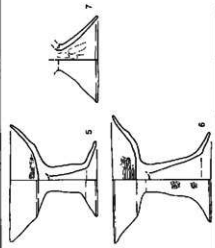
なお前後の時期、同時期の浮羽郡以外の地域の様相から上述した器種の他に鉢、鉢形の小型甎などの存在が想定されるが、良好な資料に恵まれていない。

さて、乙隈天道町83号住居跡出土土器は高坏、小型丸底壺の形態などにおいて仁右衛門畑13号住居跡より若干ながら先行する様相がうかがえる。乙隈天道町83号住居跡出土の高坏、山陰系二重口縁壺はそれぞれ福岡市西区鑑崎古墳(柳沢・杉山1984)、佐賀県東松浦郡浜玉町谷口古墳(亀井・永井1982)出土品と類似している。また第208図3に類似する小型丸底壺は福岡県福岡県嘉穂郡稲築町沖出古墳(新原1989)でも出土している。これらの古墳はいずれも古墳時代中期初頭に編年されることから、4期もその頃と考えられる。

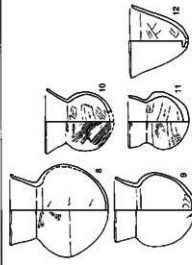
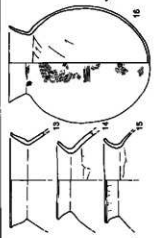
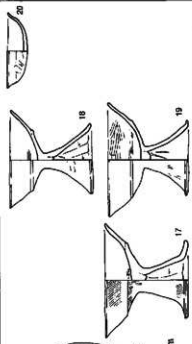
5期(第208図8~20) 4期と同様に浮羽郡内におけるこの時期の遺構は少ないが塚堂遺跡A地区3・8号竪穴住居跡でまとまった資料があり、それらを図示した。量は少ないが仁右衛門畑遺跡44号竪穴住居跡出土土器もこの時期を中心とするものであろう。周辺地域では甘木市宮原B・C地区1・3号竪穴住居跡(児玉1968)からの出土遺物がこの時期の指標的なセット関係である。

壺は中型壺(8・9)、小型丸底壺(10・11)が主体をなしている。小型丸底壺は4期と同様に外面をハケメで仕上げる粗製品が主体である。形態の面では4期には口径が胴部最大径より大きいものが多いのに対して、この時期のものは口径が胴部最大径より小さいものが主体をなす。中型壺もミガキがほとんど施されず、3期以前と比べて粗製化が進んでいることが確認できる。

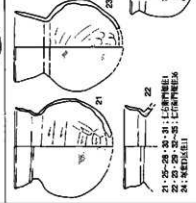
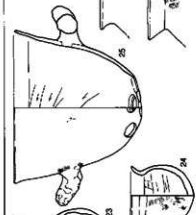
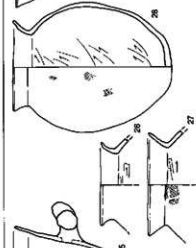
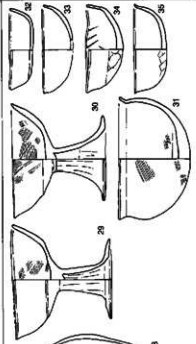
甕(13~16)は口縁部断面が直線的に外傾するものに加えて、丸みを帯びて外反するものが次第に多くなる傾向が推測される。塚堂3・8号住居跡では図示したものを以外にも多数の甕が出土しているが、内湾口縁のもの、口縁端部を肥厚するものはほぼ皆無である。外面ハケメ、内面ケズリと



1~7: 七尾藩所蔵品

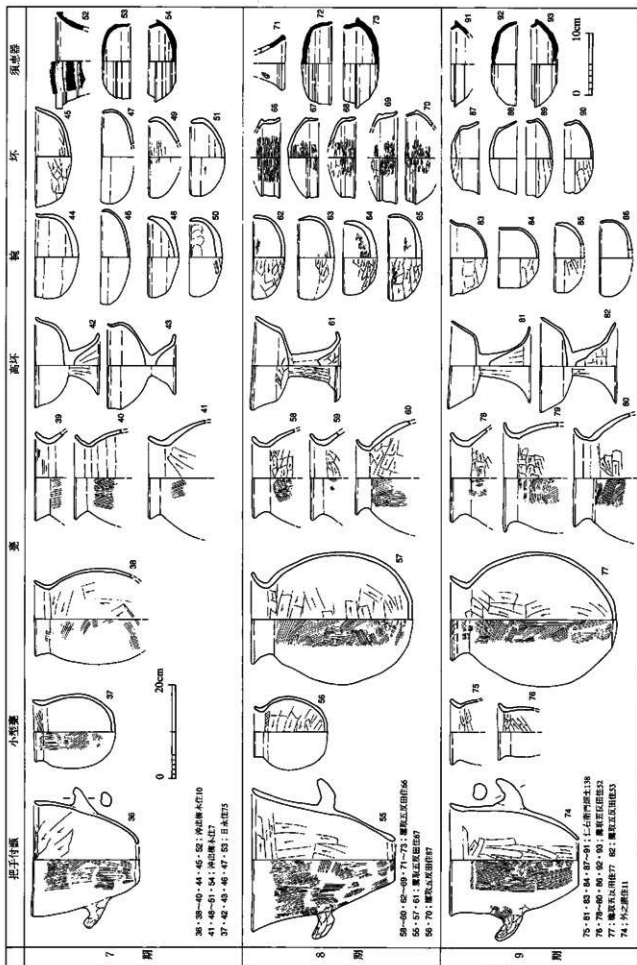


9・10・16・17・19
9・11: 尾山藩所蔵品
8・12: 尾山藩所蔵品
10: 尾山藩所蔵品



21・25・28・33・31: 尾山藩所蔵品
22・23・29・32・35: 七尾藩所蔵品
24: 尾山藩所蔵品

第208図 浮羽郡の古墳時代中・後期土器群年① (壺、その他壺、甕は1/8, 他は1/6)



第209図 洋羽部の古墳時代中・後期土師器類②（把手付甕、小型甕、壺は1/8、他は1/6）

も雑な仕上げとなっている。

高坏 (17~19) は4期に引き続いて、下方が開いた脚柱部に屈曲して明確な裾を形成するものと、坏部との接合部から脚裾にかけて直線的に開くものがある。後者はこの時期になると脚裾をわずかに折り曲げて外反させるようである。4期と同様に坏部、脚部外面に粗いハケメを施し、脚部内面はヘラケズリで仕上げている。坏部との接合技法も4期と同様である。

塚堂3・8号住居跡では鉢の出土が少ないため、1点しか図示していない(20)。比較的まとまって出土した宮原B・C3号住居跡の鉢をみると、口径7~14cmと幅があり、底部は平底・丸底、口縁部は単口縁・外反口縁とバリエーションに富んでいる。

甌は小型のものを図示した(12)。このような深い鉢形の甌は弥生時代以来の伝統的なものと考えられるが、この時期になると出土例が比較的多くなるようで塚堂A8号住居跡、宮原B・C3号住居跡で出土している。

図示はしていないがこの他に塚堂A3号住居跡では把手付大型甌が出土している。これに対して、宮原B・C地区1・3号住居跡では出土せず、カマドも付設されない。一方、宮原B・C地区3号住居跡では無文で陶質の壺が出土している。胎土分析等を経っていないため産地不明であるが、日本製須恵器かどうか問題となる資料である。これらの点については後で再度触れることにしたい。

全体の器種構成の面では当然ながら日常的な煮沸具の主体をなす甕が相当量を占めている。これに加えて、この時期になると4期に比べて高坏、小型丸底壺の量が増大するのが特徴である。正確な統計を実施したわけではないが、それぞれ20%程に達すると思われる。これらと比較するならば鉢類はさほど多くない。

6期(第208図21~35) 今回、報告した仁右衛門畑遺跡の古墳時代竪穴住居跡はこの時期のものが最も多い。第208図には1・36号住居跡出土土器を中心に示したが、この他に21・25・28・29・39・42・70・85~87号住居跡でこの時期の土器が出土している。また、塚堂遺跡A地区22号住居跡、B地区1・3号竪穴住居跡、10・19・21号を除く塚堂遺跡D地区の竪穴住居跡、鷹取五反田遺跡90・101・104・112号竪穴住居跡、浮羽町沖出遺跡9・13・14号竪穴住居跡(児玉編1987)、同沖出梅木遺跡5号竪穴住居跡(児玉編1999)からこの時期の土器がまとめて出土しており、比較的、資料が豊富である。

壺は中型壺(23)、山陰系二重口縁壺の退化形態のもの(21・22)を図示した。中型壺は4期のものに比べ、わずかに頸がしまり、口縁部が長く伸びている。図示はしていないが浮羽町沖出遺跡14号住居跡では23よりも一層、頸の締まった器形のものが出土している。また、5期の10・11のような典型的な粗製の小型丸底壺でこの時期に属する例はほとんどない。少量、残存しても良いと思われるが、器種構成中での比率が減少し、この時期にはほぼ消滅したと言えるだろう。

甕は5期と同様に口縁部断面が直線的に外形するもの(27)と丸く屈曲しながら外反するもの(26・28)がある。ただ、全体的な構成で言えば後者の方が多数を占めている。調整は内外とも粗雑である。また、この時期になると新たに器高15cm程度の小型甕が出現する(24)。

高坏は5期以前に見られた2種類の脚部の区別が曖昧になってくる。これは7・18・19の脚の端部の屈曲がさらに進み30のようになり、5・6・17・29のような脚部に類似してきたためである。坏部は4・5期のものが直線的に外傾する口縁部が多いのに対して、口縁部が内湾しながら立ち上

がり、深さも増している。調整、坏部との接合技法は4・5期と共通する。

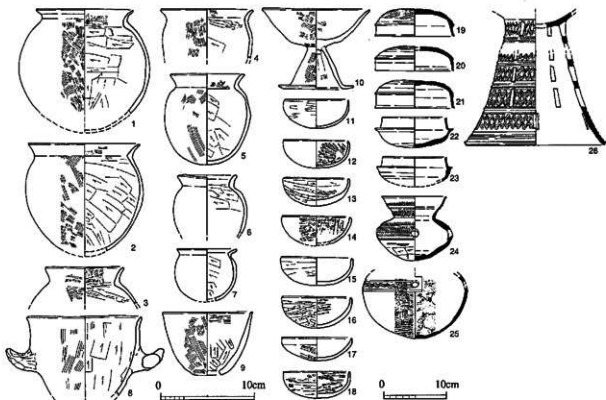
この時期の大きな特徴は32~35のような法量に比較的多量のある椀形の器形（口径10~15cm程度）が急激に増加することである。単口縁で底部を手持ちヘラケズリで仕上げるものが多く、器形、技法的にも齊一性が高い器種である。このような齊一性は5期以前の鉢類にはあまり見られないものである一方で、この椀形の器形は6期以降にも一定量を占めている。単純な形態のものではあるが、古墳時代の土師器を二分する指標の1つとして良いだろう。

古墳時代の土師器を二分する指標となる器種としてこの他に注目されるのが大型の把手付甌である。上述したように塚堂遺跡では5期に遡る可能性もあるが、浮羽郡とその周辺地域でそれが一般化するのはこの6期になってからである。25は仁右衛門畑1号住居跡出土例で、口縁は直口で底部に楕円形小蒸気孔を6つ穿孔したものと復元される。この他にこの時期の資料として塚堂遺跡、鷹取五反田90号住居跡、沖出遺跡13号住居跡などで出土例がある。いずれも蒸気孔は多孔のもので、7期以降に一般化する半円形の2孔、円筒形につくり孔を1つにしたものとは異なる。

さて、塚堂遺跡はこの地域の5・6期の代表的な集落と言えるが、そこでは7期以降の古墳時代の生活以降がほとんど検出されない。これは報告書でも述べられるように、全長91mの前方後円墳である塚堂古墳の存在を意識して集落が営まれなくなったとして説明できるだろう。したがって、集落の下限をひとまずは塚堂古墳の造営に求めても良いと考えられる。周知のように塚堂古墳は月岡古墳に続き、日岡古墳に先行して造営された古墳時代浮羽郡の首長墓と考えられる。このような首長墓の造営順序と塚堂古墳の後円部石室、前方部石室から出土した豊富な副葬品からすれば、塚堂古墳自体は中期中葉でも新しい頃と考えられる（馬田編1983、児玉1990）。したがって、6期は古墳時代中期中葉頃にあてるのが妥当で、5期は中期前葉頃となる。

このような推測を検証するためには須恵器との共伴が問題となるが、その点で注目されるのが沖出9号住居跡の出土土器である（第210図）。沖出9号住居跡では甕口縁の屈曲して外反する度合いが強く（1~7）、高坏（10）の坏部が深くなっている。このような特徴は6期の中でも新しい様相を呈している。また、高坏自体の出土量の減少、ミガキで調整した椀（12・14・18）の存在はむしろ後述する7期につながる様相と認められる。沖出9号住居跡では比較的多数の須恵器が出土している。陶器における須恵器編年で言えばTK208形式に属するものが主体であるが、22・23の坏身のようにTK23形式として位置づけられるようなものも含まれている。したがって、沖出9号住居跡出土の遺物群は土師器編年で6~7期の過渡期に位置し、それがTK208~TK23形式にかけての頃に相当することを示す非常に良好な資料であると言える。

以上にみた6期の土師器は寛、高坏など4・5期から連続して変化したものとして理解できるものも少なくない。その一方で椀、把手付大型甌など7期以降につながる新たな器種が定着したのもこの時期と言える。また、4・5期に盛行した粗製の小型丸底甕がこの時期の初頭にほとんど消滅している。高坏は塚堂D7・11・18号住居跡、鷹取五反田112号住居跡、仁右衛門畑1・36・42号住居跡に見るように5期に引き続いて器種構成中に占める比率が高いが、沖出9号住居跡では出土量が少ない。6期中に土師器高坏の急激な減少が起こったものとして理解しておきたい。この小型丸底甕、高坏の減少を補うように増加したのが、椀と出土量は少ないが恐らく須恵器であり、このような変化が7期以降の器種構成を決定したと思われる。したがって、6期は古墳時代の土師器の大きな画期と言えるであろう。また、この時期がカマド、須恵器の出現とも関連すると考えられるが、



第210図 沖出遺跡9号竪穴住居跡出土土器（報告書より一部を引用、1~9は1/8、他は1/6）

これについては後ほど考えてみることにしたい。

7期（第209図36~54） この時期の資料は少ないが、沖出梅木遺跡7・10号竪穴住居跡でまともに遺物が出土している。日永遺跡75号住居跡もこの時期に属するものと考えられ、あわせて図示した。船越二ノ上遺跡Ⅲ区の竪穴住居跡出土土器は須恵器の共伴には恵まれないが、この時期を中心とするものと考えられる。

甕（37~41）は口縁部断面の直線的に外傾するものがほとんどなくなる。一方、口縁部断面が丸く屈曲して外反するものは、外反の度合いがさらに強くなる。

把手付甌は多孔のものがなくなり、大きな単孔のものが主となる（36）。周辺地域の事例あるいは8期の事例から、半円形2孔の蒸気孔も少量ながら存在するものと思われる。

この時期の高坏は5・6期に比べると極端に出土量が少ない。日永遺跡出土例（42・43）は椀の器形を転用した坏部をなし、4期以来続いた坏部が屈曲する高坏の消滅が考えられる。42・43は坏部との接合の際に脚部上端に粘土を充填した痕跡が見られず、接合技法にも変化がうかがえる。

椀（44~51）は6期に引き続いて器種構成の中で相当量を占めている。この時期になると内外をミガキで仕上げるもの（49）が散見されるようになる。また口縁部をわずかに内湾させるもの（46・47）も出現する。

この他に集落での壺の出土例は少ないが、周辺地域の状況から考えて中型壺が少量作られる。

これらの土器器に共伴した須恵器から考えて、7期はTK23~MT15型式の頃に相当するだろう。また集落遺跡での須恵器の出土例も6期に比べると増加しており、須恵器が本格的に普及した時期と言える。4期以来続いた坏部が屈曲する高坏の消滅、高坏の出土量の減少も須恵器高坏の普及によるものと考えられる。

8期(第209図55~73) 鷹取五反田遺跡66・67・87・108号竪穴住居跡の出土遺物がこの時期の典型的な資料である。周辺地域では筑後川を挟んで吉井町の対岸に位置する朝倉町・杷木町外之隈遺跡(小田編1996)の古墳時代集落においてこの時期から9期にかけての土器がまとめて出土している。

甕(56~60)は前時期から口縁部の外反度が増す方向への型式変化をたどる。

甌の蒸気孔は55に示したように単孔のものが主体であるが、鷹取五反田87号住居跡では半円形2孔の蒸気孔の例が出土している。また、6期以前には直口のもの为主体であったのに対してこの時期になると消滅し、8~9期にかけて口縁部の外反が目立つようになる。

高坏は例が少ないが鷹取五反田67号住居跡の例を示した(61)。坏部口縁が屈曲して外反し、脚部は上部が中実となっており、42・43とは形態が異なる。外之隈遺跡でも同様の例が出土している。

椀(62~65)は引きつづきかなりの量が出土する。7期と同様にミガキを施すものが散見され、黒漆塗りのものも目立つ。

8期を9期と区別する器種として注目できるのが須恵器蓋坏を模倣した土師器の蓋坏(66~70)である。いずれも細かいミガキで仕上げ、黒漆塗りのものが多いようである。蓋は口縁部と天井部の稜が明瞭で、口縁部が直立に近い。身は蓋受けの突出が次の9期と比べるとしっかりしている。

図示した器種の他に鷹取五反田66号住居跡では把手付舞台壺が出土している。これらの土師器にはTK10-MT85型式の須恵器を伴っており、古墳時代後期前半でも新しいころに相当する。

9期(第209図74~93) 仁右衛門畑遺跡では調査区の西部、88・92~95号竪穴住居跡、138・139号土坑がこの時期に属する。また、鷹取五反田遺跡ではこの時期の竪穴住居跡が多数、発掘されている。図には仁右衛門畑138号土坑と、鷹取五反田52・77号住居跡出土遺物を中心に示した。

甕(75~80)は口縁がさらに強く外反するようになる。甌は仁右衛門畑遺跡、鷹取五反田遺跡とも完形での出土例がないため、外之隈遺跡11号竪穴住居跡の例を示した(75)。蒸気孔は単孔で口縁部の外反が強くなっている。

高坏(82・83)は坏部が屈曲しており、脚柱下部がやや広がり、脚裾が大きく外反して明確である。坏部は土師器坏蓋を反転させたかのような形態のものである。

椀(84~87)は内外のミガキ仕上げが目立たなくなり、黒漆塗りの減少する。蓋坏(88~91)も多数出土するが、この時期になると蓋の口縁部が長く内傾するようになる。また、身は底部と口縁部の屈曲部が部分が丸く、蓋受けとして機能していたか疑問である。このような形態変化のために8期と比較すると粗形となった須恵器蓋坏との形態差が大きくなっている。

この時期にはTK43~TK209型式頃の須恵器が共存しており、古墳時代後期後半にあたる。

2 仁右衛門畑遺跡とその周辺地域におけるカマド、須恵器の出現

上で述べた土師器編年では6期=古墳時代中期中葉に新器種の出現と古墳時代前期以来の器種の消滅という大きな直期が存在することがわかる。仁右衛門畑遺跡の古墳時代竪穴住居跡の多くもこの時期に位置づけられる。このような土師器の変化が浮羽郡とその周辺地域におけるカマド、須恵器の出現とどのように関連するかを考えてみたい。

表4は5~6期にかけての仁右衛門畑遺跡と周辺遺跡での竪穴住居におけるカマドの有無と、基

本的に5期までに盛行した器種である小型丸底壺の出土、6期以降に盛行した大型把手付飯の出土と初期須器あるいは陶質土器の出土の有無とその型式を示したものである。また、5～6期にかけて連続的に変化した中型壺、甕、高坏の型式学的位置からの時期比定もあわせて提示している。

仁右衛門畑遺跡では6期の土師器を出土する竪穴住居跡の中に、炉跡を確実にもつものが存在する(25・28・86号竪穴住居跡など)。したがって、炉からカマドへの転換は6期の間に起こったと考えられる。この他に鷹取五反田遺跡、沖出遺跡、沖出梅木遺跡でもカマド付き竪穴住居は6期以降のものである。6期末に位置づけられる沖出9号住居跡においてはカマドではなく、炉を設置しているが、ほぼ6期の間にこの地域ではカマドが定着したと言えるだろう。一方、5期に属する甘木市宮原B・C地区1・3号住居跡ではカマドは設置されていない。

これに対して塚堂遺跡では出土遺物が少ないため確定的ではないが、5期に遡る可能性のあるカマドが検出されている(B区1号、A区1・6号、D区5・6・7古号)。また、仁右衛門畑遺跡、鷹取五反田遺跡、沖出遺跡、沖出梅木遺跡ではカマド付住居跡からの小型丸底壺の出土例はほとんどないが、塚堂遺跡では小型丸底壺を出土する例(A区1新・6号、D区7古号)が比較的多くまわっている。塚堂遺跡のみに見られる住居隅部にカマドを設置する例(D区5・6新号)も、朝鮮半島からの導入当初の形態を示している可能性がある。したがって、塚堂遺跡では仁右衛門畑遺跡に先行し、早ければ5期の段階でカマドが出現していたと考えられる。

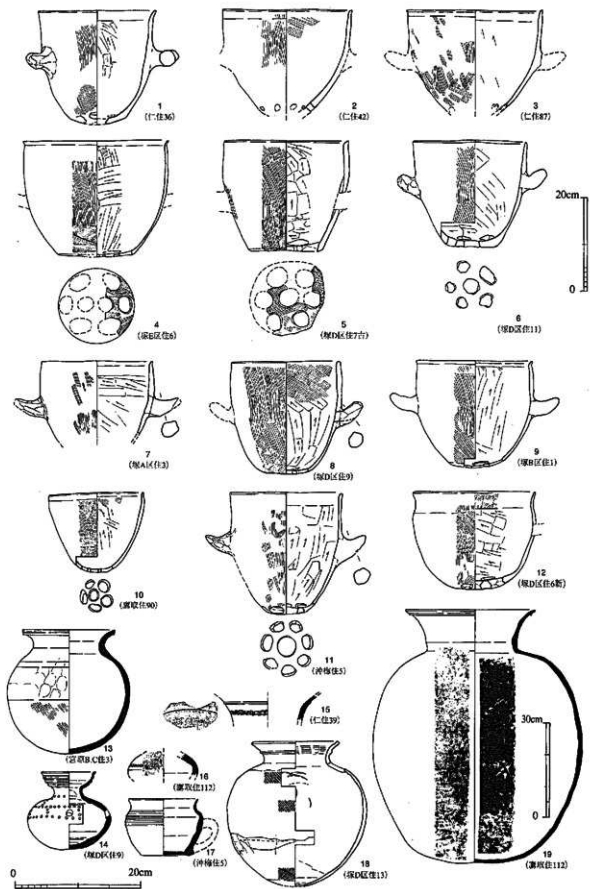
大型飯はカマドの使用と密接に関連して出現した器種であるが、表からわかるように6期のカマド付き住居からの出土例は一般的と言えるだろう。仁右衛門畑遺跡ではカマドを設置しない住居からの出土例は65号住居跡わずか1例であるのに対して、カマド付き住居での例は豊富である。したがって、カマドと同様に6期の途中に出現したものと考えられる。これに対して塚堂遺跡ではカマドと同様に5期に遡る可能性のある例が多く存在している(B区1号、A区3新号、D区5・6・7古号)。

これら5～6期の浮羽郡の把手付大型飯の例を示したのが図211である。いずれも蒸気孔は多孔であり、西日本全域を見ても出現期の型式と考えられる(杉井1993)が、これらは底部の形態により平底(4～6)とレンズ状ないし丸底に大きく分かれる。塚堂D区7号住居跡出土の平底飯

	カマド・炉	小型丸底壺	大型壺	塚堂特号	時期	カマド・炉	小型丸底壺	大型壺	須器等	時期	
仁右衛門畑在1	北中央カマド	X	O	X	6期	塚堂B1住	北・西壁カマド	X	O	X	5～6期
同 住21		X	X	X	6期か	同 住3	北壁カマド	X	X	X	6期
同 住25	伊志	X	X	X	6期	塚堂A区1古	北壁カマド	X	X	X	5期
同 住28	伊志	X	X	X	6期	同 住1新	南壁カマド	O	X	X	6期
同 住36	北壁カマド	X	O	X	6期	同 住3古	カマド無し				
同 住39	北壁カマド	X	X	上の上層一層	6期	同 住3新	カマド無し				
同 住42	北壁カマド	X	O	O(破片)	6期	同 住6	北壁カマド	O(破片)	O(破片)	X	5～6期
同 住44	伊志	O	X	X	6期	同 住8	伊志			X	5期
同 住55	伊志	X	O(破片)	X	5～6期	同 住22新	南壁カマド	X	O	X	6期
同 住59	北壁カマド	X	X	X	6期	塚堂D住1	北壁カマド	X	O	X	6期
同 住59	南壁カマド?	X	X	X	6期	同 住2新	北壁カマド	X	O(破片)	X	6期
同 住65	伊志	X	X	X	6期	同 住4	北壁カマド	O	X	X	6期
同 住67	南壁カマド	X	O	X	6期	同 住5	北西壁カマド	X	O	X	5～6期
同 住68	カマド無し	O	X	X	5期	同 住6新	北西壁カマド	X	O	X	5～6期
同 住3	カマド無し	O	X	O(陶質器)	5期	同 住7新	北壁カマド	X	O	X	6期
沖出梅木住5	北壁カマド	X	O	O(伊志)	6期	同 住7古	西壁カマド?			X	5～6期
沖出住9	伊志	X	O	TK208～TK225	6期	同 住9	北壁カマド	X	O	O(陶)	6期
同 住13	北壁カマド	X	O		6期	同 住11新	北壁カマド	X	O	X	6期
同 住14	北壁カマド	X	X		6期	同 住13	東壁カマド	X	O	O(灰質甕)	6期
鷹取五反田住90	北中央カマド	X	O(破片)	X	6期	同 住14	北壁カマド	X	X	X	6期
同 住104	南中央カマド	X	X	X	6期	同 住15	北壁カマド	X	X	X	6期
同 住112	北中央カマド	O(陶器)	O(破片)	大塚守2016前	6期	同 住17	北壁カマド	X	X	X	6期
						同 住20	北壁カマド	X	O(破片)	X	6期

Oは有、Xは無を示す

第4表 5～6期の竪穴住居跡におけるカマドの有無と出土土器



第211图 多孔式把手付甗と初期須恵器関係資料 (1~12は1/8, 13~18は1/6, 19は1/12)

(5) は5期に遡る可能性のあるものであり、塚堂遺跡ではこのような平底の例がかなり出土している。一方、仁右衛門畑遺跡ではわずかに65号住居跡で平底底部片が出土したのみである。したがって、この地域に限って言えば、甔の中では平底のものが古いようであり、それがまとまって出土する塚堂遺跡は仁右衛門畑遺跡など他遺跡に先行して把手付大型甔が出現したのではないかと推測される。さらに塚堂遺跡出土の4は3期以前の土器と共伴して出土している。将来、塚堂遺跡周辺での5期以前からの朝鮮半島との交流がより明らかにされれば、甔、カマド出現の具体的過程を考える糸口もつかめるものと思われる。

6期には須恵器の出土例は少ないが、仁右衛門畑39・42号住居跡、塚堂D区9号住居跡、沖出梅木5号住居跡、鷹取五反田112号住居跡で出土している(第211図14~19)。このうち鷹取五反田112号住居跡では大甕(19)とともにTK216型式前後の陶邑産と形態的には考えられる甔(16)が出土している。また、仁右衛門畑39号住居跡出土の広口壺頸部破片(15)は福岡県朝倉郡内の古窯跡で生産されたと推測される初期須恵器に類似しており、池の上Ⅱ~Ⅲ式(橋口編1982)と考えられる。塚堂D区9号住居跡出土の甔は類例が少ないが、TK216型式以前のものか。また、朝倉町原の東遺跡古墳群では周溝出土資料が中心であるが、6期の土師器とTK73~216型式の陶邑産に類似する須恵器、池の上Ⅱ~Ⅲ式の朝倉系初期須恵器が出土している(佐々木編1999)。これらから6期と須恵器編年との平行関係が知られ、初期須恵器の段階に相当することがわかる。6期には小烈丸底壺が消滅し、高坏が減少するが、これも初期須恵器の出現によって生産量が少なくなったものとして解釈できるものかも知れない。

今のところ5期の土師器と須恵器の確実な共伴例は知られないのが現状である。5期の土師器と共伴して出土した甘木市宮原遺跡B・C区3号住居跡出土の陶質の壺(第211図13)は朝倉古窯跡群など日本各地の初期須恵器窯では例を見ないものである。しかしこの土器は胎土、焼成の面では朝倉古窯跡群の製品に類似しており、あるいはそこで生産された可能性がある。また、甘木市古寺1号墳、池の上D-1号土壇墓出土の須恵器に共伴する土師器は5期と6期のいずれにあてると判断に悩むものである。したがって、いずれはこれらの再検討の進展と新資料の出土によって、朝倉古窯跡群の出現時期を5期にまで遡らせる確証が得られるものと予想しておきたい。

以上のように仁右衛門畑遺跡とその周辺地域では6期にはカマド、須恵器が確実に出現していたことがわかった。6期における土師器の変化自体もこのような新たな生活様式の出現によるものと解釈するのが妥当であろう。6期に新たに出現した小型甕も甔などとともに朝鮮半島の軟質土器小型鉢の影響を受けて成立した器種の可能性があり、土師器碗の盛行もその一環であろう。ただ、塚堂遺跡におけるカマドの出現時期、朝倉古窯跡群における須恵器生産、製品の出土状況から考えると、このような新たな生活様式の兆しは既に5期の段階に現れていたものと予想される。今後の発掘調査の進展により、この予想を裏付ける資料がさらに増加することを期待したい。

3. おわりに

以上のように仁右衛門畑遺跡周辺では土師器編年の6期にカマドの定着、須恵器の出現に伴う土師期の大きな変化が考えられた。仁右衛門畑遺跡と同じく吉井町に位置する塚堂遺跡とはその変化の様相に違いがあるが、両者を比較することで変化の時期の特定、その集落間での差などの重要な現象がかいま見えた。仁右衛門畑遺跡と周辺遺跡、北部九州各地の比較が進めば、より具体的に変

化の時期の特定、その意義の追及が進むものと思われる。

また、このような土師器の変化は朝鮮半島など東アジア的な食器様式の影響を受けたものであり、列島主要部の社会に多少の時期差はあれども共通してみられ、古墳時代を二分する画期となることが指摘されている(田嶋1995、内山1997など)。総体としてこの指摘は正しいと思われるが、具体的な移行過程は仁右衛門畑遺跡、塚堂遺跡などに現れたように地域、集落の歴史的性格により複雑な性質のものであろう。その意味で本論で余り言及できなかったカマド、須恵器の出現に先立つ4・5期の土師器の様式的特質の解明が今後の課題となるだろう。

注

1) 塚堂掘年では3期以前にいくつか脚筒上部に粘土を充填する接合技法のものが図示されているが、形態から考えて4・5期に下るものであろう。

参考文献

- 内山 敏行 1997 「手持食器考—日本の食器使用法の成立—」【HOMINIDS】Vol.1 pp.21-47
- 緒方 泉編 1994 「日永遺跡」Ⅱ 福岡県教育委員会
- 小田 和利編 1996 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(40) 福岡県教育委員会
- 亀井明徳・永井昌文 1982 「Ⅵ.古墳時代 5.谷門古墳」
唐津湾周辺遺跡調査委員会編『未遑回』六興出版 pp.178-95
- 小池 史哲 1983 「第8章第3節 1.土器」馬田 弘稔編「塚堂遺跡」Ⅰ 福岡県教育委員会
- 児玉 真一編 1987 「沖出遺跡」Ⅰ 浮羽町文化財調査報告書第3集
- 児玉 真一 1988 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(14) 福岡県教育委員会
- 児玉 真一編 1989 「乙斐天遺跡」福岡県文化財調査報告書第86集
- 児玉 真一編 1990 「若宮古墳群」Ⅱ 吉井町文化財調査報告書第6集
- 児玉 真一 1999 「沖出梅木遺跡」浮羽町文化財調査報告書第14集
- 佐々木 隆彦編1984 「塚堂遺跡」Ⅲ (E地区) 福岡県教育委員会
- 佐々木 隆彦編1999 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(53) 福岡県教育委員会
- 杉井 健 1993 「甍の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 pp.33-60
- 新原正典 1989 「沖出古墳」稲築町文化財調査報告書第2集
- 副島 邦弘編 1984 「塚堂遺跡」Ⅱ (A地区) 福岡県教育委員会
- 田嶋 明人 1995 「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究』第5号 pp.131-48
- 橋口 達也編 1979 「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告書第5集
- 橋口 達也編 1982 「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告書第14集
- 橋口 達也編 1983 「古寺墳墓群」Ⅱ 甘木市文化財調査報告書第15集
- 馬田 弘稔編 1983 「塚堂遺跡」Ⅰ (塚堂古墳・C地区) 福岡県教育委員会
- 馬田 弘稔 1985 「塚堂遺跡」Ⅳ (D地区) 福岡県教育委員会
- 水ノ江 和同編1994 「塚町大説遺跡」 福岡県教育委員会
- 水ノ江 和同編1999 「藤取五反田遺跡」Ⅱ 福岡県教育委員会
- 柳沢一男・杉山富雄 1984 「鹿崎古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集
- 横山 浩一 1959 「手工業生産の発展—土師器と須恵器」
小林行雄編『世界考古学大系』第3巻 日本田・古墳時代 平凡社 pp.125-44

2. 集落の変遷について

今回報告を行った古墳時代以降の仁右衛門燼遺跡では、竪穴住居跡67棟、掘立柱建物跡17棟、土坑23基、井戸1基、溝23条、墓4基を検出した。時期別にいえば古墳時代前期～中期中葉、6世紀末、7世紀後半～9世紀、11世紀～13世紀と多岐にわたっており、長期間にわたって集落が営まれた複合集落遺跡である。道路建設事業に伴う発掘調査のため調査区は東西に細長く、遺跡の展開する台地上に250m×30mの大きなトレンチを入れたようなものであり調査区外に広く展開する集落の全体を把握し景観を復元することはできないが、限られた範囲での調査成果をもとに、各時期の遺構の特徴と変遷、並びに個々の遺構の有機的集合体である集落の構造について検討を試みたい。

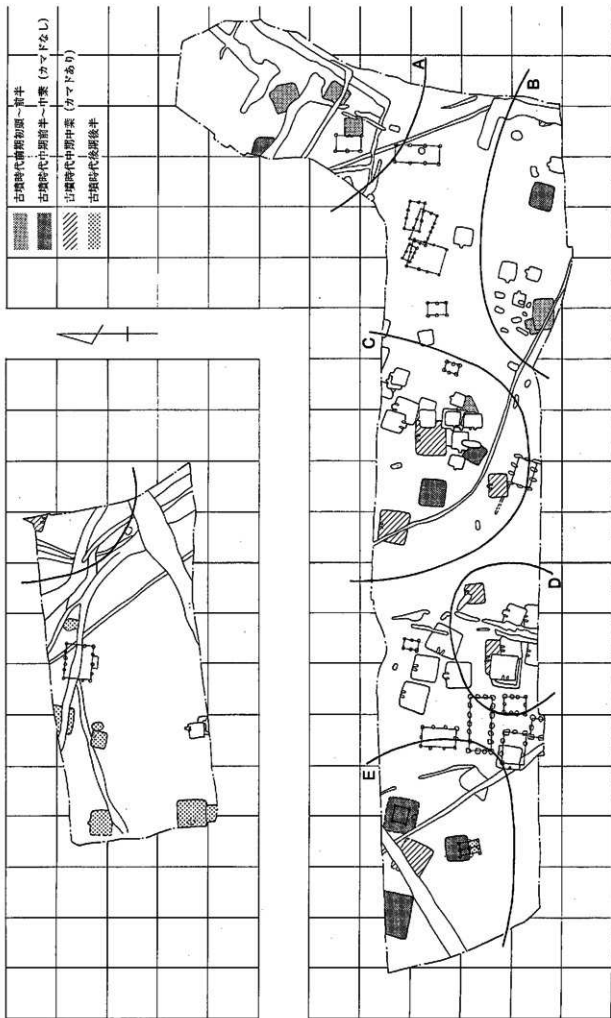
古墳時代 当遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡も検出しており、継続的に営まれる遺構群として同一組上で検討すべきであるが、報告の都合上今回は古墳時代以降に限定したい。古墳時代前期の遺構は14・16・51・58・59号竪穴住居跡がある。掘立柱建物跡は調査区内では検出していない。調査区の東側、遺跡内では最も高所にあたる標高29.7m付近に分布するが、顕著な集合状態にはなく、どちらかといえば広域に展開する傾向にある。より子細に時期区分すると、14・16・51・58・59号竪穴住居跡が前期初頭、15号竪穴住居跡が前期前半に位置付けられる。主軸方位からみれば14号と51号、16号と59号が同一方位にあり同時併存の可能性も指摘できる。また14～16号は比較的近い位置にあり、平面形の類似性からも同一単位集団の住居の建て替えとみなすこともできよう。この場合、出土土器から見て15号が最も新しく、また14号と16号は土器の上では時期差がないものの、強いて言えば住居形態からみてベッドを持ち平面長方形に近い14号の方が古い傾向にあり、14号～16号～15号の順序が想定される。

同時併存する竪穴住居跡をもとに集落景観の復元を試みた場合、それぞれの住居跡は互いに大きく離れた位置にあり、群構成をとっておらず個々独立した状態にあることが判る。このことはすなわち竪穴住居跡1棟のみで基礎単位が完結していた事を示しており、これら1棟1棟の竪穴住居跡からなる基礎単位の集合体として集落が構成されていたと思われる。

竪穴住居跡の平面形について見てみたい。14号竪穴住居跡は平面形がほぼ正方形で中央に炉を設け、主柱を4本配し、さらにベッド状遺構をもつ。15号竪穴住居跡は正方形プランで4本主柱、中央に炉を有している。16号竪穴住居跡もまた正方形プランの4本主柱で、一方の壁際中央に土坑を有している。炉の位置は不明だが、中央に配していたと見て良いだろう。これに対し、51・59号竪穴住居跡はどちらも平面形が長方形プランで中央に炉を設け、2本主柱で壁際土坑をもち、またベッド状遺構を有している。このように同一遺跡の同一時期の竪穴住居跡でも、長方形プランで2本柱のものと正方形プランで4本柱のものが併存している。

この様な二者併存の状況は同じ吉井町内に所在する塚堂遺跡A地区においても観察される。ここでは計27棟の竪穴住居跡が検出されているが、そのうち古墳時代前期のものでプランが明確なものが7棟ある。円形プランで北部九州以外からの強い影響が窺われる14号竪穴住居跡を除いて、10・27号竪穴住居跡は正方形に近いプランで4本主柱、8・15・16・19号は長方形プランで2本主柱であり、同一時期内での両者の併存が確認できる。同様の現象は何も吉井町内だけに限定されるものではなく、北部九州において一般的に見られる現象であり、既に指摘されているところである。

出土遺物においてもこれに関連する状況が香取される。長方形プランで2本主柱の59号竪穴住居



第212図 主要遺構配置図① (1/750)

跡は大半が在地系の土器で占められるのに対し、正方形プランで4本支柱の14号竪穴住居跡は大半が外来系の土器で占められており、竪穴住居跡の平面構造上の差異がそのまま出土遺物にも表出したものとして示唆的である。住居形態、土器様相を含め、同一集落内における在地系要素と外来系要素の二面性が顕著に認められたものとして特記したい。

次に古墳時代中期について検討を加える。塚堂遺跡では中期中葉頃から竪穴住居内にカマドが採用されており、普及期のカマドを有した集落遺跡として著名だが、塚堂遺跡以外にも吉井町鷹取五反田遺跡、浮羽町沖出遺跡等で同時期のカマド付設竪穴住居跡が検出されており、当地域において竪穴住居にカマドを採用するのは古墳時代中期中葉から、と理解されている。仁右衛門畑遺跡においてもやはり中期中葉にカマドが採用されており同様の状況にある。カマド採用前と後では土器型式に明確な差を認めたいが、カマドを採用するという事象は明らかに後出する要素であるため、カマド出現前の炉の段階を古墳時代中期中葉でも古段階、カマドを設置したものを新段階に位置付けた上で、古墳時代中期の集落の変遷を追ってみる。

古墳時代中期の遺構は1号・13号・21号・25号・28号・36号・39号・42号・44号・65号・70号・85号・86号・87号・96号の計15棟の竪穴住居跡がある。掘立柱建物は調査区内においては検出していない。これらの竪穴住居跡は調査区西端を除いてほぼ全域に展開するが、ある程度まとまりを持っておりA～Eの5つのグループにまとめる事が可能である。

Aグループには13号竪穴住居跡1棟のみである。この住居跡は古墳時代中期初頭に位置付けられ、前期の14～16号竪穴住居跡との継続性が窺える。Bグループは中期中葉でカマドを持たない25号と中期中葉でカマドをもつ21号とがあるが、分布域が調査区外へと続く事が予想されるため、58・59号と連続する可能性を指摘するに留める。Cグループは中期中葉の44号、中期中葉でカマドを持たない65号と、中期中葉でカマドをもつ1・42・70号とがある。51号と44号との間に断絶があるが調査区外にこの間隙を埋める住居跡がある事を予想し、前期から中期へと繋がる連続性を認めたい。また小型の42号竪穴住居跡と大型の70号竪穴住居跡は主軸方位を同方向に向けており、また雁行型配置をとることから同時に併存した1つの単位として捉えることが可能である。Dグループは中期中葉でともにカマドをもつ36号・39号竪穴住居跡の2棟からなる。周囲に前代の住居跡がない事から中期中葉に新たに形成されたグループとみてよいだろう。また、主軸方位から同時併存する1単位を構成する可能性も指摘できる。Eグループは全て中期中葉頃に位置付けられ、カマドをもたない28号・86号と、南向きカマドをもつ87号、南向きのカマドを持つ可能性が高い85号及びカマドの有無不明の29号・96号竪穴住居跡からなる。96号は大きく削平され不明な点が多いが、主軸方位から86号との同時併存を考えたい。また85号と87号は主軸方位が同一で、南向きのカマドを配置するなどの共通性がみられることから同時併存を指摘できる。つまりこのグループにおいては86号・96号から85号・87号への建て替えが想定される。このグループに関しては古墳時代中期中葉以前の住居跡が付近になく、中期中葉の古段階に新たに形成され、新段階まで存続したものと思われる。

以上の各グループ内における竪穴住居跡群の変遷を総合する。まず、古墳時代前期から竪穴住居が営まれるA～Cの3グループがあり、これらは竪穴住居1棟を基本として中期まで存続する。中期中葉の古段階になると、新たにEグループの竪穴住居が造営されるが、これは当初から2棟で1単位を構成しておりカマド出現後もこの2棟1単位構成は変化せず存続する。また中期中葉新段階にはCグループにおいても2棟あるいは1号竪穴住居跡を含めた3棟で1単位を構成し、グループ内での1棟

から2～3棟への棟数の増加が窺える。さらに新たに2棟で1単位構成をとるDグループが成立する。

上記の事から、古墳時代前期以降継続的に集落が営まれるが、古墳時代中期中葉に新たなグループが成立し、また以前から継続していたグループについても堅穴住居の棟数の増加にみられるように構成要素に変化が生じたものとみられる。したがって古墳時代中期中葉に集落が拡充したと考えたいであろう。

古墳時代中期の堅穴住居の平面形について若干検討を加えたい。カマド設置前の住居形態は平面形が正方形に近い長方形で支柱は4本、中央に炉を設け、長辺の一方の中央に土坑を設置するのが一般的である。前期と違って2本支柱のものやベッド状遺構をもつものはほとんどない。また平面長方形プランは前期からの継続性が窺える。当遺跡も基本的にこの形態を採用するが、一部壁際土坑が欠落するものもある。

カマドが普及した後もこの形態を踏襲し、平面正方形に近い長方形で長辺の一方の中央にカマド、反対側に土坑を設置し、4本支柱を基本とする。すなわちカマド設置前と後では住居形態に際だった変化は認められず、既存の住居形態にカマドのみを採用したと解釈すべきであろう。また、古墳時代後期になると、平面長方形プランやカマド対面土坑は基本的に採用されなくなる。したがって、これらは中期までの特徴として提示できるものである。

当遺跡のカマドについて気付いた点を幾つか挙げておきたい。まず、支脚から壁までの距離がおおよそ50～60cmを測り、後代のもものと比較して支脚から壁までの距離を長くするという共通要素が挙げられる。例を挙げれば船越2ノ上遺跡では5世紀後半～6世紀初頭の堅穴住居跡が検出されているが、これらのカマドの支脚の位置は30～40cm、鷹取五反田遺跡の6世紀中葉～末の堅穴住居跡のカマドでも、ほとんどが20～30cm程度であることと比較するとより明確である。ちなみに塚堂遺跡の普及期のカマドに関しても同様に支脚から壁までが長いという共通要素が指摘され、一般的特徴と言えそうである。

また支脚から壁までの距離が長く、さらに燃焼部を幅広くとる為にカマド本体が縦長の大きなものとなり、その結果としてカマド本体も堅固に構築されるに至る。塚堂遺跡ではA地区22号堅穴住居跡、D地区9号堅穴住居跡でカマド袖全体を河原石で補強しており堅牢にするための意図が窺える。

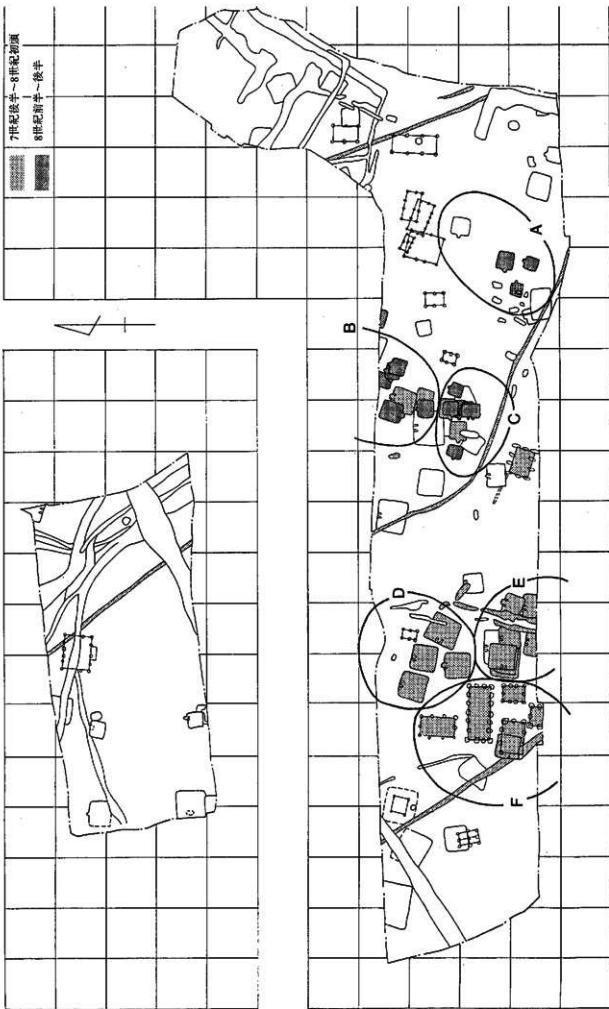
カマド焚口の両側にそれぞれ河原石を立て、その上にもう一石を架して焚口を補強する工夫が1号・36号・70号堅穴住居跡のカマドに見られる。これは塚堂遺跡や鷹取五反田遺跡、沖出遺跡の同時期の住居跡でも見られ、さらに鷹取五反田遺跡の古墳時代後期の住居跡にも広く採用されている。筑後川から近距離にあるこの地域では大型河原石の採取は容易であり、古墳時代中期から後期まで続く筑後川流域の地域的特徴として挙げることができる。

中期中葉頃を境にして集落は一旦途絶える。再び集落が出現するのは後期後半になってからであるが、いままでと分布範囲を異にし調査区西端に偏っている。この時期の検出遺構は、88号・92号・93号・94号・95号堅穴住居跡と、3号掘立柱建物跡、138号・139号土坑がある。出土遺物からみればいずれも6世紀末前後に比定できるものであるが、中でも88号堅穴住居跡と92号堅穴住居跡は位置的にも近く同一主軸方位をとることもあって、同一グループ内における同時併存の可能性を指摘できる。また3号掘立柱建物跡は単独で存在し堅穴住居群とは大きく離れた位置にある。1棟単独ということで集落全体で管理する倉とは考え難い。ある一つのグループに付随する倉を想定したほうが自然である。堅穴住居群と同一時期でありこの住居群に伴う可能性も考えられなくもないが、

調査区外にあるであろう他のグループに付属する倉を想定しておきたい。この時期に継続する時期の遺構は調査区内においては検出しておらず、大規模な集落の移動があった様である。

奈良時代 6世紀末から約1世紀の間集落は形成されておらず、再度集落が形成されるのは7世紀後半からで、以降8世紀後半頃まで存続する。仁右衛門畑遺跡の古墳時代以降の遺構の中では最も遺構数が多く、遺跡の中心となる時期の一つである。遺構は調査区の中心付近に広く展開するが、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡が一定のまとまりを持っており、グルーピングが可能である。

Aグループは2号・3号・4号・19号の4棟の竪穴住居跡からなるグループで、19号を除く3棟の住居跡は8世紀後半頃に比定される。19号に関しては出土遺物が少なく時期比定は困難だが、他の3棟と大差ない時期と考えられる。4棟とも主軸方向が平行または直交しており強い関連性が認められるが、果たして同時期の併存なのか、あるいは短期間で建て替えなのかは判断できない。Bグループは69号・71号・72号・74～78号の比較的小型の竪穴住居跡からなるグループで、出土遺物や重複関係から72号・78号は7世紀後半～8世紀初頭、69号・71号・74～77号は8世紀前半～8世紀後半に比定される。71号はCグループに入る可能性もあるが、一応Bグループに含めておく。位置関係から見て、まず最初に72号或いは78号が一棟単独で存在し、その後は1棟単独或いは2棟が併存して8世紀後半頃まで存続しつづけた様である。Cグループは43号・45～50号・52号の比較的小型の竪穴住居跡からなるグループで、50号を除く他の住居群は全てカマド方位を西に向けており、斉一性の強く窺われる一群である。50号はBグループに含めた方が良いかもしれない。出土遺物や重複関係から、47号・52号は7世紀後半～8世紀初頭頃、43号・45号・46号・48～50号は8世紀前半～後半に位置付けられる。まず最初に52号または46号が単独で成立し、その後1棟単独か2棟が併存しつづ8世紀後半まで継続したグループである。位置関係だけでなく、存続状況からみても、BグループとCグループの間には密接な関係が窺える。Dグループは31号・82号～84号の4棟の竪穴住居跡からなる一群で、出土遺物からいずれも7世紀後半～8世紀初頭に位置付けられる。同時期の他の竪穴住居跡と比較して、いずれも面積が広く、大型の範疇に属する。相互の先後関係は明確にできないが、7世紀後半から8世紀初頭の短期間で順次建て替えられたものであろう。Eグループは32～35号・37号・38号・40号竪穴住居跡からなるグループで、出土遺物はどの住居跡も7世紀後半～8世紀初頭に位置付けられるものである。1棟或いは2棟が短期間で建て替えられ8世紀初頭まで存続したものである。Fグループは掘立柱建物跡と竪穴住居跡からなる群で、4～6号・7号・10号の5棟の掘立柱建物跡と、30号竪穴住居跡とで構成される。出土遺物は僅少だが、おおよそ7世紀後半から8世紀前半頃に取まるようである。互いに接近した位置にあり同時期に存在したとは考えられず、また30号竪穴住居跡と5号掘立柱建物跡が重複する事から幾度かの建て替えが予想される。主軸方位からの同時併存性の検討を行うと、6号掘立柱建物跡と7号掘立柱建物跡は桁方向を等しくしており同時併存の可能性を指摘できる。また4号掘立柱建物跡の東梁行と10号掘立柱建物跡の東桁行を一直線上に配置しておりL字形配置の典型例と考えたが、出土遺物に時期差があり、遺物の混入などを想像しないと同時併存が認め難い状況にある。6号掘立柱建物跡はグループ内においては併存性が認められず、またこれと重複関係にある30号掘立柱建物跡も同様である。したがって7世紀後半～8世紀前半の間に3～4回の建て替えが行われ、1時期には1棟単独または2棟併存の配置状況にあったと思われる。



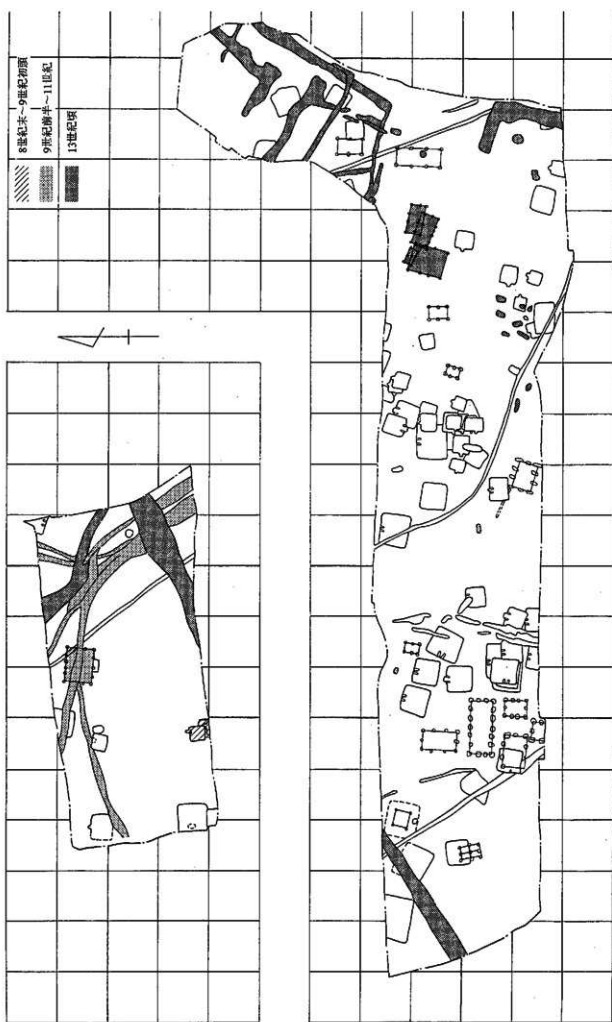
上記のグループに含まれないものとして、1号・2号・8号・9号・17号掘立柱建物跡、24号竪穴住居跡がある。主軸方位や位置関係から判断して、1号掘立柱建物跡はCグループに、9号掘立柱建物跡はBグループに、2号・17号掘立柱建物跡、24号竪穴住居跡は調査区外に存在するであろうグループに付随するものと考えられる。

以上のグループ内での掘立柱建物・竪穴住居の変遷を総合すると次のようになる。7世紀後半頃にFグループの掘立柱建物1棟単独あるいは2棟、Dグループの大型竪穴住居1棟、Eグループの通常の大サイズの竪穴住居跡が1棟または2棟、やや離れた位置にBグループ・Cグループでそれぞれ1棟が造営され集落が成立する。この形態は建て替えを伴いながら8世紀前半まで存続する。8世紀前半にはD～Fのグループは断絶するが、B・Cグループはそれぞれ1棟単独あるいは2棟でなおも継続し8世紀後半頃まで続くが、以降終焉を迎える。

これらA～Fの6グループの中でも、B・Cグループ、D～Fグループは、それぞれ存続時期や位置関係において緊密な関係が窺え、有機的な繋がりを持った群としての設定が可能である。すなわち、D～FグループはFグループの掘立柱建物1棟または2棟を中心に衛星的配置をとるDグループの大型竪穴住居1棟、並びにEグループの竪穴住居1棟または2棟で大きな一つのまとまりを構成している。またB・Cグループは竪穴住居2～4棟程度で一つのまとまりを構成している。この2つの大きなまとまりは7世紀後半から8世紀初頭までの期間ではあるが同時に併存し、互いの位置関係を保って継続的に集落を構成している。

またこの二者には構成上の格差が明確に現れている。D～Fグループの一群に関しては掘立柱建物・大型竪穴住居・通常竪穴住居によって構成され、一般集落には見られない優位性を持った上位集団、B・Cグループの一群は数棟の竪穴住居の集合からなり、D～Fグループに対して従属的な位置にある下位集団としての位置付けが可能であり、一集落内におけるグループ間の階層差が顕著に現れた例として特筆される。

次に、上位集団として位置付けたD～Fグループの性格について言及する。Fグループの掘立柱建物のうち4～6号掘立柱建物に関しては柱穴掘り方が方形を呈しており、特に4号掘立柱建物跡は3間×6間の東西棟建物で、柱根の距離から尺度の採用が想定され、面積も45.76㎡を測り大型の部類に属する。またこの掘立柱建物群に対して衛星的配置をとるDグループの83号竪穴住居跡からは識字階級存在を連想させる円面硯が出土し、さらに東側に位置する23・24号溝は幾つかの竪穴住居跡と重複関係にあり存続時期が限定されるものの、この一群に付随する区画溝として機能した可能性もある。上述したようにD～Fグループの一群に関しては他の一般集落に見られない優位性を有している。しかしながら、4号掘立柱建物跡にしても検出された柱根は径15cmと小さく、他の掘立柱建物に関しても面積、柱穴掘り方ともに傑出した大きさを有している訳でもなく、また掘立柱建物群の配置にしても明確な官衙的配置を採用しているとは言えない。さらに掘立柱建物だけでなく竪穴住居も含めて一群を構成し、さらに上述した様に同一集落内において下位の集団と併存する事などから、階層的優位性が認められるものの飛躍的な優位性を認めたい事も確かである。つまり一般集落を構成する集団よりも優位的立場にあるが、完全に分離できず、同一集落内において階層格差を持ちつつ併存する様相から、集落内を統括する首長階級といったものが想起される。D～Fグループについては掘立柱建物1～2棟、大型竪穴住居1棟、通常の大サイズの竪穴住居1～2棟程度によって構成される首長層居宅と位置付けておきたい。



新214回 主要遺構位置図③ (1/750)

7世紀後半から8世紀後半における竪穴住居について、幾つかの形態的特徴を述べておく。まず竪穴住居の平面規模であるが、BグループやCグループなど同一グループ内での7世紀後半と8世紀代の平面規模を比較すると、明らかに8世紀代の竪穴住居の方が小型であり、時代が降るにつれ縮小傾向にある事が判る。この現象については既に様々な見解が述べられている。この縮小化の理由はともかく、当遺跡においても同様の現象が観察できた事に留意したい。またカマドにおいても同様で、時期が降るにつれカマドの竪穴住居外への突出範囲が大きくなる事も確認できた。

カマド方位については各グループ間で状況が異なる事が判る。例えばCグループは7世紀後半から8世紀後半の間、大半が西方を向く。またD・Eグループは多くが北方を向く。これらは強い規制が働いたものと思われる。これに対しA・Bグループはカマドの方向に統一性を認め難く規制は弱いものと思われる。この様に同一集落内においてもカマドの方向に統一性が認められるグループとそうでないグループとが存在し、集落全体に共通する規制ではなくグループ内での規制が強く働いた状況が窺い知れる。

平安時代以降 7世紀後半に成立した集落が8世紀後半頃に終焉を迎えた後、今までの集落から大きく西に寄った位置に新たに竪穴住居が営まれる。互いに重複する89号-91号竪穴住居跡は8世紀末-9世紀初頭頃のもので、以降竪穴住居の造営は行われなくなる。恐らくこの頃を境に竪穴住居から掘立柱建物へと転換したのであろう。12号掘立柱建物跡は出土遺物がほとんど無く時期比定は困難だが、この竪穴住居に後続する時期のものと考えられる。以降、12世紀までの間、遺構数は減少する。この間に収まるものとして33号・35号・40号・41号溝及び71号・135号墓が挙げられる。全体的に西側に分布する傾向を示しており、付近に当該期の集落の存在が予想される。

12世紀中葉以降、新たに東端を中心に集落が形成される。この期のものとして、掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、墓等がある。この中で注目すべきものとして、5号-8号溝、17号溝が挙げられる。L字状に屈曲したこれらの溝は、居住域を区画する方形区画溝と思われるものである。特に17号溝に関しては、検出面の幅3m、深さ1.3mで断面台形を呈し、この頃の一般集落の区画溝と比較しても非常に大きな区画溝である事が判る。南側は調査区外へと続くが、この続きの部分は平成9年度に吉井町教育委員会によって調査が実施されており、南西側の屈曲部まで延々100m程直線的に伸びる事が確認されている。すなわち方一町を区画する区画溝ということになる。区画溝で仕切られた内部はほとんど調査区外にあるために掘立柱建物等の内部構造は不明だが、方一町の屋敷地を占有し、周囲に大型の方形区画溝を巡らす様相に、一般の農民層とは異なる上位階層の存在、例えば領主層の居館のようなものを想定しておきたい。また9号・90号墓はその副葬品の内容から、17号溝内部の居住者の墓地と考えられる。中世において居住区画内に墓地を形成する例は他の遺跡でも見られる現象だが、当遺跡でも同様の例を確認する事ができた。

以上、各時代における集落の変遷並びに個々の遺構の形態的特徴について検討を行った。特に古墳時代、奈良時代に関しては平面構造や主軸方位を中心にグループの設定や階層格差の明確化、集落構造の把握に努めたが、調査範囲の限界もあり希望的推測を多く含む検討結果となってしまった。今後は他遺跡の調査事例も含めて同一地域内における集落の構造と時期的変化を明確にし、さらに他地域との比較検討を行った上で、そこに現れる社会背景の把握に努力する必要がある。

图 版



1. 北東部全景（空中写真 南から）



2. 北東部全景（空中写真 上から）



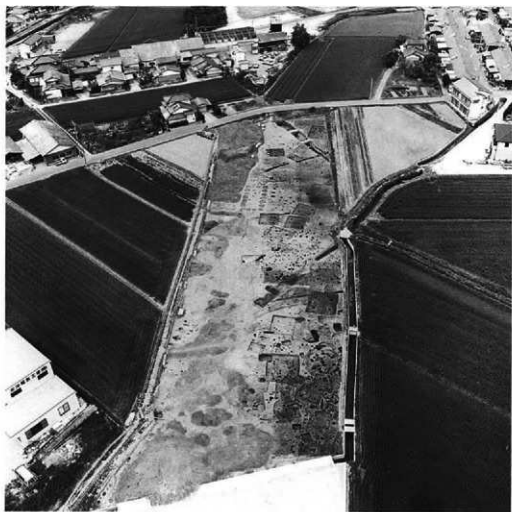
1. 調査区中央全景 (空中写真 上から)



2. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)



1. 調査区中央全景 (空中写真 南東から)



2. 調査区中央北側全景 (空中写真 南東から)



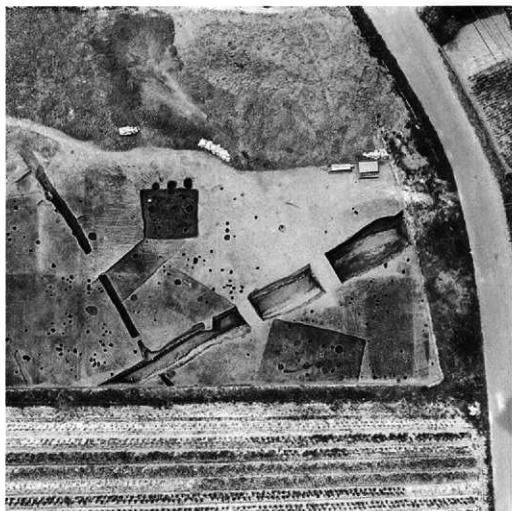
1. 調査区中央北側遺構確認状況（東から）



2. 調査区中央北側全景（東から）



1. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)



2. 調査区中央北側全景 (空中写真 上から)



1. 調査区西側全景（西から）



2. 調査区西側全景（北東から）



1. 1号堅穴住居跡
(南から)



2. 1号堅穴住居跡
カマド (南から)



3. 1号堅穴住居跡
カマド対面土坑
(北から)



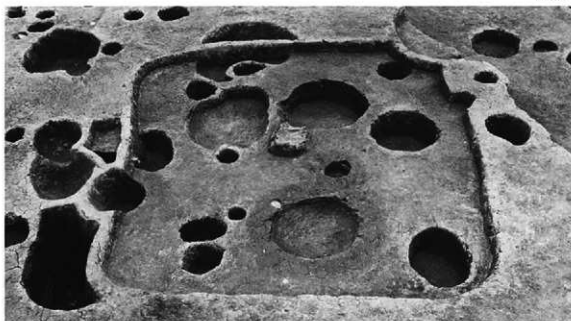
1. 2号竪穴住居跡
(西から)



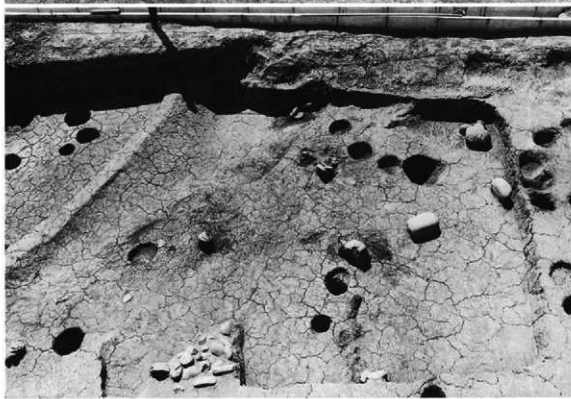
2. 3号竪穴住居跡
(東から)



3. 4号竪穴住居跡
(南から)



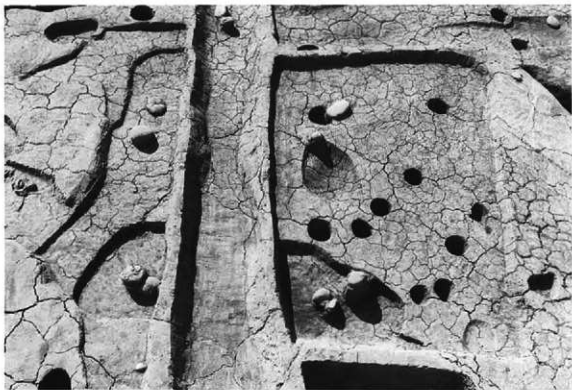
1. 8号壑穴住居跡
(西から)



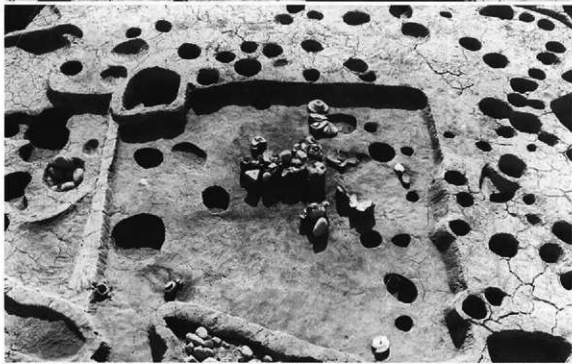
2. 13号壑穴住居跡
(東から)



3. 14号壑穴住居跡
(東から)



1. 15号堅穴住居跡
(東から)



2. 16号堅穴住居跡
(東から)



3. 17号堅穴住居跡
(南から)



1. 19号竪穴住居跡
(東から)



2. 21号竪穴住居跡
(東から)



3. 23号竪穴住居跡
(北から)



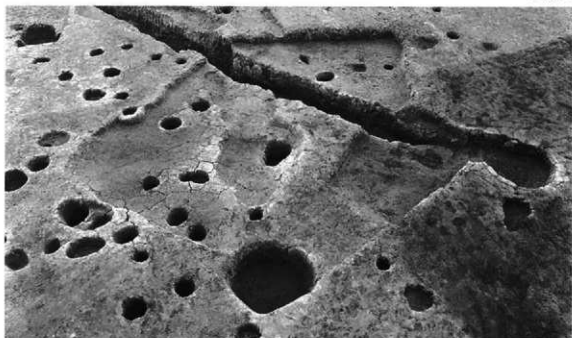
1. 24号竪穴住居跡
(北から)



2. 25号竪穴住居跡
(北から)



3. 25号竪穴住居跡
鉄製鋤先出土状況 (南から)



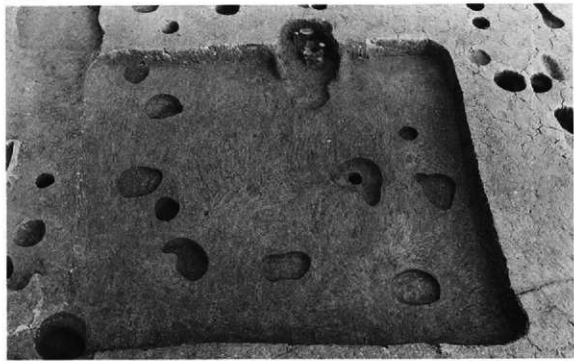
1. 29号竖穴住居跡
(北から)



2. 31~40号竖穴住居跡
(空中写真上から)



3. 31号竖穴住居跡
(南から)



1. 33号竪穴住居跡
(南から)

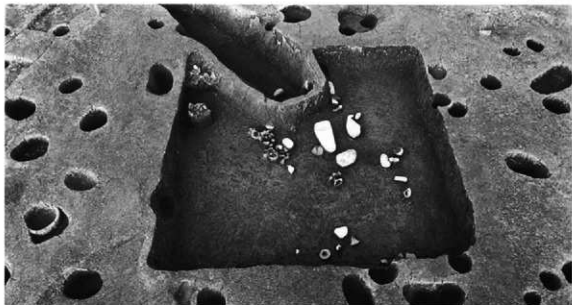


2. 33号竪穴住居跡
カマド (南から)



3. 35号竪穴住居跡
(東から)

1. 36号竪穴住居跡
(南から)



2. 36号竪穴住居跡
カマド (南から)



3. 39号竪穴住居跡
カマド (南から)





1. 42号竪穴住居跡
(南から)



2. 42号竪穴住居跡
カマド (南から)



3. 43号竪穴住居跡
(東から)

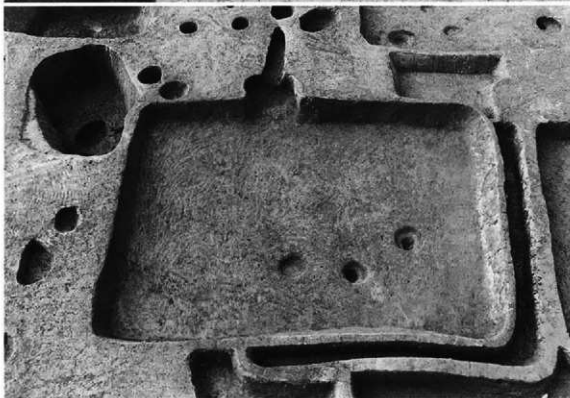
1. 43～51号竪穴住居跡
居跡（空中写真
上から）



2. 44号竪穴住居跡
居跡（西から）



3. 45・49号竪穴住居跡
居跡（東から）





1. 45号竪穴住居跡
カマド (東から)



2. 46号竪穴住居跡
カマド (東から)



3. 47号竪穴住居跡
カマド (東から)

1. 50号竪穴住居跡
(南から)



2. 51号竪穴住居跡
(南から)

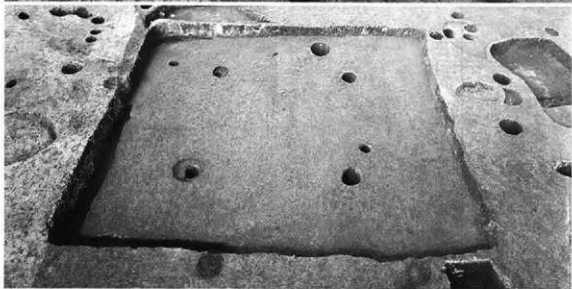


3. 52号竪穴住居跡
(東から)

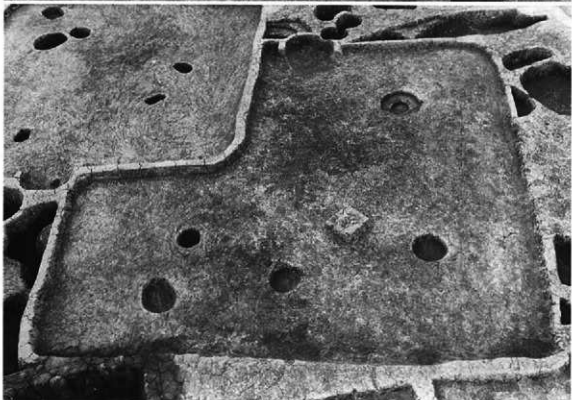




1. 58・59号堅穴住居跡 (南から)



2. 65号堅穴住居跡 (南から)



3. 69・78号堅穴住居跡 (南から)



1. 70号竪穴住居跡
(南から)



2. 70号竪穴住居跡
カマド (南から)



3. 70号竪穴住居跡
カマド対面土坑
(北から)



1. 71号竪穴住居跡
(南から)



2. 72号竪穴住居跡
(東から)



3. 74～77号竪穴住居跡
(東から)



1. 74～77号竪穴住居跡
（南から）



2. 74号竪穴住居跡
カマド（南から）



3. 75号竪穴住居跡
カマド（南から）



1. 76号竪穴住居跡
カマド（東から）



2. 80号竪穴住居跡
（南から）



3. 82号竪穴住居跡
（南から）

1. 83号竪穴住居跡
(東から)

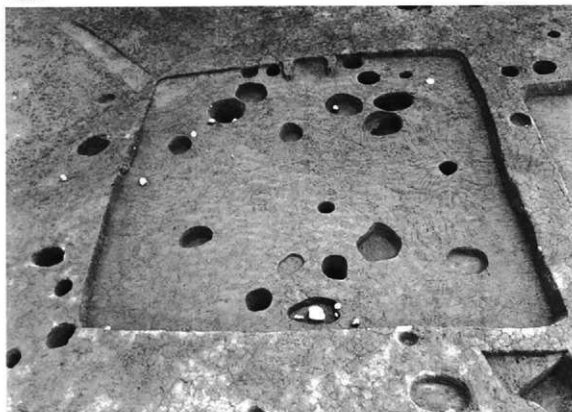


2. 83号竪穴住居跡
カマド (東から)



3. 83号竪穴住居跡
円面硯出土状況
(東から)





1. 84号堅穴住居跡
(南から)



2. 84号堅穴住居跡
カマド (南から)



3. 85号堅穴住居跡
(北から)



1. 86号竪穴住居跡
(南から)



2. 86号竪穴住居跡
壁際土坑
(北から)



3. 86号竪穴住居跡
貼床除去後
(南から)



1. 87号竪穴住居跡
(北から)



2. 88号竪穴住居跡
(南から)



3. 89~91号竪穴住居跡
(南から)



1. 89号壑穴住居跡
カマド(南から)



2. 92号壑穴住居跡
(南から)



3. 93号壑穴住居跡
(南から)



1. 93号竪穴住居跡
カマド (南から)



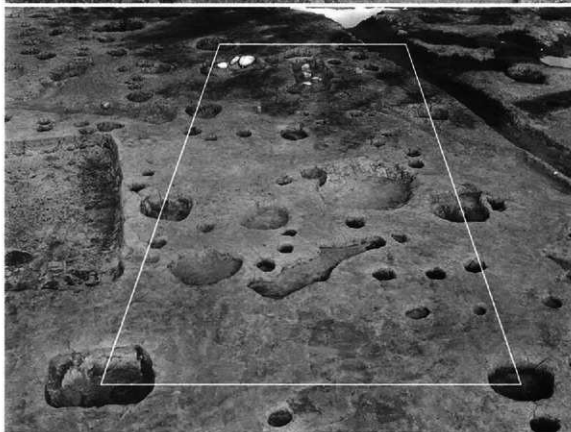
2. 94・95号竪穴住居跡
居跡 (東から)



3. 94号竪穴住居跡
カマド対面土坑
(西から)



1. 1号掘立柱建物跡
(東から)



2. 2号掘立柱建物跡
(南から)



3. 3号掘立柱建物跡
(東から)



1. 4号掘立柱建物跡
(掘削前 東から)



2. 4号掘立柱建物跡
(東から)



3. 4号掘立柱建物跡
P-7 (西から)

1. 4号掘立柱建物跡
P-10 (西から)



2. 4号掘立柱建物跡
P-12 (南から)



3. 4号掘立柱建物跡
P-17 (東から)





1. 5号掘立柱建物跡
・30号竪穴住居跡
(東から)



2. 5号掘立柱建物跡
P-9 (東から)



3. 5号掘立柱建物跡
P-10 (東から)



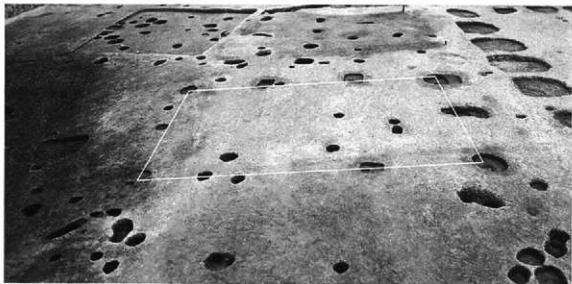
1. 6号掘立柱建物跡
(北から)



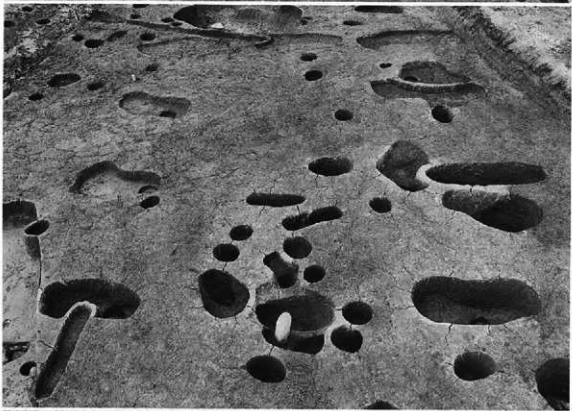
2. 6号掘立柱建物跡
P-2 (北から)



3. 6号掘立柱建物跡
P-4 (西から)



1. 7号掘立柱建物跡
(西から)



2. 8号掘立柱建物跡
(西から)



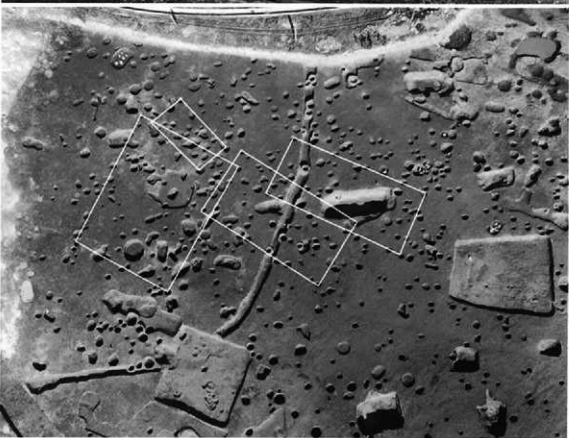
3. 10号掘立柱建物跡
(北から)



1. 11号掘立柱建物跡
(西から)



2. 12号掘立柱建物跡
(南から)



3. 13~16号掘立柱建物跡
(空中写真上から)



1. 7号土坑
(南から)



2. 10号土坑
(南から)

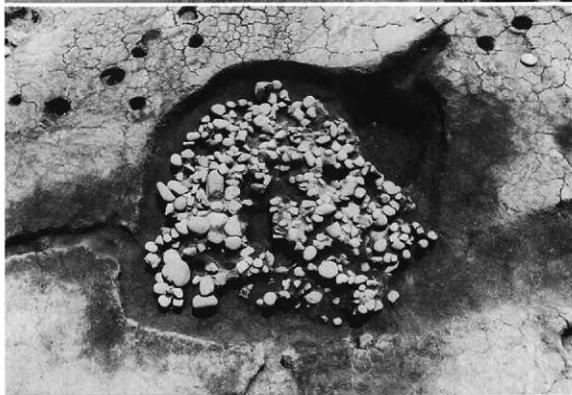


3. 14号土坑
(西から)

1. 15号土坑
(南から)



2. 33号土坑
(北から)

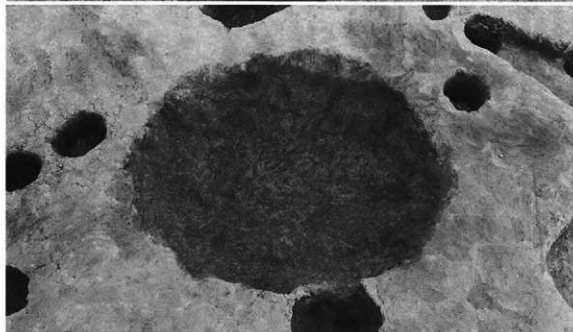


3. 36号土坑
(東から)





1. 50号土坑
(西から)



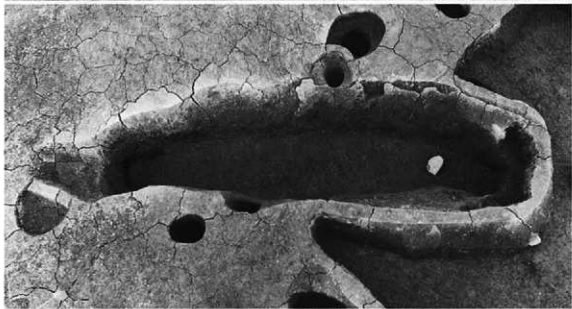
2. 50号土坑完掘状況
(西から)



3. 54号土坑
(南から)



1. 63号土坑
(北から)



2. 67号土坑
(西から)



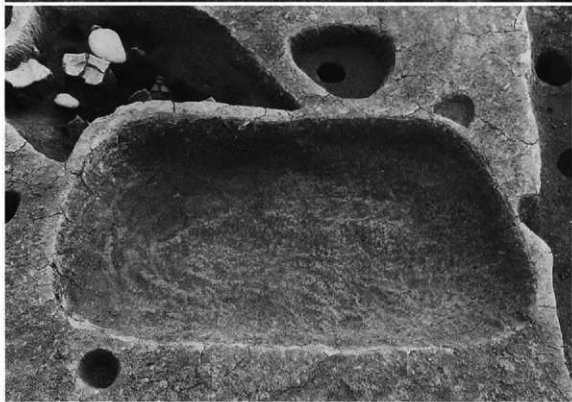
3. 73号土坑
(北から)



1. 75号土坑
(東から)



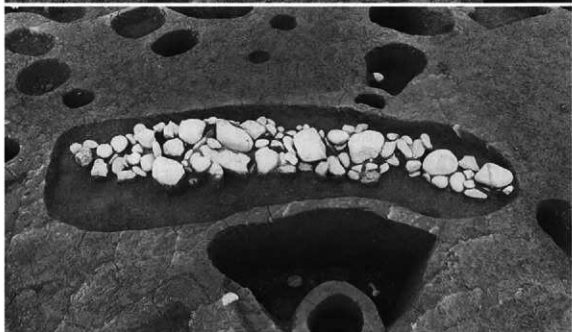
2. 83号土坑
(南から)



3. 84号土坑
(西から)



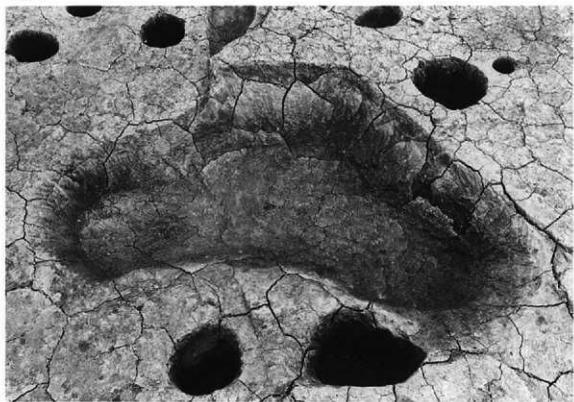
1. 89号土坑
(東から)



2. 91号土坑
(東から)



3. 111号土坑
(東から)



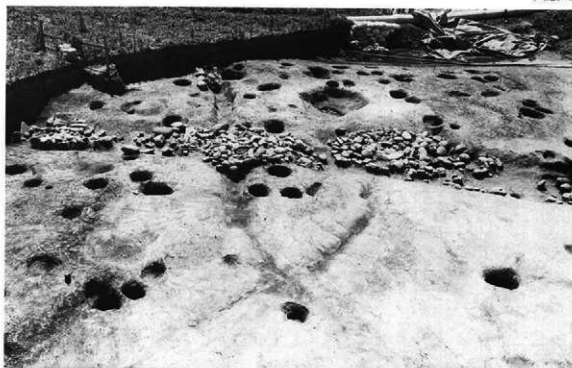
1. 131号土坑
(南から)



2. 137号土坑
(西から)



3. 138号土坑
(西から)



1. 5号溝 (西から)



2. 5号溝 (西から)

3. 5号溝コーナー部
(南から)



1. 10号溝遺物出土
状況（北から）



2. 17号溝断面
（西から）



3. 17号溝断面
（北から）

1. 22号溝断面
(南から)



2. 28号溝断面
(南から)



3. 32号溝上面
(南東から)





1. 32号溝完掘状況
(西から)



2. 32号溝北側断面
(西から)



3. 32号溝南側断面
(南から)



1. 32~40号溝
(西から)



2. 33号溝断面
(南から)



3. 34号溝断面
(西から)



1. 38号溝断面
(西から)



2. 39号溝断面
(西から)



3. 41号溝断面
(西から)



1. 9号墓 (南から)

2. 9号墓完掘状況
(西から)

3. 71号墓 (南から)



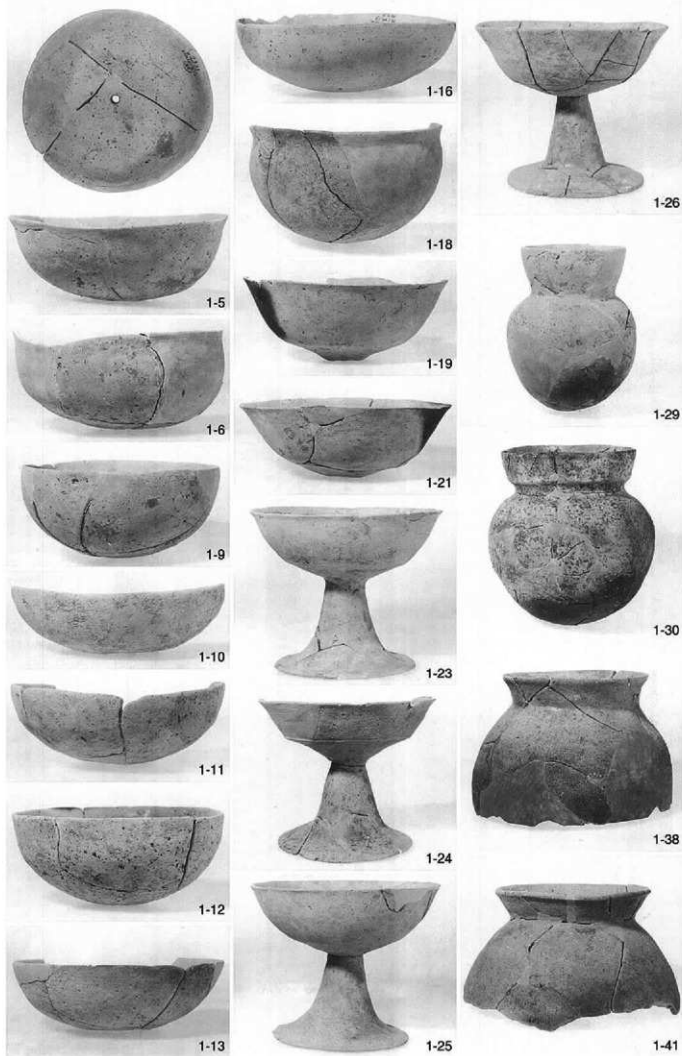
1. 90号墓
(東から)



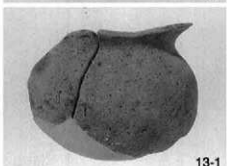
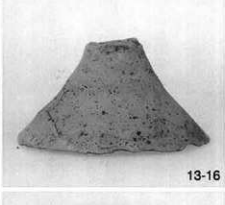
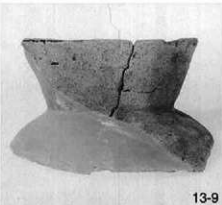
2. 135号墓
(南から)

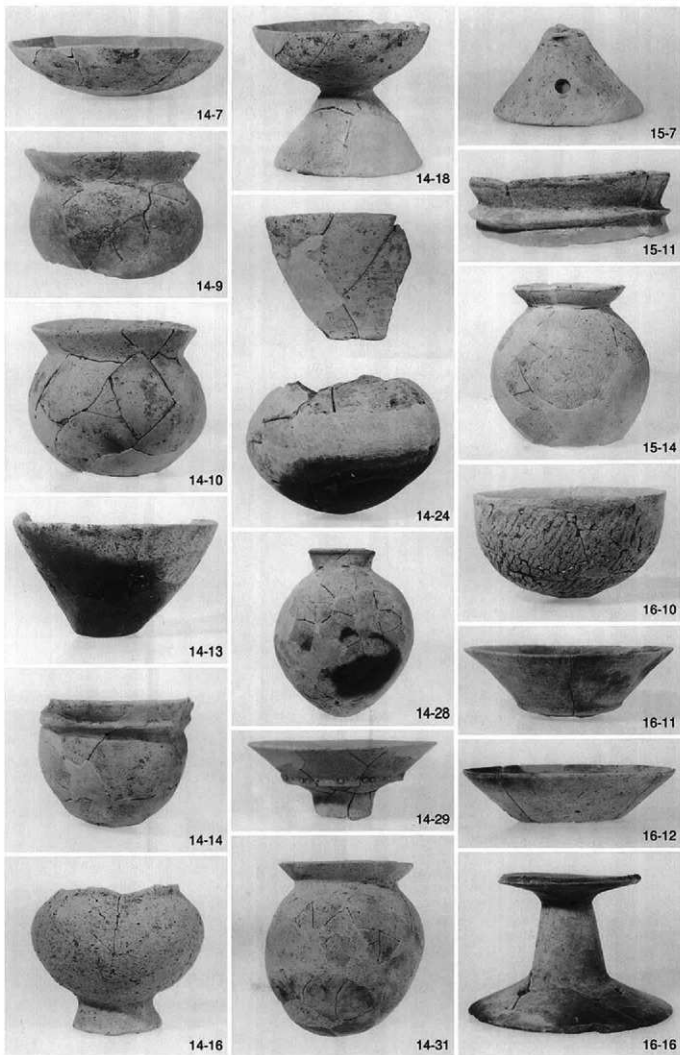


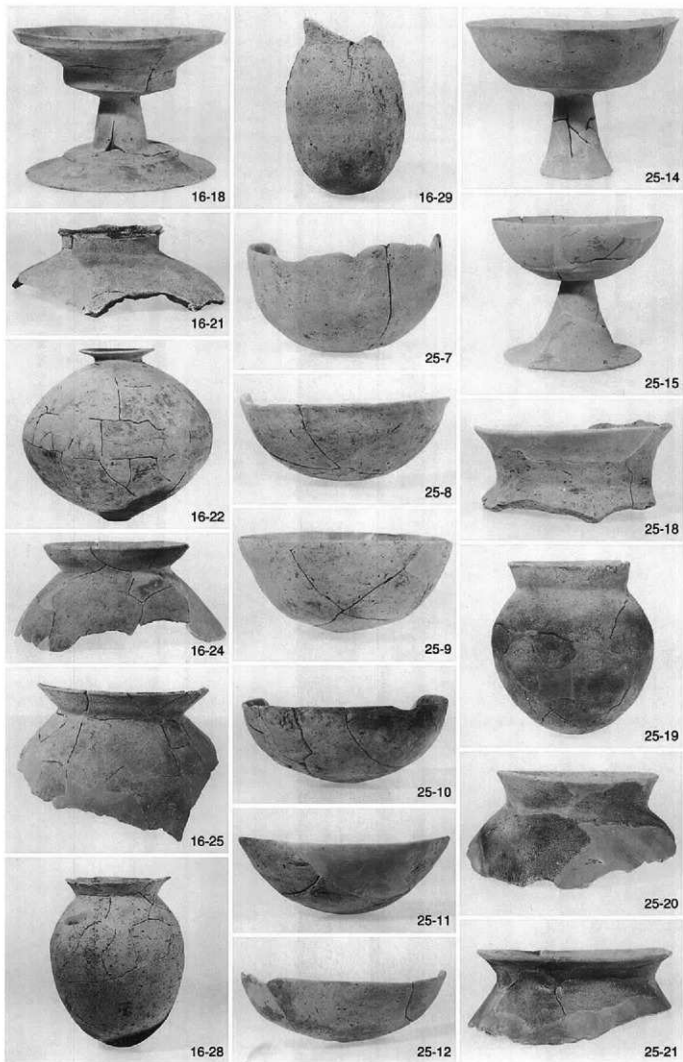
3. 49号井戸
(南から)



1号竖穴住居跡出土土器







16·25号竖穴住居跡出土土器



28-1



28-15



29-15



28-2



28-17



29-21



28-4



28-18



29-29



28-5



32-15



28-6



28-18



33-7



28-7



28-18



33-7



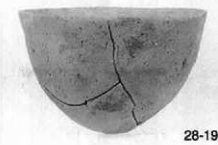
28-8



34-15



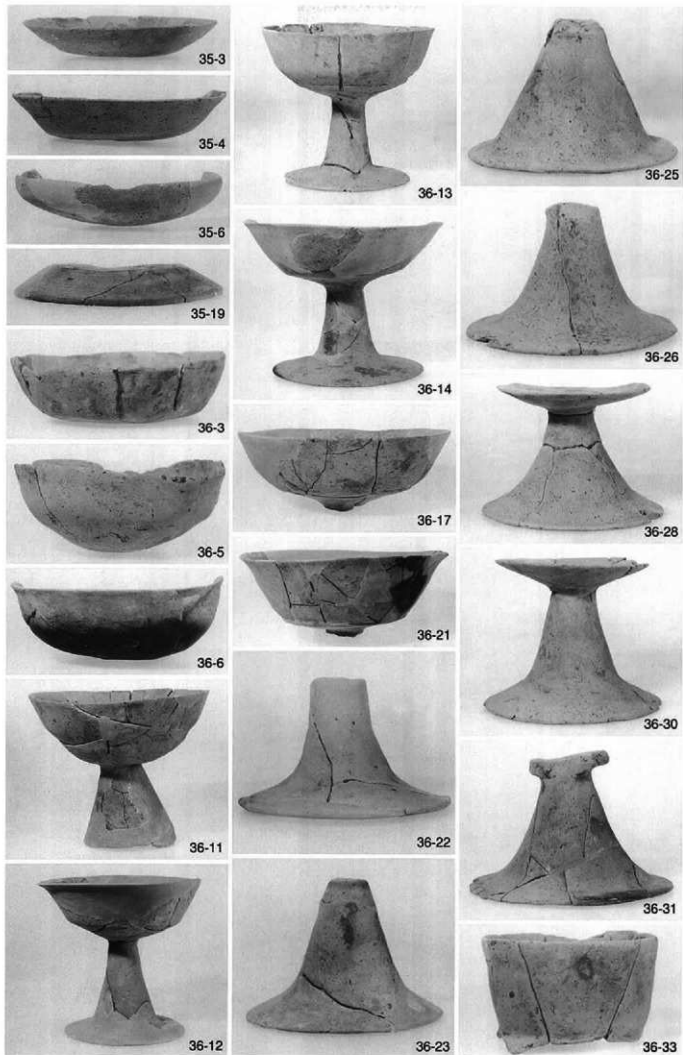
28-14



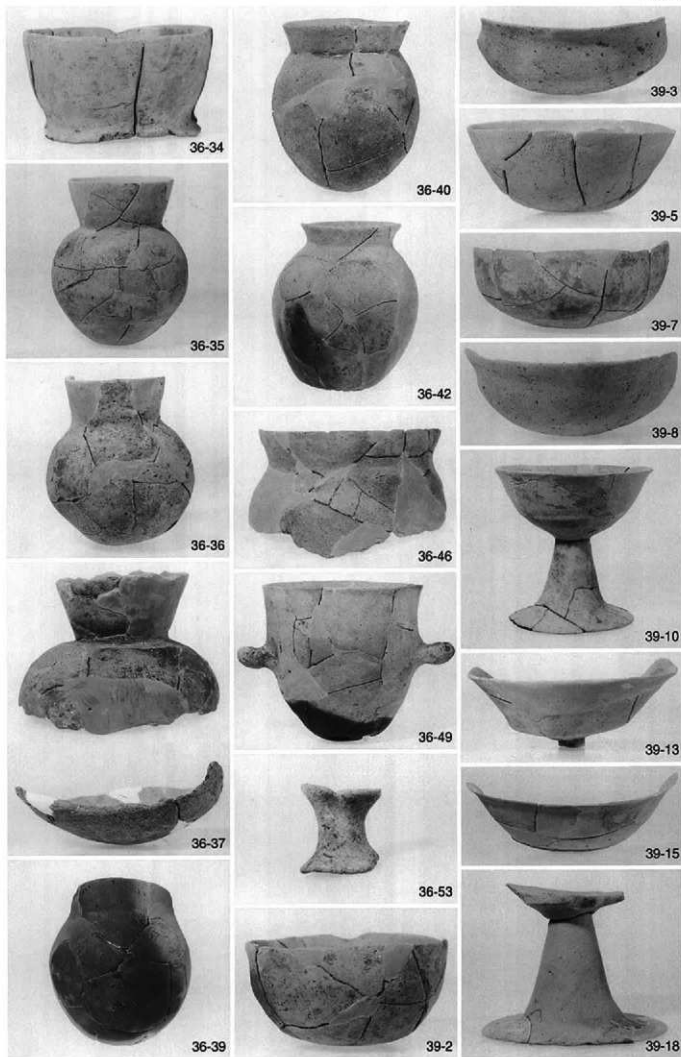
28-19

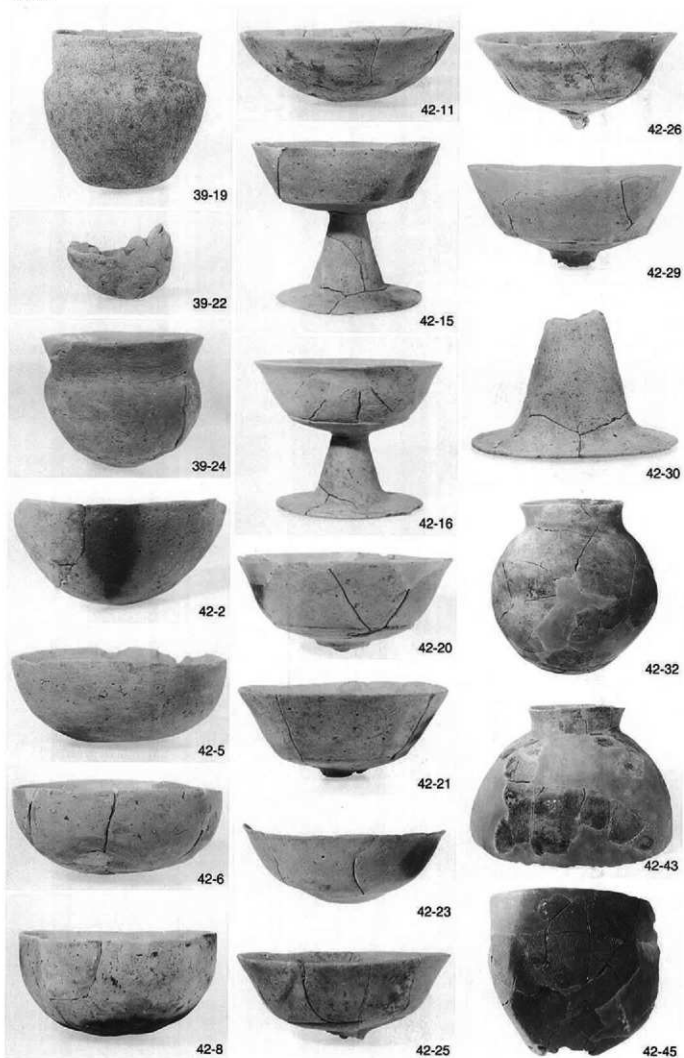


34-17

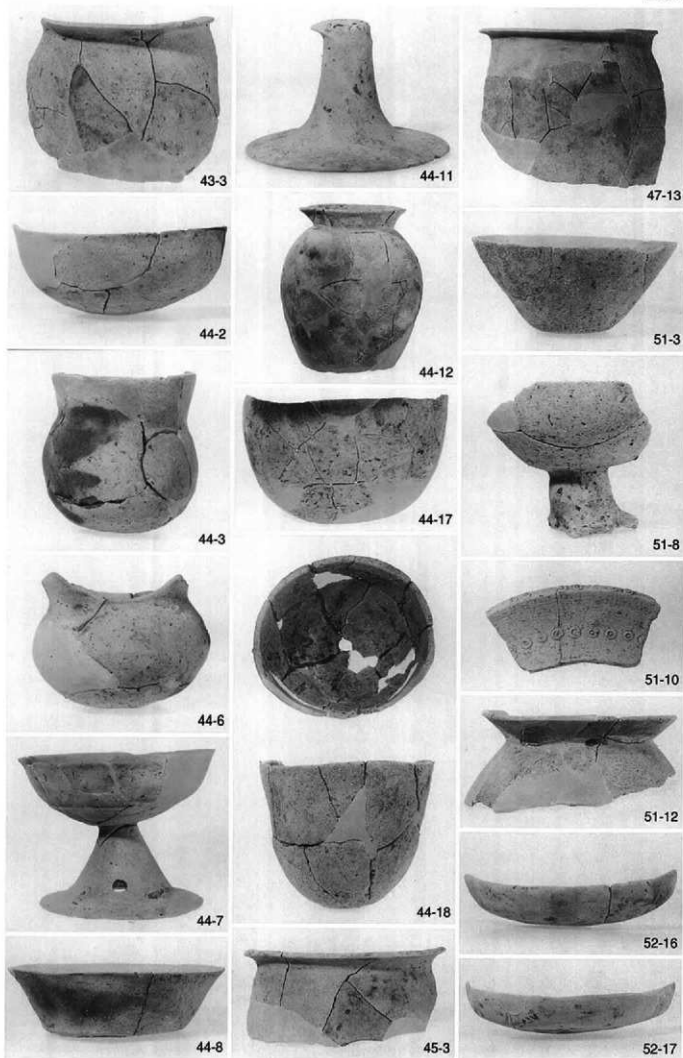


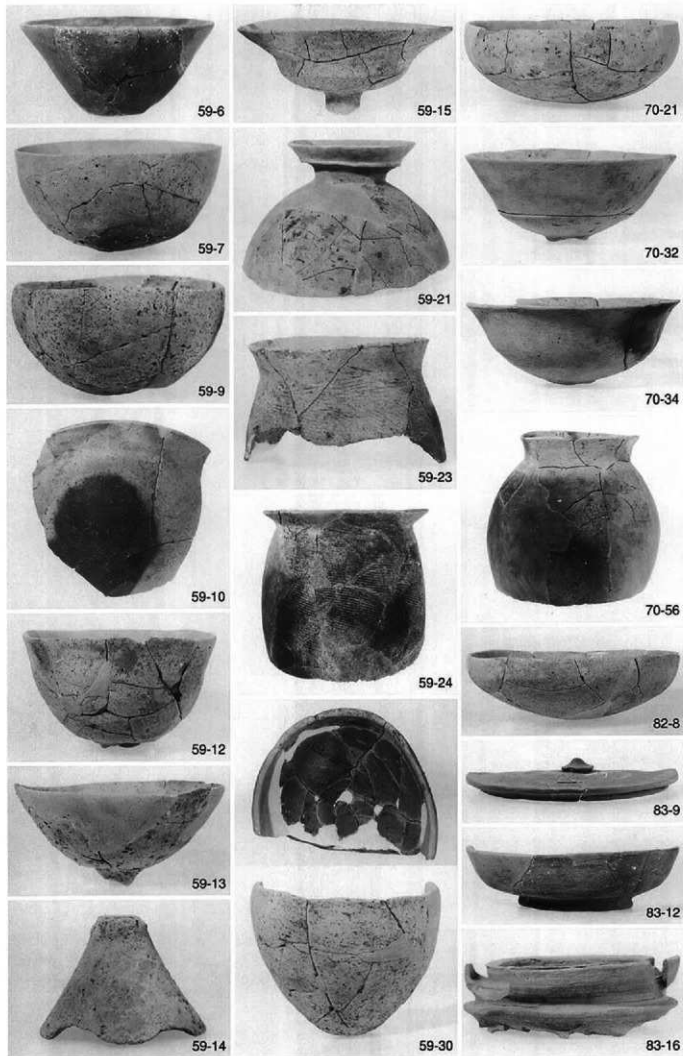
35·36号竖穴住居跡出土土器

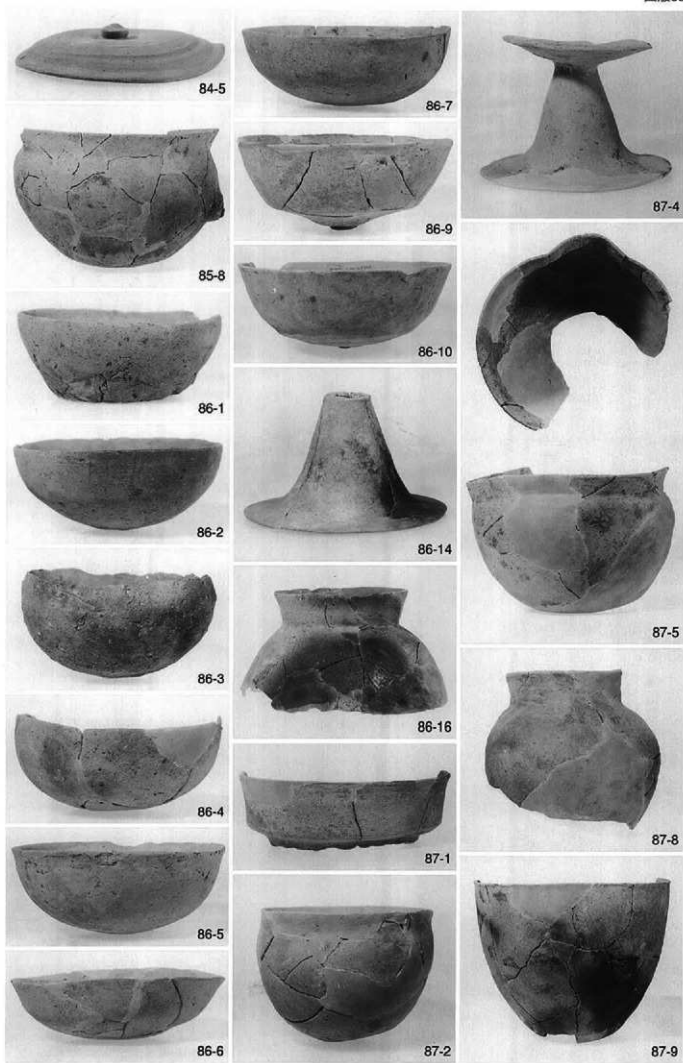




39·42号竖穴住居跡出土土器







84~87号整穴住居跡出土土器



88-4



88-8



88-12



89-9



90-11



90-12



91-13



92-14



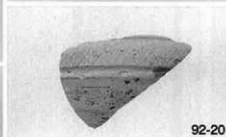
92-16



92-17



92-19



92-20



93-4



93-8



94-1



94-2



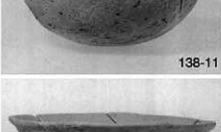
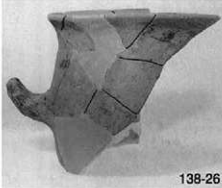
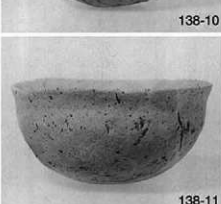
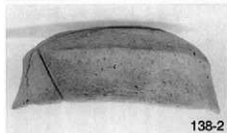
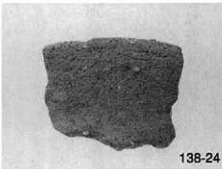
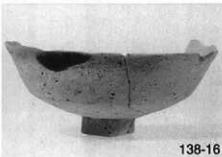
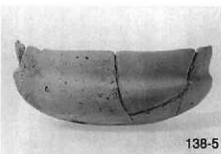
96-15

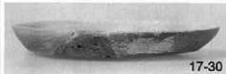
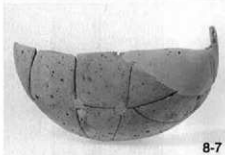


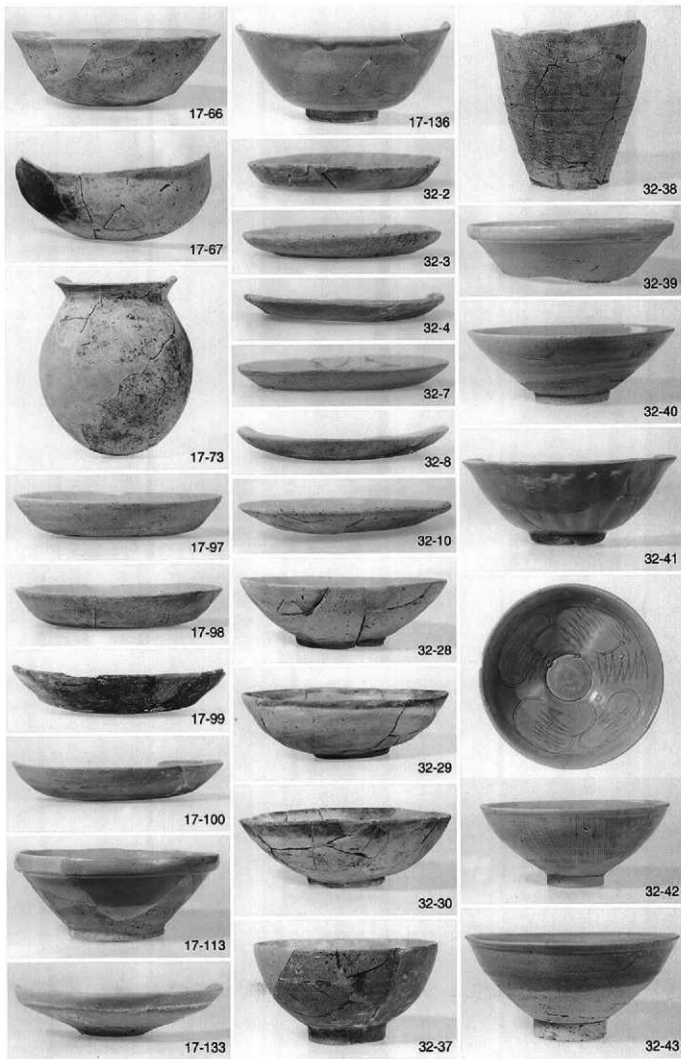
3-8



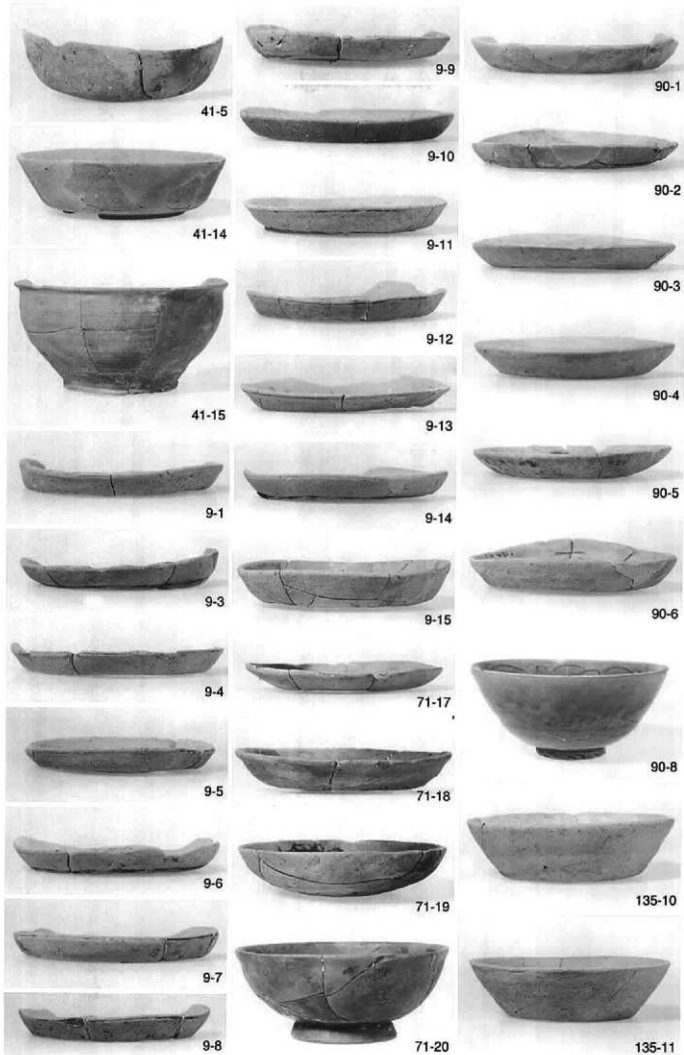
10-39

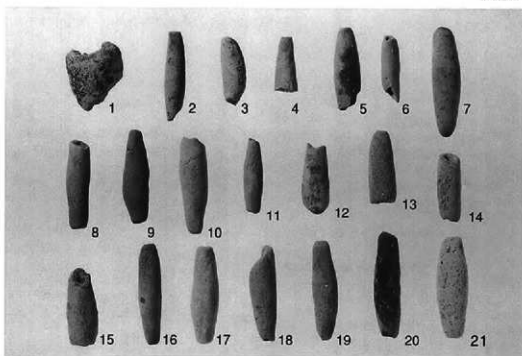




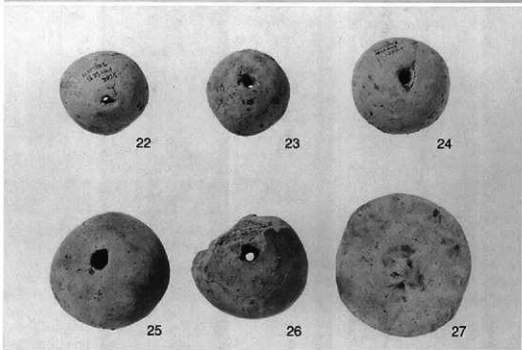


17・32号溝出土土器・陶磁器

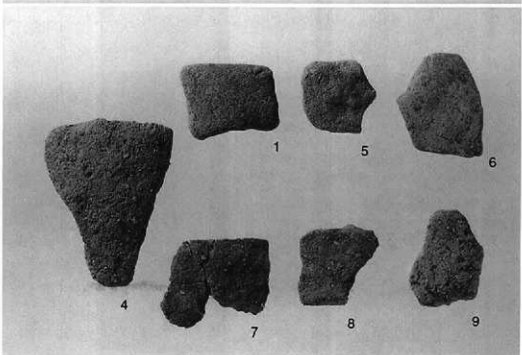




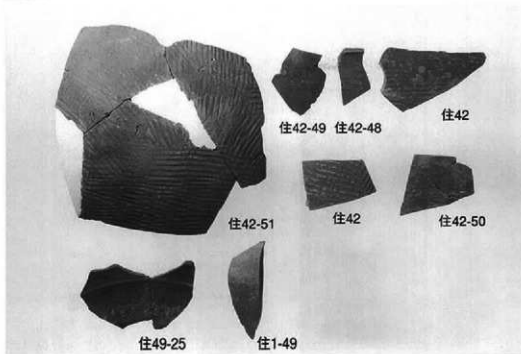
1. 管状土锤



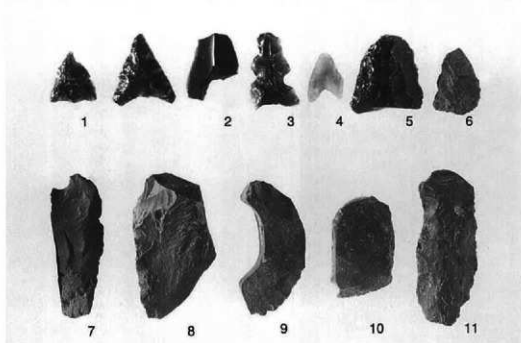
2. 土玉



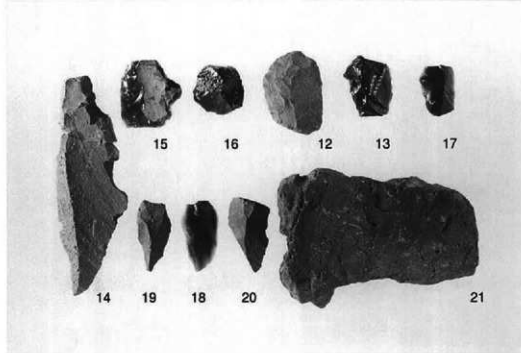
3. 烧埴土器



1. 初期須恵器

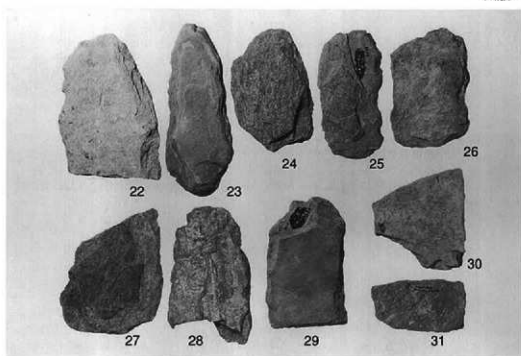


2. 打製石器①

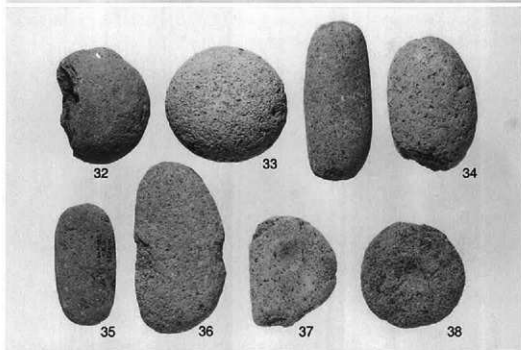


3. 打製石器②

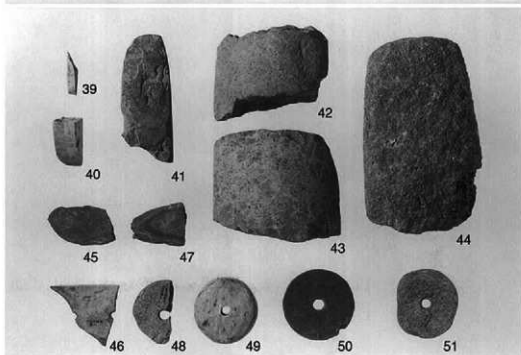
1. 打製石器③

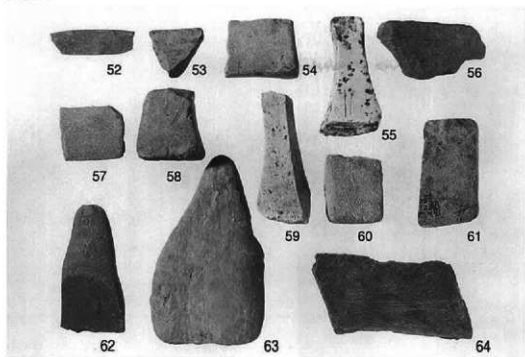


2. 磨石・敲石等

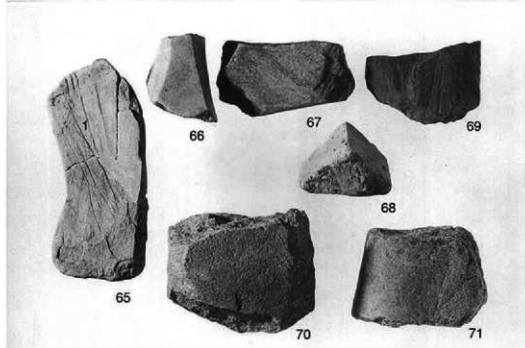


3. 磨製石器等

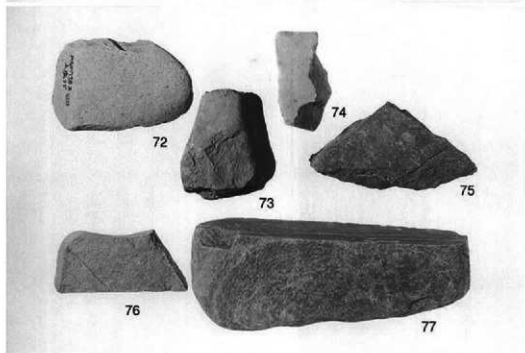




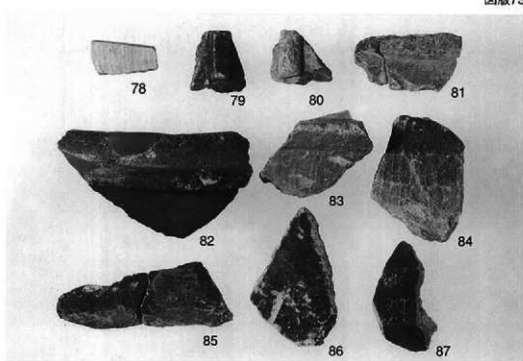
1. 砥石①



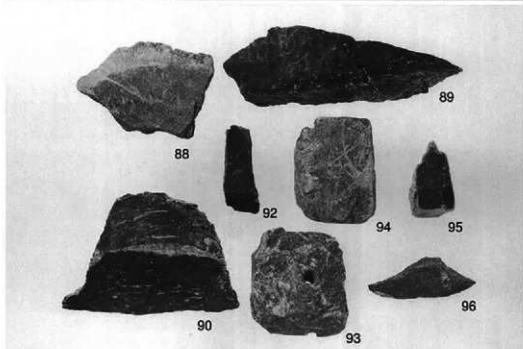
2. 砥石②



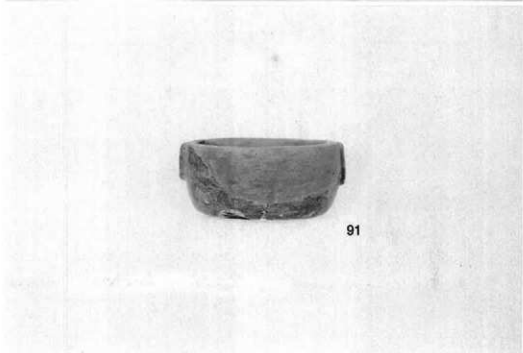
3. 砥石③



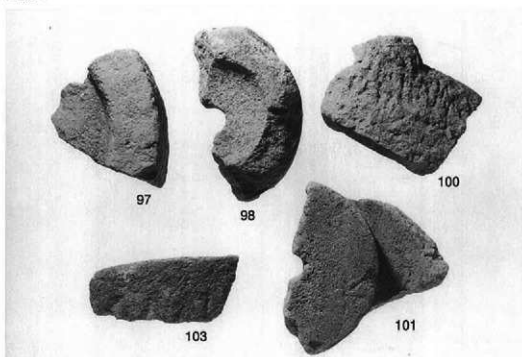
1. 滑石製石鐮等①



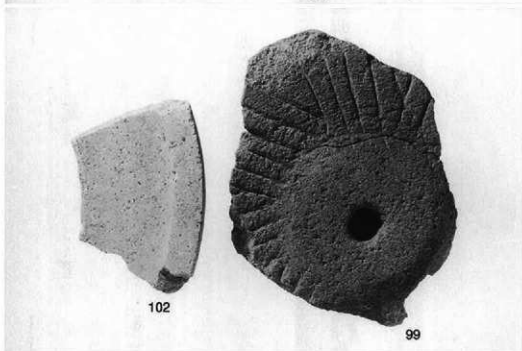
2. 滑石製石鐮等②



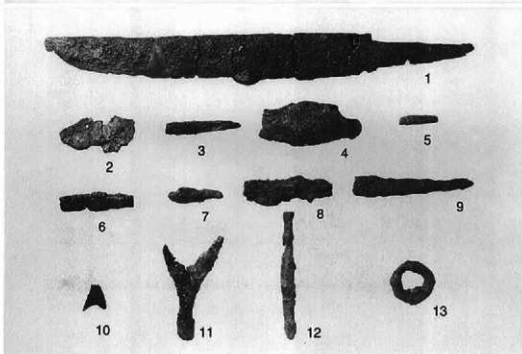
3. 滑石製石鐮模造品



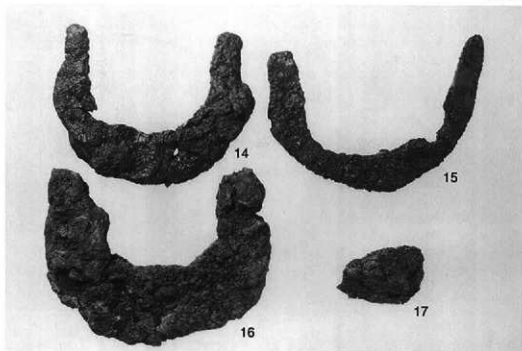
1. 石白①



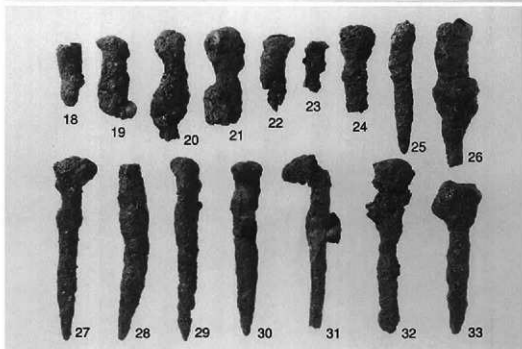
2. 石白②



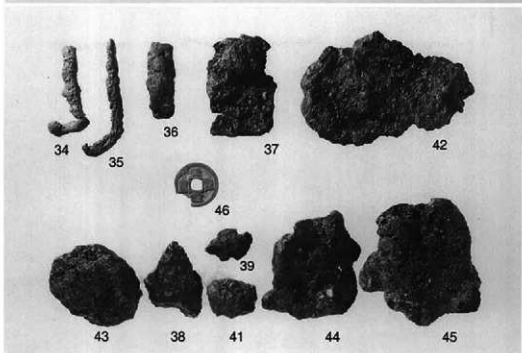
3. 鉄器①



1. 鉄器②



2. 鉄器③



3. 鉄製品等

報告書抄録

ふりがな	にえもんばたけいせき							
書名	仁右衛門燼遺跡Ⅰ							
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治字仁右衛門燼遺跡の調査							
巻次	Ⅰ（古墳時代以降編）							
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12巻							
編者名	重藤輝行・吉田東明・進村真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にえもんばたけいせき 仁右衛門燼遺跡	福岡県浮羽郡吉井町 大字新治字仁右衛門燼 字灰高	40481	630095	33° 20' 41"	130° 45' 19"	1995.4.10) 1996.3.10 1996.4.11) 1996.6.3 1997.2.10) 1997.3.25 1997.4.23) 1997.5.28	8,115㎡	道路建設（一般 国道210号浮羽 バイパス建設）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仁右衛門燼遺跡	集落 墓	古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 墓	土師器 須恵器 陶磁器 石器 鉄器				

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 11	登録番号 3

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集

仁右衛門畑遺跡 I

平成12年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2丁目9番1号

一般国道
210号

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集

仁右衛門畑遺跡 I

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

—古墳時代以降編—

付 図



付圖 仁右衛門細道跡遺構配置図 (1/300)